宮城県文化財調査報告書第244集

御駒堂遺跡・堂の沢遺跡

― 一般国道４号線築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅲ ―

平 成 28 年 12 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

国土交通省東北地方整備局

御駒堂遺跡・堂の沢遺跡

— 一般国道４号線築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅲ —

序　文

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災から 6 年が経ちました。復興は、世界と日本全国の協力をいただきながら着実に進んできました。今後ともその歩みを止めることなく進んでいかなければなりません。当教育委員会では、文化庁より示された【東日本大震災からの復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の両立を図るための埋蔵文化財の取り扱いに係る基本方針】に基づき、発掘調査基準の弾力的運用と発掘調査体制の強化を図っています。具体的には、試掘・確認調査成果などをもとにした事業者との的確な調整、工事による遺構への影響に応じた調査の簡略化、全国から自治法派遣による埋蔵文化財専門職員の応援を得ての調査体制を強化などにより、発掘調査期間の短縮を行っています。今後も、こうした取り組みを続けるとともに、見直しも行いながら調査の早期終了と復興事業の円滑な推進に向けて努力していきたいと考えています。

本書は、一般国道 4 号築館バイパス建設工事に先立って実施した栗原市御駒堂遺跡と堂の沢遺跡の発掘調査報告書です。その実施にあたっては、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所と十分な協議・調整を重ねてきました。今回の発掘調査により得られた貴重な成果が、広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりますが、遺跡の保護に理解を示され、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、地元住民の皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成 28 年 12 月

宮城県教育委員会

教育長　髙橋　仁

例　　言

1．本書は宮城県教育委員会が行った国道４号線築館バイパス建設工事に伴う御駒堂遺跡と堂の沢遺跡の調査成果をまとめたもので、築館バイパス関連遺跡発掘調査報告書の３冊目にあたる。

2．調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が行った。

3．測量基準点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標Ｘ系による。使用した測量基準点は、以下の通りである。

【御駒堂遺跡】

・2012年

MST-12：X＝－139,671.266　Y＝17,925.761　　MST-13：X＝－139,607.850　Y＝17,875.679

・2013・2014年

MST-13：X＝－139,607.850　Y＝17,875.679　　FTA-2：X＝－139,624.630　Y＝17,869.953

FTA-3：X＝－139,509.721　Y＝17,830.045

・2015年

TA-4：X ＝－ 139,584.042　Y ＝ 17,855.521　　TA-5：X ＝－ 139,508.497　Y ＝ 17,838.283

TA-6：X ＝－ 139,441.153　Y ＝ 17,854.381

【堂の沢遺跡】

FTA-9：X ＝－ 139,253.582　Y ＝ 17,651.995　　FTA-10：X ＝－ 139,082.989　Y ＝ 17,503.533

H21-501A：X ＝－ 138,981.041　Y ＝ 17,656.799

4．本書の第１図は、国土地理院発行 1/25,000 地形図「金成」「築館」を複製して使用した。

5．本書の遺構番号は遺構の種別にかかわらず、発掘現場で付されたものをそのまま使用した。また、遺構は種別にしたがって、以下の記号を使用した。

塀跡・柱列跡・土塁跡（ＳＡ）、掘立柱建物跡（ＳＢ）、溝跡（ＳＤ）、井戸跡（ＳＥ）、土坑（ＳＫ）、竪穴住居跡（ＳＩ）、その他の遺構・遺物包含層（ＳＸ）

6．遺構平面図･断面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。

遺跡周辺地形図：1/50,000　調査区位置図：1/10,000、1/2,500、1/1,000

遺構配置図：1/300・1/100（御駒堂遺跡）、1/500（堂の沢遺跡）

遺構ごとの平面図・断面図 1/60（御駒堂遺跡）

7．本文中で使用した「灰白色火山灰」は、915 年に降下した十和田ａ火山灰のことである。

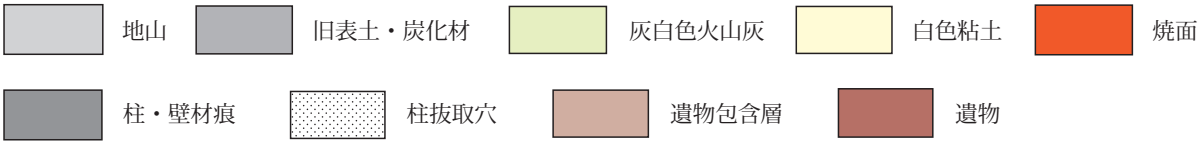
8．本書における土色の記述については、『新版標準土色帖』（小山正忠･竹原秀雄 1973）を使用した。

9．遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は土器・陶磁器・土製品・石製品が 1/3、鉄製品が 1/2、石器・古銭・鉄釘が 2/3 である。

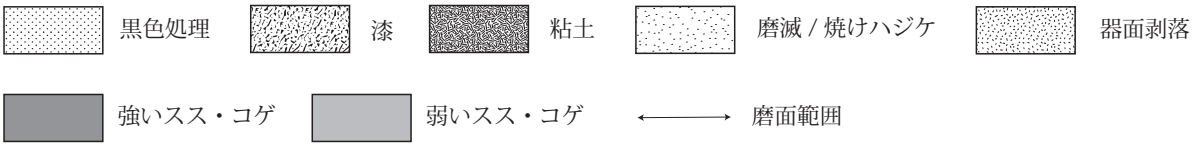
10．土器の説明では、製作においてロクロを使用しているものを「ロクロ調整」、ロクロを使用していないものを「非ロクロ調整」と表記する。

11. 遺構図や遺物図で示した塗りは、以下の特徴を示している。

【遺構平面図・断面図】



【遺物実測図】



12. 遺物の写真撮影は、株式会社アートプロフィールに委託して行った。
13. 発掘調査および整理、報告書の作成に際し、以下の方々と関係機関から指導や助言をいただいた（五十音順、敬称略、所属は発掘調査時）。
    安達訓仁（栗原市教育委員会）、宇部則保（八戸市是川縄文館）、大場亜弥（栗原市教育委員会）、佐川正敏（東北学院大学）、千葉長彦（栗原市教育委員会）、松本太郎（市川市考古博物館）、柳田俊雄（東北大学）、吉田桂（加美町教育委員会）、吉野武（宮城県多賀城跡調査研究所）
    栗原市教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所
14. 本書の整理や遺構・遺物のトレースは、村田晃一・小野章太郎・中島敦子・古川史佳が行った。
15. 断面図や遺物実測図は、原図をスキャナーでコンピューター取り込み、それを下図として（株）Adobe 製の IllustratorCS6.0 でトレースした。
16. 本書の執筆・編集は調査担当者との協議ののち、第Ⅲ章Ｃ－１とＤ－１を小野章太郎が、他は村田晃一が担当した。
17. 御駒堂遺跡の調査成果は、平成 26 年度宮城県遺跡調査成果報告会や第 28 回東北日本の旧石器文化を語る会でその内容の一端を報告しているが、これと本書の記載内容が異なる場合は、本書が優先する。
18. 火山灰の分析は株式会社火山灰考古学研究所に委託し、その成果は附章に収録した。
19. 発掘調査の記録や整理した資料、出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

目　次

第Ⅰ章　調査にいたる経緯
A．はじめに…… 1
B．調査にいたる経緯…… 1
第Ⅱ章　遺跡の概要と歴史的環境
A．遺跡の位置と地理的環境…… 2
B．歴史的環境…… 2
C．御駒堂遺跡の調査成果…… 9
第Ⅲ章　御駒堂遺跡…… 13
調査要項…… 14
A．調査の方法と経過
1．調査の方法…… 15
2．調査の経過…… 15
B．基本層序…… 19
C．発見した遺構と遺物…… 19
1．旧石器時代から縄文時代
（1）調査の方法と経過 …… 21
（2）基本層序 …… 21
（3）発見した遺構と遺物 …… 23
（4）石器集中地点 …… 28
（5）その他の出土石器 …… 33
2．縄文時代以降…… 53
3．縄文時代
（1）陥し穴 …… 53
（2）遺物包含層 …… 62
4．飛鳥～平安時代
（1）竪穴住居跡 …… 64
（2）掘立柱建物跡 ……112
5．江戸時代以降
（1）掘立柱建物跡 ……113
（2）井戸跡 ……116
（3）墓跡 ……119
（4）その他の遺構 ……121

D．総括
1．旧石器時代から縄文時代
（1）遺跡内における石器製作活動 ……125
（2）出土石器群の時期 ……126
（3）遺跡周辺の旧石器時代石器群 ……126
（4）まとめ ……128
2．飛鳥～平安時代
（1）土器と竪穴住居跡の年代 ……130
（2）竪穴住居跡 ……135
（3）カマド ……135
3．江戸時代以降……137
4．飛鳥～平安時代の御駒堂遺跡
（1）土器 ……137
（2）竪穴住居跡の検討 ……143
（3）カマドの検討 ……147
（4）集落の変遷 ……151
（5）８世紀前葉の移民集落とその意義 ……152
（6）伊治城と周辺集落 ……154
第Ⅳ章　堂の沢遺跡……161
調査要項……162
A．調査の方法と経過……163
B．基本層序……166
C．発見した遺構と遺物……166
第Ⅴ章　まとめ……168
註……169
引用・参考文献……171
附章　栗原市御駒堂遺跡における火山灰分析（株式会社　火山灰考古学研究所）……177

挿　図　目　次

図版１　遺跡の位置…… 2
図版２　御駒堂遺跡、堂の沢遺跡の位置と周辺の古代遺跡 …… 5
図版３　御駒堂遺跡と堂の沢遺跡…… 8
図版４　移民の住居と土器…… 10
図版５　御駒堂・堂の沢・山ノ上遺跡の調査地点… 11
図版６　築館バイパス関連調査区の位置…… 16
図版７　調査区全景と調査風景…… 17
図版８　基本層序…… 20
図版９　基本層序模式図・断面写真、火山灰分析作業風景 … 22
図版 10　発掘調査区平面図 …… 24
図版 11　発掘調査区断面図・断面写真 …… 25
図版 12　旧石器確認調査トレンチの土層断面模式図 …… 25
図版 13　石器出土状況（１）…… 26
図版 14　石器出土状況（２）…… 27
図版 15　石器集中地点出土石器実測図 …… 30
図版 16　石器集中地点出土石器写真 …… 31
図版 17　調査風景 …… 31
図版 18　その他出土石器実測図 …… 33
図版 19　その他出土石器写真 …… 33
図版 20　発掘調査区全景、石器出土状況 …… 36
図版 21　石器出土状況、発掘調査風景 …… 37
図版 22　石器出土状況 …… 38
図版 23　遺構配置図（１）…… 39
図版 24　遺構配置図（２）…… 40
図版 25　遺構配置図（３）…… 41
図版 26　遺構配置図（４）…… 42
図版 27　調査区全景（１）…… 43
図版 28　調査区全景（２）…… 44
図版 29　Ｃ区の検出遺構（１）…… 45
図版 30　Ｃ区の検出遺構（２）…… 46
図版 31　Ｃ区の検出遺構（３）…… 47
図版 32　Ｃ区の検出遺構（４）…… 48
図版 33　Ｃ区の検出遺構（５）…… 49
図版 34　Ｃ区の検出遺構（６）…… 50
図版 35　Ｃ区の検出遺構（７）…… 51
図版 36　Ｃ区の検出遺構（８）…… 52
図版 37　陥し穴Ａ類（１）…… 54
図版 38　陥し穴Ａ類（２）…… 55
図版 39　陥し穴Ａ類（３）…… 56
図版 40　陥し穴Ａ類（４）…… 57
図版 41　陥し穴Ａ類（５）…… 58
図版 42　陥し穴Ｂ類 …… 59
図版 43　SK72 土坑出土遺物 …… 60
図版 44　陥し穴Ｃ類 …… 61
図版 45　SX16 遺物包含層 …… 62
図版 46　SX16 遺物包含層出土遺物 …… 63
図版 47　SI01 住居跡（１）…… 65
図版 48　SI01 住居跡（２）…… 66
図版 49　SI01 住居跡（３）…… 67
図版 50　SI01 住居跡出土遺物（１）…… 68
図版 51　SI01 住居跡出土遺物（２）…… 69
図版 52　SI01 住居跡出土遺物（３）…… 70
図版 53　SI01 住居跡出土遺物（４）…… 71
図版 54　SI02 住居跡（１）…… 73
図版 55　SI02 住居跡（２）…… 74
図版 56　SI02 住居跡出土遺物 …… 75
図版 57　SI03 住居跡（１）…… 77
図版 58　SI03 住居跡（２）…… 78
図版 59　SI03 住居跡（３）…… 79
図版 60　SI03 住居跡出土遺物（１）…… 80
図版 61　SI03 住居跡出土遺物（２）…… 81
図版 62　SI06 住居跡（１）…… 83
図版 63　SI06 住居跡（２）…… 84
図版 64　SI06 住居跡（３）…… 85
図版 65　SI06 住居跡出土遺物（１）…… 86
図版 66　SI06 住居跡出土遺物（２）…… 87
図版 67　SI06 住居跡出土遺物（３）…… 88
図版 68　SI07 住居跡出土遺物 …… 89
図版 69　SI07 住居跡（１）…… 90
図版 70　SI07 住居跡（２）…… 91
図版 71　SI11 住居跡出土遺物 …… 92
図版 72　SI11 住居跡 …… 93
図版 73　SI15 住居跡（１）…… 94
図版 74　SI15 住居跡（２）…… 95
図版 75　SI15 住居跡出土遺物 …… 96
図版 76　SI50 住居跡（１）…… 97
図版 77　SI50 住居跡（２）…… 98
図版 78　SI50 住居跡出土遺物 …… 99
図版 79　SI51 住居跡（１）……100
図版 80　SI51 住居跡（２）……101
図版 81　SI51 住居跡（３）……102
図版 82　SI51 住居跡（４）……103
図版 83　SI51 住居跡出土遺物（１）……104
図版 84　SI51 住居跡出土遺物（２）……105
図版 85　SI51 住居跡出土遺物（３）……106
図版 86　SI51 住居跡出土遺物（４）……107
図版 87　SI51 住居跡出土遺物（５）……108
図版 88　SI51 住居跡出土遺物（６）……109
図版 89　SI51 住居跡出土遺物（７）……110
図版 90　SB18・37 建物跡 ……112
図版 91　SB08・22 建物跡 ……114
図版 92　SB19・20・21 建物跡 ……115
図版 93　SE05・17・71 井戸跡 ……117
図版 94　SE75・76・99 井戸跡 ……118
図版 95　SE75 井戸跡出土遺物 ……119
図版 96　ST35・36・39 墓跡 ……120
図版 97　ST35・36 墓跡出土遺物 ……121
図版 98　ST39・44 墓跡出土遺物 ……122
図版 99　その他の遺構と第Ⅰ層出土遺物 ……123
図版 100　SA13 土塁跡と SD14 空堀跡 ……124
図版 101　周辺遺跡出土の旧石器 ……129
図版 102　Ａ群土器 ……131

図版 103　Ａ群土器の類例 ……132
図版 104　Ｂ群土器 ……133
図版 105　Ｂ群土器の類例 ……134
図版 106　バイパス調査区のカマドと竪穴住居跡 ……136
図版 107　御駒堂遺跡出土土器の変遷（１）－Ⅰ群 …139
図版 108　御駒堂遺跡出土土器の変遷（２）－Ⅱ群 …140
図版 109　成形段階の台を残す関東系土師器坏 …141
図版 110　御駒堂遺跡出土土器の変遷（３）－Ⅲ群 …142
図版 111　駒堂遺跡出土土器の変遷（４）－Ⅳ・Ⅴ群 ……143
図版 112　竪穴住居の変遷（１）－Ⅰ・Ⅱ群 ……146
図版 113　竪穴住居の変遷（２）－Ⅲ～Ⅴ群土器期 …147
図版 114　カマドの分類と所属時期 ……148
図版 115　伊治城周辺集落跡から出土したロクロ土師器と文字資料 ……152
図版 116　８世紀前葉の移民集落 ……153
図版 117　８世紀前半の防衛ラインと御駒堂遺跡 ……153
図版 118　栗原・桃生郡域で出土した会津型長胴甕 …155
図版 119　伊治城跡と外郭北東部で密集する竪穴住居跡 …157
図版 120　堂の沢遺跡の範囲とトレンチの位置 …163
図版 121　遠景・トレンチ・基本層序（１）……164
図版 122　遠景・トレンチ・基本層序（２）……165
図版 123　検出遺構 ……167

表　目　次

表１　御駒堂遺跡年度別調査面積と主な発見遺構… 12
表２　御駒堂・堂の沢・山ノ上遺跡の調査成果…… 12
表３　石器集中地点の出土石器組成表…… 28
表４　水洗篩で回収した砕片…… 28
表５-1　出土石器属性表（１）…… 34
表５-2　出土石器属性表（２）…… 35
表６　陥し穴属性表…… 60
表７　竪穴住居跡属性表……111
表８　掘立柱建物跡属性表……116
表９　井戸跡属性表……119
表 10　墓跡属性表 ……122
表 11　御駒堂遺跡周辺の旧石器時代遺跡一覧 ……127
表 12　土器群の併行関係と竪穴住居の年代 ……138
表 13　御駒堂遺跡の竪穴住居跡属性表 ……144
表 14　伊治城と周辺集落における竪穴住居の消長 …155
表 15　伊治城と周辺集落における竪穴住居跡の時期別構成…158
表 16　伊治城周辺集落の時期別住居数と火災住居 ……158
表 17　８世紀中葉から後半の竪穴住居と出土遺物 ……159
表 18　栗原郡に関する古代史年表 ……160

第Ⅰ章　調査にいたる経緯

A．はじめに

本書は、築館バイパス建設工事にともなう栗原市御駒堂遺跡・堂の沢遺跡の発掘調査報告書である。調査は御駒堂遺跡が平成 21・22・24 ～ 27 年度、堂の沢遺跡は平成 25 年度に実施した。宮城県教育委員会が発行する築館バイパス建設工事関連遺跡調査報告書の３冊目にあたる。

B．調査にいたる経緯

築館バイパス建設工事事業は、栗原市築館の市街地を縦断する国道４号線の交通混雑緩和と市街地周辺部の活性化等の理由により、築館赤坂を起点に市街地を東側に迂回して旧志波姫町を通り、築館城生野に至る総延長約７㎞、路線幅 50 m、両側４車線の一般国道４号築館バイパスの建設工事が立案され、昭和 56 年に都市計画決定された。

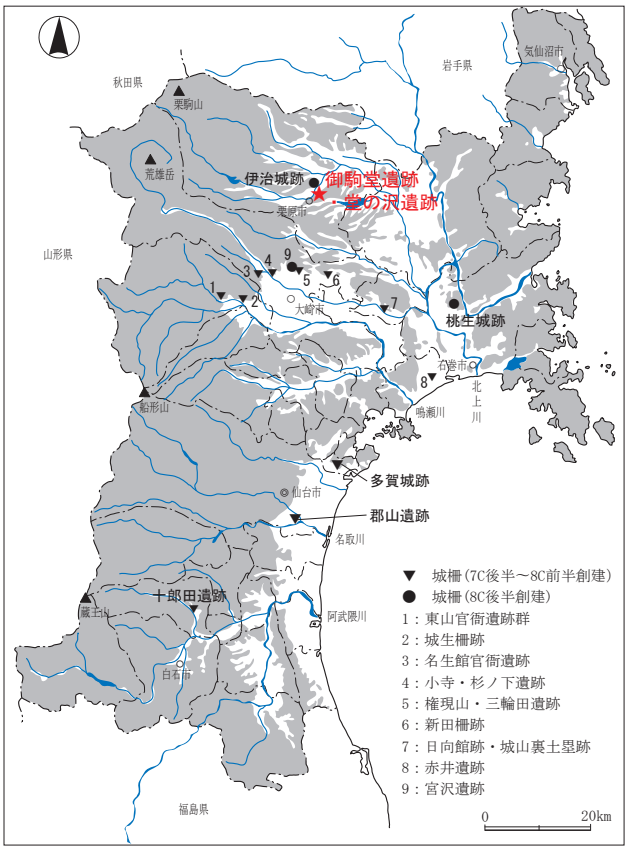
平成 14 年６月、宮城県教育委員会は国土交通省東北地方建設局仙台河川国道事務所に対し、計画地内に周知の遺跡が存在することと未発見の遺跡が存在する可能性があることから、遺跡の取り扱いについて協議を申し入れ、同年９月に遺跡分布調査と試掘調査を実施した。その結果、古代の竪穴住居跡や土器が発見された下萩沢遺跡、中世以降とみられる塚が確認された源光遺跡、古代の土器が散布していた大天馬遺跡と堂の沢遺跡を遺跡台帳に新規登録した。このことを受けて、事業主体の国土交通省東北地方建設局と保存協議を行ったが、計画変更で保存可能な源光遺跡の塚を除いて路線の変更は困難であることから、建設工事前に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

計画地内での確認調査と本発掘調査は、平成 15・16・19 年に高田山遺跡、源光遺跡、原田遺跡、下萩沢遺跡、平成 21・23 年には大天馬遺跡で順次実施している。御駒堂遺跡は、平成 21・22・24・25 年に国道 398 号線より南の遺跡隣接地を確認調査したところ、一部の範囲が国道の南側まで延びることを確認したため、その部分の本発掘調査を行った。こうした結果、築館バイパスは平成 19 年に赤坂から下萩沢に至る 1.2㎞で供用が開始され、さらに平成 25 年には国道 398 号線までの区間 1.3㎞が延伸されている。

それより北については、御駒堂遺跡が平成 26・27 年に確認調査と本発掘調査を行って終了している。また、堂の沢遺跡は平成 25 年に確認調査を行い、南側の高い部分で近世以降の水田跡や溝跡などを検出し、北側の低い部分では湿地土壌の中に灰白色火山灰（註１）が厚く堆積している状況を確認したため、本発掘調査の必要はないと判断した。さらに、今回の成果より遺跡の範囲は東へ縮小すると考えられたため、市教育委員会とはかって遺跡の範囲変更を行うこととした。その結果、築館バイパスは平成 27 年中に堂の沢遺跡の北 0.7km まで延伸され、栗原中央大橋に至る市道と接続した。

第Ⅱ章　遺跡の概要と歴史的環境

A．遺跡の位置と地理的環境



図版１　遺跡の位置

御駒堂遺跡は、栗原市志波姫堀口字御駒堂に所在する（図版１・２）。市の中心部は、栗原郡で最も大きな町であった旧築館町で、遺跡は市街中心部から北東に約２㎞離れる。周辺の地形は、奥羽山脈から樹枝状に派生して東に延びる陸前丘陵の一部（築館丘陵）とその麓の迫川低地、両者に挟まれて北東に延びる河岸段丘で構成される。遺跡は迫川低地を望む上位段丘に立地しており、両者の比高差は 10 ～ 20 mである。

御駒堂遺跡の範囲は東西約 1,500 m、南北約 400 mと東西に細長く、築館バイパスは西側を南北に縦断する（図版３・５）。発掘調査前の状況は、国道 398 号線の南が水田で、北は国道に面する部分が宅地となる他は畑地が多く、北縁部のみ山林となっていた。それぞれの標高は水田が 30 m前後、畑地や宅地が 32 m前後、山林が 36 mほどである。

堂の沢遺跡は、栗原市志波姫堀口字堂の沢に所在する（図版１・２）。遺跡は下位段丘に立地しており、御駒堂遺跡より 10 mほど低い。築館バイパスは遺跡の西端を南北に縦断する（図版３・５）。発掘調査前の状況は、東へ延びる自然堤防中央部が宅地や畑地で、その縁辺となる三方は低地へ向けて傾斜しており、水田として利用されていた。標高は 21 m前後で、周囲の低地より１mほど高い。

B．歴史的環境

御駒堂遺跡や堂の沢遺跡で発見された遺構や遺物は、旧石器時代、縄文時代、飛鳥・奈良・平安時代、江戸時代以降のものがある。ここでは、遺跡周辺におけるこれらの時代の歴史的環境について、発掘調査成果を中心に述べる（図版２）。その際、栗原郡の範囲は、現在の栗原市から高清水・瀬峰の両町を除く、築館・一迫・鶯沢・志波姫・若柳・金成・栗駒町および花山村とする（いずれも旧町村名）。また、文中に何度も出てくる教育委員会は教委、多賀城跡調査研究所は多賀研と略することとする。

【旧石器時代】

後期旧石器時代の遺跡としては、伊治城跡や淀遺跡（宮城県教委 2001）などがあげられる。前者は、72㎡の範囲から石器 406 点が出土したこと、全体の 97％が剥片・砕片であること、接合資料が多く認められることから、石器製作の場であったと考えられている（築館町教委 2004）。

【縄文・弥生時代】

嘉倉貝塚では縄文時代の住居跡 163 軒、掘立柱建物跡 46 棟、貯蔵穴 119 基、土壙墓 45 基など多数の遺構が確認された。なかでも、前期後葉～中期初頭には半径 32 mの広場を中心に環状集落が形成されたほか、晩期後葉～弥生前期の墓域が確認されるなど大きな成果が上がっている（宮城県教委 2003b、築館町教委 2003）。中期末の集落跡としては鰻沢遺跡や坂戸遺跡があげられ、ともに、同時期の宮城県北部～岩手県南部を中心に分布する斜位土器埋設複式炉をもつ住居跡が確認された（築館町教委 2005、迫町教委 2005）。弥生時代の遺跡は縄文時代に較べて急減するが、宇南遺跡で後期の土器棺墓が発見されている（宮城県教委 1979a）。

【古墳時代前期・中期】

前期は、伊治城跡から方形周溝墓や円墳もしくは円形の低墳丘墓とみられる円形周溝、鶴ノ丸遺跡や宇南遺跡では方形周溝墓とともに住居跡が確認された（築館町教委 1994・1995、宮城県教委 1979・1980h）。とくに、伊治城跡では墓域から離れた遺跡北端で、複数の郭から構成される豪族居館が発見された。同時期の居館としては最北の例であり、土師器とともに続縄文土器（北大Ⅰ式）や黒曜石製石器が出土したことから、古墳文化と続縄文文化との交流を示すものと評価されている（高橋 2015）。

また、近年調査された入の沢遺跡は伊治城の南隣にあり、周囲から隔絶した標高 49 mの丘陵頂部を塀と大溝で囲み、その内部に住居群がつくられるという、高い防御性を備えていた。住居跡からは古墳に副葬される銅鏡や鉄製品、装身具、水銀朱などがまとまって出土するものがある一方、焼失したものも多く認められ、古墳文化と続縄文文化との交流と軋轢を示すものとして注目を集めている（村上 2015 a、高橋 2015、東北学院大学アジア流域文化研究所 2015 など）。さらに、近接する大仏古墳群の年代観の見直しや入の沢とほぼ同時期とみられる伊治城の豪族居館との関係など、当時、倭国の北縁を形成した地域の様相を見直す契機ともなった。

中期は、古墳が築館留場遺跡出土の円筒埴輪片として紹介された資料（藤沢 2000）、集落跡としては長者原遺跡で住居跡３軒以上、須恵器や石製模造品が出土した例（栗駒町教委 1995）が挙げられるが、集落数は少なく、明確な古墳も確認できないなど、前期に較べて低調である（註２）。

【古墳時代後期～奈良時代前半】

６世紀代の古墳や集落跡の様相は不明である。この時期の古墳は、仙台平野以北で小規模な円墳が散見される程度になることから、栗原郡域の古墳の築造や集落形成はあったとしてもきわめて低調と考えられる。一方、より南に位置する加美町米泉館跡（宮崎町教委 1996）や仙台市大野田古墳群（仙台市教委 2011）では、古墳文化と続縄文文化が折衷した墓が確認されており、両文化の交流は継続するとともに後者の南下傾向が認められる（今泉・藤沢 2006）。こうしたあり方は、古墳が活発に

築造された阿武隈川以南の地とは明確に異なり、6世紀代における畿内政権との政治的関係の有無が、国造制の施行域と蝦夷の居住域を分ける根拠となった可能性が指摘された（今泉 1992）（註３）。

７世紀は前半の集落跡が泉谷館跡（瀬峰町教委 1987）で、末～８世紀初頭の集落跡が本遺跡の自動車道調査区第１群土器段階（宮城県教委 1982）で確認されているが、数は少ない。泉谷館では、在地型カマド（註４）や岩手県南部様式と共通する在地土師器がある一方、筑波山周辺の茨城・栃木・千葉に類例が求められる関東系土師器（佐藤 2007）や関東型カマドも認められた。

本遺跡の集落跡は、３～４軒の住居で構成された小群が互いに距離を置いて分布する散村状の景観を呈したとみられ、カマドは在地型である。岩手県南部様式と類似する在地土師器に関東系土師器食器が伴っており、その出自は北武蔵型暗文坏や北武蔵型坏に代表される新型土師器に求められる（鶴間 2004）。また、両者の関係は、土師器食器のみであることから、限定的な交流であったと考えられる。

８世紀前葉になると遺跡数は増加し、それらは遺構や土師器の様相から以下のように分けられる（註５）。

①：カマド・土師器とも在地型で構成される集落

…木戸遺跡（宮城県教委 1980f）、佐内屋敷遺跡第Ⅰａ・ｂ群土器段階（宮城県教委 1983）（註６）、原田遺跡ⅠＡ群土器段階（宮城県教委 2009a）、観音沢遺跡（宮城県教委 1980j）、五輪Ｃ遺跡（宮城県教委 1979b）など

②：関東型カマドを持つ竪穴住居と関東系土師器が主体となる集落

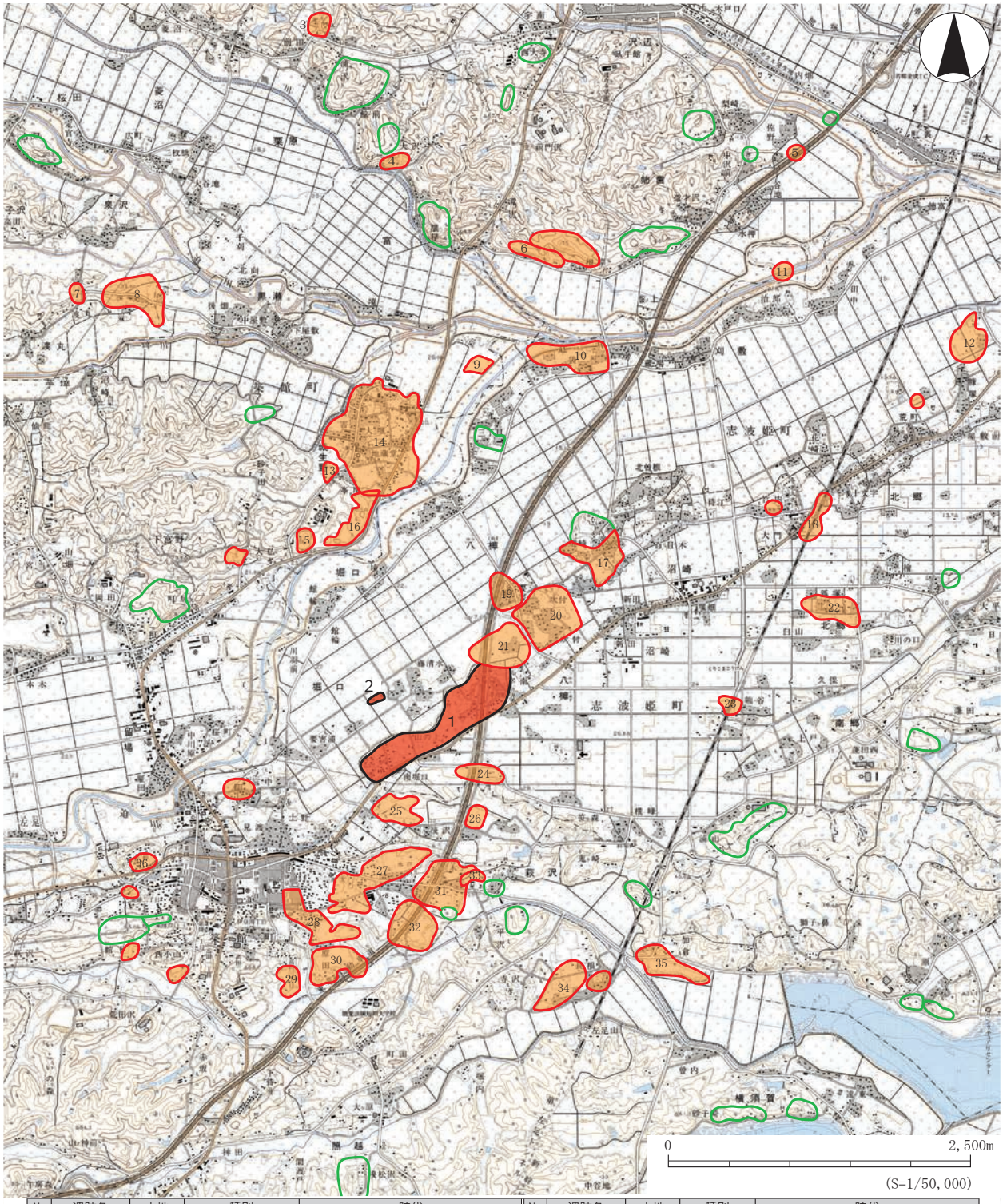
…本遺跡第２群土器段階（宮城県教委 1982）、山ノ上遺跡（宮城県教委 1980g）、長根遺跡（瀬峰町教委 2003）など

③：掘立柱建物と竪穴住居で構成され、関東系土師器が出土する集落。建物は３間以下が多い

…源光遺跡（栗原市教委 2015a）、下萩沢遺跡（栗原市教委 2016）

①類の土師器や住居構成は、本遺跡第１群土器段階と同じで一般集落と考えられる。②類や③類は、現在のところ栗原郡周辺にのみ認められる。②類は土器・カマドとも関東型が主体であること、関東系土師器に南武蔵型が伴うこと、③類は同時期の東北南部に例がないものであることから、大化前代まで南との交流がなかった蝦夷の地に対する律令支配の準備として、坂東からの直接的な移住が行われたと考えられる（村田 2009）。特に、本遺跡は東西 1,500 m、南北 400 mの全体に②類集落が形成されることから、多くの人々が移配されたと考えられる。一方、③類は②類集落を統轄した施設とも考えられるが、モデルは何か、②類との共時性や関係性など、検討すべき課題が多い。

７・８世紀代の墳墓は、古墳と横穴墓がある。鳥矢ヶ崎古墳群は、33 基の小円墳からなり、そのうち２基の調査が行われた。築造年代は８世紀代とみられ、１号墳の石室が横穴式石室の退化形態であること、２号墳の主体部は、東北北部の「末期古墳」にみられる木棺直葬墳とのかかわりで考えられることから、被葬者である首長層と北上川中流域以北とのつながりが指摘されている（藤沢 2000）。また、２号墳からは副葬品として蕨手刀や銅製銙帯金具一式などが出土した。銙帯金具は朝貢によってもたらされており、これら畿内政権との結びつきを示す文物は、地域支配の象徴として利用されたと考えられる（八木 1999）。一方、栗原郡周辺の横穴墓は、造営の最盛期が７世紀末から



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	御駒堂遺跡	段丘	集落	縄文・弥生・古墳後・奈良・平安・近世	19	鶴ノ丸館跡	段丘	集落・城館	縄文・弥生・古墳前・古代・中世・近世
2	堂の沢遺跡	段丘	集落	古代	20	吹付遺跡	段丘	集落	奈良・平安
3	栗原寺跡	丘陵	寺院	平安	21	宇南遺跡	段丘	集落・城館	縄文・弥生・古墳前・古代・中世・近世
4	大沢横穴墓群	丘陵	横穴墓	古墳後・奈良	22	狐塚遺跡	段丘	窯	奈良
5	佐野遺跡	丘陵	集落	縄文・弥生・奈良・平安	23	熊谷遺跡	段丘	集落	縄文・奈良・平安
6	姉歯横穴墓群	丘陵	横穴墓	古墳後・奈良	24	山ノ上遺跡	段丘	集落	縄文・奈良
7	泉沢A遺跡	丘陵	集落	奈良・平安	25	大天馬遺跡	段丘	集落	奈良・平安
8	長者原遺跡	丘陵	集落	古墳中・奈良・平安	26	後沢遺跡	段丘	集落	奈良・平安
9	城下遺跡	自然堤防	集落	奈良・中世・近世	27	下萩沢遺跡	丘陵	集落	縄文・弥生・奈良・平安
10	刈敷袋遺跡	自然堤防	散布地	縄文・古代	28	源光遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安
11	刈敷治郎遺跡	自然堤防	散布地	縄文・古代	29	高田山遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
12	糠塚遺跡	段丘	集落	弥生・奈良・平安	30	原田遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安
13	甚内屋敷遺跡	段丘	散布地	縄文・古代	31	木戸遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安
14	伊治城跡	段丘	城柵・集落・墓	旧石器・古墳前・後・奈良・平安	32	佐内屋敷遺跡	丘陵	集落	縄文・弥生・奈良・平安
15	大仏古墳群	丘陵	墓	古墳後・奈良	33	鰻沢遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安・中世
16	入の沢遺跡	丘陵	古墳・横穴墓・集落	古墳前・後・奈良・平安・中世・近世	34	照越台遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・古墳、古代
17	淀遺跡	段丘	集落	旧石器・古墳・奈良・平安・中世	35	嘉倉貝塚	丘陵	集落・貝塚	縄文・弥生・奈良・平安
18	大門遺跡	段丘	集落	縄文・奈良・平安・中世	36	青野遺跡	段丘	散布地	古代

図版２　御駒堂遺跡、堂の沢遺跡の位置と周辺の古代遺跡

８世紀前半代で、７世紀後半以降に大崎平野以南から２次的に受容された（古川 1996）。このため、栗原周辺の墳墓は北上川中流域以北の「末期古墳」に類する古墳と、大崎平野以南の系譜をひく横穴墓が近接して混在し、時期的に併行して築造された（藤沢　前掲）。

以上のことから、古墳時代後期から奈良時代前半における栗原郡周辺の人々（＝蝦夷）は、墳墓の副葬品や横穴墓から、畿内政権との結びつきや大崎以南の東北南部との交流が一定程度認められるものの、土師器や須恵器、古墳からみて、大崎以南の地域に較べて畿内政権との関係が希薄である一方、北上川中流域以北との結びつきが強かったと考えられる。このため、本地域における建郡を前提とした坂東からの移配は、黒川以北十郡域と異なる方法が採られたが、②・③類集落（＝移民集落）は８世紀中葉になると急減し、城柵が設置されたのは、御駒堂遺跡への大量移配から半世紀近く経った後のこととなった（註７）。

【奈良時代後半】

神護景雲元年（767）に伊治城が造営され、同年もしくは 769 年にはそれを母体として栗原郡が置かれた。建郡にあたっては、坂東や陸奥南部から強制移住あるいは募集による自主移住が人単位で行われた。移民は柵戸と呼ばれ、城柵の造営・維持、土地の開発やムラの経営にあたり、公民として諸負担を課せられた（註８）。

伊治城は、政庁－内郭（曹司域）－外郭からなる三重構造城柵で、全体の 2/3 を占める外郭北部は多数の竪穴住居が犇めく住居域であった（村田 2004・2016）。また、栗原郡全体でも伊治城創建を前後して集落数が増えており、多くの移民があったと考えられる。その一端が、伊治城跡 SI04 住居跡（多賀研 1978）、SK18 土坑（多賀研 1979）、同表採資料（栗原市 2015b）、原田遺跡 SI31 住居跡（宮城県教委 2009a）から出土した会津型長胴甕（山中 2003）や栗原郡に存在した会津郷で、移民募集政策によって陸奥国会津郡から栗原郡へまとまった移住が行われたことを具体的に示している（註９）。

８世紀後半代の集落は、御駒堂･佐内屋敷･原田･下萩沢･長者原･大門･有賀峯･佐野のほか、経ヶ崎･大境山・桃生田前遺跡などで認められ、遺跡数が急増する。集落は①類が主体で基本的な景観は前代と同じであるが、住居は小形化の傾向が進み、それに伴うように住居の壁外に燃焼部が突出し、その先に長い煙道が付くカマドが増える（村田 2004）。原田遺跡や下萩沢遺跡では、掘立柱建物と竪穴住居で構成される集落が認められ、後者では建物が直列に並んで配置に計画性が窺える。また、本段階の集落は火災住居が多く認められ、原田・下萩沢の両遺跡では、伊治公呰麻呂の乱で焼き討ちされた可能性が指摘されている（宮城県教委 2009a・ｂ）。

関東系土師器は姿を消し（註 10）、多くの集落で須恵器が一定量出土するようになる。須恵器の増加は、伊治城造営に伴って現地生産が始まったためで、本遺跡周辺では瓦陶兼業窯の小迫観音窯跡や須恵器窯の狐塚窯跡などが知られる。土師器は食膳具を中心に黒川以北十郡以南と共通するものが増える一方、同地域では８世紀前半までに姿を消す伝統器種（高坏・広口壺・甑など）が残る。

栗原建郡後ほどなく、宮城県北部から北の地域は蝦夷の強力な抵抗に遭い、宝亀５年（774）の海道蝦夷の桃生城侵略から弘仁２年（811）まで続く、38 年戦争の時代に突入する。その間、宝亀 11

年（780）には伊治公呰麻呂の乱が勃発し、伊治城の主要殿舎は焼失した（政庁Ⅱ期）。こうした事態を招いた理由は、黒川以北十郡以南に較べて南の地域とのつながりが希薄であった桃生・栗原地域に対し、桃生・伊治２城の造営とそれに伴う大量の柵戸移配といった、律令国家の急激かつ強圧的な拡大政策に対する反発があったと考えられる（註 11）。

【平安時代】

伊治城は呰麻呂の乱後再建される（政庁Ⅲ期）が、その後大きな改修は行われず、９世紀前葉に廃絶したと考えられる。延暦 21 年（802）の胆沢城､翌年の志波城と相次ぐ北上盆地の城柵造営によって征夷の前線から遠く離れたことに加え、延暦 24 年（805）の徳政相論で征夷が中止されたことで、後方支援基地としての伊治城の重要性が低くなったためと考えられる（註 12）。

伊治城廃絶後の９・10 世紀の集落は、本遺跡のほか佐野・糠塚・宇南・佐内屋敷・長者原・手取・西手取・五輪Ｃ・がんげつ・大境山遺跡などで認められる。これらの集落では、８世紀代まで認められた特大形以上の住居が急減し、中・小形住居を中心に構成されるようになる。さらに、カマド位置にも変化が認められる。８世紀代は北壁中央につくられることが多かったが、東壁や中央から偏った位置に付設されるものが増える。また、宮城県内の集落では９世紀以降、掘立柱建物を伴う例が増えるが（小井川・村田 1994）、栗原郡周辺では大境山遺跡など一部の例にとどまり、他地域に較べて集落への掘立柱建物の普及が進んでいなかったとみられる。

集落や住居構造だけでなく、土師器にも大きな変化が認められる。９世紀前葉のうちに、栗原郡はもとより最北の志波城周辺まで、ロクロ土師器が急速に普及する。これにより、陸奥国内の土師器はほぼ同じ組成・器形となり、前代まで認められた土師器の地域性は薄まるが、桃生・栗原地域では、９世紀以降も煮炊具に非ロクロ土師器が存続し、さらに、量は少ないものの食器が認められて、黒川以北十郡以南とは異なる様相を示した。

【江戸時代】

本遺跡自動車道調査区や城下遺跡、八沢要害遺跡などで、主屋・副屋・雑舎といった複数の建物と井戸や廃棄土坑などで構成される江戸時代以降の屋敷跡が確認されている。このうち、城下遺跡の建物群は幅２～３ｍの区画溝で方形に囲まれ（栗原市教委 2014）、本遺跡自動車道調査区では山林との境に屋敷墓が発見された（宮城県教委 1982）。３遺跡は、築館宿などの町場から離れていること、建物群が広い範囲に点在し密集しないことから、農民層の屋敷跡と考えられる。中でも、八沢要害遺跡の屋敷跡は中世の小規模館の平場をそのまま引き継ぐ形で屋敷がつくられ、建物規模も大きいことから、主は肝煎と考えられている（宮城県教委 1980k）。

遺跡全景（昭和 51 年度撮影）　右側は東北自動車道関連の発掘調査地

図版３　御駒堂遺跡と堂の沢遺跡

C．御駒堂遺跡の調査成果

本遺跡の発掘調査は、築館バイパスのほか東北自動車道や御駒堂浄水場、個人住宅の建設に伴って実施されている（表１・２）。それぞれの調査成果をまとめると、以下のようになる。

【東北自動車道関係調査】

東北自動車道が遺跡東端付近を南北に縦断し、そこに志波姫ＰＡが併設されることになったため、県教委が 1976 年と 1978 年に発掘調査を実施した（図版５）。その結果､古代の竪穴住居跡が 41 軒、近世以降の掘立柱建物跡 11 棟のほか、井戸跡や墓群、区画溝跡などが確認された。後者の建物群は３つに分けられ、その一つは井戸を伴う中庭を建物５棟が囲む農家の屋敷、墓群は屋敷墓と指摘されている（宮城県教委 1982）。

古代の竪穴住居跡の年代別軒数は古墳前期が１軒、７世紀末～８世紀初頭が３軒、８世紀前半が 22 軒、８世紀後半が３軒、９世紀以降が４軒である（註 13）。中でも、８世紀前半は関東系土師器と関東型カマドで構成される移民集落であり（図版４）、こうした関東色がストレートに現れた例は黒川以北十郡以南に認められないことから、古墳時代中・後期を通して畿内政権との結びつきが弱い地に対する、関東からの直接的な移住を示すものとして注目されている（村田 2000・2009 など）。このため、本遺跡の成果は東北だけでなく関東地方の博物館でも紹介されている（東北歴史博物館 2004、横浜市歴史博物館 2002・2007 など）。

【御駒堂浄水場関係調査】

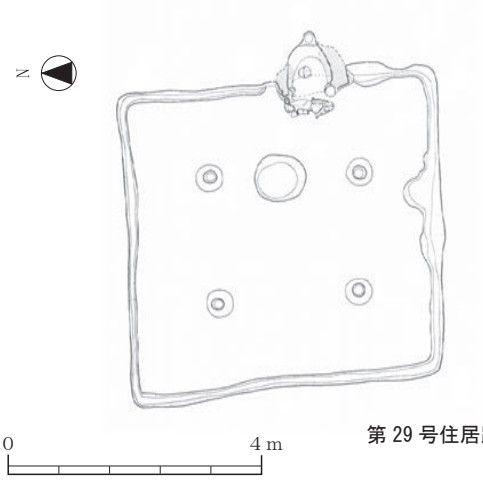
遺跡北西端に建つ御駒堂浄水場が拡張されることになったため、2001・2002 年に発掘調査が行われた。調査主体は旧志波姫町教委で、担当は県教委である。自動車道調査地点からは西に 900 m 離れる。調査の結果、古代の竪穴住居跡６軒、井戸跡１基、土器埋設遺構１基などが確認された（志波姫町教委 2005）。精査した住居跡は１軒で、土師器やカマドの特徴は自動車道調査地点の８世紀前葉と共通しており、移民が住んだと考えられたため、同時期の移民集落は東西 1,500 mの遺跡全体に広がっていた可能性が考えられた。また、井戸跡は灰白色火山灰より古く、古代集落の井戸としては類例が少なく、注目される。

【一般開発関係調査　個人住宅関係調査】

一般開発に関わる調査で、市教委によって 2005 年以降、毎年行われている。その結果、遺跡西側の３地点で住居跡が１軒ずつ検出され、2013 年の南隣接地で行われた調査では、関東型カマドをもつ竪穴住居跡が確認された。このため、遺跡南側の範囲は図版５のように拡大している。

【築館バイパス関連調査】

遺跡西側を国道４号線築館バイパスが南北に縦断するため、県教委が 2009 ～ 2015 年に本線部分の発掘調査を実施した（本書で報告）。８世紀前葉の竪穴住居跡を７軒、８世紀中葉～後半の竪穴住居跡を２軒確認しており､関東からの移民集落が遺跡全体に展開していたことが確実となった。また、８世紀中葉～後半の集落としては、類例が少ないロクロ土師器や墨書土器が出土しており、建郡まも

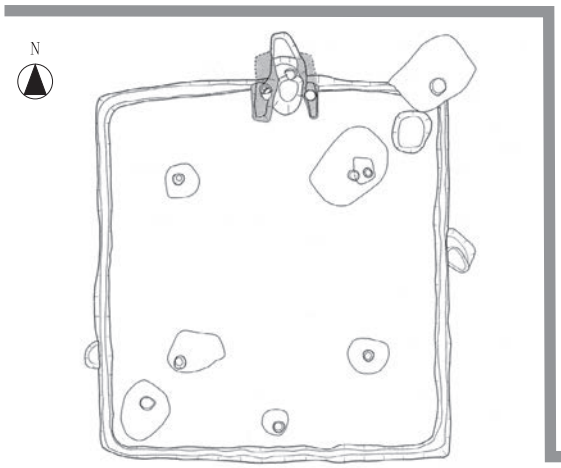


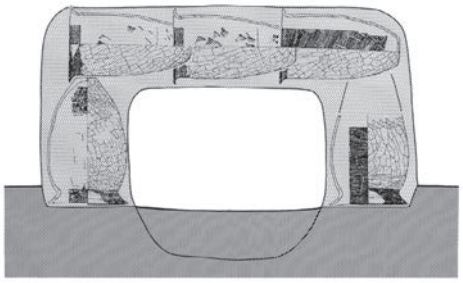
（住居跡平面図、S=1/120）

第 29 号住居跡（西から）

第 29・35 号住居跡出土関東系土師器（横浜市歴博 2002 より）

第 29 号住居跡カマド





第 29 号住居跡カマド焚口部模式図　（村田 2000 より）

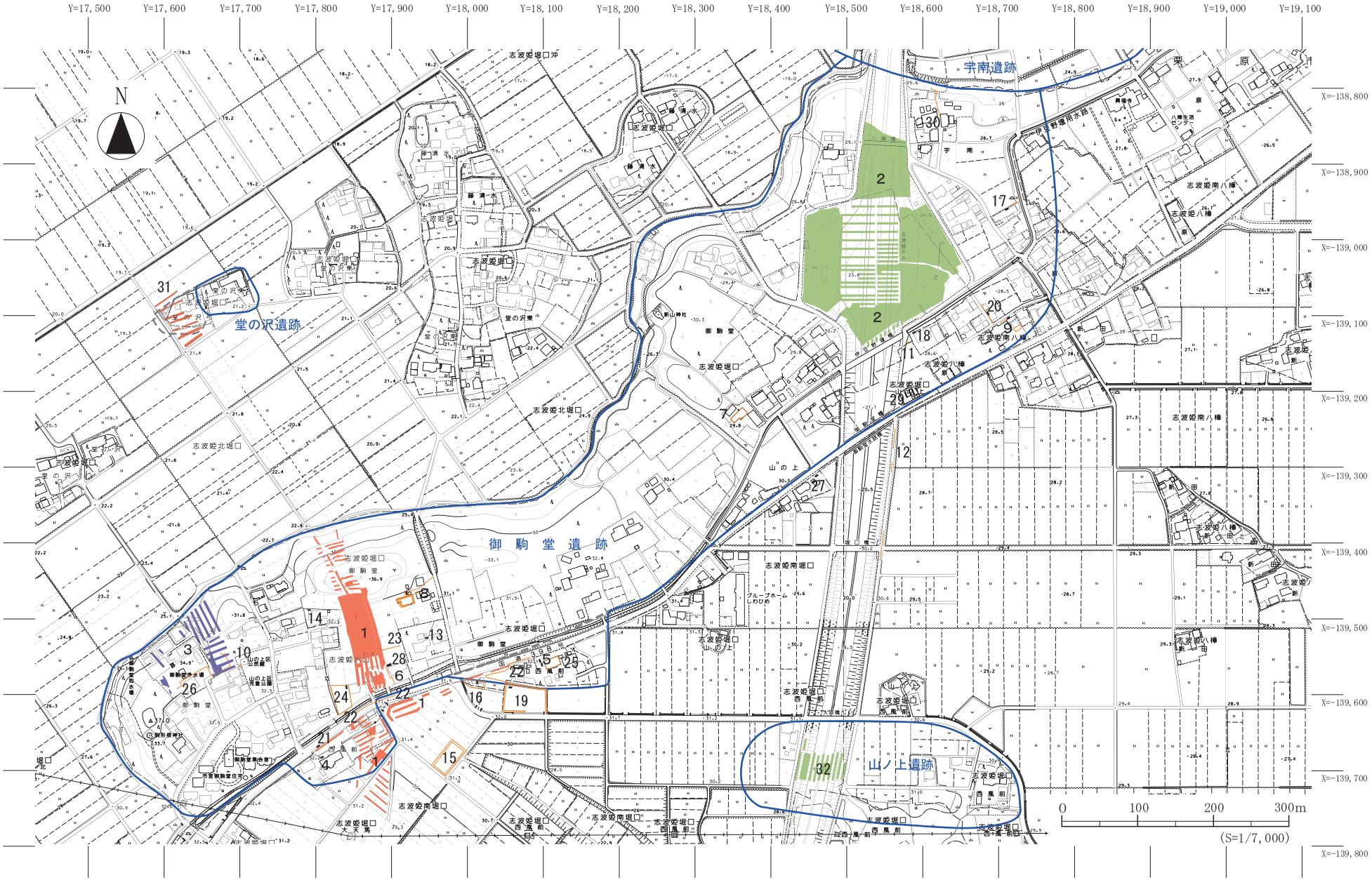
0　50cm

（S=1/20）

第６号住居跡（南から）

第６号住居跡カマド

図版４　移民の住居と土器　－第６号住居跡と第 29 号住居跡－



築館バイパス関連調査　東北自動車道関連調査　旧志波姫町浄水場調査　栗原市教委確認調査　栗原市教委立会調査　遺跡範囲　遺跡範囲（旧）

図版５　御駒堂・堂の沢・山ノ上遺跡の調査地点

ない栗原郡の律令支配の一端を知る手がかりが得られた。このほか、旧石器時代から縄文時代にかけての遺物包含層、縄文時代早期とみられる陥し穴群、近世における農民層の屋敷跡等を確認している。

御駒堂遺跡

№.	調査年．月．日	調査地点	面積（㎡）		調査内容	主な発見遺構	遺物量（平箱）
			対象	調査（本調査分）			
1	2009(H21).5.25－6.3	A区南隣接地	1,900	300	試掘・確認調査	遺構なし	0
2	2010(H22).10.20－10.26	B区西側	2,000	900	試掘・確認調査	遺構なし	0
3	2012(H24).9.4－9.18	A区南側	660	470(470)	記録保存調査、試掘・確認調査	竪穴住居跡１(8c前葉)	5
4	2013(H25).11.11－11.28	A区北側	2,446	550(550)	記録保存調査、試掘・確認調査	竪穴住居跡１(8c後半)、近世以降の溝跡・Pit・土坑	3
5	2014(H26).1.21－1.30	C区・D区	7,200	1,800	試掘・確認調査	陥し穴、竪穴住居跡４、掘立柱建物跡、近世以降の井戸跡、土坑	1
6	2014(H26).7.7－10.3	B区東側・C区・D区	7,650	3,533(2,940)	記録保存調査、試掘・確認調査	旧石器の遺物包含層１、縄文晩期の遺物包含層１、陥し穴21、竪穴住居跡６(8c前葉)、古代の掘立柱建物跡１、近世の掘立柱建物跡７、井戸跡３、墓跡17など	21
7	2015(H27).4.20－6.2	C区東端	460	460(460)	記録保存調査	縄文時代の陥し穴１、竪穴住居跡２(8c前葉と後半)、近世の掘立柱建物跡１、井戸跡４	6
			14,816	6,633(4,420)			

堂の沢遺跡

	2013(H25).11.5－11.14		3,452	623	試掘・確認調査	近世以降の溝跡・Pit・土坑・水田跡	0

※遺物量は発掘調査時のもの

表１　築館バイパス関連　御駒堂遺跡年度別調査面積と主な発見遺構

№.	遺跡名	調査原因	調査主体	調査期間	調査内容	対象面積（㎡）	調査面積（㎡）	本調査面積（㎡）	主な検出遺構	報告書
1	御駒堂遺跡	築館バイパス	宮城県教委	2009(H21).5～2015(H27).5	本	14,800		6,630	旧石器時代の遺物包含層、陥し穴22、古代の竪穴住居跡7、掘立柱建物跡7、近世墓17、井戸跡7	本書
2	御駒堂遺跡	東北自動車道	宮城県教委	1976(S51).8～1978(S53).8	本	45,000		36,000	古代の竪穴住居跡41、掘立柱建物跡11	宮城県83
3	御駒堂遺跡	御駒堂浄水場	志波姫町教委	2001(H13).3～2002(H14).10	本+確認	1,410		250	古代の竪穴住居跡6、土器埋設遺構1、井戸跡1	志波姫町１
4	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教委	2009(H21).12	確認		20		古代の竪穴住居跡1	
5	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教委	2013(H25).11	確認		23.7		古代の竪穴住居跡1、土坑など	
6	御駒堂遺跡	配管	栗原市教委	2014(H26).9	本		18.2		古代の竪穴住居跡1	
7	御駒堂遺跡	既存建物解体・簡易水洗	栗原市教委	2005(H17).7	立会		140		焼土・炭化物あるも不明	
8	御駒堂遺跡	個人住宅	栗原市教委	2005(H17).10	確認		8.5		近世以降のﾋﾟｯﾄ2	
9	御駒堂遺跡	寄宿舎 合併処理浄化槽	栗原市教委	2007(H19).7 2012(H24).5	立会 確認		20 8		なし なし	
10	御駒堂遺跡	防災無線	栗原市教委	2007(H19).10	立会		0.2		なし	
11	御駒堂遺跡	防災無線	栗原市教委	2007(H19).10	立会		0.2		なし	
12	御駒堂遺跡	水道	栗原市教委	2007(H19).11	立会		50		なし	
13	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教委	2009(H21).10	確認		16		なし	
14	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教委	2010(H22).10	確認		6.6		なし	
15	御駒堂遺跡	個人住宅	栗原市教委	2010(H22).12、2011(H23).1	立会		192		なし	
16	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教委	2011(H23).1	確認		6.7		なし	
17	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽、配管	栗原市教委	2011(H23).2～3	確認・立会		9		なし	
18	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教委	2011(H23).1	確認		17.6		なし	
19	御駒堂遺跡	個人住宅 合併処理浄化槽 水道	栗原市教委	2011(H23).3 2011(H23).1 2011(H23).2	立会 確認 立会		205 11 22		ピット なし なし	
20	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教委	2012(H24).1	確認		4.2		溝跡	
21	御駒堂遺跡	案内表示	栗原市教委	2013(H25).2	確認		9		なし	
22	御駒堂遺跡	水道 水道 水道	栗原市教委	2013(H25).3 2014(H26).2 2015(H27).4～5	立会 立会 立会		130 33.5 83.4		落ち込み(カクラン？) なし 溝跡1、落ち込み	
23	御駒堂遺跡	側溝	栗原市教委	2016(H28).3	立会		28		なし	
24	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教委	2013(H25).5	確認		7.8		なし	
25	御駒堂遺跡	個人住宅	栗原市教委	2013(H25).8	立会		90		なし	
26	御駒堂遺跡	浄水場	栗原市教委	2014(H26).1～2	立会		70		なし	
27	御駒堂遺跡	個人住宅	栗原市教委	2014(H26).7	立会		10		なし	
28	御駒堂遺跡	合併処理浄化槽	栗原市教委	2014(H26).9	確認		22.8		なし	
29	御駒堂遺跡	個人住宅 合併処理浄化槽	栗原市教委	2014(H26).9 2015(H27).4	確認 確認		35.2 9		なし なし	
30	御駒堂遺跡	水道	栗原市教委	2015(H27).12	立会		26		なし	
31	堂の沢遺跡	築館バイパス	宮城県教委	2013(H25).11		2,246		550	近世の水田跡	本書
32	山ノ上遺跡	東北自動車道	宮城県教委	1975(S50).10～11		4,140		1,340	古代の竪穴住居跡3	宮城県69

※№は図版５に対応

表２　御駒堂遺跡、堂の沢遺跡、山ノ上遺跡の調査成果

第Ⅲ章　御駒堂遺跡

SI01 住居跡（南から）

SI01 住居跡出土土器

調　査　要　項

遺跡名：御駒堂遺跡（宮城県遺跡登録番号　49014）

遺跡記号：ＢＪ

所在地：宮城県栗原市志波姫堀口御駒堂

発掘対象面積：14,816㎡（隣接地確認調査分を含む）

発掘面積：6,627㎡（隣接地確認調査分を含む。本発掘調査面積は 4,420㎡）

調査期間：平成 21 年 5 月 25 日～ 6 月 3 日
平成 22 年 10 月 20 日～ 10 月 26 日
平成 24 年 9 月 4 日～ 9 月 18 日
平成 25 年 11 月 11 日～ 11 月 28 日、平成 26 年 1 月 21 日～ 1 月 30 日
平成 26 年 7 月 7 日～ 10 月 3 日
平成 27 年 4 月 20 日～ 6 月 2 日

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：平成 21 年度：豊村幸宏、尾形祐之、古田和誠
平成 22 年度：初鹿野博之、小野寺淳一、古田和誠
平成 24 年度：古川一明、豊村幸宏、山中信宏、大友邦彦、古田和誠
平成 25 年度：村田晃一、大友邦彦、清水上政憲、長内祐輔、齋藤和機
平成 26 年度：高橋栄一、村田晃一、佐藤則之、小野章太郎、村上裕次、熊谷宏規
長内祐輔、高橋洋彰、高橋透、齋藤和機
平成 27 年度：村田晃一、生田和宏、熊谷宏規

Ａ．調査の方法と経過

１．調査の方法

今回の発掘調査は、幅３ｍのトレンチを設定して確認調査を行い、遺構を検出した部分について調査区を面的に広げるという方法を採った。その際、当地域の古代集落は住居が散村状に点在すること、中には一辺４ｍ以下の小形住居が含まれることから、トレンチ間の距離はできる限り狭くする必要があり、４ｍを基本とした（図版６）。その結果、確認調査で見落とした竪穴住居は１軒（SI15）に押さえることができた。

遺構断面図は、随時手実測で作成した（縮尺 1/20）。平面図は、調査区の近くに設定された工事用の測量原点（世界測地系第Ｘ系）を基準とし、（株）ＣＵＢＩＣ製発掘調査関連測量専用ソフト「電子平板　遺構くん」と（株）ソキア・トプコン製の自動追尾トータルステーションを用いて作成した。また、遺構の写真撮影は 1,200 万画素のデジタルカメラを使い、調査面積が広かった平成 26 年度のみラジコンペリコプターによる航空写真撮影（デジタルカメラと６×７版カメラ）を業者に委託して行った。

２．調査の経過

築館バイパスは遺跡西側を南北に縦断するため、これを横断する国道 398 号線や市道、地目の境に基づいてＡ～Ｄ区に区分した（図版６・７）。調査概要は以下のとおりである。また、年度毎の調査期間、調査面積、発見遺構については表１にまとめた。

①平成 21 年度の調査

Ａ区南隣接地で確認調査を行ったが、遺構・遺物は認められなかった。

②平成 22 年度の調査

Ｂ西側区で確認調査を行ったが、遺構・遺物は認められなかった。

③平成 24 年度の調査

Ａ区南端で確認調査を行ったところ、８世紀前葉の竪穴住居跡を１軒（SI01）確認したことから、住居周辺について本調査を実施した。SI01 は、カマドや土器の特徴が関東地方のものと共通しており、同地域から移住した人々の住居と考えられた。また、この場所は遺跡隣接地であったため、範囲の修正を行った。

④平成 25 年度の調査

Ａ区北側とＣ区、Ｄ区の確認調査を行った。栗原郡域の古代集落は住居が点在すること、中には一辺４ｍ以下の小形住居が含まれることから、トレンチは４ｍ間隔で設定した。その結果、Ａ区で８世紀後半の竪穴住居跡を１軒（SI02）検出したことから、住居周辺について本調査を行った。

Ｃ区は中央から北側にかけて、南北に長い５本のトレンチを設定したところ、古代の竪穴住居跡４軒のほか、陥し穴や掘立柱建物跡、井戸跡などを検出したため、この部分について翌年に全面調査す

平成 21 年度調査区　平成 22 年度調査区　平成 24 年度調査区　平成 25 年度調査区

平成 26 年度調査区　平成 27 年度調査区　栗原市教委調査区

※平成 25 年度の確認調査はC区全域について行ったが、翌年、その成果に基づいて中央から北側は道路幅に合わせて調査区を設定したため、重複部分では 25 年度のトレンチを表現していない。

図版６　築館バイパス関連調査区の位置

平成 26 年度調査区全景（南から）　中央奥の青いシートは発掘調査中の入の沢遺跡

遺構検出作業－平成 27 年度調査

遺構精査（１）－平成 27 年度調査

遺構精査（２）－平成 25 年度調査　SI02 住居跡

平成 26 年度調査現地説明会

図版７　調査区全景と調査風景

ることとした。また、D区は北裾部で併行する土塁と空堀跡を確認したため、一部断ち割りを行ったが、土塁の積土にしまりがなく、空堀が山側につくられているため、近世以降の獣除け施設と考えられた。その他の部分については、木根が非常に多かったことから、それらを避けてトレンチを設定したが、遺構・遺物は認められなかった。

⑤平成 26 年度の調査

C区中央から北側の本発掘調査とC区南側およびB区東側の確認調査を行った。本発掘調査部分では、古代の竪穴住居跡５軒（SI03・06・07・11・15）のほか、陥し穴 20 基、掘立柱建物跡７棟、井戸跡２基、近世墓 17 基などを確認した。さらに、C区北西隅付近の第Ⅴ層から石器が出土したことから、２×２ｍのグリッドを設定して包含層を調査するとともに、調査区全体に任意のグリッドを設定して他の包含層の有無についても確認を行った。

D区は、昨年度未調査であった区域にトレンチを入れたところ、頂部付近の南斜面で縄文晩期の遺物包含層を確認した。さらに、C区南側の確認調査で古代の竪穴住居跡を１軒（SI50）発見したため、その周囲についても本発掘調査を行った。

調査の結果は、以下のとおりである。

・旧石器時代の遺物包含層は、石器製作の場であった。
・陥し穴には３種類あり、最も多い平面が円形で底の中央に逆茂木が１本立てられるタイプは、４～10m離れて南北に並んでいた。
・６軒の竪穴住居跡は、いずれも８世紀前葉のもので、出土土器やカマドが判明したものの構造をみると、関東地方（特に北武蔵）からの直接的な移民のあったことを示している。
・８世紀前葉の移民の住居は、過去の調査成果を加えると30軒になり、それらが遺跡内でまんべんなく分布することから、東西1,500m、南北400mの範囲全体に移民集落が形成されたと考えられる。
・近世の遺構は、掘立柱建物跡や井戸跡、近世墓の分布から居住域と外側の耕作地、さらに山際の屋敷墓といった農家の景観が復元できる。

８月 23 日には、現地説明会を実施し、180 名の参加があった。さらに、８月 28 日に志波姫小学校６年生を対象とした校外学習を行っている。参加者は 63 名であった。

⑥平成 27 年度の調査

C区東側の歩道部分について本発掘調査を実施し、８世紀前葉の竪穴住居跡１軒（前年度の SI03 の一部）、８世紀中頃～後半の竪穴住居跡１軒（SI51）、陥し穴２基、井戸跡４基などを発見した。このうち、陥し穴の１基（SK72）より縄文時代早期の土器が出土したことから、陥し穴全体の年代を考える手がかりが得られた。また、SI51 からは導入段階のロクロ土師器や同時代の一般集落では少ない墨書土器、馬が描かれた刻書土器などが出土しており、当地域における律令支配のあり方を具体的に示すものとして注目される。

B．基本層序

御駒堂遺跡の範囲は東西約 1,500 m、南北約 400 mと東西に細長く、築館バイパスは西側を南北に縦断する（図版５）。発掘調査前の状況は、国道 398 号線の南が水田で、北は国道に面する部分が宅地となる他は畑地が多く、北縁の高い部分は山林となっていた。それぞれの標高は水田が 30 m前後、畑地や宅地が 32 m前後、山林が 36 mほどである。

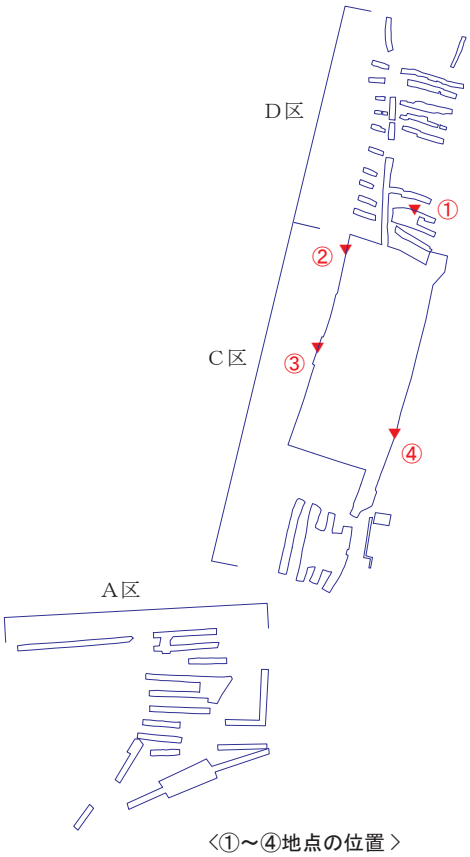
基本層は地点毎に多少異なるものの、ほぼ同じ特徴をもつことから６層（第Ⅰ～Ⅵ層）に大別できる（図版８）。第Ⅰ層は表土である。第Ⅱ層は第Ⅲ層が残存する部分で確認できた自然堆積層で、厚さは 10 ～ 20㎝程である。第Ⅲ層は 10 世紀前葉に降下した灰白色火山灰色で、残りの良い部分では１次堆積の上に水成堆積層（２次堆積）が確認できた。第Ⅳ層は旧表土で、段丘上での厚さは残りの良いところでも 10㎝ほどであるが、遺跡北端の SA13 土塁跡下に良好に残っており、40㎝前後認められた。古代の遺構はここから掘り込まれるが、縄文時代の遺構との関係は、第Ⅳ層が部分的にしか残らないため不明である。第Ⅴ層は地山漸移層、第Ⅵ層は地山である。両層については、次章で詳述する。

以下各層の特徴を示す。

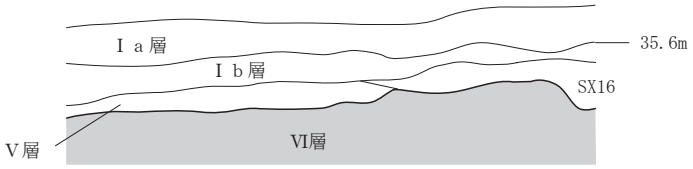
第Ⅰ層：表　　土	暗褐色（10YR3/4) ～黒褐色（10YR3/1）シルト
第Ⅱ層：自然堆積層	黒色（10YR2/2）粘土～粘土質シルト
	第Ⅲ層上に堆積
第Ⅲ層：灰白色火山灰層	灰白（10YR8/2）シルト
	残りのよい場所では１次堆積と２次堆積に細分できる
第Ⅳ層：旧　表　土	黒褐色（10YR3/1 ～ 3/2）シルト
第Ⅴ層：地山漸移層	暗褐色（10YR3/4）シルト～灰黄褐色（10YR4/2）シルト
第Ⅵ層：地　　山	黄褐色（10YR5/6）シルト質粘土

C．発見した遺構と遺物

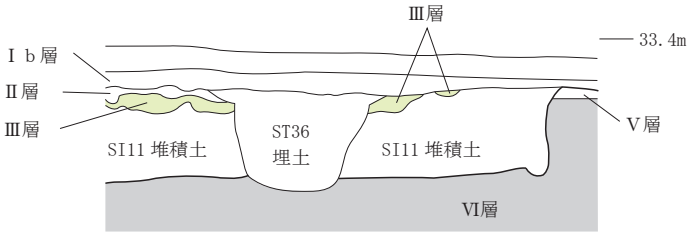
発見遺構・遺物と基本層序との関係は、旧石器時代から縄文時代の遺物が第Ⅴ～Ⅵ層に含まれる。一方、縄文時代以降の遺構や遺物は、第Ⅳ～Ⅵ層で確認した。飛鳥時代より新しい遺構は、第Ⅳ層から掘り込まれる。このため、以下の記述は旧石器時代から縄文時代と縄文時代以降に分けて行う。その際、本遺跡の過去の調査については、1976 ～ 1978 年に実施した東北自動車道調査（宮城県教委 1982）を自動車道調査、2001 ～ 2002 年に実施した旧志波姫町教委調査（志波姫町教委 2005）を浄水場調査と呼ぶことにする。



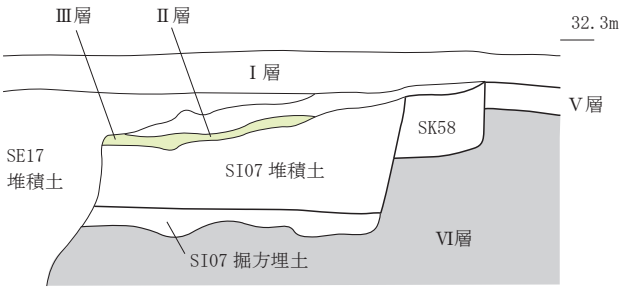
〈①～④地点の位置〉



〈①：D区南部－SX16 付近〉

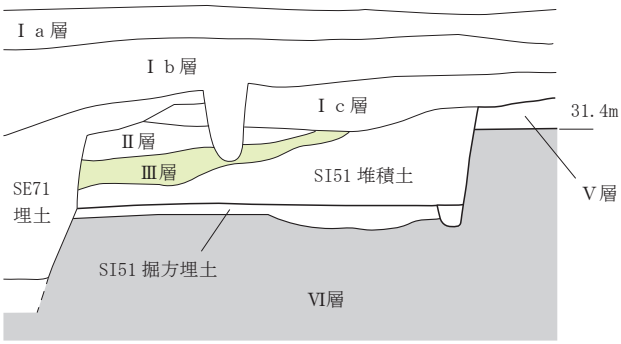


〈②：C区西壁北端－SI11 付近〉



〈③：C区西壁中央部－SI07 付近〉

0　1 m
(S=1/40)



〈④：C区東壁南側－SI51 付近〉

図版８　基　本　層　序

１．旧石器時代から縄文時代

(1) 調査の方法と経過

平成 26 年度の発掘調査対象範囲の地形は、北側の急斜面部と南側の緩斜面～平坦面に分かれる。このうち本発掘調査を実施した南側（Ⅱ・Ⅲ区）において、Ⅱ区北西部の遺構確認面（Ⅴ層上面）および竪穴住居跡（SI11）の堆積土からそれぞれ 1 点ずつ縄文時代以前とみられる石器が出土した（図版 18･19）。このため、Ⅱ区北西部を中心に縄文時代以前の遺構･遺物の検出を目的とした調査を行った。

調査では 2m × 2m を 1 グリッドとする確認トレンチを石器出土地点に設定した。この地点の調査でⅥ層中（図版 9）から石器が出土することを確認したため、石器が出土したトレンチの隣接部分も調査の対象として、順次拡張することとした。また、石器出土層位であるⅥ層の分布範囲を確認する目的で、斜面と平行または直交するように、それぞれ南北方向、東西方向に一定の間隔でトレンチを設定した（図版 10）。この際に、調査を完了した古代の竪穴住居跡も確認トレンチとして利用し、Ⅵ層以下の土層確認を行った。結果、当該期の遺構として石器集中地点 1 箇所を検出し、53 点の石器が出土した（水洗篩による回収遺物を除く）。これに、先に出土した 2 点を含めると 55 点に上る。また、Ⅵ層の分布は調査区の北半分のみに広がることを確認した（図版 10 ～ 12）。

出土したすべての遺物は出土位置を三次元で記録し、また、ある程度の大きさの遺物については出土層位や出土状況を詳細に確認・記録するため、個別の出土状況について写真による記録保存を行った。さらに、石器を取り上げた後の土壌の型（インプリント）についても写真による記録保存を実施した。石器が集中して出土したトレンチでは、一部の土壌を回収し、水洗篩（4mm･2mm･1mm 目）による遺物の回収を行った（表 3）。調査ではすべての土壌を回収することができなかったことから、回収した土壌はすべて計量し、土壌 1 ℓ あたりの遺物量を算出することで、砕片の分布密度を確認することとした（図版 13）。

平成 27 年度は、前年度の調査結果を踏まえて、Ⅵ層が分布する調査区北側 1/3 の部分でやや密に、残る 2/3 の部分では間隔を広げて確認トレンチを設定し、遺構・遺物およびⅥ層の分布の確認を行った（図版 10・12）。

なお、2 箇年に及ぶ発掘調査において当該期を対象とした調査面積は約 250㎡である。

(2) 基本層序

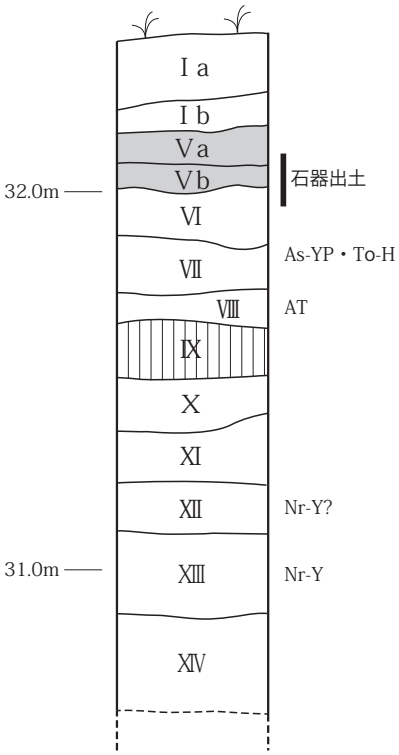
石器集中地点内（Ⅱ区 A5 グリッド西壁）で確認した基本層序は以下のとおりである（図版 9）。なお、火山灰の検出および分析については、（株）火山灰考古学研究所に委託した（附章参照）。

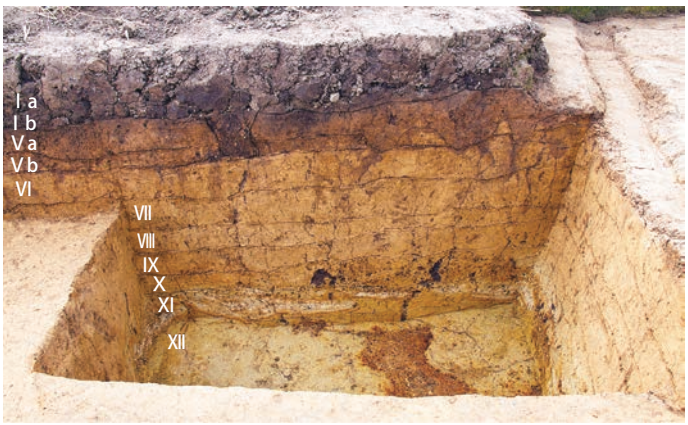
第Ⅰ層：表土層。現耕作土層（Ⅰａ層）と旧耕作土層（Ⅰｂ層）に分かれる。

第Ⅴ層：暗褐色粘土質シルト層。この地点ではⅥ層起源の黄褐色シルト質粘土ブロックを含み、その多寡により、少量を含む層（Ⅴａ層）と多量に含む層（Ⅴｂ層）に分かれる。いわゆる下層（当該地点ではⅥ層）との漸移層である。この層から石器の出土が確認される。

第Ⅵ層：黄褐色シルト質粘土層。石器はこの層の上部から最も多く出土する。

第Ⅶ層：黄褐色粘土質シルト層。Ⅵ層に比べて砂がやや多く混じる。この層から浅間板鼻黄色軽石





層位	土色	土性	特徴	備考
Ⅰa			現耕作土	
Ⅰb			旧耕作土	
Ⅴa	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	10YR5/6 黄褐色シルト質粘土（Ⅵ層起源）粒・小ブロック少量	石器出土
Ⅴb	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	10YR5/6 黄褐色シルト質粘土（Ⅵ層起源）小～中ブロック多量	石器出土
Ⅵ	黄褐色（10YR5/6）	シルト質粘土	炭化物粒少量。植物の根によるカクランが多く入る	石器出土
Ⅶ	黄褐色（10YR5/6）	シルト質粘土	炭化物粒少量。Ⅵ層に比べて砂がやや多い。植物の根によるカクランが入る	As-YP、To-H
Ⅷ	明黄褐色（10YR6/6）	シルト質粘土	炭化物粒をわずかに含む。植物の根によるカクランが入る	AT
Ⅸ	黄褐色（10YR5/6）	シルト質粘土	炭化物粒少量	暗色帯
Ⅹ	黄褐色（2.5Y5/6）	粘土		
ⅩⅠ	明黄褐色（2.5Y6/6）	粘土	2.5Y8/3 淡黄色火山灰をラミナ状に含む	
ⅩⅡ	明黄褐色（2.5Y6/6）	砂	小礫多量。スコリアをわずかに含む	Nr-Y?
ⅩⅢ	明褐色（7.5YR5/8）	砂質シルト	スコリアを含む	Nr-Y
ⅩⅣ	灰黄色（2.5Y7/2）	粘土	炭化物粒を含む	

図版９　基本層序模式図（左）・断面写真（右上）、火山灰分析作業風景（右下）

（As-YP）（註 14）と十和田八戸テフラ（To-H）が検出された。

第Ⅷ層：明黄褐色シルト質粘土層。この層から姶良丹沢火山灰（AT）が検出された。

第Ⅸ層：黄褐色シルト質粘土層。この層は前後の層と比較してややくすんだ色調を呈し、上層で検出された AT との関係から、いわゆる「暗色帯」（柳田 2003）とみられる。

第Ⅹ層：黄褐色粘土層

第ⅩⅠ層：明黄褐色粘土層。淡黄色火山灰をラミナ状に含む。

第ⅩⅡ層：明黄褐色砂層。スコリアをわずかに含む。

第ⅩⅢ層：明褐色砂質シルト層。スコリアを含む。火山灰分析の結果、このスコリアは鳴子柳沢テフラ（Nr-Y）に比定されている。上層の第ⅩⅡ層および第ⅩⅠ層で検出した火山灰やスコリアはこの二次堆積物の可能性が考えられる。

（3）発見した遺構と遺物

①遺構の概要

平成 26 年度の本発掘調査区（Ⅱ区）北西部で、石器集中地点 1 箇所を検出し、ここから石器が 53 点出土した（表３）。石器はＶａ層からⅥ層上部にかけて出土しているが、Ⅵ層から出土した石器が最も多いことや、石器の平面分布では出土層位の偏りが確認されないことから、Ｖａ層やＶｂ層出土の石器は本来Ⅵ層上部に包含されていたものとみられ、Ⅵ層が遺物包含層として位置づけられる。また、石器集中地点周辺の土壌の一部を回収し、水洗篩（4mm･2mm･1mm 目）により砕片を 2,717 点回収した（表４）。これらの他に、縄文時代や古代の遺構確認面や、古代の遺構堆積土から当該石器群に含まれるとみられる剥片が 2 点出土している。

②遺物包含層の分布状況

石器の本来の出土層位がⅥ層上部であることから、この分布範囲を確認する目的で、Ⅱ区全域を対象にトレンチを設定し、遺構・遺物の有無の確認とともに土層の確認を行った。図版 12 はⅡ区全域の南北および東西断面を柱状図で示したものである。南北方向では、西から 9T-10T 間、16T-17T 間、22T-23T 間でⅥ層の分布が途切れることを確認した。これより北側ではすべての確認トレンチでⅥ層を検出しており、東西ともに調査区外へ広がるものとみられる。

③出土石器の分類

本発掘調査で出土した当該期の石器は、総数 2,772 点ある。これらのほとんどが水洗篩で回収した砕片で、出土位置を確認・記録できた遺物は 55 点である。これらの石器について、以下の基準で器種分類を行った。

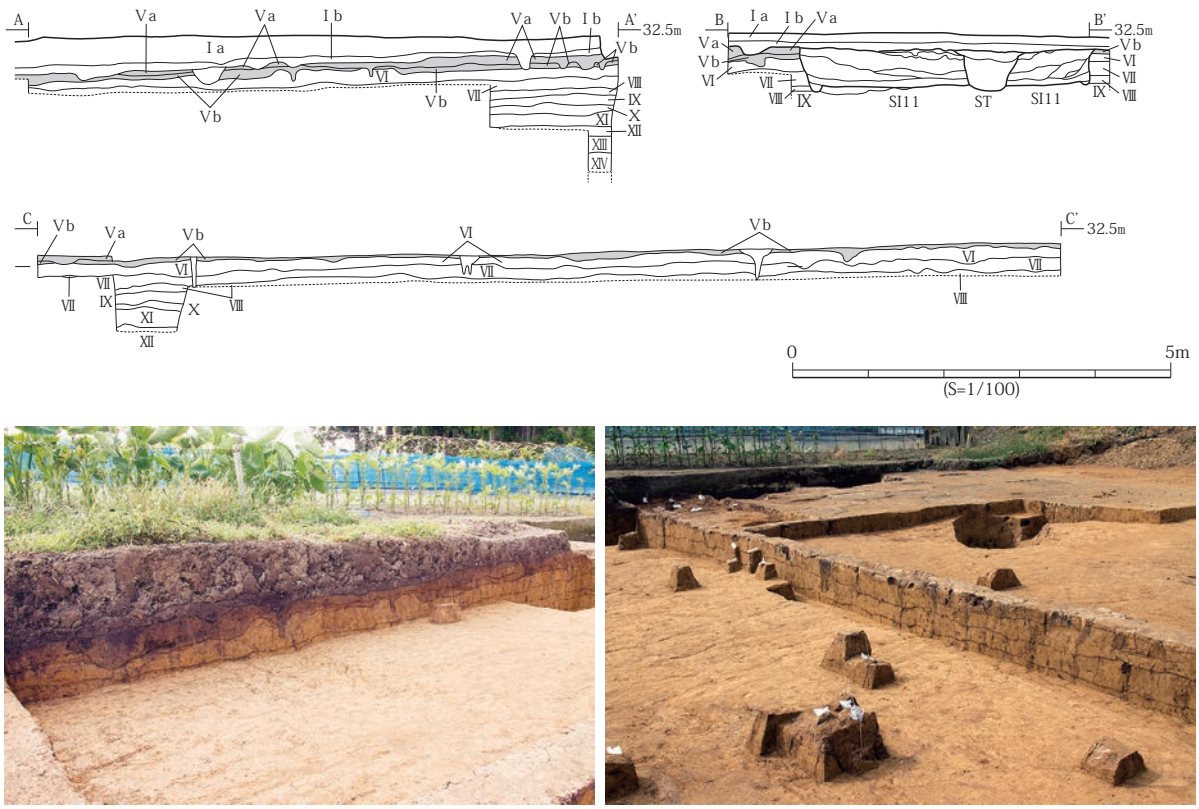
楔形石器：両極打法による剥離面（両極剥離痕）が認められるもののうち、対向する縁辺に二次加工や使用による微小剥離痕が観察されるもの。この石器の特徴として、末端がステップ状となる二次加工面が多く見られ、また、使用による縁辺のつぶれが多く認められる。

二次加工ある剥片：剥片や石刃の縁辺の一部に二次加工を施したもの。全体の形状は素材となる剥片や石刃の元の形状を大きく変化させることがなく、また、二次加工の位置も不規則であることから、器種として一定の型式を有するものではない。

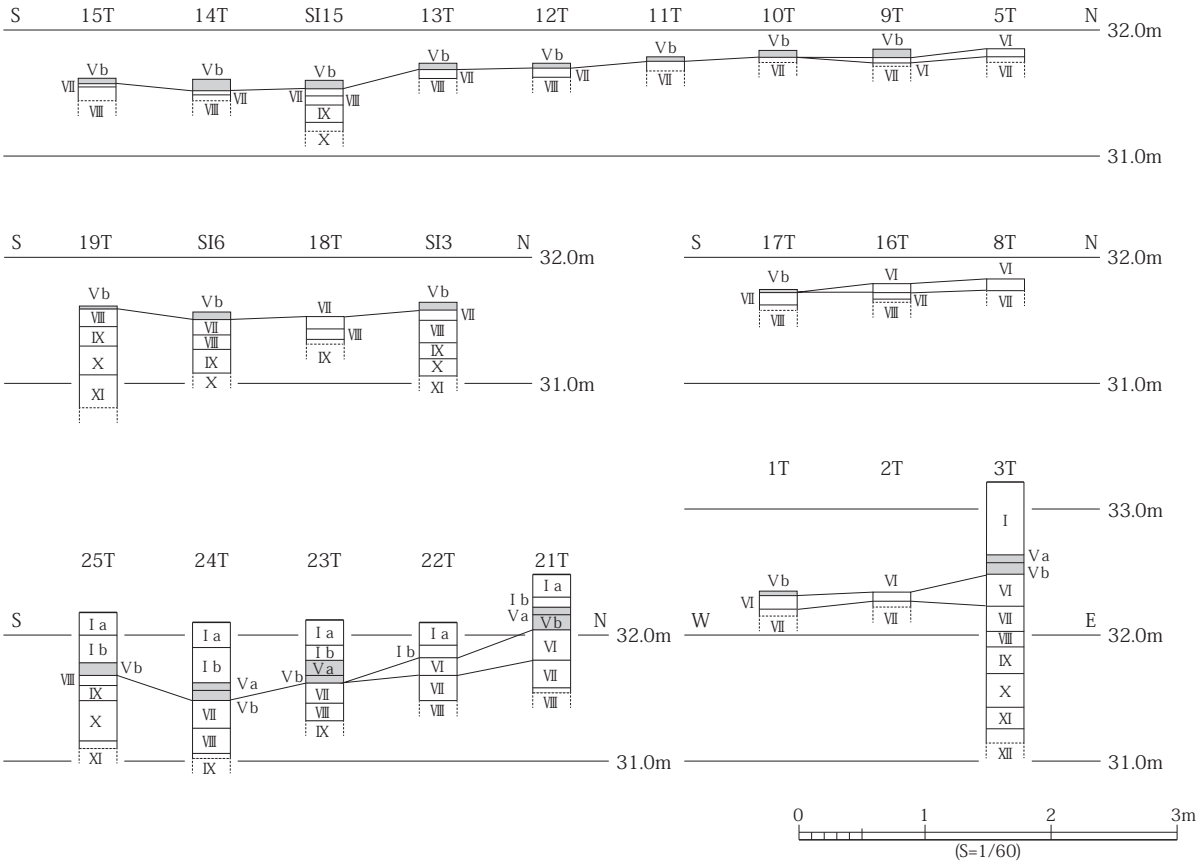
石刃：長さが幅の概ね 2 倍以上あり、両側辺と平行する稜線をもつ剥片。破損等により長さが幅の 2 倍未満のものについては、元の形状が石刃として認定できるもののみこの器種に分類した。

剥片・砕片：石器製作における石材残滓。便宜的に、製作時の目的の有無や内容にかかわらず最終剥離面がポジティブとなるものを剥片、ネガティブとなるものを石核とする。剥片と分

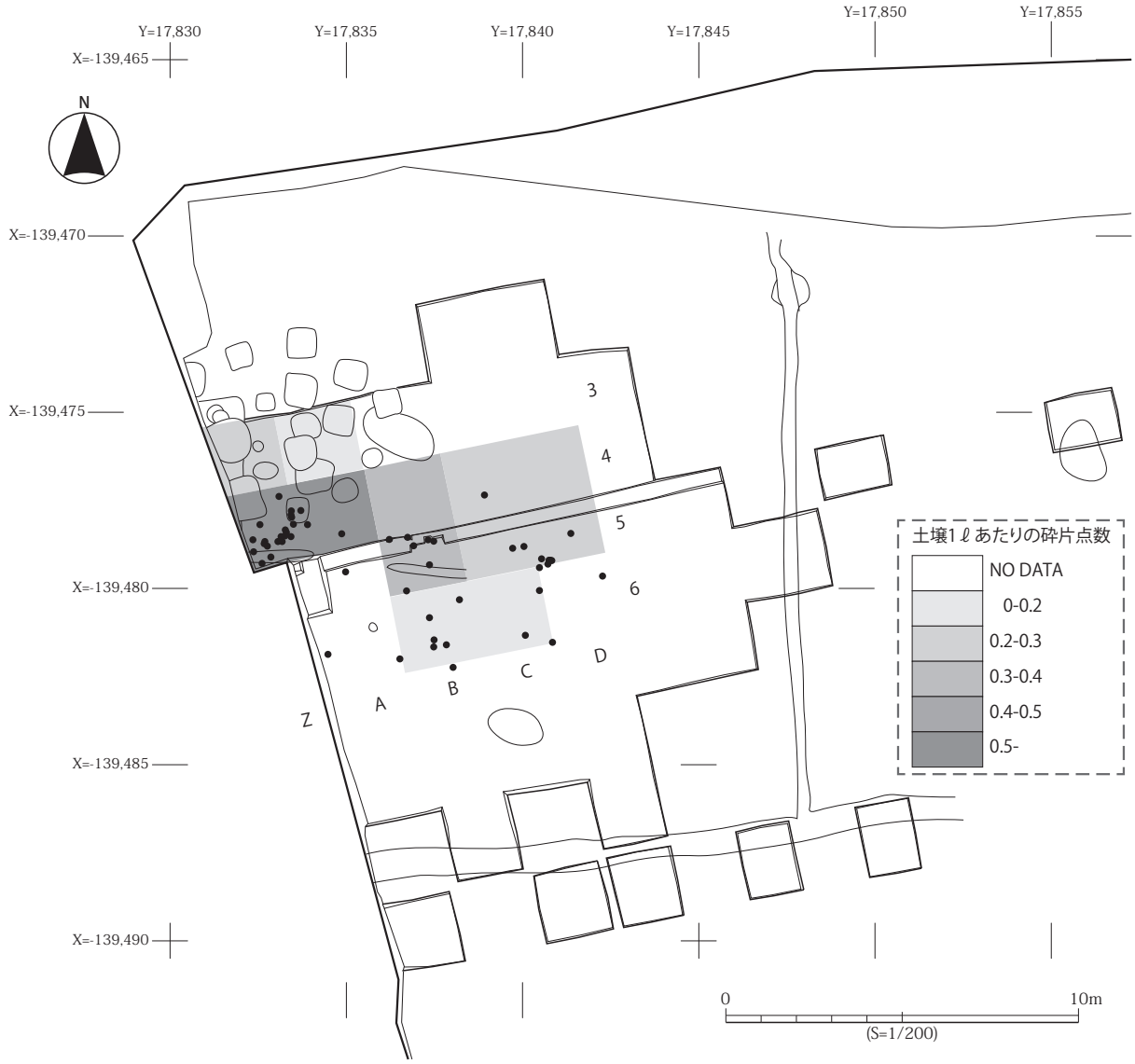
図版 10　発掘調査区平面図

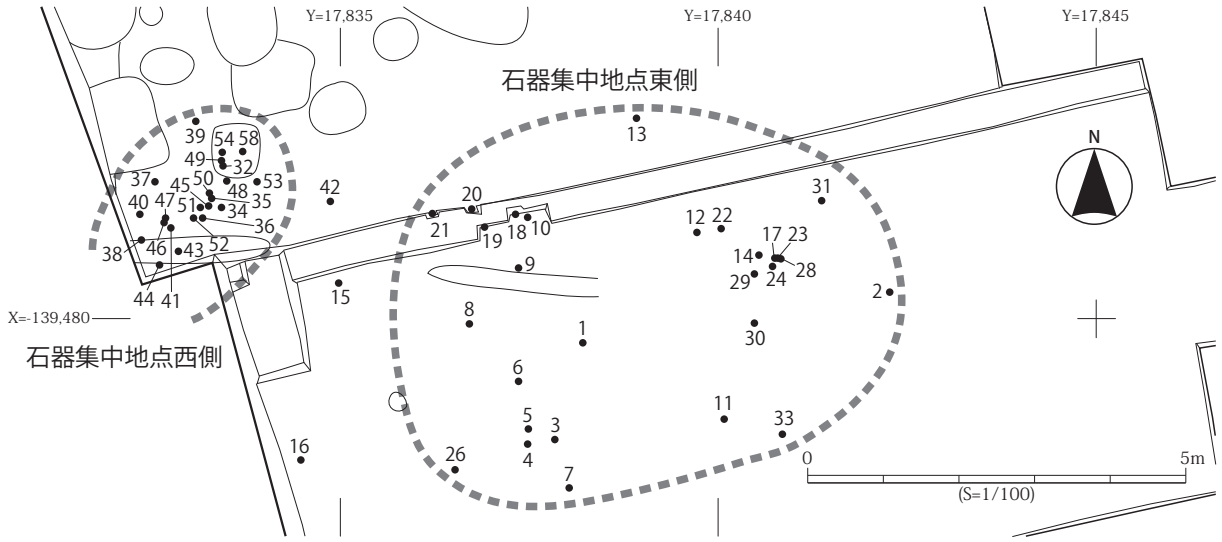


図版 11　発掘調査区断面図（上）・断面写真（左下 : 南北断面、右下 : 東西断面）

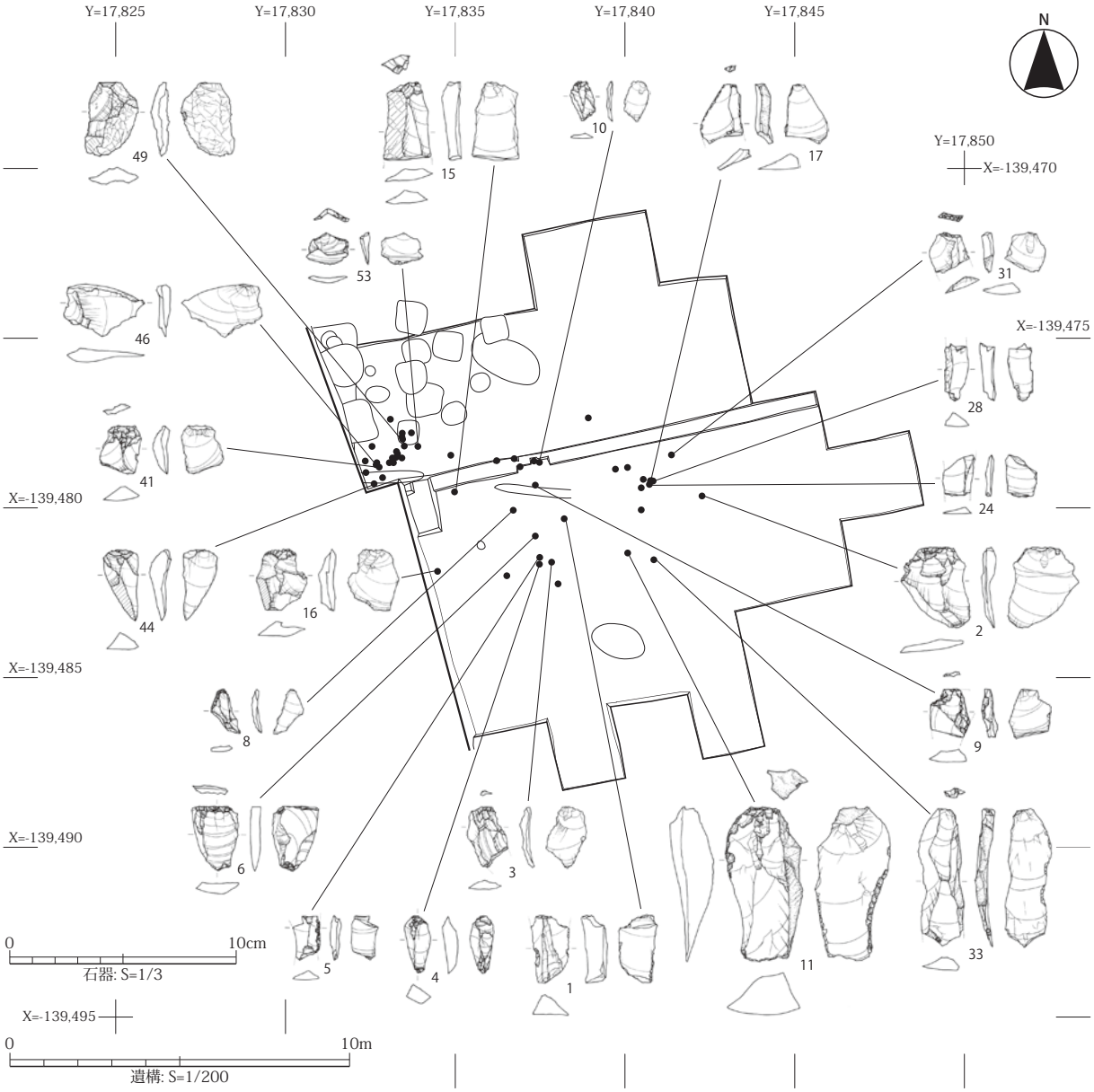


図版 12　旧石器確認調査トレンチの土層断面模式図





図版 13　石器出土状況（1）　上 : 砕片出土状況　下 : 遺物集中地点拡大図



図版 14　石器出土状況（2）

類したもののうち、長さと幅がいずれも 2cm 未満となる極小型のものについては砕片として分類した。ただし、破損が見られる砕片のうち、本来の長さまたは幅が 2cm を超えるものと認定できるものについては剥片として分類している。なお、石核の出土は確認されなかった。

以上の分類から、本発掘調査で出土した当該期の石器群 2,772 点の内訳は楔形石器 2 点、二次加工ある剥片 3 点、石刃 4 点、剥片 19 点、砕片 2,744 点（うち水洗篩回収 2,717 点）である。石材は珪質頁岩 50 点、珪質凝灰岩 4 点、玉髄 1 点が認められる。なお、珪質凝灰岩と分類したものについては、色調が珪質頁岩よりやや白色を呈するものの、細粒緻密で剥離面がやや光沢を帯びるといった質感は、珪質頁岩のそれに非常に近似しており、同じ範疇のものとして認識することが可能である。

表 3　石器集中地点の出土石器組成表（出土位置を記録した遺物のみ）　上 : 層位別　下 : ブロック別

出土層位	楔形石器			二次加工ある剥片			石刃			剥片			砕片			総計
	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	
Ⅴ層													1		1	1
Ⅴa層													1	1	2	2
Ⅴb層	1		1				2		2	8	1	9	5	1	6	18
Ⅵ層	1		1	3		3	2		2	7	1	8	18		18	32
総計	2		2	3		3	4		4	15	2	17	25	2	27	53

石器ブロック	楔形石器			二次加工ある剥片			石刃			剥片			砕片			総計
	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	珪質頁岩	珪質凝灰岩	計	
東ブロック	2		2	3		3	3		3	7		7	12	1	13	28
西ブロック							1		1	8	2	10	13	1	14	25
総計	2		2	3		3	4		4	15	2	17	25	2	27	53

表 4　水洗篩で回収した砕片

グリッド	回収土壌出土				遺物台座出土		総計
	層位	点数	体積（ℓ）	点数 / ℓ	層位	点数	
Z3	Ⅴ	14	82.20	0.17			14
	Ⅵ	94	300.83	0.31	Ⅵ	7	101
	計	108	383.03	0.28	計	7	115
Z4	Ⅴ	262	251.86	1.04			262
					Ⅴb	23	23
	Ⅵ	491	606.90	0.81	Ⅵ	185	676
	計	753	858.76	0.88	計	208	961
A3	Ⅵ	3	17.49	0.17			3
	計	3	17.49	0.17			3
A4	Ⅴ	528	391.78	1.35			528
	Ⅴb	1	118.93	0.01	Ⅴb	1	2
	Ⅵ	449	750.32	0.60	Ⅵ	1	450
	計	978	1261.03	0.78	計	2	980
A5					Ⅴb	3	3
					計	3	3
B4	Ⅴ	7	26.24	0.27			7
	Ⅵ	57	152.16	0.37			57
	計	64	178.40	0.36			64
B5	Ⅴa	13	69.96	0.19			13
	Ⅴb	82	132.92	0.62			82
	Ⅵ	62	241.36	0.26	Ⅵ	9	71
	計	157	444.25	0.35	計	9	166
B6	Ⅴa	7	76.96	0.09			7
	Ⅴb	26	89.20	0.29			26
	Ⅵ	7	62.96	0.11	Ⅵ	9	16
	計	40	229.12	0.17	計	9	49
C4	Ⅴ	4	8.75	0.46			4
	Ⅵ	34	134.67	0.25	Ⅵ	4	38
	計	38	143.42	0.26	計	4	42
C5	Ⅴb	19	17.49	1.09			19
	Ⅵ	0	62.96	0.00	Ⅵ	3	3
	計	19	80.45	0.24	計	3	22
C6	Ⅴa	3	10.49	0.29			3
	Ⅴb	0	15.74	0.00			0
	Ⅵ	25	131.18	0.19	Ⅵ	3	28
	計	28	157.41	0.18	計	3	31
D4	Ⅵ	24	89.20	0.27			24
	計	24	89.20	0.27			24
D5	Ⅴ	0	61.22	0.00			0
	Ⅴb	139	374.29	0.37	Ⅴb	1	140
	Ⅵ	109	449.49	0.24	Ⅵ	8	117
	計	248	884.99	0.28	計	9	257
D6	Ⅴb	0	36.73	0.00			0
	計	0	36.73	0.00			0
総計		2460	4764.28	0.52		257	2717

（4）石器集中地点

Ⅱ区北西部で検出した石器集中地点は南北約 5.5m ×東西約 10m の範囲に広がり、調査区西壁付近の Z4 グリッドで石器が最も多く出土していることから、さらに西側の調査区外へ延びるものとみられる（図版 13）。また、この北側については古代や近世の遺構掘削による攪乱を著しく受けているため、本来は北側にも広がっていた可能性が考えられる。前項で示した石器総数 2,772 点から、遺構確認面や古代の遺構堆積土から出土した剥片 2 点を除く 2,770 点（うち水洗篩回収 2,717 点）がこれに帰属する。なお、出土位置を記録した遺物（53 点）の石器石材は珪質頁岩 49 点、珪質凝灰岩 4 点である。

①石器の出土状況

石器集中地点では南北約 5.5m、東西約 10m の範囲で遺物を確認し、その分布状況から Z4 グリッドを中心に広がる。水洗篩により回収した砕片の分布状況もまた、Z4 グリッドを中心とした分布状況を呈する（図版 13）。一方で、器種別の分布状況を見ると、遺物が最も集中する西側ではほとんどが剥片や砕片で構成されるのに対し、やや散漫な分布状況を呈する東側ではトゥールや石刃を含む器種構成となっている（図版 14・15）。石器群全体では出土層位による分布および器種組成の差異は確認できないことから、この分布の差異は時期差によるものではないものとみられる。これらは同一の時期の石器群であると捉えられ、集中地点内における分布の差異は、場の機能の差の可能性として捉えられる。以下に石器集中地点を東西に分けて記述する。

【石器集中地点西側】

南北約 2m、東西約 2m の範囲に石器が特に集中して分布する。石器の集中箇所が調査区西壁付近にあることから、さらに西側の調査区外へ広がるものとみられる。また、北側は古代や近世の遺構により攪乱を受けていることから、北側にも分布が広がる可能性が考えられる。この範囲で出土した石器は 25 点あり、その内訳は石刃 1 点、剥片 10 点、砕片 14 点である。範囲内では 1 箇所（Z4・A4 グリッド）に石器が集中する傾向が見られる。水洗篩回収の砕片の分布状況（土壌 1 リットルあたりの点数）もこれに類似し、Z4 グリッドや A4 グリッドで多く分布している。

【石器集中地点東側】

南北約 5m、東西約 6.5m の範囲に石器が分布する。この範囲で出土した石器は 28 点あり、その内訳は楔形石器 2 点、二次加工ある剥片 3 点、石刃 3 点、剥片 7 点、砕片 13 点である。範囲内では 3 箇所で若干の集中が認められるが、全体としては散漫な分布状況を呈する。水洗篩回収の砕片の分布状況（土壌 1 リットルあたりの点数）は、西側に近いところで多く分布し、そこから離れるにつれて少なくなる傾向が見られる。

②出土石器

石器集中地点で出土した石器は、トゥールが少なく、その種類も少ないという特徴があげられる。また、トゥール以外では、ほとんどが調整剥片や砕片であり、石刃などの目的剥片が少ない点も特徴的である。個々の石器に残されたさまざまな痕跡のうち特筆すべきものとして、被熱の痕跡があるものが 15 点あり、その割合が大きい点があげられる。以下に、器種別に概要を述べる。

［楔形石器］

２点あり、Ｖｂ層およびⅥ層からそれぞれ 1 点ずつ出土している。石材はすべて珪質頁岩である。S04（図版 15-1、16-1）は、器体の平面および断面形が凸レンズ状を呈する。両端の刃部の幅は狭く、短い線状を呈する。S06（図版 15-2、16-2）は、器体の平面形が台形、断面形が逆三角形を呈するいわゆる「楔」の形状をもつ。ステップ状の微小剥離痕が観察される端部は、片方が平坦、残りの片方が線状を呈する。

［二次加工ある剥片］

３点あり、すべてⅥ層から出土している。石材はすべて珪質頁岩である。S05（図版 15-3、16-3）は上下両端が破損しているが、石刃の一辺に二次加工を施したものとみられる。S08（図版 15-4、16-4）は極小型の剥片の一辺に二次加工を施している。S11（図版 15-5、16-7）は石刃の一辺の打面部から末端部にかけて二次加工を施している。加工の方向は打面側が腹面から、末端側が背面からとなっており、途中で方向を変えている。素材となる石刃は打面および背面に自然面を大きく残し、平面形がやや不整で、断面形が厚みをもつ形状であるため、ナイフ形石器とよばれるものとは素材選

図版 15　石器集中地点出土　石器実測図

図版 16　石器集中地点出土　石器写真

図版 17　調査風景（南から）

択において差異が認められる。

［石刃］

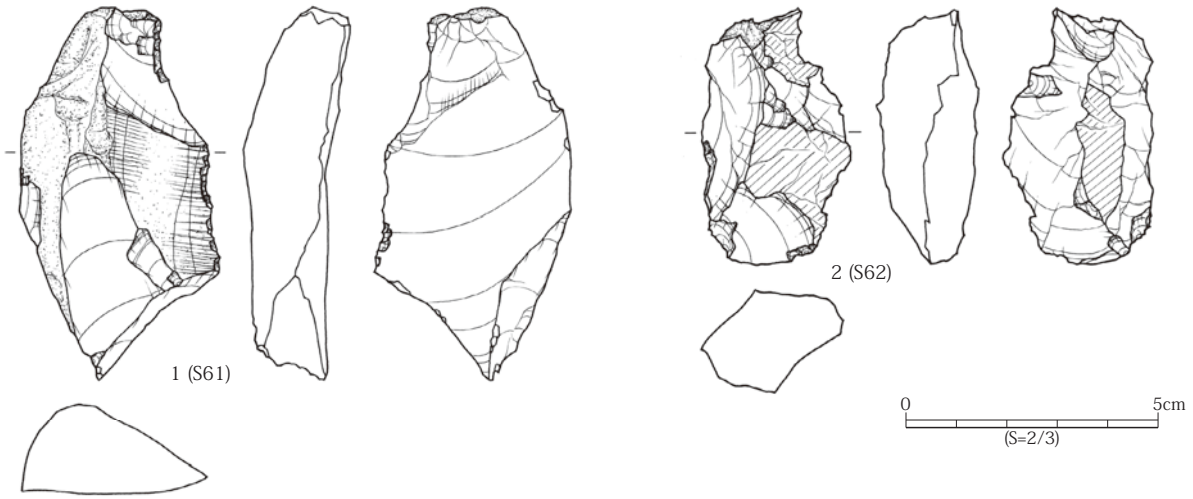
4点あり、Ⅴb層から2点、Ⅵ層から2点出土している。石材はすべて珪質頁岩である。S33（図版15-6、16-8）は打面がやや小さく、細身で薄手の形状である。器体が腹面側に反り、両側辺も湾曲したやや歪な形状を呈する。背面には自然面や石核素材面が残る。S15（図版15-7、16-9）は打面部のみの残存であるが、両側辺が平行し歪みの少ない形状を呈する。打面はやや大きく厚みをもつ。S24（図版15-8、16-5）は中間部のみの破片である。S28（図版15-9、16-6）は末端部のみの残存であるが、両側辺が歪み、厚みをもつ形状を呈する。背面には石核素材面を大きく残している。また、熱を受けた痕跡が確認される。

［剥片・砕片］

剥片は17点あり、Ⅴb層から9点、Ⅵ層から8点出土している。砕片は出土位置を記録したものが27点あり、Ⅴ層（細分できなかったもの）から1点、Ⅴa層から2点、Ⅴb層から6点、Ⅵ層から18点出土した。石材は、剥片が珪質頁岩15点、珪質凝灰岩2点で、砕片が珪質頁岩25点、珪質凝灰岩2点である。S10（図版15-10、16-11）およびS41（図版15-11、16-10）、S53（図版15-12、16-12）、S44（図版15-13、16-13）は頭部調整に伴って剥離された剥片や砕片とみられる。S31（図版15-14、16-14）およびS03（図版15-15、16-16）、S09（図版15-16、16-15）は打面調整（再生）に伴って剥離された剥片とみられ、S31では打面に頭部調整痕が残されている。S17（図版15-18、16-18）およびS01（図版15-20、16-17）、S16（図版15-17、16-20）は作業面調整による剥片であり、自然面や石核素材面を残す。なお、S01では微小剥離痕が観察される。S02（図版15-19、16-22）は幅のやや広い剥片である。背面は、末端部にわずかに自然面を残すのみで、目的剥片剥離面および調整面のみで構成される。S49（図版15-21、16-21）は熱を受けた痕跡が背面および腹面の両面で広く認められる。S46（図版15-22、16-19）は幅広の剥片で、背面に石核の素材面を大きく残す。

（5）その他の出土石器

B5 グリッドの遺構確認面（Ⅴ層に相当）で珪質頁岩製の剥片 1 点（S61、図版 18-1、19-1）、SI11 住居跡の堆積土から玉髄性の剥片 1 点（S62、図版 18-2、19-2）が出土している。S61 は石器集中地点と同様の良質な珪質頁岩を利用していることから、この石器群に帰属させることが可能である。S62 は石器集中地点の石器群では見られない石材を利用しているが、石器集中地点と重複する住居跡から出土していることから、S61 と同様に帰属するものとみられる。



図版 18　その他出土石器　実測図

図版 19　その他出土石器　写真

表 5-1　出土石器属性表（1）

登録番号	器種	類型	調査区	遺構	層位	石材	法量				残存	被熱	変形	自然面	付着物	石刃・剥片類・二次加工ある剥片のみ	
							長（mm）	幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）						剥離角	最大幅位置
S01	剥片	作業面調整	B6	東	Ⅴb	珪質頁岩	28.8	17.3	9.7	4.27	末端部	0	0	0	0	-	C
S02	剥片	-	D6	東	Ⅵ	珪質頁岩	35.7	28.8	5.8	4.29	ほぼ完形	0	0	1	0	119	B
S03	剥片	打面調整	B6	東	Ⅴb	珪質頁岩	26.0	18.1	4.1	1.09	末端部欠	0	0	1	0	91	B
S04	楔形石器	-	B6	東	Ⅴb	珪質頁岩	24.7	10.8	8.3	1.39	完形	0	0	0	0	-	-
S05	二次加工ある剥片	-	B6	東	Ⅵ	珪質頁岩	18.6	11.4	4.1	0.67	中間部	0	0	0	0	-	B
S06	楔形石器	-	B6	東	Ⅵ	珪質頁岩	28.1	20.5	4.4	3.06	完形	0	0	0	0	-	-
S07	剥片	両極	B7	東	Ⅴb	珪質頁岩	31.0	8.2	4.7	0.90	完形	0	0	0	0	113	C
S08	二次加工ある剥片	-	B5	東	Ⅵ	珪質頁岩	18.7	12.8	2.2	0.38	完形	0	0	0	0	127	B
S09	剥片	打面調整	B5	東	Ⅴb	珪質頁岩	21.6	17.6	5.9	1.66	末端部欠	0	0	0	0	95	B
S10	砕片	頭部調整	B5	東	Ⅵ	珪質頁岩	16.8	10.4	2.1	0.32	完形	0	0	0	0	111	B
S11	二次加工ある剥片	-	C6	東	Ⅵ	珪質頁岩	67.7	32.7	17.5	32.08	完形	0	0	1	0	111	A
S12	砕片	-	C5	東	Ⅵ	珪質頁岩	18.0	9.4	2.7	0.19	打面部欠	0	0	0	0	-	Ce
S13	砕片	-	C4	東	Ⅵ	珪質頁岩	12.4	15.0	2.8	0.30	打面部欠	0	0	0	0	-	C
S14	砕片	頭部調整	D5	東	Ⅵ	珪質頁岩	15.3	8.7	1.7	0.19	完形	1	0	0	0	120	B
S15	石刃	-	A5	西	Ⅴb	珪質頁岩	33.1	20.3	7.9	5.13	末端部欠	0	0	0	0	88	B
S16	剥片	作業面調整	A6	西	Ⅵ	珪質頁岩	26.5	21.7	6.4	2.70	完形	0	0	1	0	86	B
S17	剥片	作業面調整	D5	東	Ⅵ	珪質頁岩	25.4	17.7	5.4	2.15	末端部欠	0	0	1	0	93	B
S18	砕片	-	B5	東	Ⅵ	珪質頁岩	5.9	6.9	1.6	0.06	打面部欠	1	0	0	0	-	C
S19	砕片	頭部調整	B5	東	Ⅵ	珪質頁岩	8.5	4.8	1.7	1.33	完形	0	0	0	0	96	A
S20	砕片	頭部調整	B5	東	Ⅵ	珪質頁岩	16.5	7.2	1.9	0.17	完形	0	0	0	0	106	Ce
S21	砕片	-	B5	東	Ⅵ	珪質頁岩	13.9	12.5	3.1	0.35	打面部欠	1	0	0	0	-	C
S22	砕片	頭部調整	C5	東	Ⅵ	珪質頁岩	11.3	5.8	1.1	0.08	完形	0	0	0	0	100	B
S23	砕片	頭部調整	D5	東	Ⅴb	珪質頁岩	13.5	6.6	1.5	0.13	完形	0	0	0	0	133	A
S24	石刃	-	D5	東	Ⅴb	珪質頁岩	17.0	13.7	2.8	0.59	中間部	0	0	0	0	-	B
S25	欠番																
S26	砕片	-	A6	東	Ⅵ	珪質頁岩	11.6	8.6	3.0	0.35	末端部	0	0	1	0	-	C
S27	礫	-	A5		Ⅴb	安山岩質凝灰岩	-	-	-	0.63	破片	0	-	-	0	-	-
S28	石刃	-	D5	東	Ⅵ	珪質頁岩	24.3	10.2	6.7	1.18	末端部	1	0	0	0	-	C
S29	砕片	-	D6	東	Ⅴb	珪質凝灰岩	10.3	10.8	3.5	0.36	打面部欠	1	0	1	0	-	B
S30	砕片	-	C6	東	Ⅴb	珪質頁岩	5.6	4.7	0.9	0.01	打面部欠	1	0	0	0	-	C
S31	剥片	打面調整	D5	東	Ⅵ	珪質頁岩	17.2	17.5	3.9	1.17	末端部欠	0	0	0	0	83	B
S32	砕片	頭部調整	Z4	西	Ⅴb	珪質頁岩	9.2	7.7	1.5	0.06	完形	1	0	0	0	92	B
S33	石刃	-	C6	東	Ⅵ	珪質頁岩	60.5	19.1	5.3	6.67	末端部欠	0	0	1	0	98	B
S34	砕片	-	Z4	西	Ⅴ	珪質頁岩	8.6	10.4	2.2	0.10	打面部欠	1	0	0	0	-	Ce
S35	剥片	-	Z4	西	Ⅴb	珪質頁岩	11.8	17.3	3.6	0.38	末端部	1	0	0	0	-	C
S36	砕片	-	Z4	西	Ⅴb	珪質頁岩	10.5	9.5	2.8	0.18	打面部欠	0	1	0	0	-	B
S37	剥片	-	Z4	西	Ⅴb	珪質頁岩	21.5	20.0	2.3	0.86	末端部	1	0	0	0	-	C
S38	砕片	頭部調整	Z4	西	Ⅴa	珪質凝灰岩	12.2	7.6	2.1	0.16	完形	0	0	0	0	111	B
S39	砕片	-	Z4	西	Ⅴa	珪質頁岩	5.9	5.4	1.0	0.01	打面部欠	0	0	0	0	-	B
S40	砕片	頭部調整	Z4	西	Ⅴb	珪質頁岩	7.4	13.1	1.9	0.15	完形	0	0	0	0	98	B
S41	剥片	頭部調整	Z4	西	Ⅵ	珪質頁岩	20.3	18.1	5.8	1.89	完形	0	0	0	0	113	C
S42	砕片	-	A4	西	Ⅵ	珪質頁岩	6.2	6.2	1.8	0.10	打面部欠	0	0	1	0	-	B
S43	砕片	頭部調整	Z4	西	Ⅵ	珪質頁岩	8.0	7.0	1.5	0.08	中間部	1	0	0	0	-	B
S44	剥片	頭部調整	Z4	西	Ⅵ	珪質凝灰岩	31.6	15.4	7.3	2.01	完形	0	0	0	0	114	A
S45	砕片	-	Z4	西	Ⅵ	珪質頁岩	11.5	10.2	3.6	0.29	打面部欠	1	0	0	0	-	B
S46	剥片	-	Z4	西	Ⅵ	珪質頁岩	23.5	35.7	5.4	2.79	末端部欠	1	0	0	1	102	A
S47	剥片	打面調整	Z4	西	Ⅴb	珪質頁岩	17.1	11.2	2.5	0.33	末端部欠	0	0	0	0	93	B
S48	砕片	-	Z4	西	Ⅵ	珪質頁岩	15.6	10.9	2.3	0.36	打面部欠	1	0	0	0	-	B
S49	剥片		Z4	西	Ⅵ	珪質頁岩	32.4	23.1	6.6	3.54	打面部欠	1	0	0	0	-	B
S50	剥片	-	Z4	西	Ⅴb	珪質頁岩	18.8	17.5	3.3	0.36	打面部欠	0	0	0	0	-	B
S51	砕片	-	Z4	西	Ⅵ	珪質頁岩	13.5	9.9	4.0	0.47	完形	1	0	0	0	96	B
S52	砕片	頭部調整	Z4	西	Ⅵ	珪質頁岩	8.9	5.0	0.7	0.01	打面部欠	1	0	0	0	100	B
S53	剥片	頭部調整	A4	西	Ⅴb	珪質凝灰岩	13.0	17.7	2.3	0.44	完形	0	0	0	0	76	C
S54	砕片	-	Z4	西	Ⅵ	珪質頁岩	11.2	4.8	3.1	0.10	打面部欠	1	0	0	0	-	B
S55	礫	-	Z3		Ⅵ	凝灰岩	-	-	-	0.01	破片	0	-	-	0	-	-
S56	礫	-	Z4		Ⅵ	安山岩質凝灰岩	-	-	-	0.24	破片	0	-	-	0	-	-
S57	欠番																
S58	砕片	-	A4	西	Ⅵ	珪質頁岩	14.9	11.6	2.7	0.28	末端部	1	0	0	0	-	C
S59	欠番																
S60	欠番																
S61	剥片	-	B5	-	確認面	珪質頁岩	73.2	40.1	17.2	46.04	末端部欠	0	0	1	0	100	B
S62	剥片	-	-	SI11	3-5	玉髄	49.4	29.9	21.2	26.54	完形	0	0	1	0	80	B

［石器属性基準］

被熱・変形・自然面・付着物・微小剥離痕　1: あり　2: なし
最大幅位置　A: 打面部　B: 中間部　C: 末端部　Xe: それぞれの端部
背面構成（頭部調整・自然面・素材面・ポジ面）　1-3: あり（枚数）　0: なし
背面構成（剥離面）　※腹面の剥離方向に対して　同 : 同方向　横 : 横方向　逆 : 逆方向　0: なし
背面構成（その他）　0: なし
打点位置　※腹面を正面に見て　Le: 左端　L: 左側　M: 中間　R: 右側　Re: 右端
バルブ形状　S: 強く発達　D: 弱く発達　F: 発達しない
末端形状　F: フェザー　H: ヒンジ　S: ステップ　O: ウートラパッセ
折れの位置　腹面を正面に見て　P: 打面側　R: 右側　D: 末端側　L: 左側　※記号数は枚数を表す。

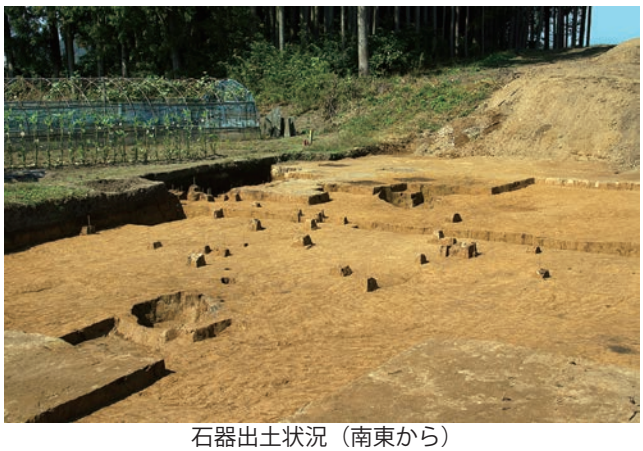
表 5-2　出土石器属性表（2）

石刃・剥片類・二次加工ある剥片のみ														備考	実測図版	写真図版	登録番号
背面構成						打面			打点位置	バルブ形状	末端形状	微小剥離痕	折れの位置				
頭部調整	自然面	素材面	ポジ面	剥離面	その他	幅（mm）	厚（mm）	形状									
-	0	1	1	横逆	0	-	-	-	-	-	O	1	P		15-20	16-17	S01
1	1	0	0	同横	0	11.6	3.4	凹状	R	S	F	0	L		15-19	16-22	S02
1	0	0	0	同横	0	5.2	1.7	平坦	L	S	-	0	D		15-15	16-16	S03
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		15-1	16-1	S04
-	0	0	0	同	0	-	-	-	-	-	-	0	PD		15-3	16-3	S05
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		15-2	16-2	S06
0	0	3	1	0	0	3.6	1.8	点状	Re	S	両極	0	0		-	-	S07
1	0	0	0	同	0	2.7	0.9	点状	M	D	O	0	0		15-4	16-4	S08
1	0	0	0	同横	0	-	-	平坦	-	S	-	0	PD		15-16	16-15	S09
1	0	0	0	同横	0	4.4	0.6	線状	M	D	F	0	0		15-10	16-11	S10
1	1	0	0	同	0	18.8	13.7	自然面	L	S	F	0	0		15-5	16-7	S11
-	0	2	0	同	0	-	-	-	-	-	O	0	0		-	-	S12
-	0	1	1	0	0	-	-	-	-	-	F	0	PP		-	-	S13
1	0	1	0	同	0	2.9	1.1	線状	L	D	H	0	0		-	-	S14
1	0	0	0	同	節理面	14.7	7.1	山型	L	D	-	0	D		15-7	16-9	S15
1	1	0	0	同横	節理面	6.7	0.8	線状	M	D	S	0	0		15-17	16-20	S16
0	1	0	0	同	0	6.7	2.7	凸状	R	D	-	0	D		15-18	16-18	S17
-	0	1	1	0	0	-	-	-	-	S	F	0	P		-	-	S18
1	0	0	0	同	0	2.8	0.9	線状	Le	D	S	0	0		-	-	S19
1	0	0	0	同横	0	1.3	0.5	点状	Re	D	O	0	0		-	-	S20
-	0	1	1	同	0	-	-	-	-	D	F	0	P		-	-	S21
1	0	0	0	同横	0	1.3	0.5	点状	M	D	-	0	0	末端ガジリ	-	-	S22
1	0	0	0	同横逆	0	5.2	1.9	平坦	M	F	H	0	0		-	-	S23
-	0	0	0	同	0	-	-	-	-	-	-	0	PD		15-8	16-5	S24
																	S25
-	1	0	0	0	0	-	-	-	-	-	F	0	PLL	摩滅顕著	-	-	S26
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	S27
-	0	1	0	同	0	-	-	-	-	-	-	0	PD		15-9	16-6	S28
-	1	1	0	同	0	-	-	-	-	-	F	0	P		-	-	S29
-	0	1	1	0	0	-	-	-	-	S	F	0	P		-	-	S30
0	0	0	0	同	0	10.5	3.7	凸状	R	S	-	0	D		15-14	16-14	S31
1	0	0	0	同	0	3.3	1.0	平坦	M	S	F	0	0		-	-	S32
0	1	1	0	同	0	9.6	4.4	山型	M	D	-	0	DD		15-6	16-8	S33
0	0	1	1	0	0	-	-	-	-	-	O	0	P		-	-	S34
-	0	1	0	同	0	-	-	-	-	-	F	0	PP		-	-	S35
0	0	0	0	同	風化面	-	-	-	-	-	F	0	P	多段階剥離	-	-	S36
-	0	1	1	同	0	-	-	-	-	-	F	0	PLLD		-	-	S37
1	0	0	0	同	0	1.0	1.3	点状	M	D	F	0	0		-	-	S38
-	0	0	0	同	0	-	-	-	-	-	H	0	P		-	-	S39
1	0	0	0	同	0	4.1	1.4	平坦	Le	S	H	0	0		-	-	S40
1	0	0	0	同	0	11.9	4.0	平坦	L	D	F	0	0		15-11	16-10	S41
-	1	0	0	0	0	-	-	-	-	F	O	0	P	粗粒部分の砕片	-	-	S42
-	0	0	0	同横	0	-	-	-	-	-	-	-	PPD		-	-	S43
1	0	0	0	同	節理面	11.5	4.5	凸状	R	F	F	0	0		15-13	16-13	S44
-	0	2	1	0	0	-	-	-	-	-	O	0	P		-	-	S45
0	0	1	0	横	0	6.2	1.5	平坦	M	S	-	0	D		15-22	16-19	S46
0	0	0	0	同横	0	7.8	2.6	調整	-	-	-	0	D		-	-	S47
-	0	1	0	0	0	-	-	-	-	-	F	0	PR		-	-	S48
-	0	1	0	0	剥がれ	-	-	-	-	-	F	0	P		15-21	16-21	S49
-	0	1	0	同	0	-	-	-	-	-	F	0	P		-	-	S50
0	0	0	0	横	剥がれ	9.5	1.3	線状	M	F	F	0	0		-	-	S51
1	0	0	0	同横	0	-	-	-	-	-	F	0	P		-	-	S52
1	0	0	0	同	0	15.0	3.6	山型	M	D	F	0	0		15-12	16-12	S53
-	0	0	0	同横	0	-	-	-	-	-	F	0	P		-	-	S54
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	S55
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	S56
																	S57
-	0	1	1	同	0	-	-	-	-	-	S	0	PL		-	-	S58
																	S59
																	S60
0	1	0	0	同横	0	17.0	8.3	自然面	L	D	-	0	DD		18-1	19-1	S61
0	1	1	1	同	節理面	20.1	11.5	自然面	-	D	F	0	P		18-2	19-2	S62

1. 発掘調査区全景（北から）

2. 石器出土状況（北西から）

図版 20　発掘調査区全景、石器出土状況



石器出土状況（南東から）

石器出土状況（東から）

調査風景（北から）

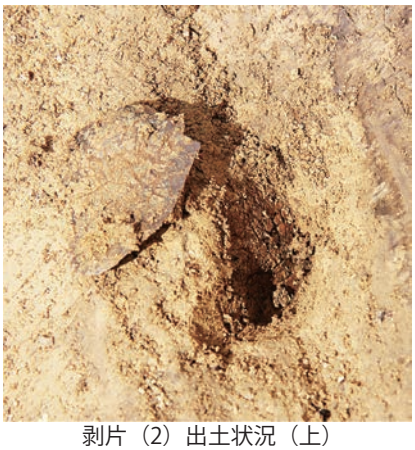
調査風景（南から）

石刃（33）出土状況（上）
同インプリント（下）

剥片（49）出土状況（上）
同インプリント（下）

剥片（1）出土状況（上）
同インプリント（下）

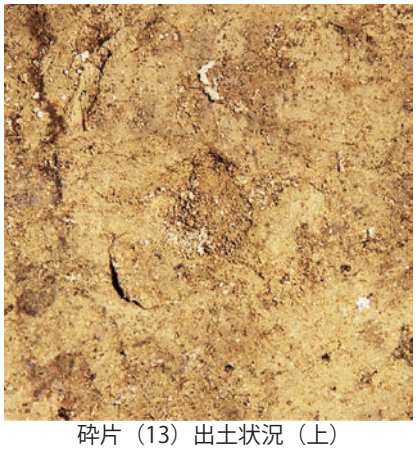
図版 21　石器出土状況、発掘調査風景



剥片（2）出土状況（上）
同インプリント（下）

楔形石器（6）出土状況（上）
同インプリント（下）

剥片（3）出土状況（上）
同インプリント（下）

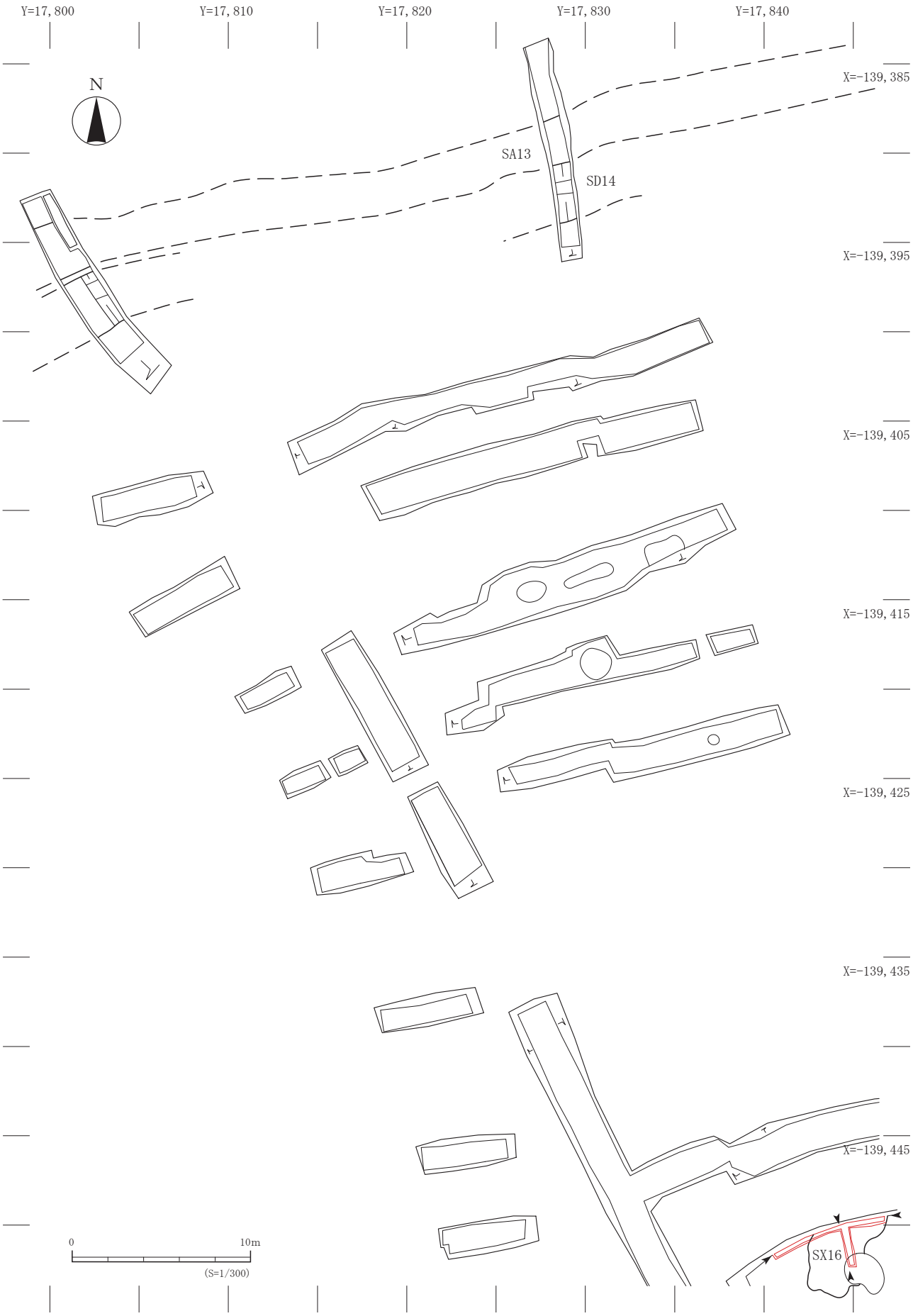


剥片（21）出土状況（上）
同インプリント（下）

砕片（12）出土状況（上）
同インプリント（下）

砕片（13）出土状況（上）
同インプリント（下）

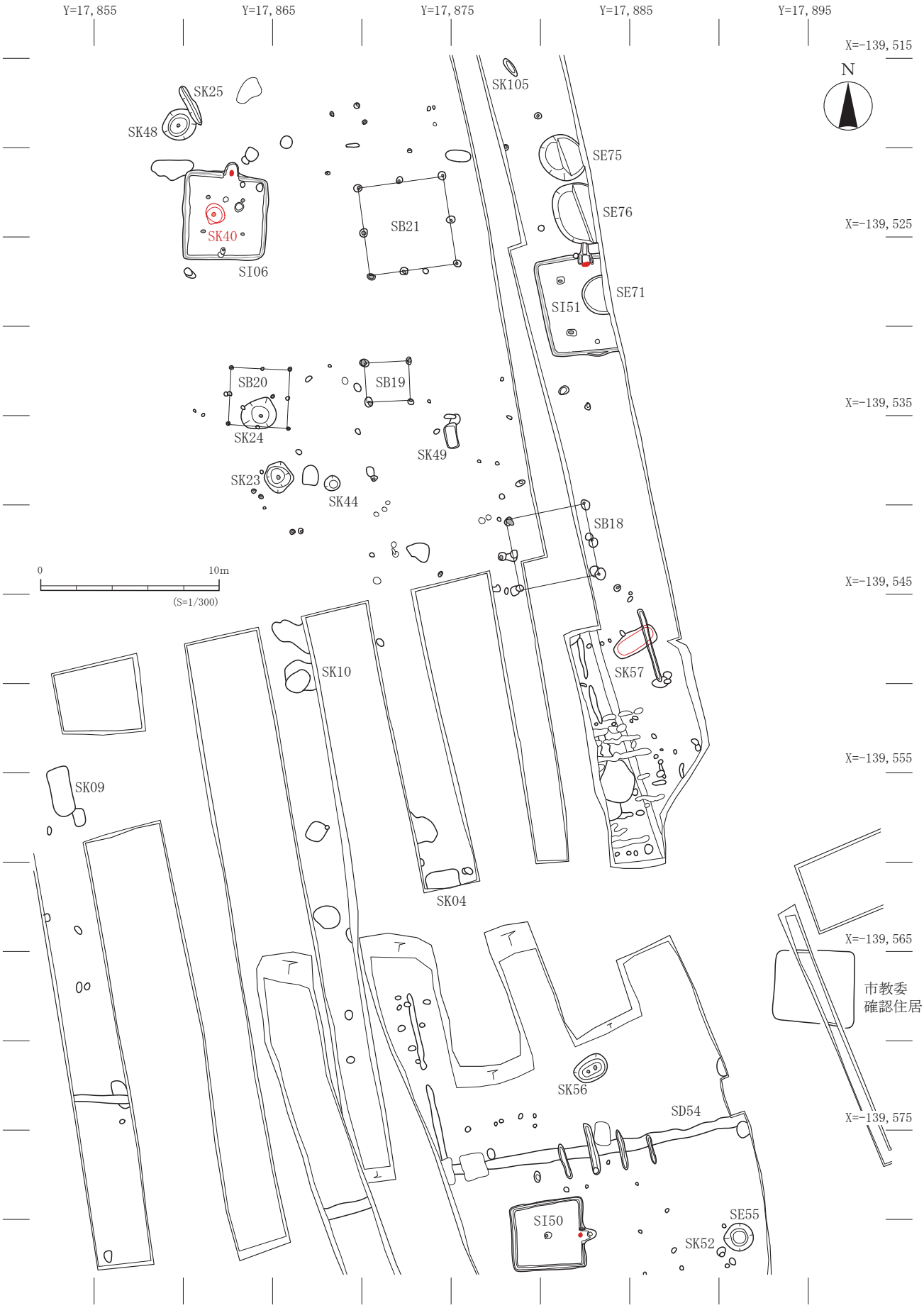
図版 22　石器出土状況


Y=17,800
Y=17,810
Y=17,820
Y=17,830
Y=17,840
N
X=-139,385
SA13
SD14
X=-139,395
X=-139,405
X=-139,415
X=-139,425
X=-139,435
X=-139,445
SX16
0
10m
(S=1/300)

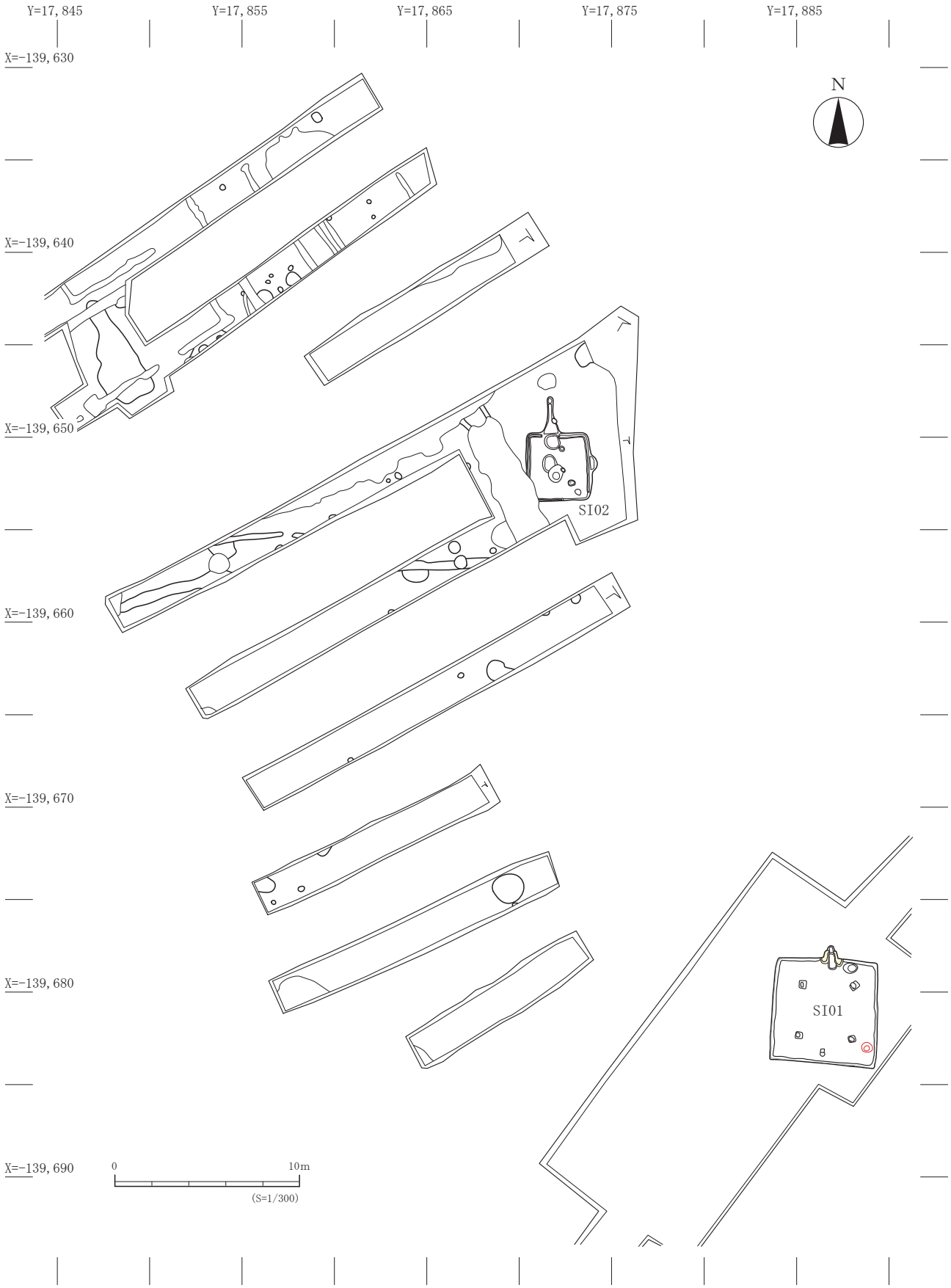
図版23　遺構配置図（1）

Y=17, 835
Y=17, 835
Y=17, 835
Y=17, 835
Y=17, 835
N
X=-139, 460
X=-139, 470
X=-139, 480
X=-139, 490
X=-139, 500
X=-139, 510
X=-139, 520
SK46
SK47
ST39
SI11
SK38
SK45
SK32
SK34
SD43
SD42
SK33
SE05
SK73
SK74
SK31
SB08
SB22
SI03
SK29
SK30
SK12
SK28
SK72
SK27
SE99
SK58
SK26
SE17
SI07
SK25
SK48
SB37
SI15
SK40
SI06
SB21
0
10m
(S=1/300)

図版24　遺構配置図（2）


Y=17,855
Y=17,865
Y=17,875
Y=17,885
Y=17,895
X=-139,515
X=-139,525
X=-139,535
X=-139,545
X=-139,555
X=-139,565
X=-139,575
N
SK25
SK48
SK40
SI06
SB21
SK105
SE75
SE76
SE71
SI51
SB20
SB19
SK24
SK49
SK23
SK44
SB18
0
10m
(S=1/300)
SK10
SK57
SK09
SK04
SK56
SD54
SI50
SE55
SK52
市教委
確認住居

図版25　遺構配置図（3）


Y=17,845
Y=17,855
Y=17,865
Y=17,875
Y=17,885
X=-139,630
X=-139,640
X=-139,650
X=-139,660
X=-139,670
X=-139,680
X=-139,690
N
SI02
SI01
0
10m
(S=1/300)

図版26　遺構配置図（4）

平成 26 年度調査区全景（北から）

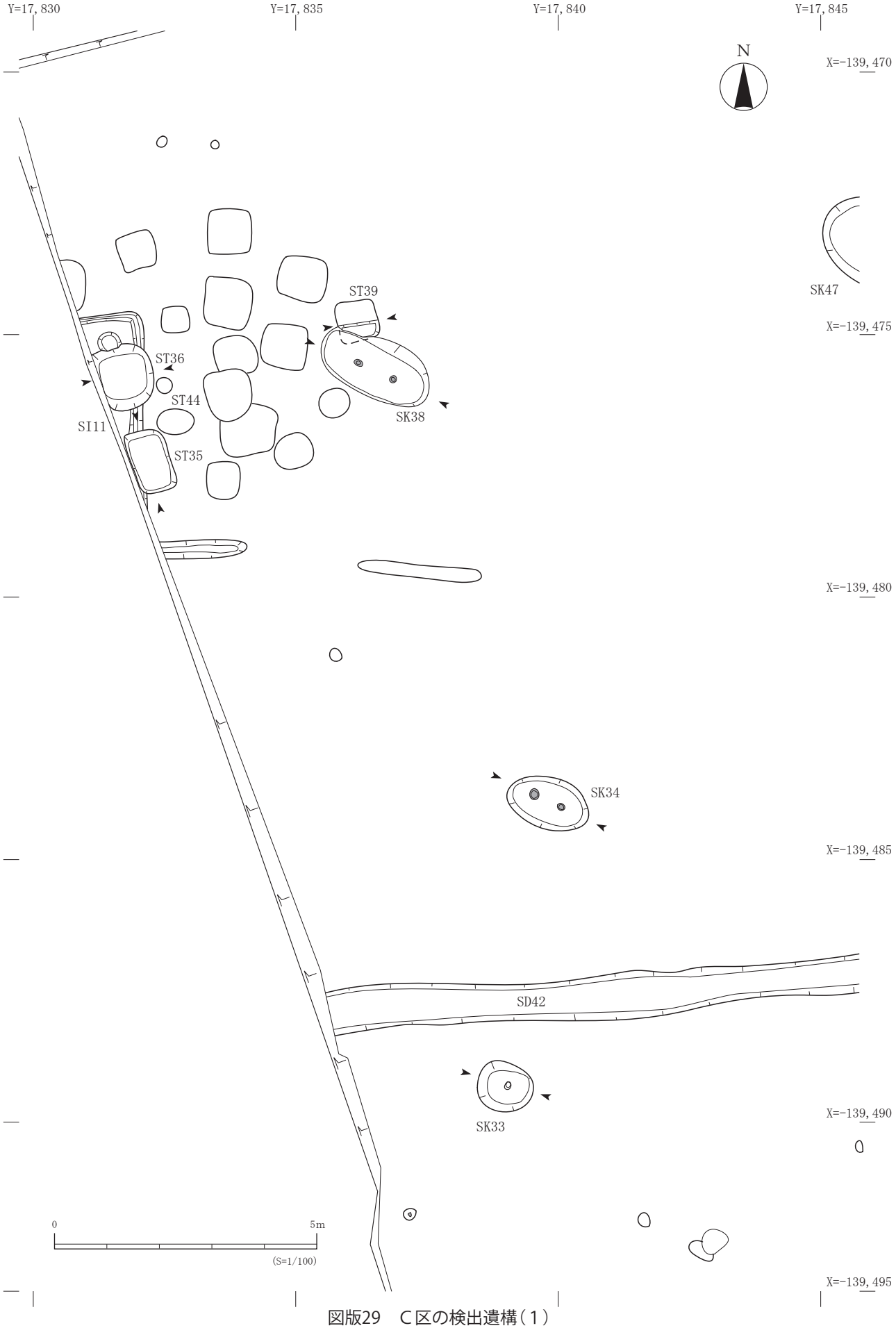
平成 26 年度調査区全景（南西から）

図版 27　調査区全景（1）

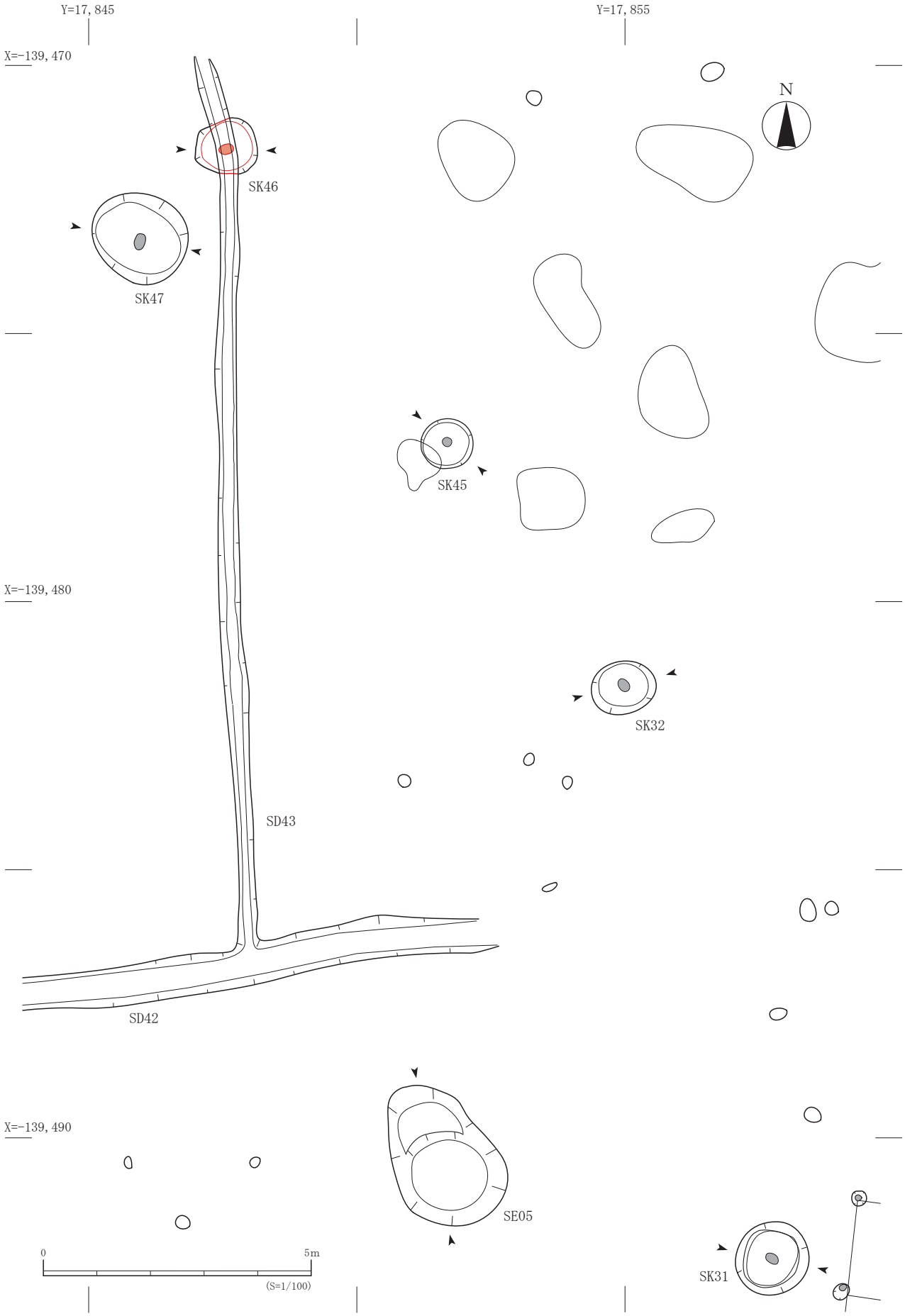
平成 26 年度調査区全景（上から）

平成 26 年度調査区中央～南の検出遺構（北から）

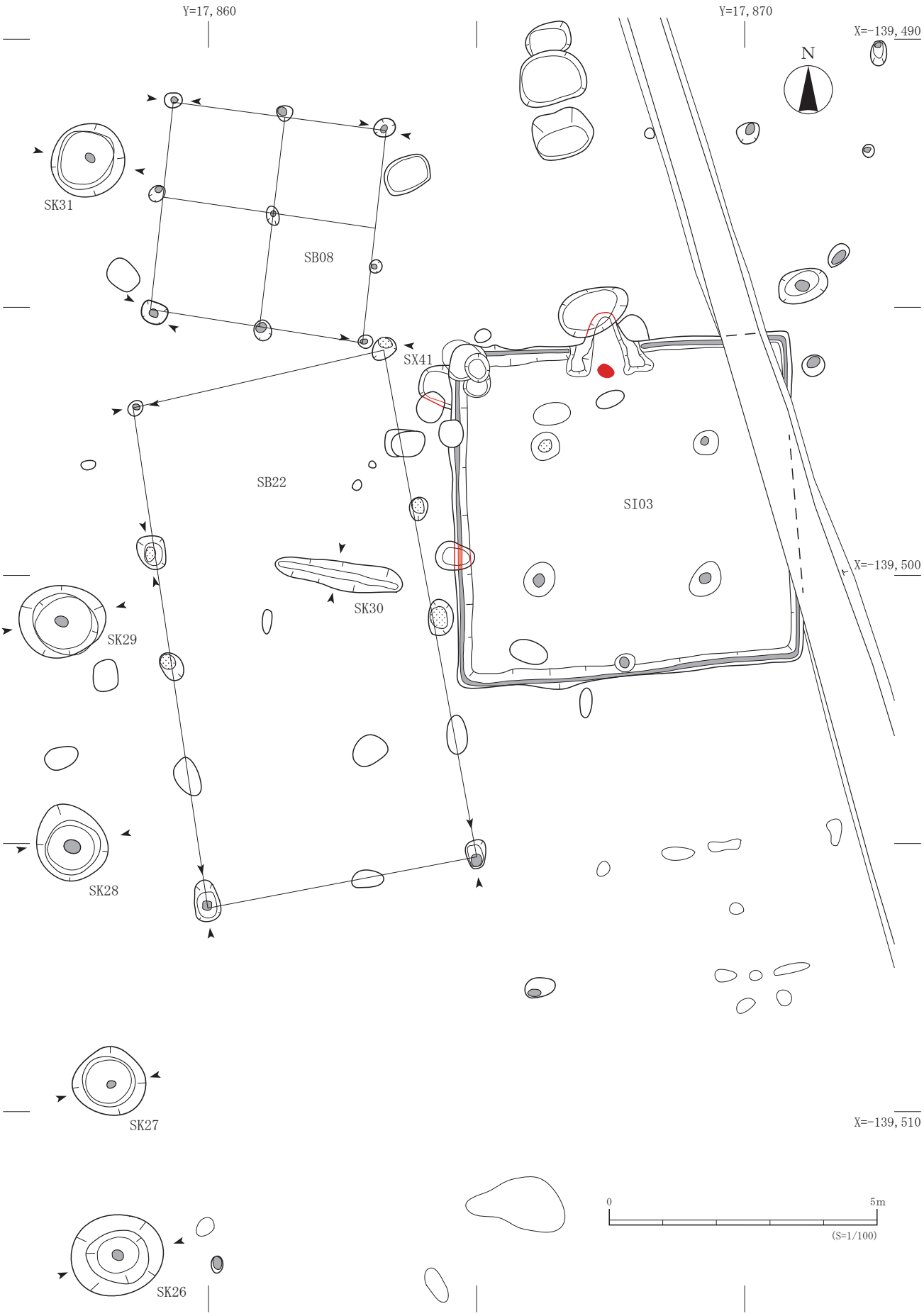
図版 28　調査区全景（2）



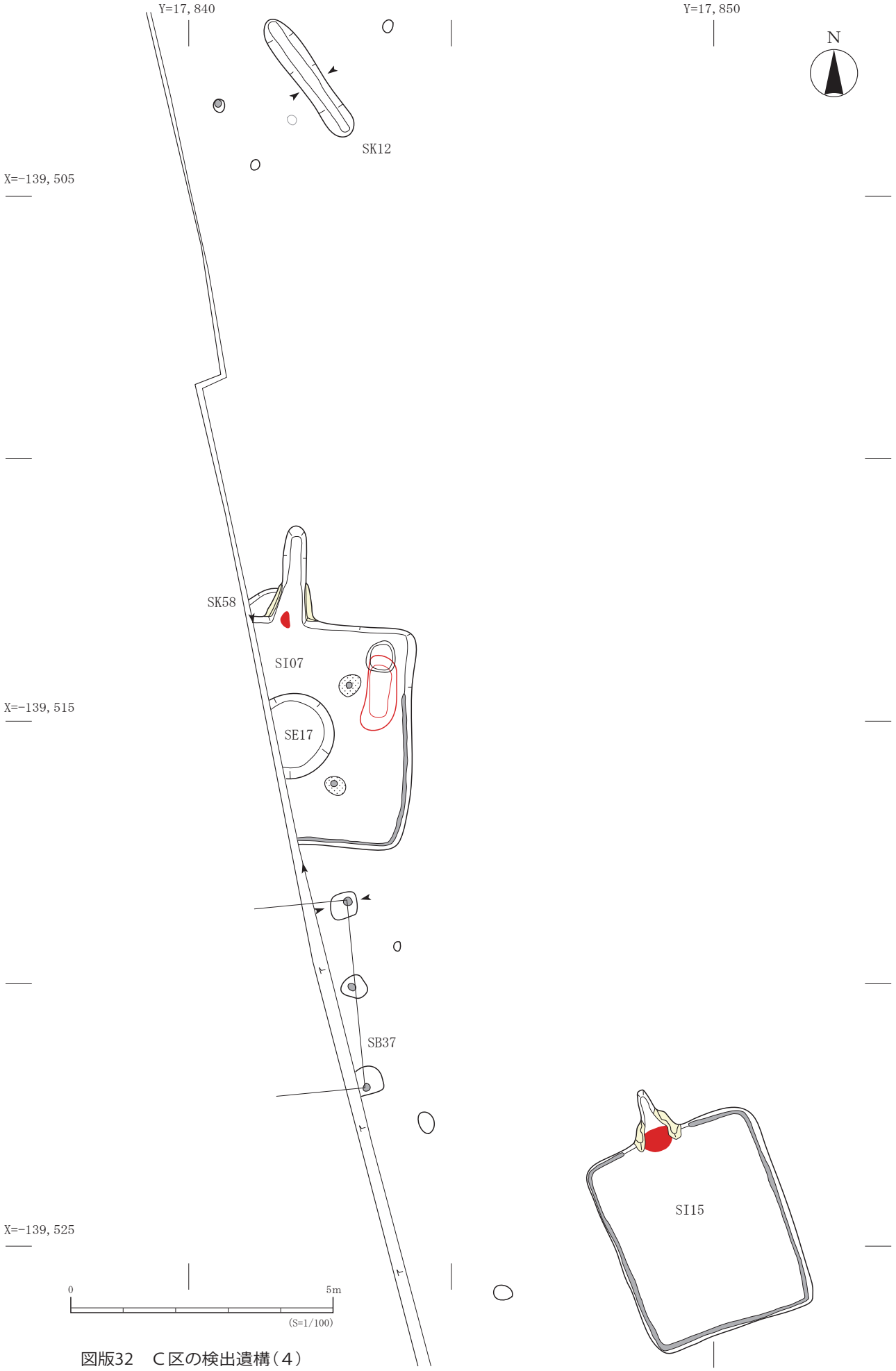
図版29　C区の検出遺構（1）



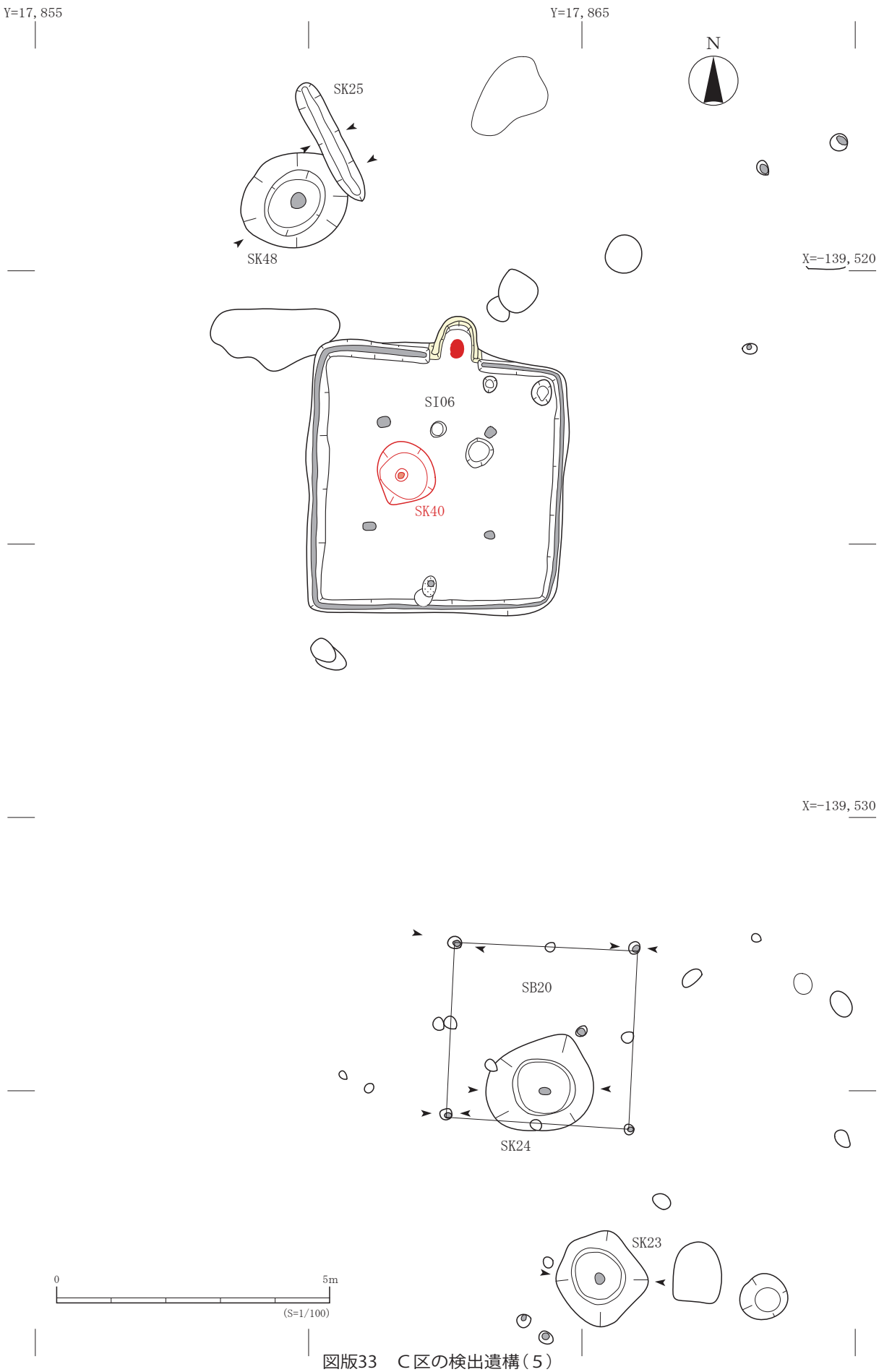
図版30　C区の検出遺構（2）



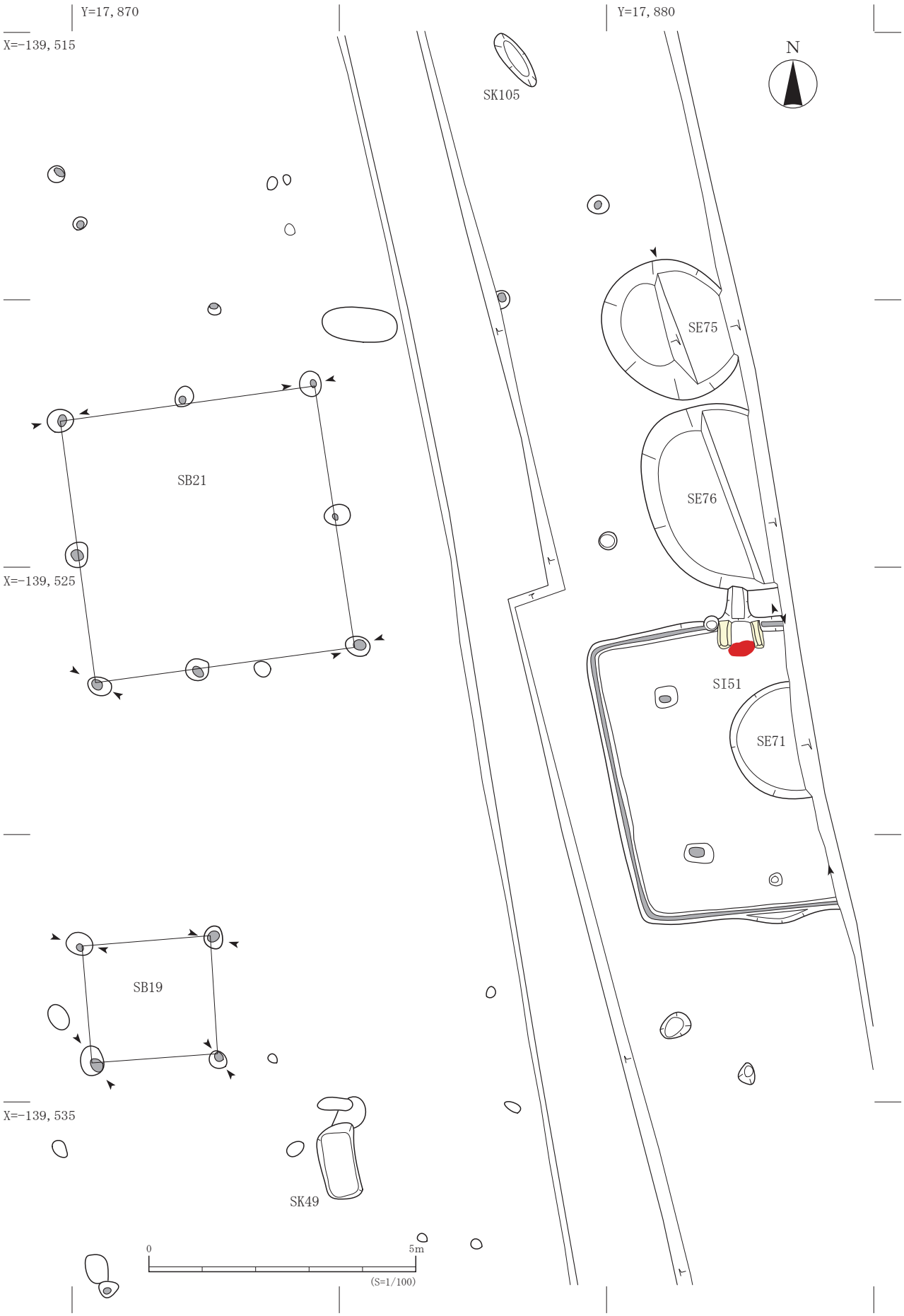
図版31　C区の検出遺構（3）



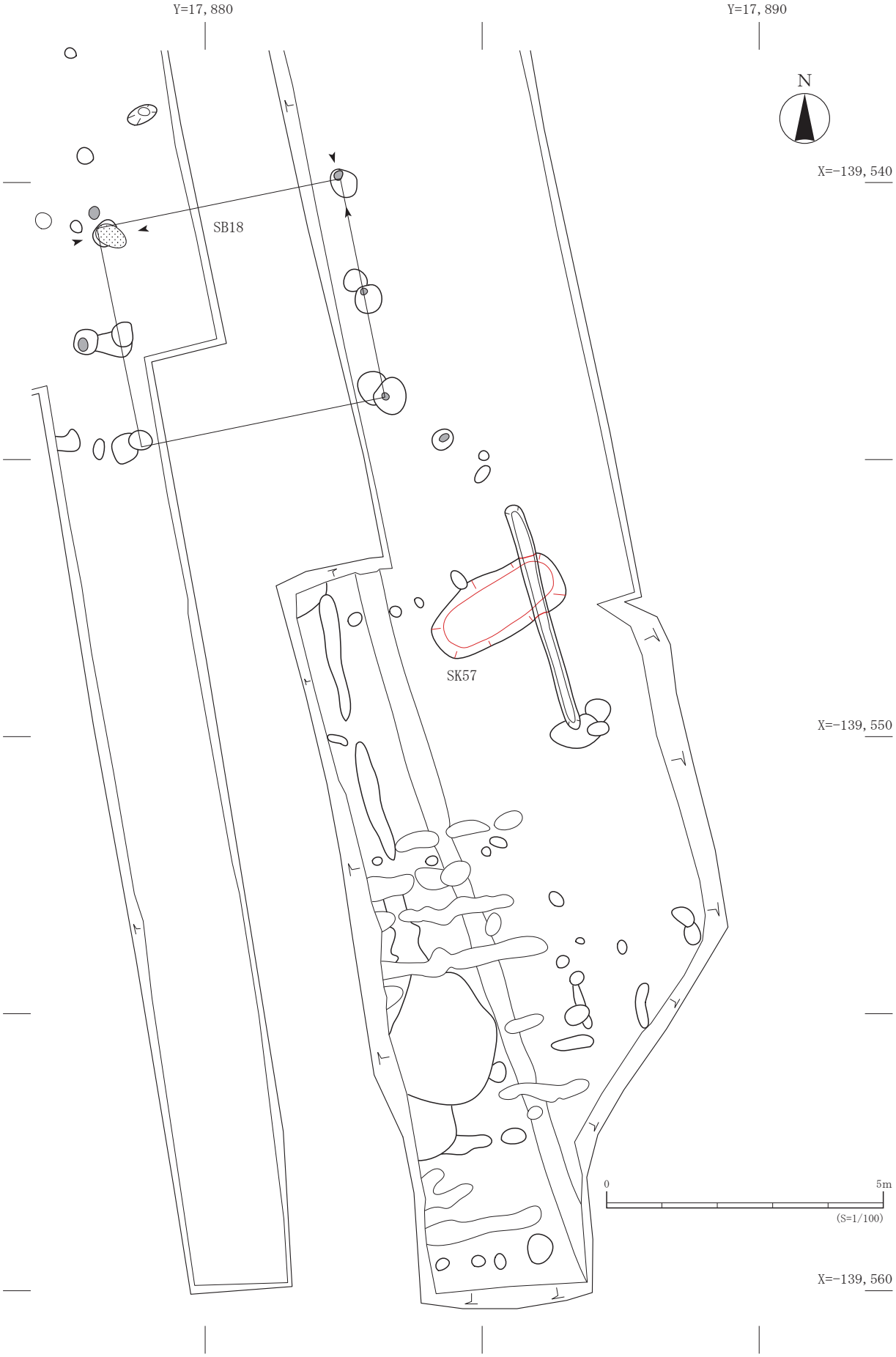
図版32　C区の検出遺構（4）



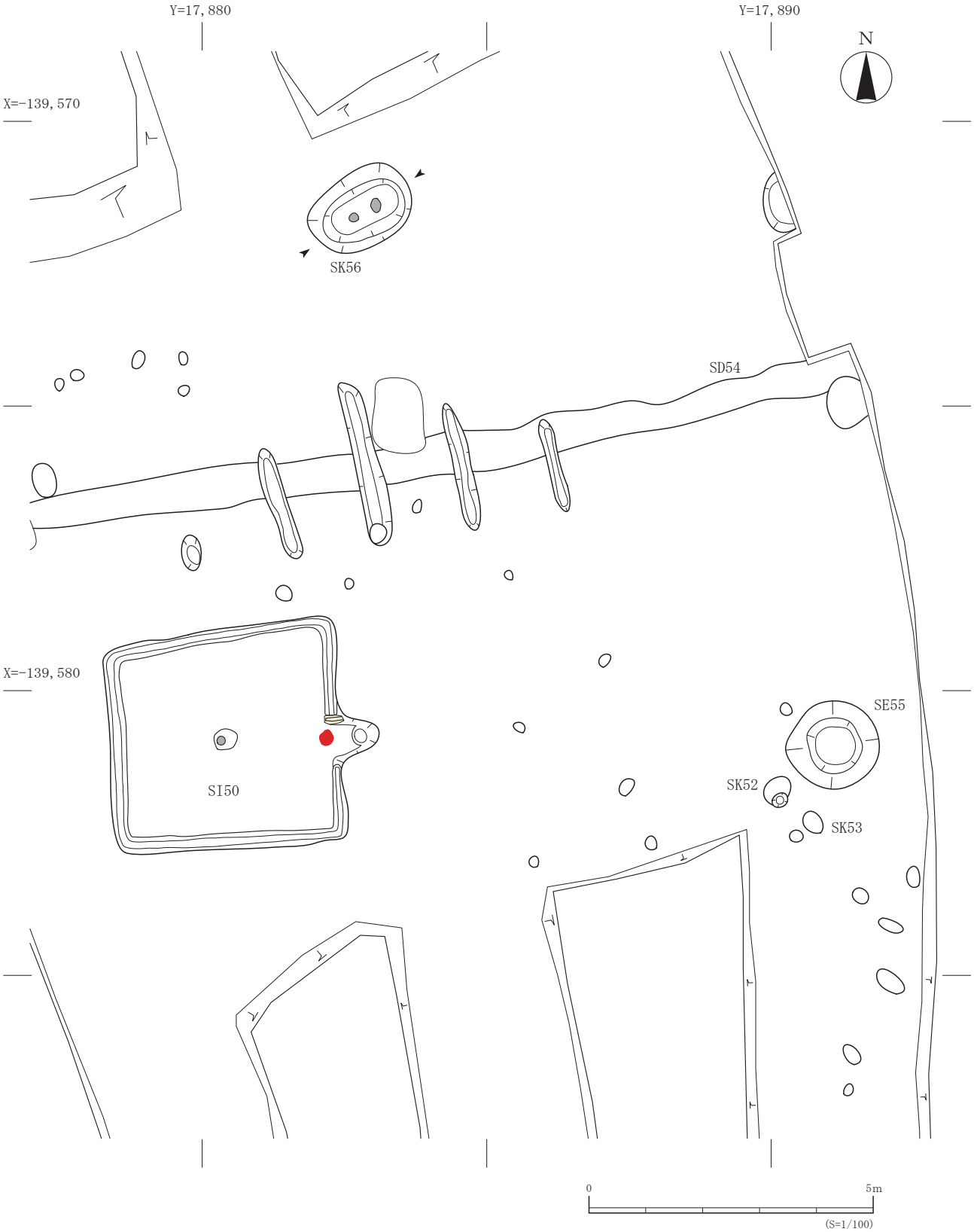
図版33　C区の検出遺構（5）



図版34　C区の検出遺構（6）



図版35　C区の検出遺構（7）



図版36　C区の検出遺構（8）

２．縄文時代以降

これまでの本遺跡の発掘調査成果から、遺構の年代は縄文時代、飛鳥～平安時代、江戸時代に大別できる。縄文時代の遺構は、Ｃ区で確認した陥し穴群とＤ区の遺物包含層であり、飛鳥時代～平安時代の遺構は、Ａ区とＣ区で確認した竪穴住居跡とＣ区の掘立柱建物跡である。江戸時代より新しい遺構は、Ａ・Ｃ・Ｄ区で確認した。主なものとして、Ａ・Ｃ区の掘立柱建物跡、井戸跡、墓跡、溝跡、小溝状遺構群、Ｄ区の土塁と空堀があげられる（図版 23 ～ 26）。以下、時代別に記述を行う。

３．縄文時代

（1）陥し穴

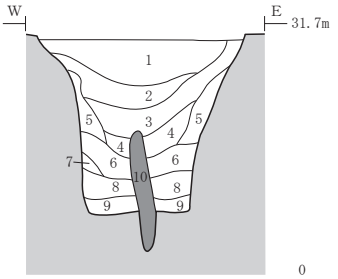
縄文時代の陥し穴はＣ区で 22 基確認しており、形態からＡ：平面が円形で底中央に逆茂木が 1 本立てられるもの、Ｂ：平面が楕円形で穴底の長軸に合わせて逆茂木が２本立てられるもの、Ｃ：平面が溝状に細長いもの、いわゆるＴピットの３タイプに分けられる。類型別の数は、Ａ類が 14 基、Ｂ類が５基、Ｃ類は３基で、Ａ類が最も多い。

陥し穴は、類型毎に規模や逆茂木の太さに共通点が多い。他遺構との重複が少なく、遺物はわずかに出土したのみである。このため、遺構毎の記述は行わず、概要を述べることとし、個々のデータは表６にまとめた。

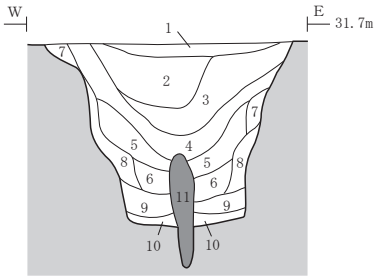
【Ａ類】（図版 37 ～ 41）

平面が円形で底中央に逆茂木が 1 本立てられるものである（SK23・24・26 ～ 29・31 ～ 33・40・45 ～ 48）。SK33 を除いて、C 区北端の山際から調査区中央を 4 ～ 10 m離れて南北に並んでいた。他遺構と重複する例が少なく、SK24 と SK40 はそれぞれ SB20 建物跡、SI06 住居跡より古い。

規模は確認面の直径が 1.1 ～ 2.0 mで、深さは 0.9 ～ 1.5 m、断面形は箱形が多い（14 基中 10 基）。逆茂木は径が８～ 20㎝で、掘方はないことから、片方の先端を尖らせて底面中央に打ち込んだ後、穴側の露出した先端を尖らせて使用したと考えられる。



SK23



SK24

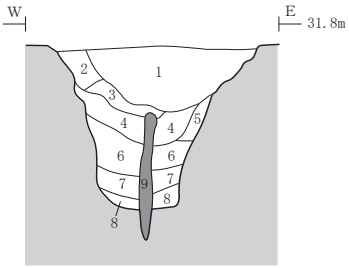
(S=1/60)

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト		
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	炭化物を含む	
3	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
4	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土		
5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト		壁崩落土
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土		
7	にぶい黄橙色(10YR6/4)	粘土		
8	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
9	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	炭化物を含む	
10	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		杭痕跡

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		
2	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト		
3	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
4	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		
5	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
6	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		
7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	地山ブロックを含む	壁崩落土
8	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	
9	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト		
10	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
11	黒褐色(10YR3/2)	シルト		杭痕跡

SK23 完掘写真（北から）

SK24 完掘写真（北から）

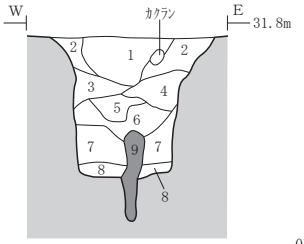


SK26

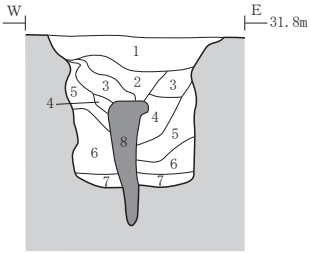
No.	土色	土性	混入物など	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	黒褐色粘土小ブロックを含む	
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土		
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土		
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山粒・小ブロックを含む	
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを少量含む	
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
9	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		杭痕跡

SK26 完掘写真（北から）

図版 37　陥し穴Ａ類（１）－SK23・24・26



SK27



SK28

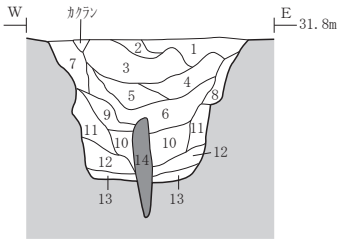
(S=1/60)

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	黒褐色粘土小ブロックを含む	
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		
3	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山ブロックを少し含む	
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土	地山ブロックを少し含む	
5	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		
6	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	黒褐色シルト質粘土ブロックを含む	
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
9	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		杭痕跡

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
2	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土		
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
8	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	杭痕跡

SK27 完掘写真（北から）

SK28 完掘写真（南から）

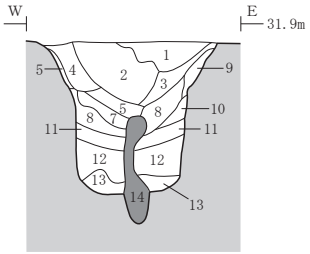


SK29

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト		
2	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト		
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	地山粒を少量含む	
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土		
5	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト質粘土		
6	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土		
7	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	暗褐色粘土小ブロックを含む	
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを少量含む	
9	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		
10	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
11	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
12	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
13	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
14	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		杭痕跡

SK29 完掘写真（南から）

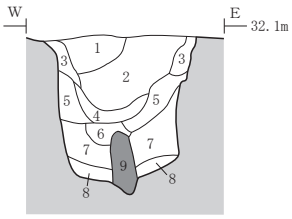
図版 38　陥し穴Ａ類（２）－SK27・28・29



SK31

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト		
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	黒褐色粘土小ブロックを含む	
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土		
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	暗褐色粘土小ブロックを含む	
5	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土		
6	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロック少量含む	
8	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む	
9	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		
10	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
11	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土		
12	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
13	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
14	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	杭痕跡

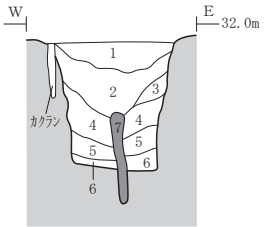
SK31 完掘写真（南から）



SK32

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト		
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	黒褐色粘土小ブロック含む	
3	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山ブロックを少し含む	
4	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	黒褐色シルトブロックを含む	
5	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	暗褐色シルトブロックを含む	
6	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む。	
9	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む	杭痕跡

SK32 完掘写真（南から）



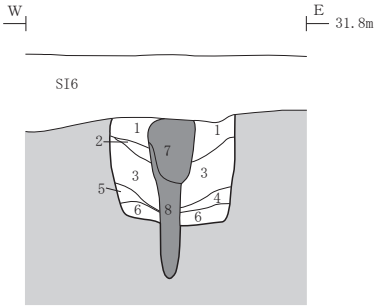
SK33

(S=1/60)

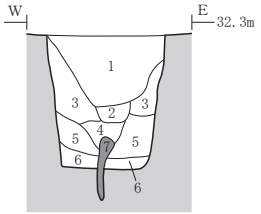
No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト		
2	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト	地山小ブロックを少量含む	
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト質粘土	黒褐色粘土小ブロックを多く含む	
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山粒・小ブロックを含む	
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		杭痕跡

SK33 完掘写真（南から）

図版 39　陥し穴Ａ類（３）－SK31・32・33



SK40



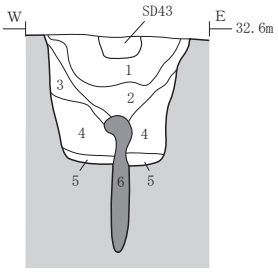
SK45

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		
3	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	地山ブロックを含む	
4	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	
5	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		
6	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト		杭痕跡
8	黒褐色(10YR2/3)	シルト		

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト	地山小ブロックを少量含む	
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土		
3	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山小ブロックを多く含む	
4	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト		
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを少量含む	
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		杭痕跡

SK40 断面写真（南から）

SK45 完掘写真（南から）



SK46

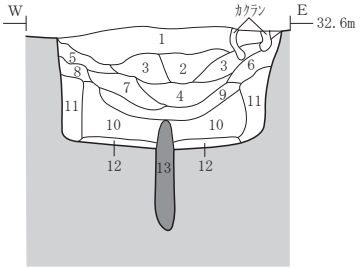
0　2m

(S=1/60)

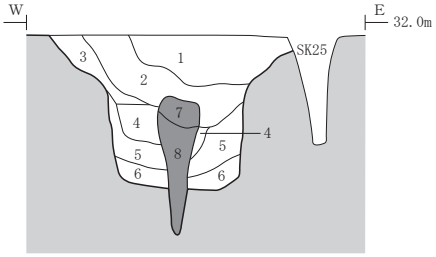
No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト		
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山ブロックを少し含む	
3	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
6	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		杭痕跡

SK46 完掘写真（西から）

図版 40　陥し穴Ａ類（４）－SK40・45・46



SK47



SK48

№.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	黒褐色シルトブロックを含む	
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		
3	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		
4	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		
5	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	暗褐色粘土ブロックを含む	
6	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	暗褐色シルトブロックを少し含む	
7	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		
8	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト		
9	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト		
10	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む	
11	褐色(10YR4/6)	粘土質シルト		
12	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
13	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		杭痕跡

0　2m

(S=1/60)

№.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト		
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	黒褐色粘土ブロックを含む	
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	暗褐色粘土ブロックを含む	
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		杭痕跡
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		

SK47 完掘写真（南から）

SK48 完掘写真（北から）

図版 41　陥し穴Ａ類（５）－SK47・48

【Ｂ類】（図版 42）

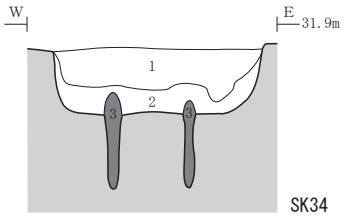
平面が楕円形で、穴底の長軸に合わせて逆茂木が２本立てられるものである（SK34・38・56・57・72）。Ｃ区北部に３基、南部に２基認められ、広い範囲に散在する。他遺構と重複するのは１例のみで、SK38 は ST39 墓跡より古い。

規模は確認面の長径が 1.6 ～ 2.5 mで、深さは 0.5 ～ 0.9 m、断面形は箱形である。逆茂木は径が 10 ～ 20㎝で、掘方はないことから、片方の先端を尖らせて底面中央に打ち込んだ後、穴側の露出した先端を尖らせて使用したと考えられる。

SK72 の底面から、縄文時代早期末の梨木畑式土器が出土した（図版 42・43）。陥し穴からの遺物の出土はきわめて少ないことから、その年代を考える上で貴重な発見となった。

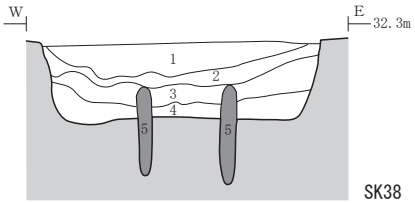
【Ｃ類】（図版 44）

平面形が細長い溝状となるもので、Ｔピットとも呼ばれる（SK12・25・30）。Ｃ区中央に３基散在する。規模は確認面の長径が 2.4 ～ 2.6 m、短径 0.5 ～ 0.6 m、深さは 0.7 ～ 0.9 mあり、断面形



SK34

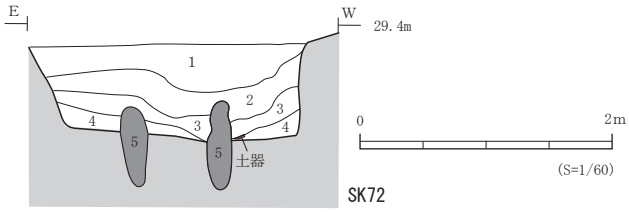
No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト		
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト		杭痕跡



SK38

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト質粘土	黒褐色粘土ブロック含む	
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	地山ブロックを少し含む	
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト質粘土	地山ブロックを含む	
4	黒褐色(10YR2/3)	粘土	地山ブロックを含む	
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土		杭痕跡

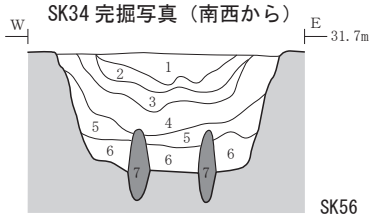
SK38 完掘写真（南西から）



SK72

SK72 写真（北東から）

SK34 完掘写真（南西から）



SK56

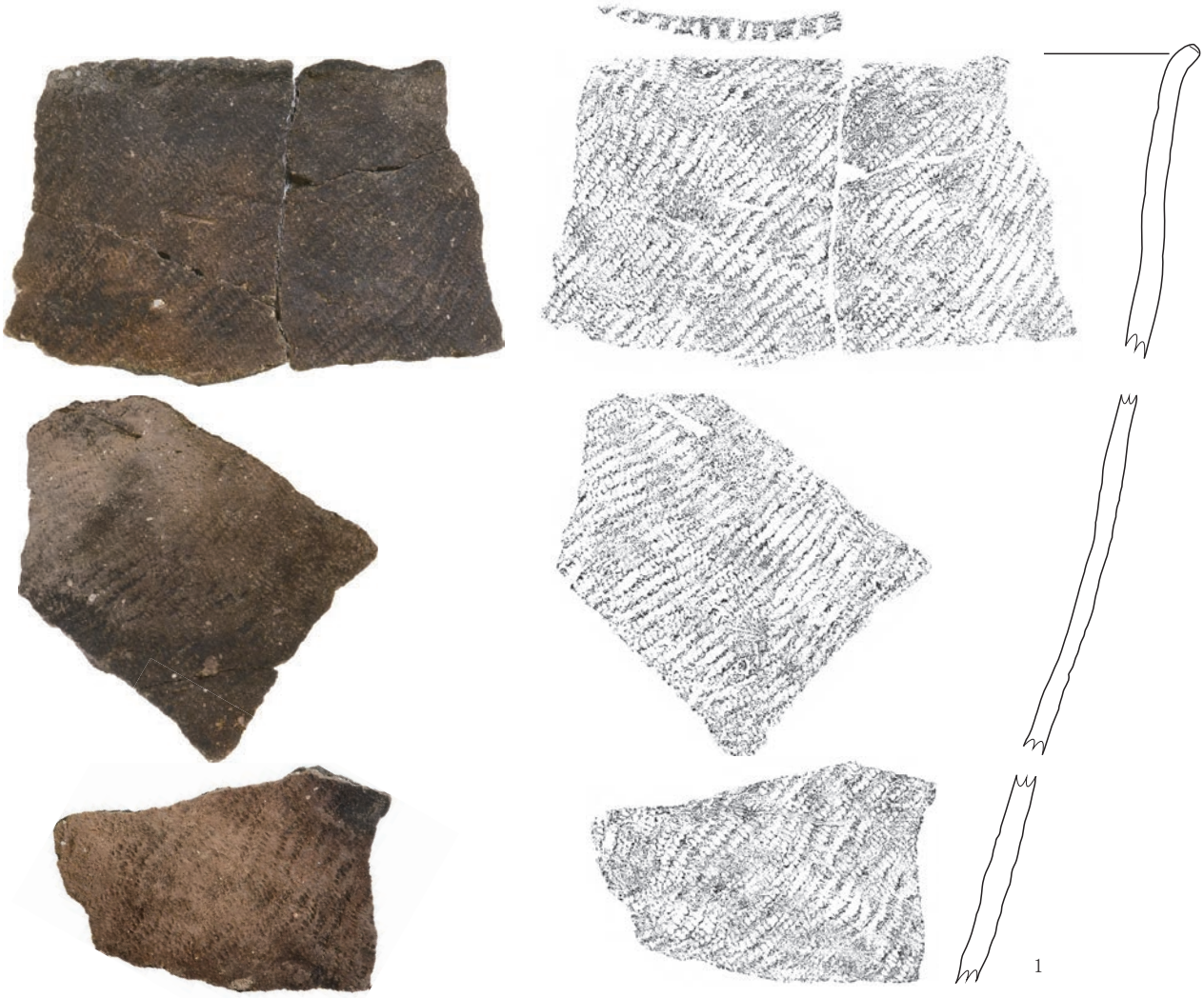
No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト		
2	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	シルト		
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト		
4	オリーブ褐色(2.5Y4/3)	シルト		
5	オリーブ褐色(2.5Y4/6)	シルト		
6	黄褐色(2.5Y5/3)	粘土質シルト		
7	灰黄色(2.5Y6/2)	粘土		杭痕跡

SK56 完掘写真（北から）

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト		
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
3	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		
4	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト		
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		杭痕跡

SK72 縄文土器出土状況写真（南から）

図版 42　陥し穴Ｂ類－SK34・38・56・72



0　10cm
(S=1/3)

（法量：cm）

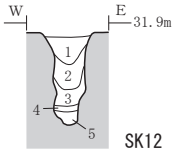
No.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
1	縄文土器	深鉢	底面	(26.4)	―	―	一部	外：口縁部刻み、ＬＲ縄文。内：条痕	236

図版 43　SK72 土坑出土遺物

遺構No.	分類	平面形	断面形	規模(m)	深さ(m)	杭痕跡(cm)			堆積土の状況	備考	図版No.	
						数	直径	長さ			平面	断面
SK12	C	長楕円形	漏斗形	2.6×0.5	0.7	×	―	―	自然堆積		32	44
SK23	A	不整円形	上が開く箱形	1.7×1.7	1.4	1	15	95	自然堆積		33	37
SK24	A	不整円形	上が開く箱形	2.0×1.7	1.5	1	15	90	自然堆積	下半は径1.00m	33	37
SK25	C	長楕円形	漏斗形	2.4×0.5	0.9	×	―	―	自然堆積	SK48より新しい	33	44
SK26	A	円形	上が開く箱形	1.7×1.5	1.3	1	10	102	自然堆積	下半は径0.70m	31	37
SK27	A	円形	箱形	1.3×1.2	1.1	1	15	74	自然堆積		31	38
SK28	A	不整円形	箱形	1.5×1.3	1.2	1	16	150	自然堆積		31	38
SK29	A	不整円形	箱形	1.6×1.4	1.1	1	16	79	自然堆積		31	38
SK30	C	長楕円形	漏斗形	2.4×0.6	0.9	×	―	―	自然堆積		31	44
SK31	A	円形	箱形	1.4×1.4	1.2	1	20	85	自然堆積		31	39
SK32	A	円形	箱形	1.2×1.0	1.2	1	16	50	自然堆積		30	39
SK33	A	円形	箱形	1.1×0.9	1.0	1	8	74	自然堆積		29	39
SK34	B	楕円形	浅い箱形	1.6×1.0	0.5	2	10/14	70/76	自然堆積		29	42
SK38	B	楕円形	浅い箱形	2.2×1.1	0.6	2	10/16	70/80	自然堆積		29	42
SK40	A	不整円形	箱形	1.2×1.0	1.4	1	16	127	自然堆積	SI6より古い。SI6で上半は壊される	33	40
SK45	A	円形	箱形	1.1×1.1	1.1	1	10	70	自然堆積		30	40
SK46	A	円形	箱形	1.1×1.0	1.0	1	16	108	自然堆積		30	40
SK47	A	楕円形	箱形	1.8×1.6	0.9	1	15	75	自然堆積		30	41
SK48	A	不整円形	上が開く箱形	1.9×1.8	1.2	1	15	107	自然堆積	SK25より古い。下半は径1.00m	33	41
SK56	B	楕円形	箱形	1.9×1.3	0.9	2	15/15	60/60	自然堆積		36	42
SK57	B	楕円形	箱形	2.5×1.2	0.8	2	10/10？	？	自然堆積		35	―
SK72	B	楕円形	箱形	2.2×1.2	0.9	2	20	70	自然堆積	底面から縄文早期末、梨木畑式土器出土	24	42

※B類の杭痕跡は２本であるため、●/●と表現した
※Ａ類の断面は円筒形。埋没する過程で、上半の壁が崩れて開く
※Ａ・Ｂ類の杭は上下とも尖る。底から30～70cm打ち込んだ後、上を尖らせている

表６　陥し穴属性表

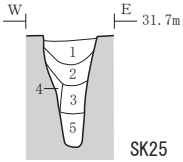


SK12

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト		
2	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山ブロックを含む	
3	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山小ブロックを多く含む	
4	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		
5	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	地山小ブロックを多く含む	

SK12 断面写真（南から）

SK12 断面写真（南東から）

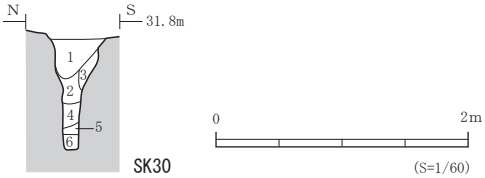


SK25

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト		
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト		壁崩落土
5	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト		

SK25 断面写真（北から）

SK25 断面写真（北西から）



SK30

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト		
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを含む	
3	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト質粘土	地山小ブロックを多く含む	
4	褐色(10YR4/4)	シルト質粘土	黒褐色シルト小ブロックを含む	
5	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト		
6	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト		

SK30 断面写真（西から）

SK30 完掘写真（西から）

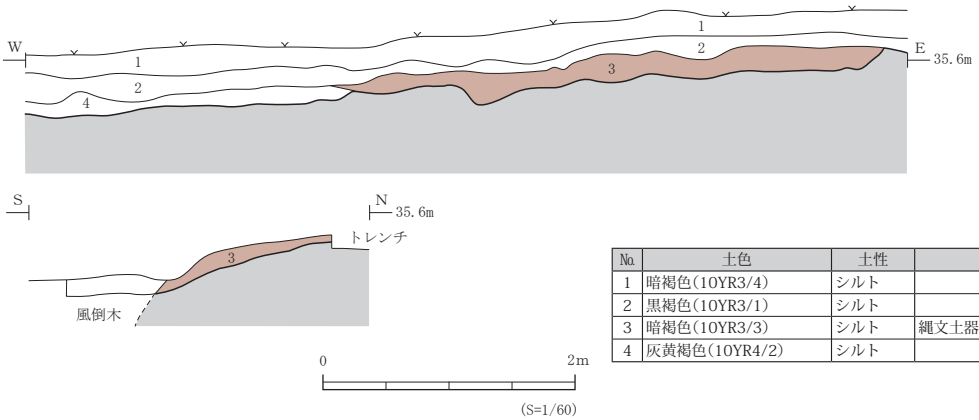
図版 44　陥し穴C類－SK12・25・30

は漏斗形である。

（2）遺物包含層

【SX16 遺物包含層】（図版 45）

Ｄ区頂部付近の南斜面で確認した遺物包含層で、範囲は東西 4.6 m、南北 4.0 m、厚さは 20㎝前後である。堆積土から縄文土器浅鉢が２個体出土した。文様がわかるものは、４単位の山形突起が付き、平行沈線が施されている（図版 46）。縄文晩期後葉の大洞Ａ～Ａ′式期に位置づけられる。

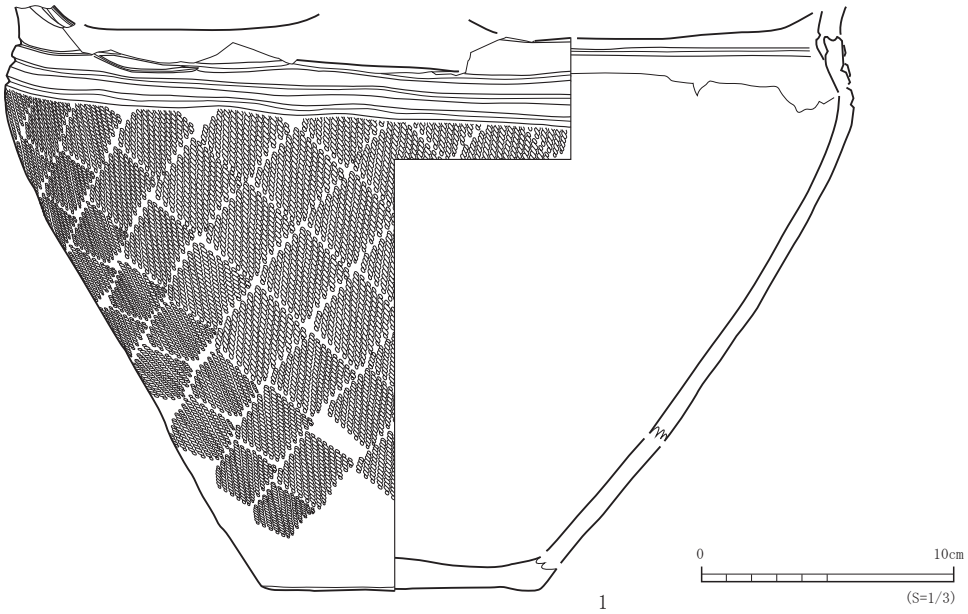


№.	土色	土性	混入物など	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト		基本第Ⅰa層
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト		基本第Ⅰb層
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	縄文土器を含む	SX16包含層
4	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		基本第Ⅴ層

SX16 断面写真（東から）

SX16 断面写真（西から）

図版 45　SX16 遺物包含層



（法量:cm）

No.	種別	器種	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
1	縄文土器	鉢	(36.0)	11.0	(23.0)	4/5	山形突起（４単位）、平行沈線。口唇部と口縁内面に沈線。ＬＲ縄文	136

図版 46　SX16 遺物包含層出土遺物

４．飛鳥～平安時代

竪穴住居跡を９軒、掘立柱建物跡を１棟確認した。住居跡の年代は８世紀前葉が７軒（SI01・03・06・07・11・15・50）、８世紀中葉～後半が２軒（SI02・51）である。前者はＡ区とＣ区に点的に分布するが、Ｃ区中央部のSI06・07・15は７～８m間隔で他の住居より近い関係にある。一方、後者はＡ区東端とＣ区南東部に１軒ずつ認められる。

自動車道調査区や浄水場調査区を参考にすると、８世紀前葉の住居は３～４軒を一つの単位として遺跡全体に分布する。８世紀中葉～後半は遺跡東端の自動車道調査区と西側のバイパス調査区で認められたが、前代に較べて住居数は著しく少ない。３～４軒単位でブロックを構成するとみられる。

SB37建物跡は、出土遺物から年代を特定できないが、江戸時代以降の掘立柱建物とは平面形や柱穴規模、埋土が異なる点から古代の建物跡と判断した。その場合、本遺跡の古代の遺構には飛鳥時代～平安時代のものがあること、周辺の集落跡でも掘立柱建物の年代が７世紀まで遡る可能性が指摘されていることから（栗原市教委2015a・2016）、飛鳥時代～平安時代のいずれかとみておきたい。

（1）竪穴住居跡

【SI01住居跡】（図版47～49）

〔位置・検出面〕Ａ区南端の第Ⅵ層で確認した。

〔重複関係〕なし。

〔規模・平面形〕東西5.7 m、南北5.6 mほどの方形である。

〔方向〕東辺で測るとＮ２°Ｅである。

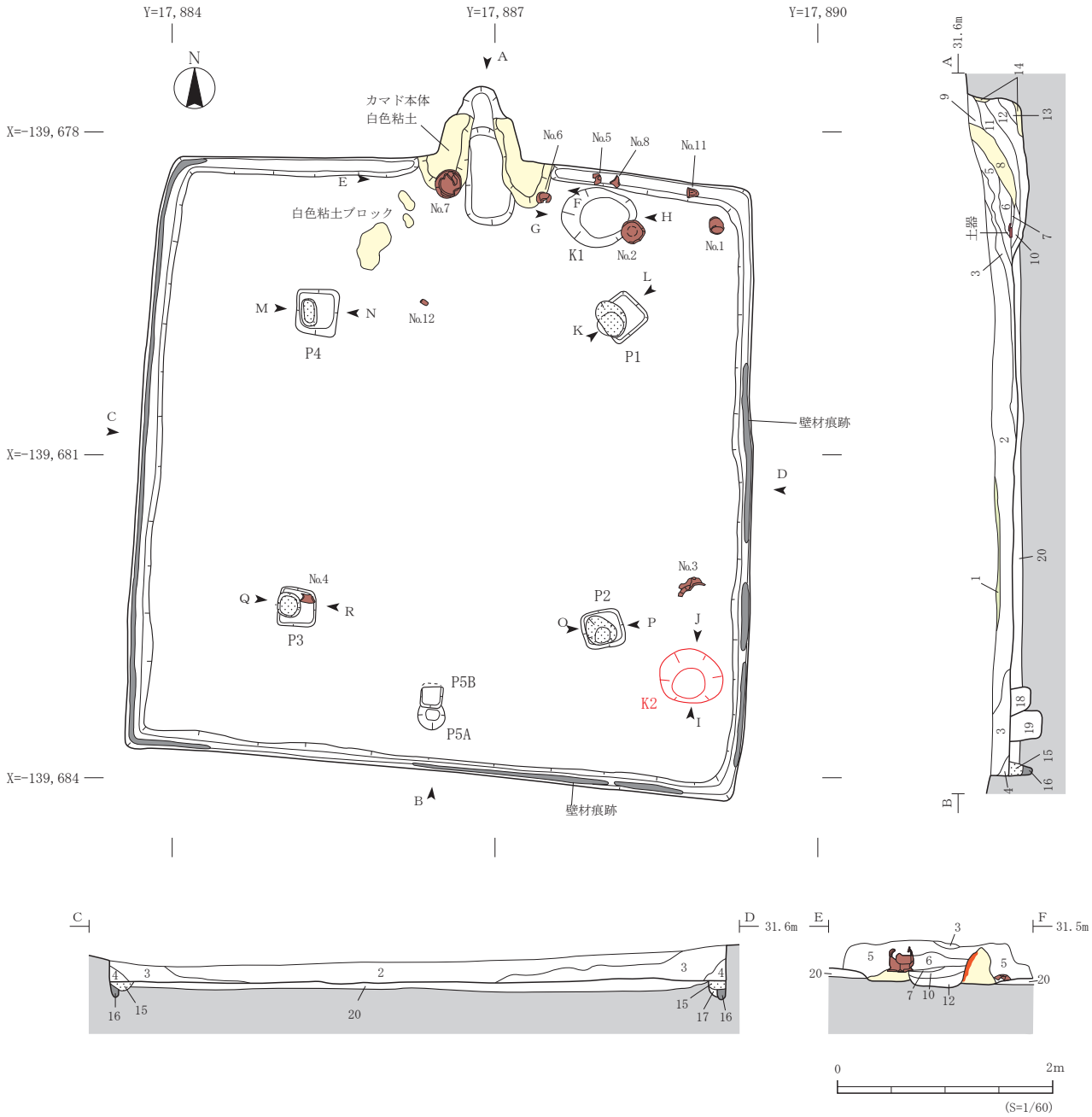
〔堆積土〕カマド部分を除く堆積土は大別４層に分けられた。１～３層はカマド破壊に伴う埋土の上に位置しており、層相からみて自然堆積と考えられる。１層は灰白色火山灰層で、その降下時には住居跡中央が窪んだ状態であったことを示している。

〔壁〕壁は急に立ち上り、壁高は最も残りのよい東辺中央で34cmある。

〔床面〕掘方埋土（黒褐色粘土質シルト）を床とする。

〔柱穴〕主柱穴は、床面の対角線上で４個確認した（P1～P4）。すべての柱穴で柱抜取穴を確認しているが、柱痕跡は25×14㎝ほどの長方形とみられる。掘方は一辺が33cm～42cmの隅丸方形で、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

〔カマド〕北壁中央部に付設された。本体は北壁を掘り込んで住居外側に突出し、その奥に短い煙道が付く。側壁や天井部は白色粘土で構築しており、左側壁の前端は土師器長胴甕を倒位に据えて焚口の補強を行っている（図版48）。一方、右側壁の前端には補強した甕が認められないこと、カマド左手前の床面上に本体構築材の白色粘土ブロックが認められることから、住居廃絶時に右側壁を中心にカマドを破壊していると考えられる。燃焼部内の堆積土は天井崩落土より下が本体破壊に伴う埋土と機能時の堆積土、上層は自然堆積土と考えられる。



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	灰白色火山灰小ブロックを少量含む	大別１層
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山粒を含む	大別２層
3	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	大別３層
4	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	大別４層
5	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山粒を含む。白色粘土小ブロックを少量含む	カマド上層
6	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	地山粒・白色粘土ブロックを少量含む	
7	黒褐色(10YR2/3)	シルト質粘土	焼土粒・炭化物粒を含む	
8	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト質粘土	白色粘土主体	カマド天井崩落土
9	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土粒・炭化物粒を含む	カマド下層
10	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒を多く含む	
11	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒を含む	
12	明赤褐色(5YR5/6)	シルト質粘土	焼土粒・炭化物粒を多量に含む。地山粒を含む	カマド機能時堆積土
13	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒を多く含む	
14	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト質粘土	白色粘土主体	本体or煙道崩落土
15	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	壁材抜取痕
16	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	壁材痕跡	
17	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	壁材据方埋土
18	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山ブロックを含む	P5B埋土
19	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	P5A柱抜取穴埋土	
20	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	木炭粒を多量に含む。堅くしまる	掘方埋土

図版 47　SI01 住居跡（１）

全　景（南から）

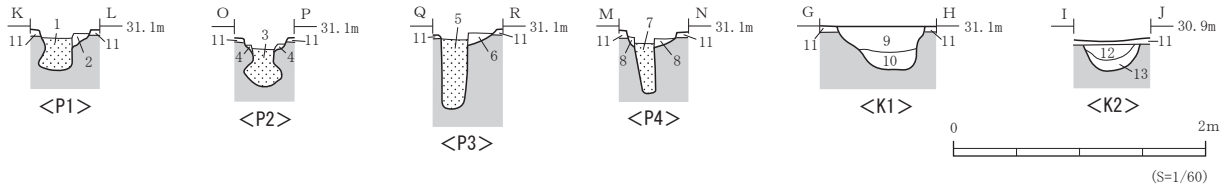
カマド（南から）

カマド焚口側壁断面（南から）

カマド断面（東から）

完掘後（南から）

図版 48　SI01 住居跡（2）



№.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	P1柱抜取穴
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	P1埋土
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	P2柱抜取穴
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	P2埋土
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	P3柱抜取穴
6	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	P3埋土
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	P4柱抜取穴

№.	土色	土性	混入物など	備考
8	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	P4埋土
9	にぶい褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	地山粒や木炭粒・焼土粒を含む	K1堆積土
10	黄褐色(10YR5/6)	シルト質粘土	灰白色粘土ブロックを多く含む	
11	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	木炭粒を多量に含む。堅くしまる	掘方埋土
12	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	K2堆積土
13	黄褐色(10YR5/6)	シルト質粘土		

P1 断面（南東から）

P2 断面（南から）

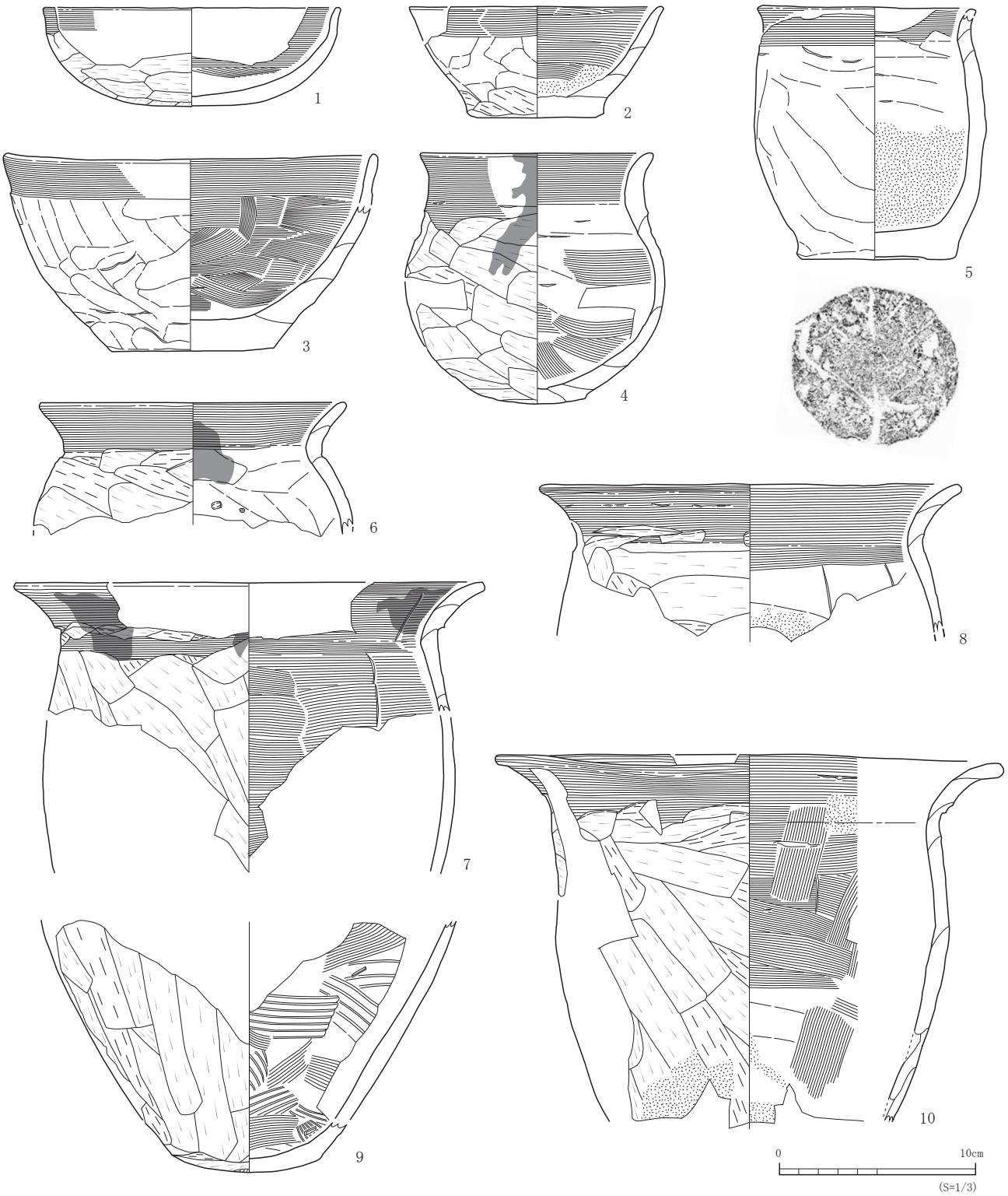
P3 完掘後（南から）

P4 完掘後（南から）

P5 断面（西から）

K1 断面（南から）

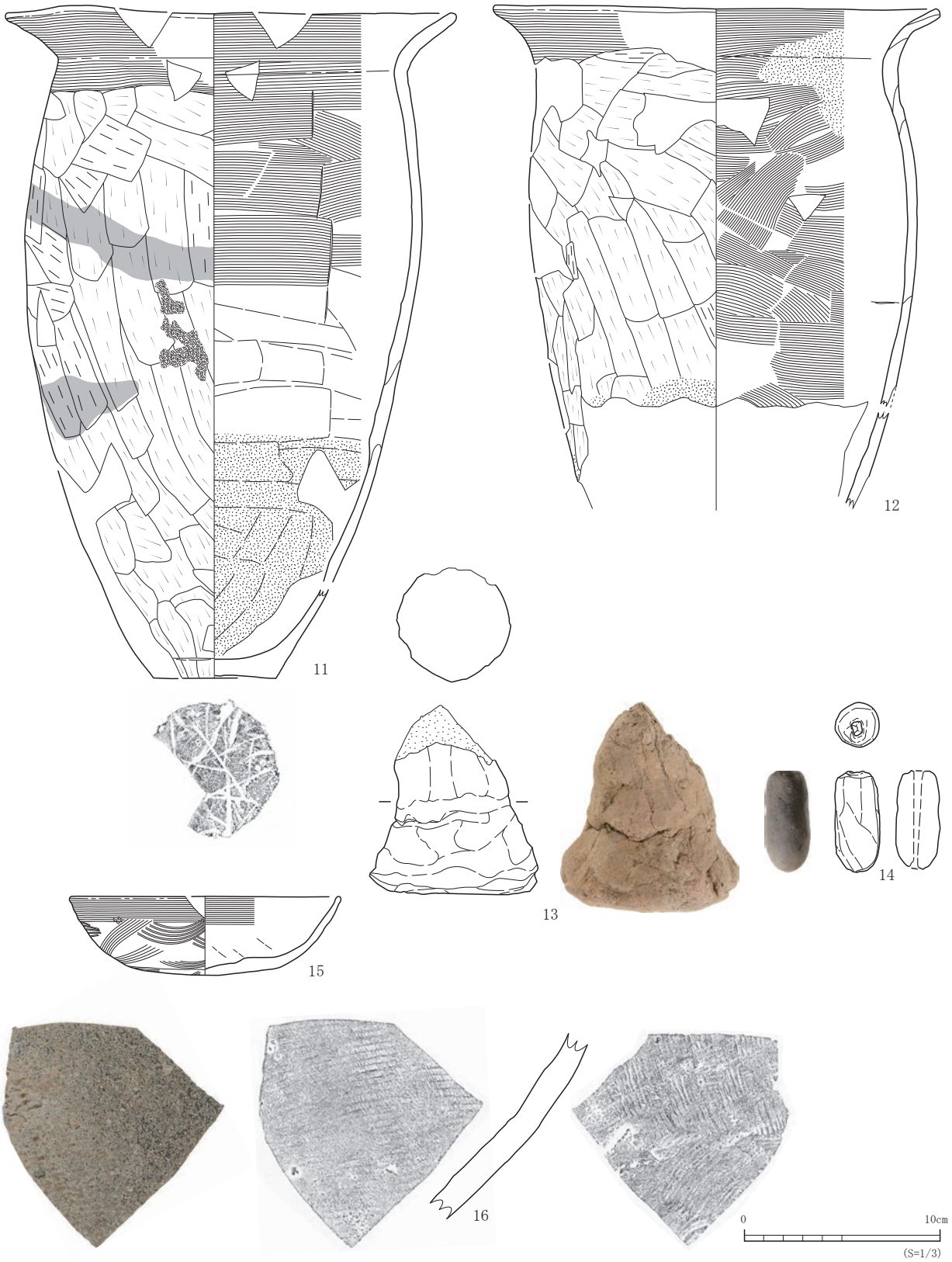
図版 49　SI01 住居跡（3）



（法量:cm）

№.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
1	土師器	坏	床面直上	(15.0)	—	(5.0)	一部	外:ヨコナデ→ナデ→ケズリ　内:ナデ。関東系土師器	17
2	土師器	ミニチュア	カマト゛右壁(№6)	12.8	6.6	5.6	1/2	外:ナデ→ケズリ・ヨコナデ　内:ナデ	11
3	土師器	鉢	床面(№2)	(18.8)	8.3	10.1	2/3	外:ナデ→ヨコナデ　内:ナデ底部ヘラケズリ。製作時に長胴甕を鉢に転化	2
4	土師器	小形甕	壁材抜取溝(№8)	(12.0)	—	(12.7)	1/3	外:ヨコナデ→ケズリ　内:ナデ→ヨコナデ。関東系土師器。外面にふきこぼれ	14
5	土師器	小形甕	床面(№1)	(11.0)	8.0	(12.4)	ほぼ完形	外:ナデ→ヨコナデ　内:ヨコナデ→ナデ。底部木葉痕	1
6	土師器	中形甕	貯蔵穴２層	(15.4)	—	—	1/8	外:ヨコナデ→ケズリ　内:ナデ→ヨコナデ。関東系土師器。内面に穀物痕	13
7	土師器	長胴甕	床面直上(№4)	(23.4)	—	—	1/5	外:ヨコナデ→ケズリ　内:ナデ→ヨコナデ。関東系土師器。口縁両面にスス痕	7
8	土師器	長胴甕	床面	(21.0)	—	—	1/8	外:ヨコナデ→ケズリ　内:ナデ→ヨコナデ。関東系土師器	3
9	土師器	長胴甕	床面直上	—	—	—	1/8	外:ケズリ　内:ナデ、ハケメ→ナデ。関東系土師器	8
10	土師器	長胴甕	床面直上	25.5	—	—	1/3	外:ヨコナデ→ケズリ　内:ヨコナデ→ナデ。関東系土師器	4

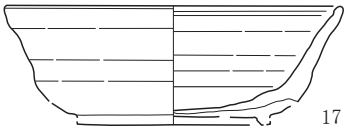
図版 50　SI01 住居跡出土遺物（１）

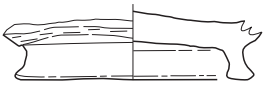


(法量:cm)

No.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
11	土師器	長胴甕	カマド左壁(No.7)	22.8	6.5	39.9	1/2	外:ヨコナデ→ケズリ　内:ナデ・ヘラナデ。木葉痕。胴部外面に粘土付着。関東系土師器	12
12	土師器	長胴甕	床面直上	(22.4)	—	—	1/3	外:ヨコナデ→ケズリ　内:ナデ。関東系土師器	6
13	土製品	支脚	壁材抜取溝(No.11)	—	8.4	—	3/4	体部ナデ　底部:木葉痕→粘土付着	15
14	土製品	土錘	床面直上(No.12)	—	—	—	完形	厚:2.3　長:5.1　孔径:0.7　ナデ仕上げ	9
15	土師器	坏	掘方埋土	13.6	—	(3.5)	1/3	外:ヨコナデ→ハケメ(体部連弧状)→ナデ　内:ナデ胎土に金雲母	18
16	須恵器	甕	掘方埋土	—	—	—	—	丸底。 外:平行タタキ　内:同心円アテ具→ナデ	19

図版 51　SI01 住居跡出土遺物（2）





0　10cm
(S=1/3)

(法量:cm)

No.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
17	須恵器	高台坏	堆積土	13.2	―	(4.7)	1/3	外:ロクロナデ　底:回転ヘラケズリ	20
18	須恵器	壺	堆積土	―	9.4	―	一部	外:回転ケズリ→ロクロナデ　内:ロクロナデ　底:回転ケズリ→ロクロナデ	16

図版 52　SI01 住居跡出土遺物（3）

図版 53　SI01 住居跡出土遺物（4）

〔周溝・壁材痕跡〕周溝はカマド部分を除いて全周し、壁材の抜取痕が認められる。北辺を除く各辺では、抜取穴の下で幅 10cm ほどの壁材痕を確認した。掘方は幅 15 ～ 20㎝、深さは 20 ～ 25㎝である。

〔貯蔵穴〕カマド右脇にある（K1）。長軸 70cm、短軸 54cm の楕円形で、深さは 36cm、断面形は不整な逆台形である。堆積土は２層に分けられるが、人為的に埋戻されている。

〔その他の施設〕南辺中央の壁際から 25cm 内側で柱穴（P5）を確認した。新旧２時期あり、Ａ期は径 25cm の円形で、全体が柱抜取穴とみられる。Ｂ期は一辺が 24cm の隅丸方形で、柱痕跡は確認していない。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。カマド反対側の南壁中央にあること、断面形が壁に向けて傾くことから、入口の梯子を固定した穴（入口ピット）と考えられる。

　また、住居南東隅の掘方埋土下から土坑を検出した（K2）。長軸 57cm、短軸 48cm の楕円形で、深さは 24cm あり、断面形は逆台形である。堆積土は２層に分けられるが、人為的に埋戻されている。

〔出土遺物〕床面から土師器鉢・小形甕・長胴甕、K1 から土師器中形甕、P2 柱抜取穴から土師器甕、周溝壁材抜取痕から土師器小形広口壺・長胴甕や円筒状の土製支脚、床面直上から土師器坏・長胴甕・

広口壺や土錘、カマド堆積土から土師器甕、住居堆積土から土師器坏・甕、須恵器高台坏・壺・甕などほか、カマド焚口左壁の補強材として土師器長胴甕、掘方埋土から土師器坏・甕が出土した（図版50 ～ 53）。土師器はいずれも非ロクロ調整である。

【SI02 住居跡】（図版 54・55）

〔位置・検出面〕 A区東部の第Ⅵ層で確認した。

〔規模・平面形〕 東西 3.6 m、南北 3.7 mほどの隅丸方形である。

〔方向〕 東辺で測るとＮ１°Ｗである。

〔堆積土〕 カマド部分を除く堆積土は大別３層に分けられた。いずれも自然堆積と考えられる。１層は灰白色火山灰層で、その降下時には住居跡中央が窪んだ状態であったことがわかる。

〔壁〕 壁は急に立ち上り、深さは最も残りのよい中央部で 33cm ある。

〔床面〕 掘方埋土（第Ⅵ層ブロック主体、黒褐色シルトを含む）を床とする。

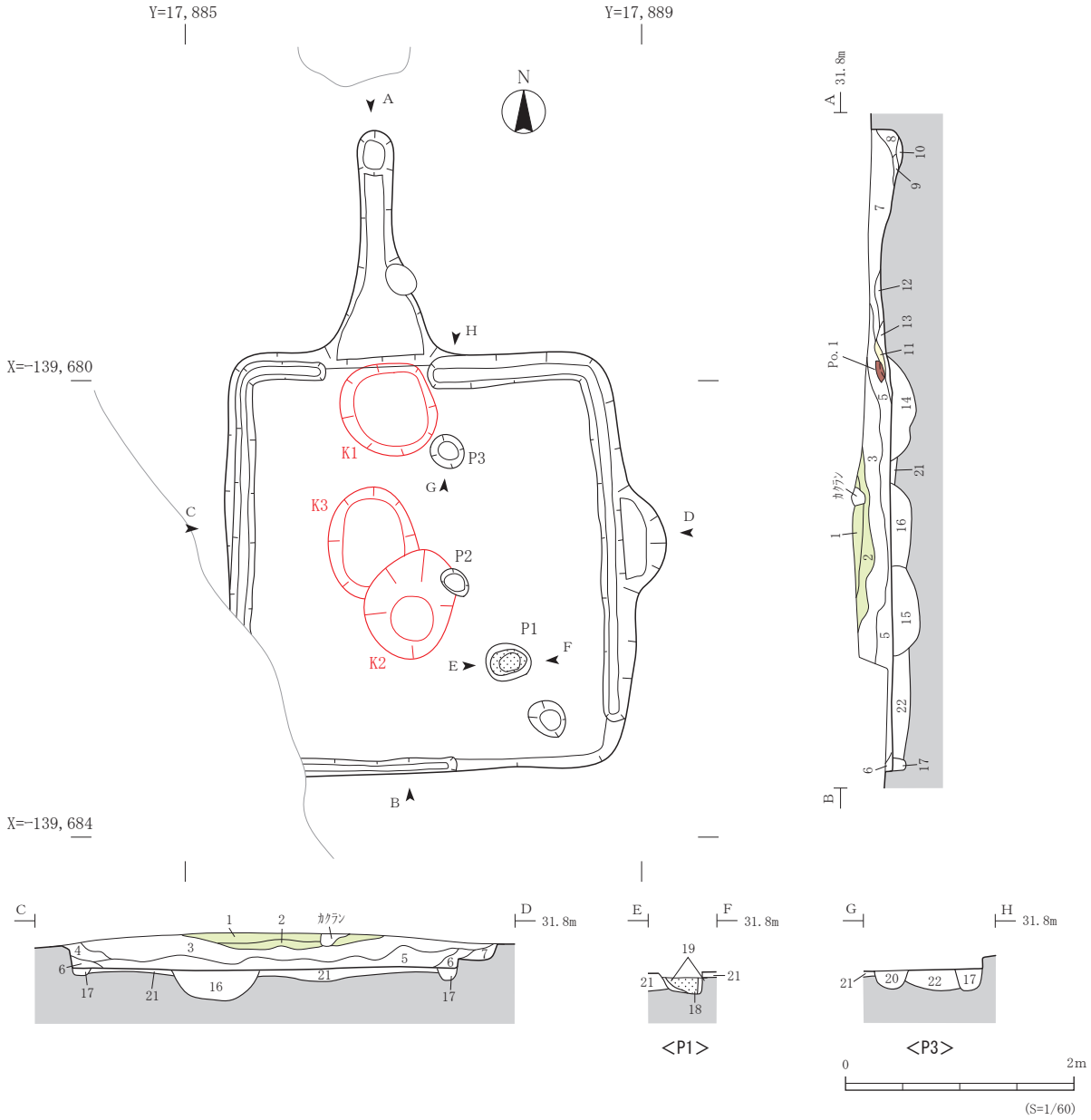
〔柱穴〕 住居北側中央（P3）と南東部（P1）でピットを確認したが柱位置に規則性がないことから、主柱穴ではないとみられる。P1 は、柱抜取穴の下で径 12㎝の柱痕跡を確認した。掘方は一辺が 30cm ～ 40cm の隅丸方形で、埋土は第Ⅵ層ブロックを多く含む灰黄褐色シルトである。

〔カマド〕北壁中央部に付設された。本体は北壁を掘り込んで住居外側に突出し、その奥に長さ 1.4 m、幅 0.2 mの細長い煙道が取りつく。燃焼部の側壁に顕著な焼面がなく、堆積土に下面が焼けた白色粘土ブロックが認められること、その上から口縁部を上にした土師器坏が出土したことから、カマド本体は白色粘土で、住居の廃絶時に破壊されたと考えられる（図版 55）。

〔周溝・壁材痕跡〕 周溝はカマドと南東隅を除いて全周する。幅８㎝前後、深さは 12㎝ほどで、壁材の抜取痕と考えられる。

〔その他の施設〕埋め戻された土坑を３基確認した。K2･3 は住居中央にあり、長径が 0.9 m、深さが 0.2 ～ 0.3 mほどで、K2 が新しい。K1 は径 0.8 m、深さ 0.3 mあり、カマド燃焼部手前で認められる。また、東壁中央部は 0.3 mほど外に張り出し、ステップ状になっていることから、住居の出入口にかかわる施設とみられる。

〔出土遺物〕 カマド堆積土や住居堆積土から出土したが、量はごくわずかであり、住居廃絶時に土器を別な場所に移したか廃棄したと考えられる（図版 56）。土師器はいずれも非ロクロ調整である。住居中央の３層から一括して出土した土師器長胴甕（２）は、カマドに装着されていたものが破壊時に取り外されたと考えられる。また、11 層上面から出土した土師器坏は、前述のとおり壊したカマド天井の上に正位に置かれていた（１）。



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	灰白色(10YR8/1)	シルト	灰白色火山灰の水成堆積	大別１層。基本第Ⅲb層
2	灰白色(10YR8/1)	シルト	灰白色火山灰	大別１層。基本第Ⅲa層
3	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物を含む	大別２層
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山小粒を含む	
5	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山小ブロックを含む	大別３層。遺物３層
6	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む	大別３層
7	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む	煙道堆積土
8	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む	
9	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼土・炭化物を多く含む。機能時の堆積層	
10	黄褐色(10YR5/6)	粘土	壁崩落土	
11	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	下面が焼けている	カマド天井崩落土
12	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物を多く含む	煙道堆積土
13	褐色(7.5YR4/4)	シルト	焼土・炭化物を多く含む	カマド機能時堆積土
14	黒褐色(10YR2/3)	シルト	K1埋土	
15	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山(大・小)ブロックを含む	K2埋土
16	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山小ブロックを含む	K3埋土
17	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを含む	周溝埋土
18	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山小粒・炭化物を含む	P1柱抜取穴
19	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	P1埋土
20	黒褐色(5YR3/1)	粘土質シルト	地山ブロック・焼土・炭化物を含む	P3埋土
21	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	黒褐色シルトを含む	掘方埋土
22	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを含む	

図版 54　SI02 住居跡（１）

全　景（南から）

全　景（南東から）

全　景（東から）

カマド 11 層上面の上に置かれた土師器坏（東から）

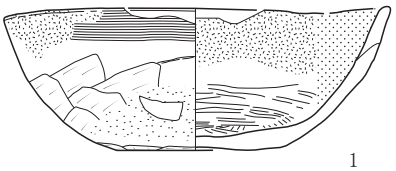
灰白色火山灰の堆積状況（南東から）

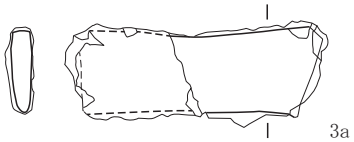
灰白色火山灰の堆積状況（北東から）

K1 断面（東から）

完掘後（南東から）

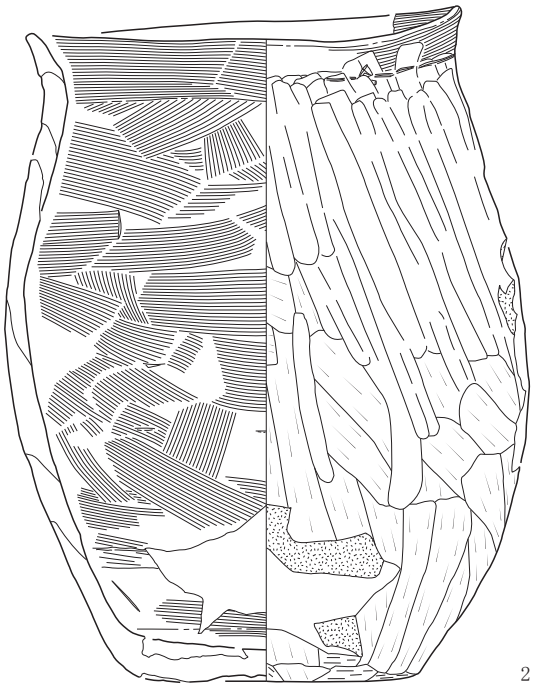
図版 55　SI02 住居跡（2）





0 5cm

（3 ：S=1/2）



0 10cm

（1 ・ 2 ：S=1/3）

（法量:cm）

№	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
1	土師器	坏	カマド11層(Po.1)	15.3	(6.4)	5.6	2/3	外:ヨコナデ・ケズリ　内:口縁ハゼ痕・ミガキ→黒色処理	51
2	土師器	長胴甕	ベルト3層一括	(16.8)	11.0	26.7	1/2	外:ヨコナデ・ケズリ→ミガキ　内:ナデ→ヨコナデ	52
3	鉄製品	刀子	c−3層	−	−	−	一部	幅2.6　長:7.4　最大厚:1.5	53

図版 56　SI02 住居跡出土遺物

【SI03 住居跡】（図版 57 ～ 59）

〔位置・検出面〕 C 区北東部の第Ⅵ層で確認した。

〔重複関係〕SX41 より新しく、SP59 より古い。

〔規模・平面形〕東西 6.4 m、南北 6.3 mほどの方形である。

〔方向〕西辺で測るとＮ２°Ｗである。

〔堆積土〕カマド部分を除く堆積土は大別３層に分けられた。いずれも自然堆積である。

〔壁〕壁は急に立ち上り、壁高は最も残りのよい西辺中央で 36cm ある。

〔床面〕掘方埋土（第Ⅴ層ブロック主体）を床とする。

〔柱穴〕主柱穴は、床面の対角線上で 4 個確認した（P1 ～ P 4）。柱痕跡は径 12 ～ 20㎝の円形で、すべての柱穴で柱抜取穴を確認した。掘方は一辺もしくは長径が 50cm ～ 70cm の隅丸方形、もしくは楕円形である。埋土は地山ブロックを多く含む褐色シルトである。

〔カマド〕北壁中央部に付設された。本体は北壁を 0.6 m掘り込んで住居外側に突出し、その奥に短い煙道が付く。側壁や天井部は白色粘土で構築しており、焚口左壁は補強材として土師器中形甕が倒位に据えられている。燃焼部内の堆積土は 4 層に分けられるが、いずれも自然堆積と考えられる。また、棒状の土製支脚が燃焼部左寄りから出土した（図版 59）。

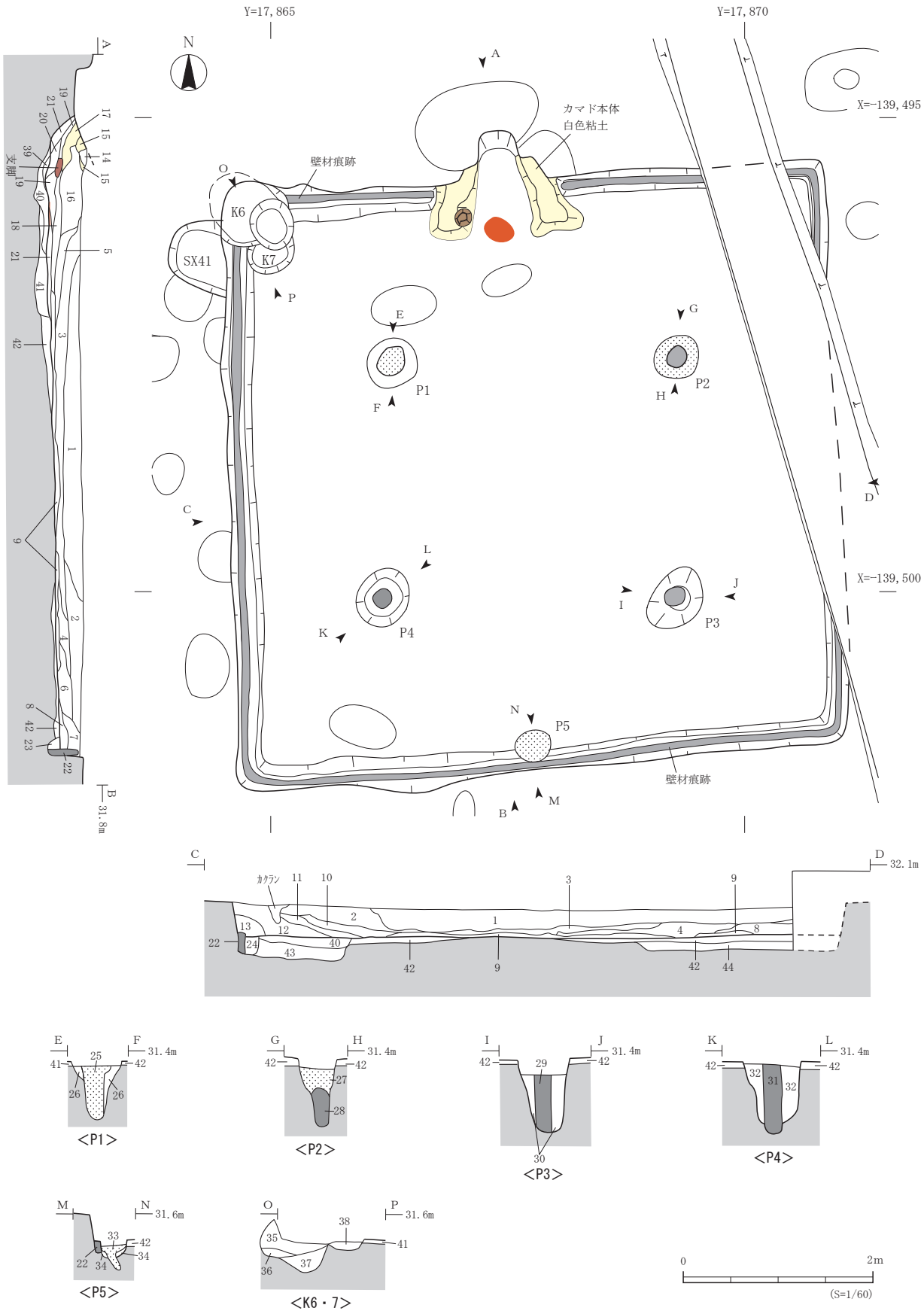
〔周溝・壁材痕跡〕周溝はカマド部分を除いて全周し、壁材の抜取痕が認められる。北辺を除く各辺では、抜取穴の下で幅３～８cm、深さ 14 ～ 22cm の壁材痕を確認した。掘方は幅 20㎝前後、深さは 15㎝ほどである。

〔貯蔵穴〕認められない。。

〔その他の施設〕南辺中央の壁内側で柱穴（P5）を確認した。柱は抜き取られている。埋土は第Ⅵ層ブロックを含む黒褐色シルトである。カマド反対側の南壁中央にあること、柱抜取穴の断面形が壁に向けて傾くことから、入口の梯子を固定した穴（入口ピット）と考えられる。

　また、住居北西隅で壁を抉る土坑を検出した（K6）。壁材痕跡より新しい。

〔出土遺物〕床面から土師器坏・中形甕・長胴甕、カマド内から土製支脚、堆積土から土師器坏・甕、須恵器甕、掘方埋土から土師器坏・甕などが出土した（図版 60・61）。また、３はカマド焚口左壁の補強材として倒位に据えられていた（図版 59）。土師器はいずれも非ロクロ調整である。



図版 57　SI03 住居跡（1）

全　景（上から）

№.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山粒・小ブロッグを含む	大別１層。遺物１層
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山粒を多く含む	大別１層。遺物２層
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を多く含む	
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト		
5	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を多く含む	
6	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を均質に多く含む	
7	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を多く含む	
8	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
9	暗褐色(10YR3/4)	シルト		大別３層。遺物床直
10	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を多く含む	大別２層。遺物２層
11	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
12	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を含む	
13	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む	
14	暗褐色(10YR3/4)	シルト		カマド堆積土
15	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	側壁、天井崩落土	
16	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を多く含む	
17	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	側壁、天井崩落土。16より少し暗い	
18	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒・小ブロックを均質に多く含む	大別２層。遺物２層
19	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山小ブロックを含む。焼土を多く含む	カマド堆積土
20	赤褐色(5YR4/6)	焼土	焼土ブロック主体	
21	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
22	黒褐色(10YR2/3)	シルト		壁材痕跡
23	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを多く含む	壁材据方埋土
24	黄褐色(10YR5/6)	粘土	地山ブロック主体	

№.	土色	土性	混入物など	備考
25	暗褐色(10YR3/4)	シルト		P1柱抜取穴
26	褐色(10YR4/6)	粘土	白色粘土を少量含む	P1埋土
27	暗褐色(10YR3/4)	シルト		P2柱抜取穴
28	褐色(10YR4/4)	?	地山ブロック主体	P2柱抜取穴
29	黒褐色(10YR2/3)	シルト		P3柱痕跡
30	褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒を多量に含む	P3埋土
31	黒褐色(10YR2/3)	シルト		P4柱痕跡
32	褐色(10YR4/6)	粘土	白色粘土を少量含む	P4埋土
33	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	地山粒を多量に含む	P5柱抜取穴
34	褐色(10YR4/4)	粘土		P5埋土

№.	土色	土性	混入物など	備考
35	黒褐色(10YR2/3)	シルト		K6堆積土
36	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む	
37	褐色(10YR4/6)	シルト		
38	暗褐色(10YR3/3)	シルト		K7堆積土
39	黒褐色(10YR2/3)	シルト質粘土		カマド掘方埋土
40	褐色(10YR4/6)	粘土		掘方埋土
41	黄褐色(10YR5/6)	粘土		
42	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多く含む	
43	褐色(10YR4/6)	粘土	地山ブロックを多く含む	
44	黄褐色(10YR5/6)	粘土	地山ブロックを多く含む	

図版 58　SI03 住居跡（２）

全　景（南から）

ベルト断面（西から）

カマド（南から）

カマド断面（西から）

カマド左側壁と支脚出土状況（南東から）

カマド左側の遺物出土状況（西南から）

北壁際の遺物出土状況（南西から）

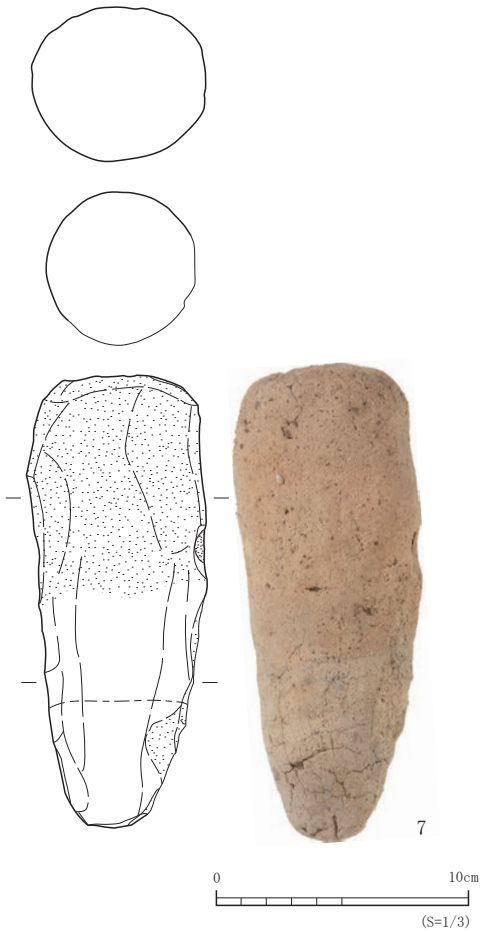
完掘後（南から）

図版 59　SI03 住居跡（3）

（法量：cm）

No.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
1	土師器	坏	床面	(12.8)	—	3.9	1/4	外：ヨコナデ・ケズリ　内：ミガキ	106
2	土師器	長胴甕	床面(Po.1)	(21.4)	—	—	1/6	外：ヨコナデ→ケズリ　内：ヨコナデ・ナデ→縦位のナデ。関東系土師器	103
3	土師器	中形甕	カマド左壁(Po.5)	16.4	6.8	19.0	完形	頸部に段　外：ヨコナデ→沈線・ミガキ　内：ハケメ→ヨコナデ・ミガキ	105
4	土師器	長胴甕	床面(Po.3)	(24.0)	—	—	1/4	外：ハケメ→ヨコナデ→ミガキ　内：ハケメ→ナデ→ヨコナデ。口縁部断面が四角。東北北部系土師器	107
5	土師器	長胴甕	床面(Po.2)	(21.0)	—	—	1/6	外：ヨコナデ→ケズリ　内：ヘラナデ・ナデ→ヨコナデ。関東系土師器。胴部に粘土付着	104
6	土師器	長胴甕	7層(Po.7)	—	8.4	—	1/6	外：ナデ・ハケメ→ケズリ　内：ナデ・ヘラナデ。底部木葉痕	102

図版 60　SI03 住居跡出土遺物（1）



（法量:cm）

No.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
7	土製品	支脚	19層(Po.6)	―	―	17.9	完形	最大径:6.8　ナデ仕上げ	101

図版 61　SI03 住居跡出土遺物（2）

【SI06 住居跡】（図版 62 ～ 64）

〔位置・検出面〕 C 区中央部の第Ⅴ層で確認した火災住居である。

〔重複関係〕SK40 土坑より新しい。

〔規模・平面形〕東西 4.7 m、南北 4.9 mほどの方形である。

〔方向〕西辺で測るとＮ２°Ｅである。

〔堆積土〕カマド機能時を除く堆積土は大別７層に分けられた。３層は人為的な埋土、４～７層は火災に伴う層（火災層）である。本住居は火災後埋め戻され（３層）、その後窪んだ中央部は流入土（２層）の上に灰白色火山灰が堆積した（１層）。

〔壁〕壁は急に立ち上り、壁高は最も残りのよい西辺中央で 42cm ある。

〔床面と天井構築材の出土状況〕掘方埋土（第Ⅵ層ブロック主体、第Ⅴ層を含む）を床とする。その上は部分的に弱い焼面が認められ、全体を火災に伴う炭化物層（大別７層）が覆う。また、７層上面や５層中から炭化材と焼土ブロックが多量に出土した（図版 63）。前者は主柱を結ぶ線に対して放射状に延びることから垂木、後者は屋根葺土と考えられる。

〔柱穴〕主柱穴は、床面の対角線上で４個確認した（P1 ～ P4）。それぞれで一辺 15 ～ 20㎝の方形痕跡が認められた。堆積土に焼土や炭化物を多く含むことから、柱抜取痕と考えられる。掘方は一辺が 30 ～ 60cm の不整方形である。埋土は第Ⅵ層ブロックを多く含む褐色シルトで、黒褐色シルトを含む。掘方は床の下で確認したことから、柱を立てた後、床が貼られたと考えられる。

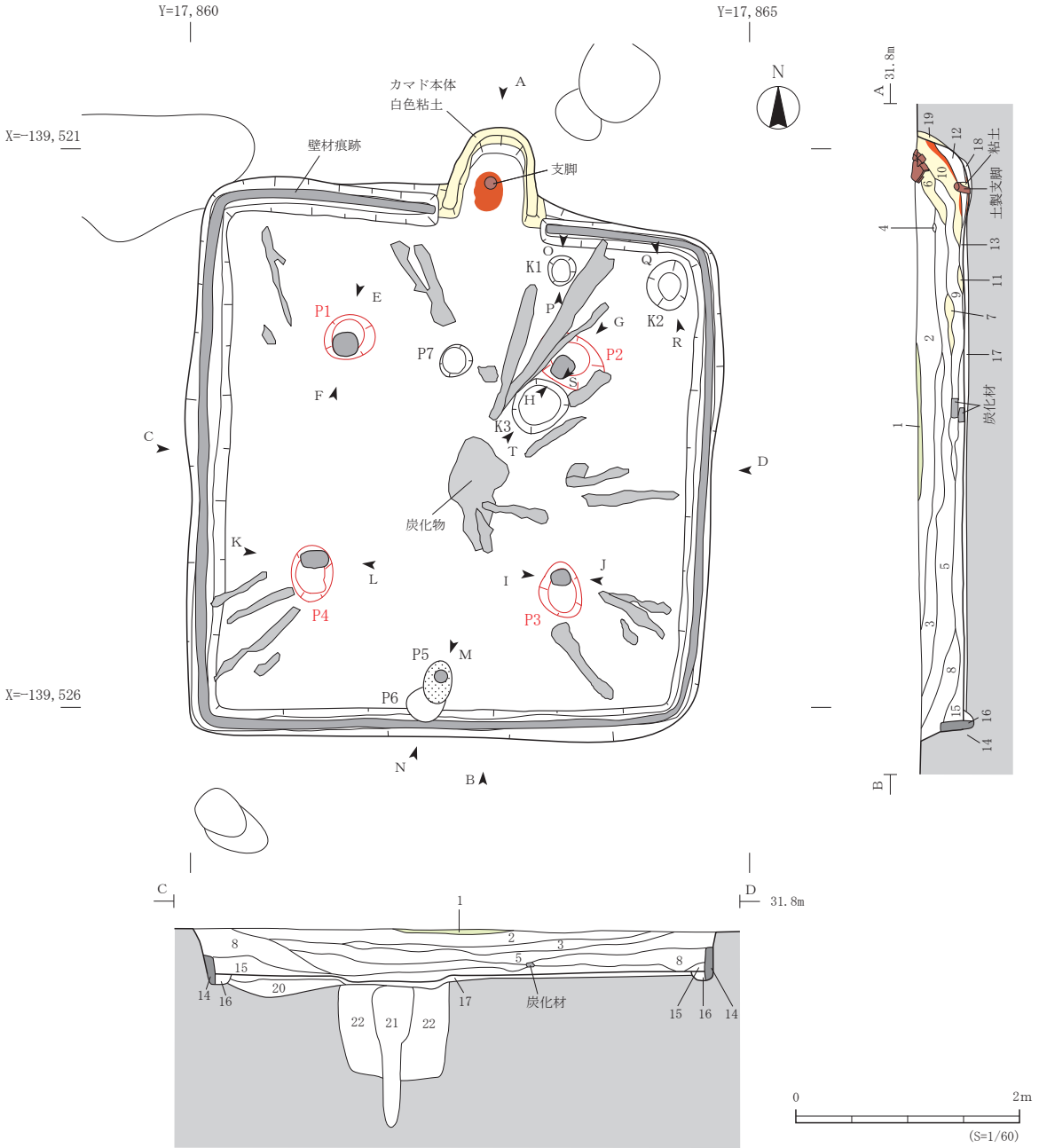
〔カマド〕北壁中央部に付設された。本体は北壁を 0.8 mほど掘り込んで住居外に突出し、その内側に幅 10 ～ 15㎝の白色粘土を貼り付けて構築している。煙道が認められないこと、奥壁が外に向けて傾斜することから、煙道はそのまま上方に延びたと考えられる。４層（本体崩壊土）上面から横位で出土した土師器長胴甕は、もともと装着されていた長胴甕を外したのち、横位に置き直すという、カマド廃絶祭祀に伴うものと考えられる。また、円筒状の土製支脚が燃焼部中央に据えられていた（図版 63）。

〔周溝・壁材痕跡〕周溝はカマド部分を除いて全周する。幅６㎝ほどの壁材は炭化しており、床から 10 ～ 20㎝立ち上がる。掘方は幅 20㎝、深さは 10㎝ほどである。

〔貯蔵穴〕カマド右側の住居北東隅にある（K2）。径 45cm ほどの歪んだ円形で、深さは 25cm、底は中央が低く壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は２層に分けられ、上層から土師器甕が一括で出土している。住居廃絶に際して土器とともに埋め戻されたと考えられる。

〔その他の施設〕南辺中央の壁材に接して柱穴を２個を確認した。重複しており壁材に接する P6 が古く、内側の P5 が新しい。P6 は径 30cm の円形で、全体が柱抜取穴とみられる。P5 は一辺が 25cm の方形で柱抜取穴がつき、柱痕跡は径 10㎝ほどである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。カマド反対側の南壁中央にあることから、入口の梯子を固定した穴（入口ピット）と考えられる。

また、北東主柱（P2）の南側で土坑を検出した（K3）。径 50㎝ほどの円形で、深さは 15cm ほどで、壁は急に立ち上がる。火災層に覆われていることから、住居の廃絶前に埋め戻されたと考えられる。



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	灰白色火山灰を含む	大別１層
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭化物粒・焼土粒を含む	大別２層。遺物１層
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む。炭化物を含む	大別２層。遺物２層
4	褐灰色(10YR5/1)	粘土質シルト		大別２層
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・焼土を含む	大別３層。遺物３層
6	褐灰色(10YR5/1)	粘土質シルト	上面から土師器甕が一括出土	大別４層。カマド天井崩落土
7	褐灰色(10YR5/1)	粘土質シルト		
8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物粒・焼土粒を含む	大別５層。遺物４層
9	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物粒・焼土粒を多く含む	
10	褐灰色(10YR5/1)	粘土質シルト		大別６層。カマド天井崩落土。遺物５層
11	褐灰色(10YR5/1)	粘土質シルト		
12	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	炭化物粒・焼土粒を多量に含む	カマド最終段階の堆積土。遺物６層
13			炭化物層	カマド機能時の堆積層
14	黒褐色(10YR2/2)	シルト		壁材痕跡
15	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化材・焼土ブロック(土葺き屋根材)を多く含む	大別７層。火災時の堆積層
16	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを多く含む	壁材掘方埋土
17	にぶい黄橙色(10YR7/2)	粘土	白色地山ブロックを多く含む。黒褐色シルトを含む	貼床
18	にぶい赤褐色(5YR4/4)	シルト	にぶい黄褐色粘土ブロック・炭化物を含む	カマド本体掘方埋土
19	にぶい黄橙色(10YR7/2)	粘土	カマド本体・煙道構築土	天井・側壁構築土
20	暗褐色(10YR3/3)	シルト		掘方埋土

※21はSK40逆茂木痕、22はSK40堆積土

図版 62　SI06 住居跡（１）

全　景（真上から）

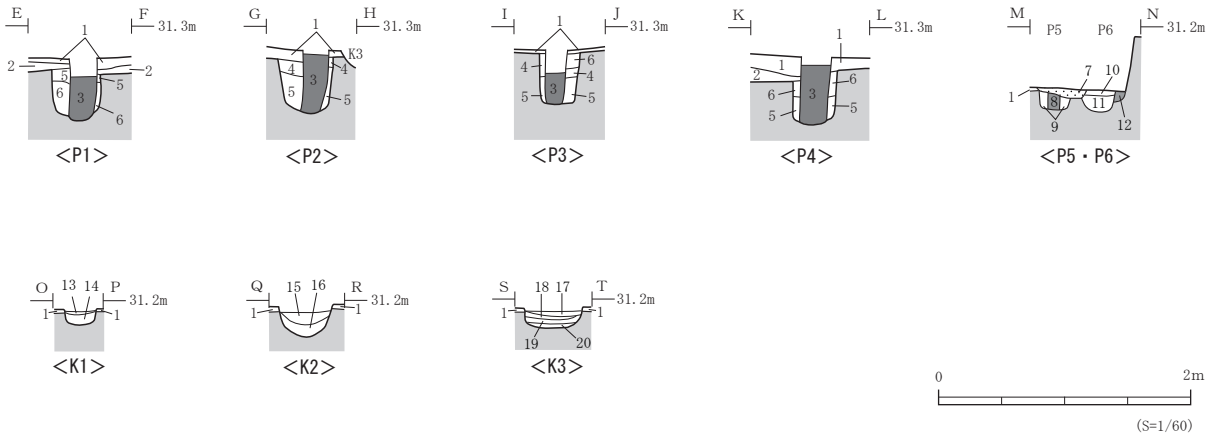
灰白色火山灰の堆積状況（南から）

炭化材検出状況（北東から）

カマド断面（南東から）

カマド（南東から）

図版 63　SI06 住居跡（2）



№.	土色	土性	混入物など	備考
1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土	地山ブロック主体。堅くしまる	貼床
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土	黒褐色シルトを含む	掘方埋土
3	黒褐色(7.5YR2/2)	シルト	焼土・炭化物を含む	柱痕跡
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト		柱穴埋土
5	褐色(10YR4/4)	シルト		
6	褐色(10YR4/4)	シルト	黒褐色シルトを含む	
7	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを含む	P5柱抜取穴
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	P5柱痕跡
9	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土	黒褐色シルトを含む	P5埋土
10	黒色(10YR2/1)	シルト		P6埋土

№.	土色	土性	混入物など	備考
11	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山粒を含む	
12	黒褐色(10YR2/2)	シルト		壁材痕跡
13	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭化物・焼土を多く含む	K1堆。火災層
14	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物粒・焼土粒を含む	K1堆積土
15	黒褐色(10YR2/3)	シルト	土師器甕が一括出土	K2堆積土
16	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
17	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック・炭化物・焼土を含む	K3堆。火災層
18	黒褐色(10YR3/2)	シルト		K3堆積土
19	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土	18層を含む	
20	黒褐色(10YR3/2)	シルト		

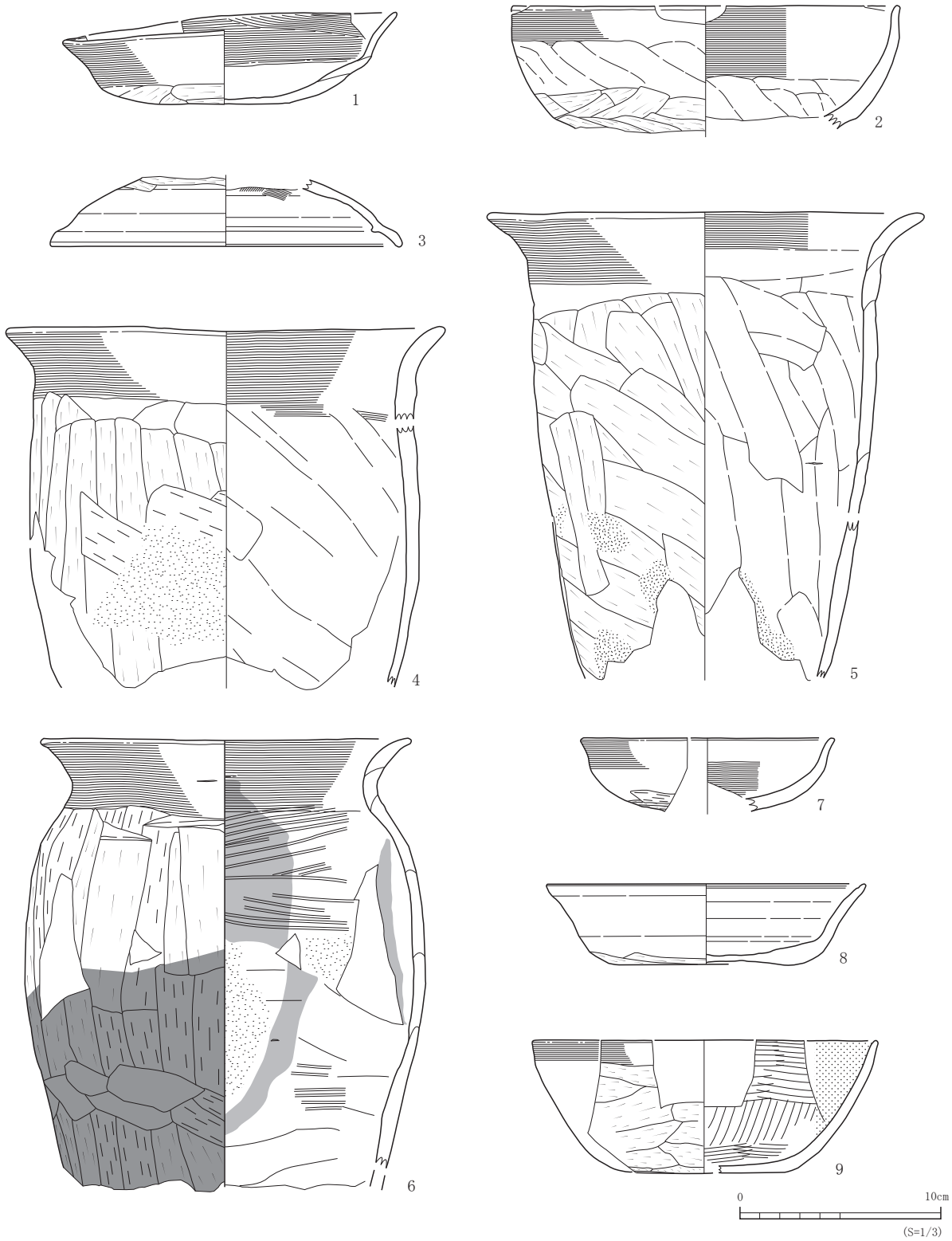
P1 断面（西から）

P3 断面（南から）

P4 断面（南から）

K1 断面（西から）

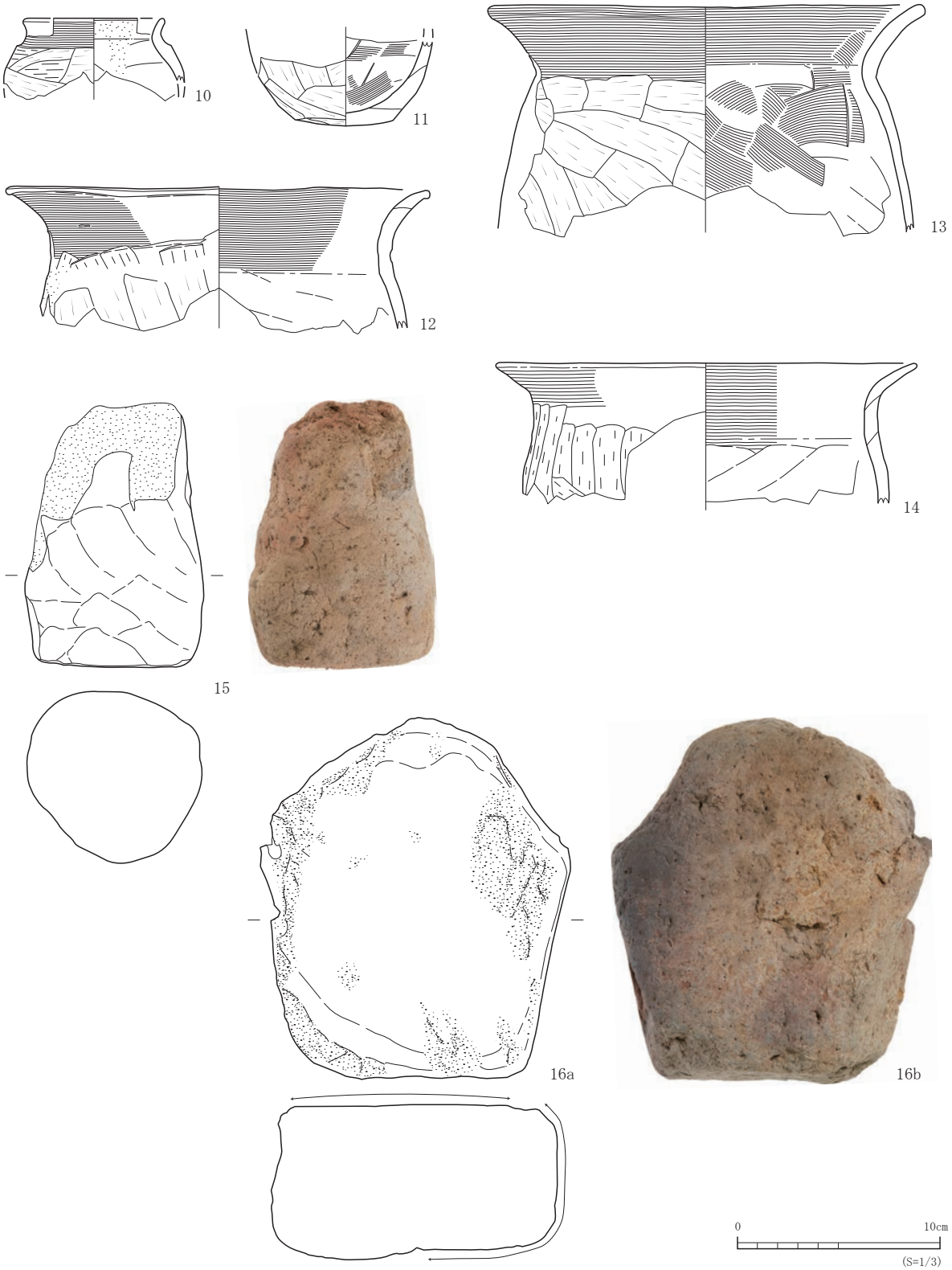
図版 64　SI06 住居跡（3）



(法量:cm)

No.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
1	土師器	坏	カマド6層	16.3	(6.5)	4.5	2/3	外:ヨコナデ→ケズリ・ナデ　内:ナデ→ヨコナデ。関東系土師器。盤状	125
2	土師器	坏	床面	(19.0)	—	—	1/5	外:ヨコナデ→ナデ→ケズリ　内:ナデ→ヨコナデ。関東系土師器	118
3	須恵器	蓋	床面	(17.4)	—	(3.3)	1/4	外:ロクロ→回転ケズリ　内:ロクロナデ	108
4	土師器	長胴甕	カマド6層	21.4	—	—	1/4	外:ナデ→ヨコナデ→ケズリ　内:ヨコナデ→ナナメナデ。関東系土師器。カマド廃絶祭祀	126
5	土師器	長胴甕	カマド前(b-1層)	(21.2)	—	—	1/4	外:ヨコナデ→ケズリ・ナデ　内:ナデ→ヨコナデ。関東系土師器	110
6	土師器	長胴甕	K-2堆	(18.1)	—	—	1/4	外:ナデ→ケズリ　内:ハケメ・ナデ→ヨコナデ。関東系土師器。両面に黒色付着物	128
7	土師器	坏	c-4層	(12.4)	—	—	1/6	外:ヨコナデ→ケズリ　内:ナデ	120
8	須恵器	坏	b-5・6層	(15.8)	(8.8)	3.9	1/3	外:ロクロナデ→ヘラ切り→手持ちケズリ　内:ロクロナデ。口縁上端に沈線	117
9	土師器	埦	c-4層	(17.2)	(8.0)	6.6	一部	外:ヨコナデ→ケズリ　内:ミガキ→黒色処理(再酸化のため、黒色がとぶ)	121

図版 65　SI06 住居跡出土遺物（1）



(法量:cm)

No.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
10	土師器	小型壺	d-3層	(6.2)	—	—	1/6	外:ケズリ→ヨコナデ　内面:ナデ・口縁部マメツ	124
11	土師器	小型壺	c-4層	—	—	—	一部	外:ケズリ　内:ナデ・ヘラナデ	119
12	土師器	長胴甕	b-5.6層	(20.2)	—	—	1/8	外:ヨコナデ・ナデ→ケズリ　内:ヨコナデ→ナデ	114
13	土師器	長胴甕	b-3層	(21.0)	—	—	1/6	外:ヨコナデ→ケズリ　内:ヨコナデ→ナデ。関東系土師器	111
14	土師器	長胴甕	b-5.6層	(20.6)	—	—	1/8	外:ヨコナデ→ナデ→ケズリ　内:ヨコナデ→ナデ	115
15	土製品	支脚	カマド燃焼部	(15.8)	—	—	一部	最大厚:5.7　残存高:(9.4)　指ナデ成形	127
16	石製品	砥石	c-床面	(17.2)	—	—	完形	長:17.6　幅:15.3　厚:9.1　重量:3400ｇ。置砥	122

図版 66　SI06 住居跡出土遺物（2）

図版 67　SI06 住居跡出土遺物（3）

〔出土遺物〕床面から土師器坏・小形甕・長胴甕や須恵器蓋、砥石、カマド内から土師器坏や支脚、カマド前から長胴甕、K2 から土師器長胴甕、住居堆積土から土師器坏・埦・小形広口壺・長胴甕、須恵器坏などが出土している（図版 65 ～ 67）。土師器はいずれも非ロクロ調整である。

【SI07 住居跡】（図版 69・70）

〔位置・検出面〕Ｃ区中央部西端の第Ⅴ層で確認した。住居東半を調査した。

〔重複関係〕SK58 土坑より新しい。

〔規模・平面形〕東西 3.3 m以上、南北 4.2 mの方形で、カマドの位置からみて東西は 4.5 mほどとみられる。

〔方向〕東辺で測るとＮ５°Ｅである。

〔堆積土〕カマド部分を除く堆積土は大別５層に分けられた。１～４層は自然堆積層、５層は生活層である。また、２層は灰白色火山灰層で、その降下時には住居跡中央が窪んだ状態であったことがわかる。

〔壁〕壁は急に立ち上り、深さは最も残りのよい北壁部分で 60cm ある。

〔床面〕掘方埋土（黒褐色シルト主体、第Ⅴ・Ⅵ層ブロックを含む）を床とする。

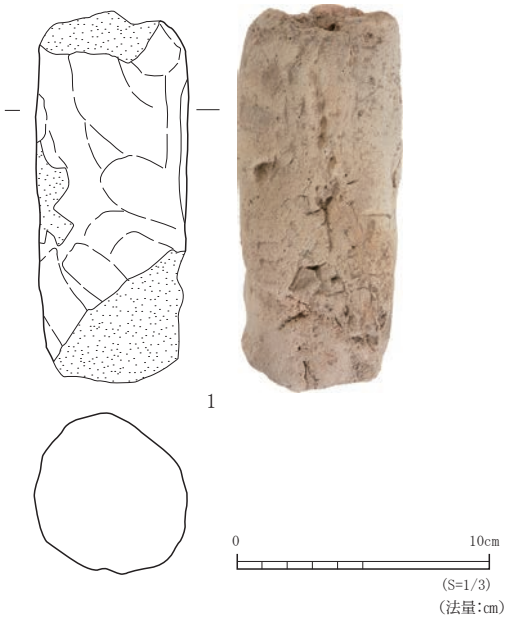
〔柱穴〕主柱穴は住居北東部の P1、南東部の P2 であり、未調査部分に想定される２個を含めた４個が主柱穴と考えられる。P1・２とも柱抜取穴の下で径 15㎝の柱痕跡を確認した。掘方は径が 20cm ～ 30cm の楕円形で、埋土は第Ⅵ層ブロックを多く含む灰黄褐色シルトである。

〔カマド〕北壁中央部に付設された。本体は北壁を 0.6 m掘り込んで住居外側に突出し、その奥に長さ 1.2 m、幅 0.5 mの細長い煙道が取りつく。本体は地山を削出し、その上に白色粘土を積んでいる。また、棒状の土製支脚が燃焼部左よりから出土した（図版 69・70）。支脚や焼面の位置から、本体は住居内まで延びていたと考えられる。さらに、煙道部は崩落した白色粘土ブロックが認められることから、半地下式であったことがわかる。

〔壁材痕跡〕壁材痕跡はカマド部分を除いて全周するとみられる。幅 10㎝前後、深さは 10 ～ 25㎝である。掘方が認められないことから、壁材は住居掘方を埋め戻しながら立てられたと考えられる。

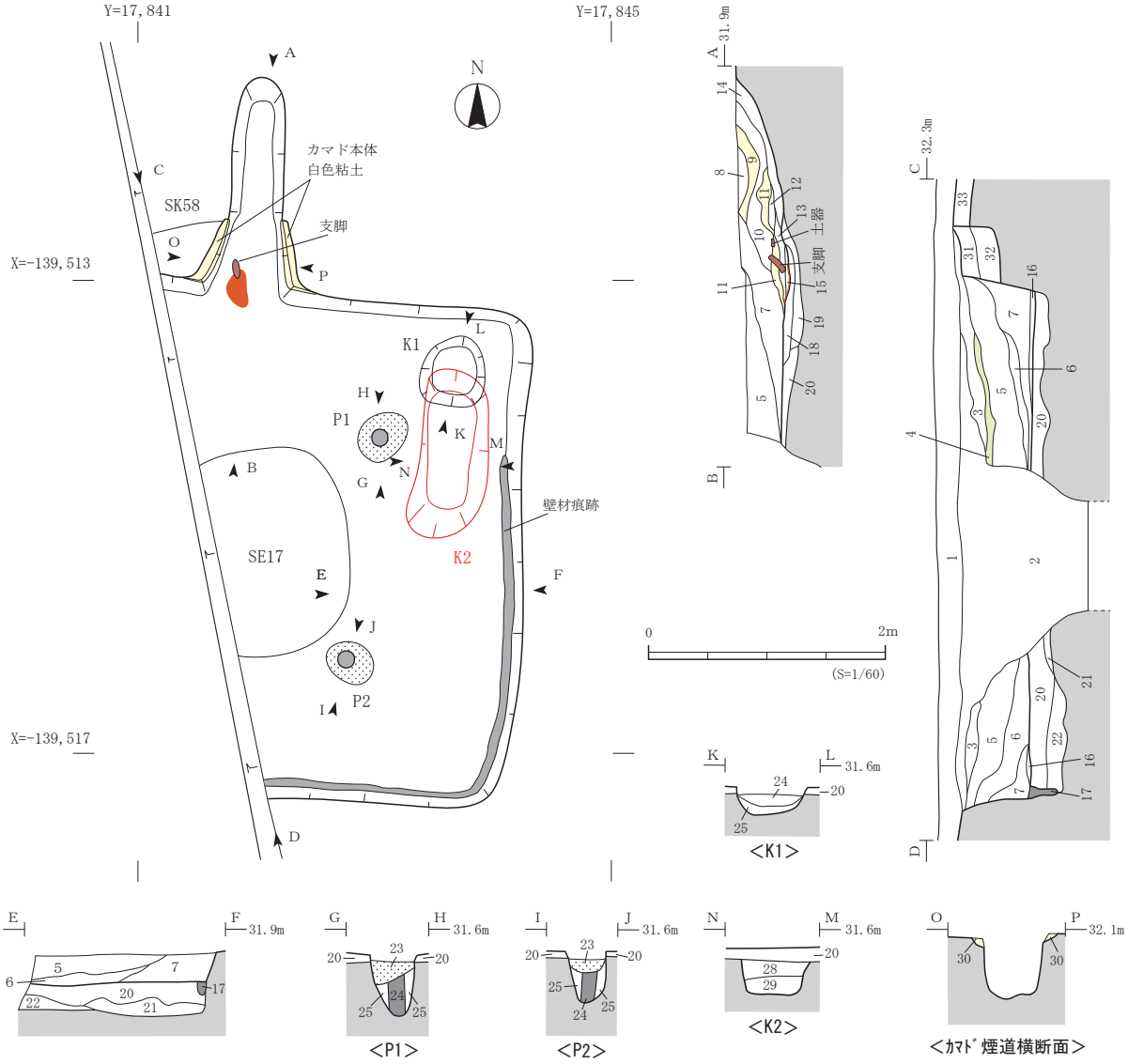
〔貯蔵穴〕カマド右脇にある（K1）。径 60㎝ほどの歪んだ楕円形で、深さは 24cm、断面形は不整な逆台形である。堆積土は２層に分けられる。

〔その他の施設〕K2 は K1 の南側にある床下土坑で、長径は 0.9 m、深さは 0.3 mほどである。堆積土は２層に分けられるが、いずれも人為的に埋め戻されている。



No.	種別	層位	器種・特徴	登録
1	土製品	カマド燃焼部	支脚　長:(14.7) 厚:5.9。指ナデ	129

図版 68　SI07 住居跡出土遺物



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト		基本第Ⅰ層
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト		SE17堆積土
3	黒色(2.5Y2/1)	シルト		大別1層。基本第Ⅱ層
4	灰白色(10YR8/1)	シルト	灰白色火山灰	大別2層。基本第Ⅲ層
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物を少し含む	大別3層
6	暗褐色(10YR3/3)	シルト		大別4層
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・地山ブロックを多く含む	
8	黒色(10YR2/1)	シルト		カマド堆積土
9	暗灰黄色(2.5Y5/2)	粘土質シルト		カマド天井崩落土
10	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山ブロックを含む	カマド堆積土
11	灰白色(2.5Y7/1)	粘土	下部は焼けが著しい	カマド天井崩落土
12	暗褐色(10YR3/3)	シルト		カマド堆積土
13	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土ブロック・炭化物を含む	カマド堆積土
14	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを含む	カマド堆積土
15	にぶい赤褐色(5YR4/4)	シルト	焼面	
16	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	大別5層。生活層
17	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを含む	壁材痕跡
18	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを含む	カマド掘方埋土
19	黄褐色(2.5Y5/4)	シルト	地山ブロックを含む	
20	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	貼床
21	オリーブ褐色(2.5Y4/6)	砂質シルト	地山ブロックを多く含む	掘方埋土
22	黄褐色(2.5Y5/6)	砂質シルト	地山ブロックを多く含む	
23	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山ブロックを含む	柱抜取穴
24	暗褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	柱痕跡
25	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを含む	柱穴掘方埋土
26	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを少し含む	K1堆積土
27	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロックを少し含む	
28	黒褐色(2.5Y3/2)	砂質シルト	地山ブロックを多く含む	K2(床下土坑)埋土
29	暗灰黄色(2.5Y4/2)	粘土質シルト	地山ブロックを少し含む	
30	にぶい黄褐色(2.5Y6/4)	粘土	カマド白色粘土	煙道天井土
31	黒褐色(10YR3/1)	シルト		SK58堆積土
32	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを含む	
33	暗褐色(10YR3/4)	シルト		基本第Ⅴ層

図版 69　SI07 住居跡（1）

全　景（南から）

完掘後（南東から）

東西断面（南から）

壁材痕断面（南から）

カマド（南東から）

カマド（南から）

P1 断面（東から）

K1 断面（東から）

図版 70　SI07 住居跡（２）

〔出土遺物〕カマド燃焼部から土製支脚（図版 68）、堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、掘方埋土から土師器甕が少量出土した。

【SI11 住居跡】（図版 72）

〔位置・検出面〕Ｃ区中央部北西端の第Ⅴ層で確認した。調査したのは住居全体からみて東壁周辺の一部である。

〔重複関係〕ST36 墓跡より古い。

〔規模・平面形〕東西 0.7 m以上、南北 3.9 mほどの隅丸方形である。

〔方向〕東辺で測るとＮ２°Ｅである。

〔堆積土〕堆積土は大別４層に分けられた。いずれも自然堆積である。また、２層は灰白色火山灰層で、その降下時には住居跡中央が窪んだ状態であったことがわかる。

〔壁〕壁は急に立ち上り、深さは最も残りのよい南壁周辺で 40cm ほどある。

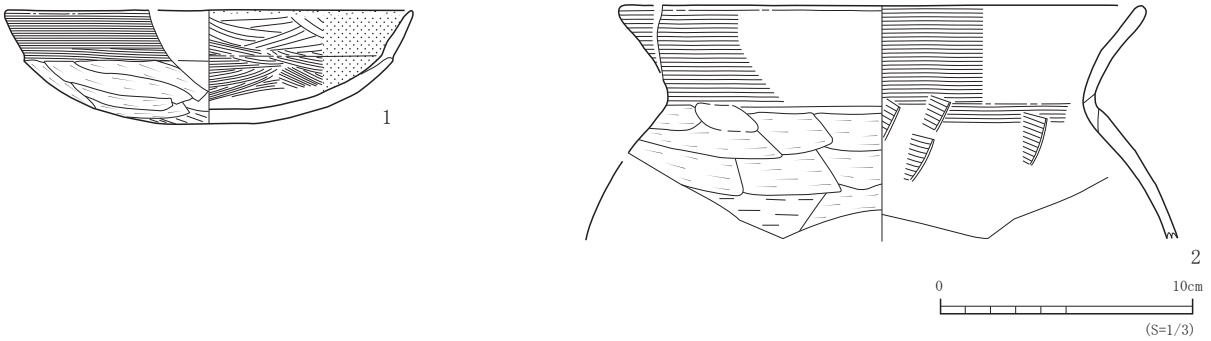
〔床面〕掘方埋土（黒褐色 or 褐色シルト主体、第Ⅴ・Ⅵ層ブロックを含む）を床とする。

〔カマド〕北壁周辺の４層に焼土や炭化物が多く含まれることから、カマドは北壁に設けられたと考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕周溝はカマド部分を除いて全周するとみられる。幅、深さとも 20㎝ほどで、人為的に埋め戻されていることから、壁材の抜取痕と考えられる。

〔貯蔵穴〕K1 は径 40㎝ほどの歪んだ円形で、深さは 20cm、断面形は皿形の土坑である。カマドが北壁に想定されることから、その右につくられた貯蔵穴とみられる。

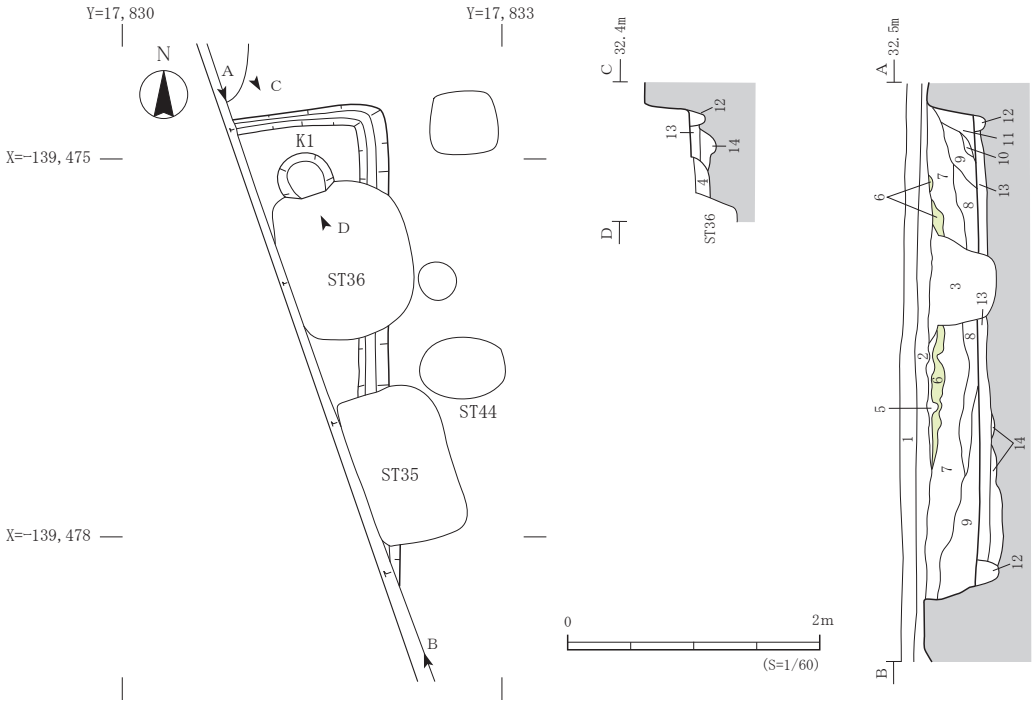
〔出土遺物〕３層から非ロクロ調整の土師器坏・甕・広口壺などが少量出土した（図版 71）。



（法量：cm）

No.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
1	土師器	坏	8層	(16.0)	―	(4.5)	1/4	外：ヨコナデ→ケズリ　内：ミガキ→黒色処理。有段丸底	130
2	土師器	広口壺	8層	(20.6)	―	―	1/8	外：ヨコナデ→ケズリ　内：ヨコナデ→ヘラナデ。関東系土師器	131

図版 71　SI11 住居跡出土遺物



№.	土色	土性	混入物など	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト		基本第Ⅰa層
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト		基本第Ⅰb層
3				ＳＴ36埋土
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多量に含む	K1堆積土
5	黒褐色(10YR2/2)	シルト		大別１層。基本第Ⅱ層
6	灰白色(10YR8/2)	シルト	灰白色火山灰	大別２層。基本第Ⅲ層
7	黒褐色(10YR2/3)	シルト		大別３層
8	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを少量含む	
9	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックをやや多く含む	大別４層
10	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭化物粒を多く含む	
11	褐色(7.5YR4/4)	シルト	炭化物粒を少し、焼土ブロックを多量に含む	
12	黄褐色(10YR5/6)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	周溝埋土
13	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	掘方埋土
14	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	

完　掘　写　真（北から）

完掘後写真（北から）

南北断面写真（東から）

K1 断面写真（東から）

図版 72　SI11 住居跡

【SI15 住居跡】（図版 73・74）

〔位置・検出面〕 C区中央部西端付近の第Ⅴ層で確認した。

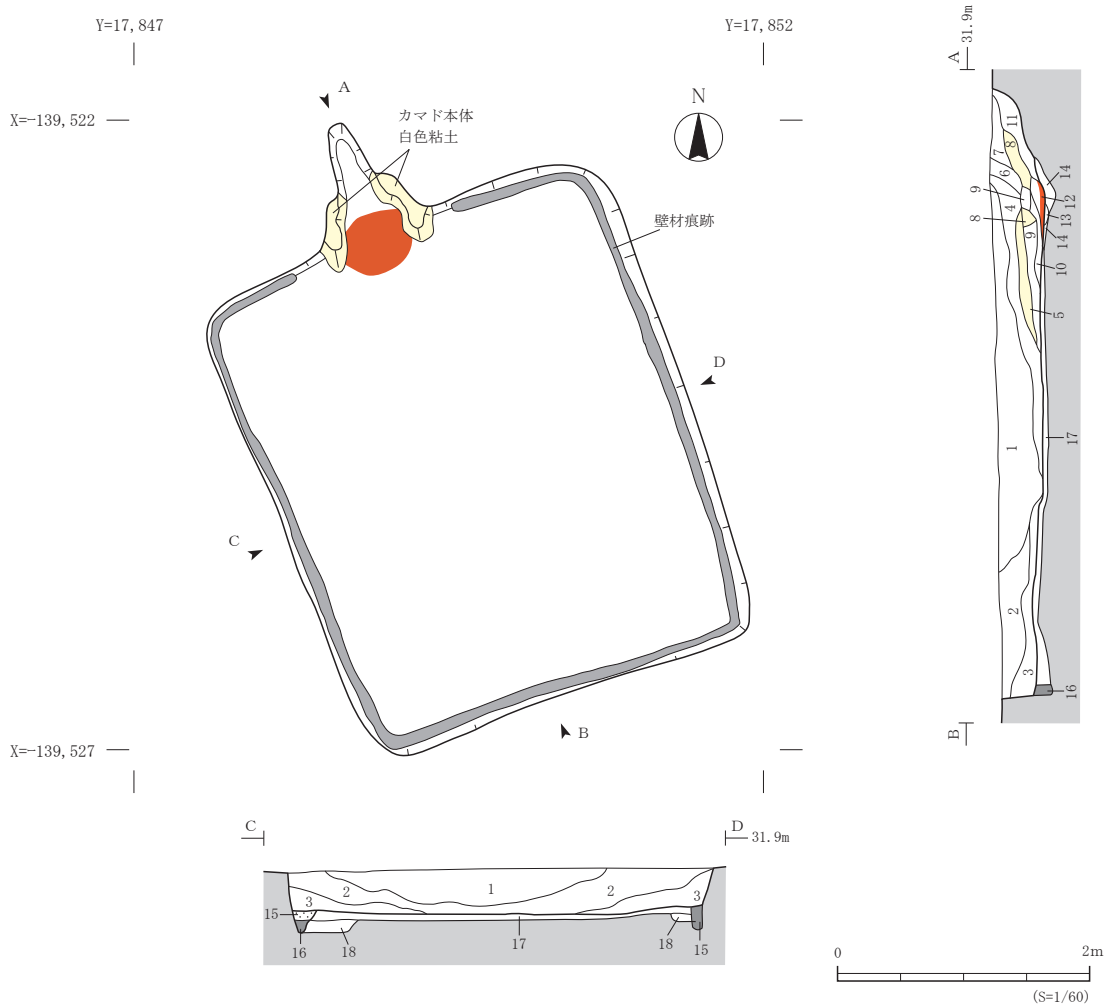
〔規模・平面形〕 東西 3.4 m、南北 4.0 mほどの長方形である。

〔方向〕 西辺で測るとN 23°Wである。

〔堆積土〕 カマド部分を除く堆積土は大別３層に分けられた。いずれも自然堆積である。

〔壁〕 壁は急に立ち上り、深さは最も残りのよい北壁部分で 40cm ある。

〔床面〕 掘方埋土（灰黄褐色粘土質シルト）を床とする。



№.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト		大別１層
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト		大別２層
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒を多く含む	大別３層
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト	白色粘土ブロックを含む	
5	灰白色(10YR7/1)	粘土	黒褐色シルトを少し含む	カマド天井・壁崩落土
6	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	シルト	地山ブロックを多く含む	カマド内堆積土
7	灰白色(10YR7/1)	粘土	焼土を含む	
8	灰白色(10YR7/1)	粘土	下面が焼けている	天井・壁崩落土
9	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土ブロックと炭化物を含む	カマド内堆積土
10	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土ブロックと炭化物を多く含む	
11	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山ブロックを含む	煙道内堆積土
12	赤褐色(5YR4/6)	シルト		カマド機能時の堆積土
13	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト		カマド掘方埋土
14	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト		
15	オリーブ褐色(2.5Y4/6)	シルト		壁材抜取穴
16	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山粒を含む	壁材痕跡
17	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト		貼床
18	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト		掘方埋土

図版 73　SI15 住居跡（１）

全　景（南から）

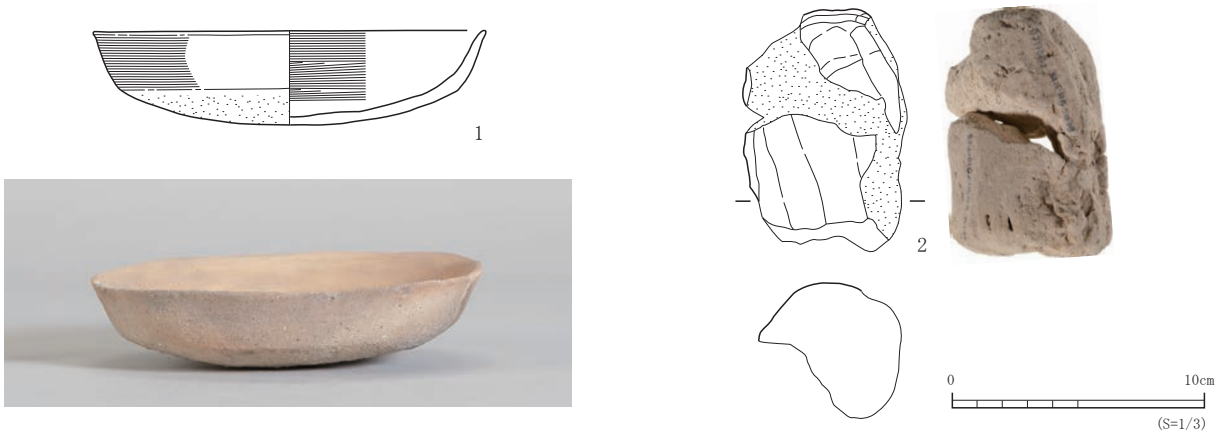
南北断面（南東から）

カマド断面（南東から）

カマド（南西から）

カマド完掘後（南から）

図版 74　SI15 住居跡（２）



（法量:cm）

No.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
1	土師器	坏	2層	(15.4)	―	(4.5)	1/2	外:ヨコナデ、底部マメツ　内:ナデ→ヨコナデ。盤状、関東系土師器	132
2	土製品	支脚	10層	―	―	(9.2)	一部	最大厚:5.7　残存高9.4　指ナデ成形	138

図版 75　SI15 住居跡出土遺物

〔カマド〕北壁中央部に付設された。カマドは北壁を 0.4 m掘り込んで住居外側に突出し、そこから住居内にかけて白色粘土で構築された。その奥に長さ 0.5 m、幅 0.3 mの短い煙道が取りつく。

〔周溝・壁材痕跡〕周溝はカマド部分を除いて全周する。このうち南辺と西辺で幅 10㎝、深さ 20㎝の壁材痕跡が、西・北・東の３辺では壁材抜取穴が認められた。掘方が認められないことから、壁材は住居掘方を埋め戻しながら立てられたと考えられる。

〔柱穴・貯蔵穴・その他の施設〕いずれも認められなかった。

〔出土遺物〕カマド手前の３層から棒状の土製支脚（２）、２層から非ロクロ調整の土師器坏（１）などが少量出土した（図版 75）。

【SI50 住居跡】（図版 76・77）

〔位置・検出面〕Ｃ区南東部の第Ⅴ層で確認した。

〔規模・平面形〕東西 4.1 m、南北は東壁が 4.0 m、西壁が 3.6 mの方形である。

〔方向〕西辺で測るとＮ 23°Ｗである。

〔堆積土〕カマド部分を除く堆積土は大別４層に分けられた。いずれも自然堆積である。また、１層は灰白色火山灰層で、その降下時には住居跡中央が窪んだ状態であったことがわかる。

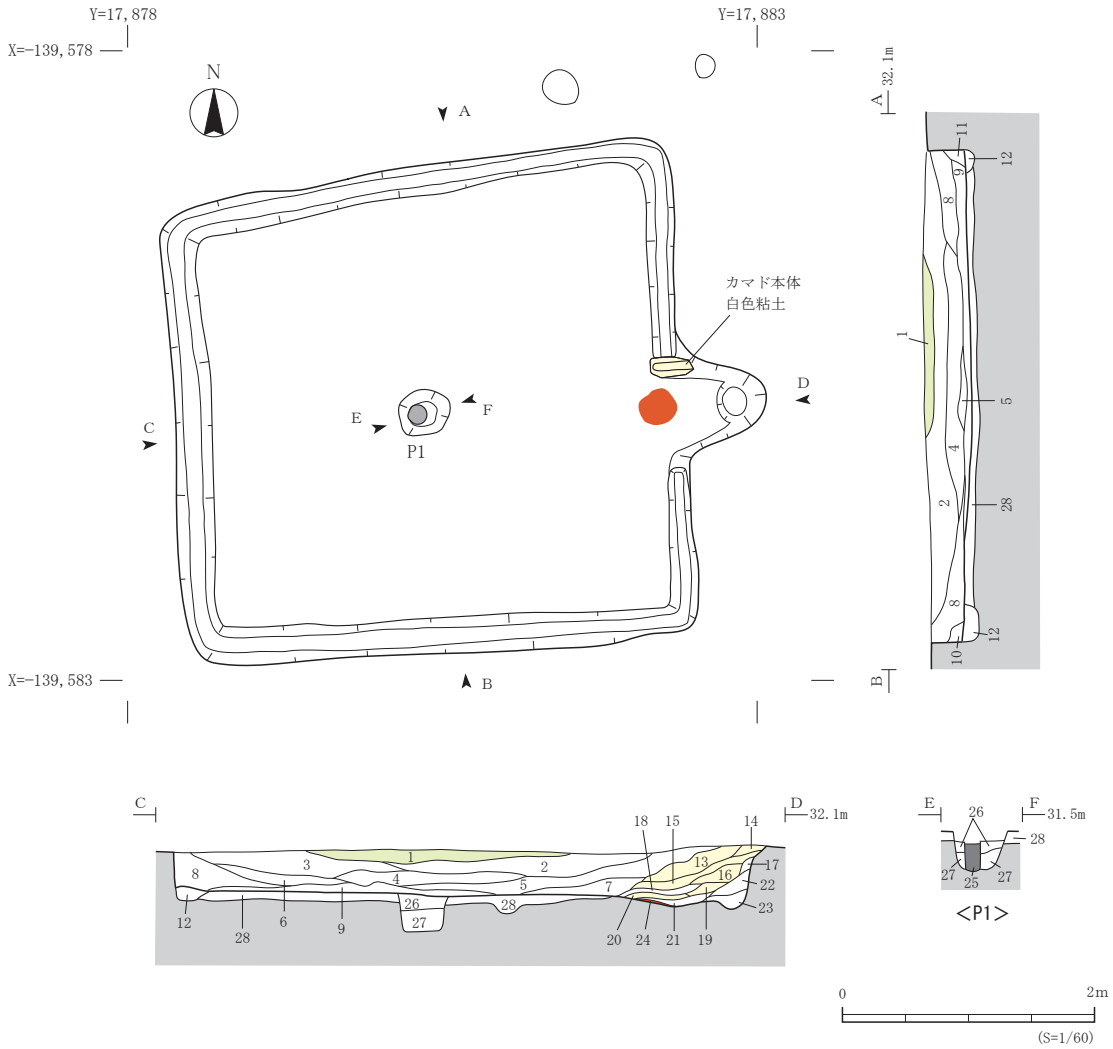
〔壁〕壁は急に立ち上り、深さは最も残りのよい北壁部分で 40cm ある。

〔床面〕掘方埋土（灰黄褐色粘土質シルト）を床とする。

〔柱穴〕住居中央で主柱穴を１個確認した（P1）。柱痕跡は径 15㎝の柱痕跡を確認した。掘方は径が 40cm ほどの円形で、埋土は第Ⅵ層ブロックを多く含む灰黄褐色シルトや黄褐色シルトである。

〔カマド〕北壁中央部に付設された。カマドは北壁を 0. 7 m掘り込んで住居外側に突出し、その手前から住居内にかけて白色粘土で構築され、煙道は突出部の奥壁付近がピット状に窪んでおり、そこから上方に延びる短煙道と考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕周溝はカマド部分を除いて全周する。幅 15 ～ 20㎝、深さ 15㎝ほどで、埋め戻されていることから壁材抜取穴と考えられる。



№.	土色	土性	混入物など	備考
1	灰白色(10YR8/2)	シルト	灰白色火山灰	大別１層。基本第Ⅲ層
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト		大別２層
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物を含む	
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
5	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼土粒・炭化物粒を含む	大別３層
6	黒色(10YR2/1)	シルト		
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土粒・炭化物粒を含む	
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土粒を含む	
9	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	大別４層
10	黄褐色(10YR4/4)	粘土	黒褐色土を含む	大別４層。壁崩落土
11	暗褐色(10YR3/3)	シルト		大別４層
12	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	周溝埋土
13	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト質粘土		カマド天井・側壁崩落土
14	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		カマド側壁崩落土
15	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	焼土・炭化物を含む	カマド天井・側壁崩落土
16	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト質粘土		
17	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土・炭化物を含む	
18	黒褐色(7.5YR2/2)	シルト	焼土・炭化物を多量に含む	
19	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト質粘土		カマド天井・側壁崩落土
20	灰褐色(7.5YR4/2)	シルト	焼土・炭化物を多量に含む	
21	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	焼土粒・炭化物粒を多く含む	カマド内堆積土
22	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック・炭化物を多く含む	
23	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		
24	赤褐色(5YR4/6)	シルト		カマド機能時の焼面
25	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを含む	P1柱痕跡
26	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む	P1埋土
27	黄褐色(10YR5/6)	粘土	地山ブロック主体。暗褐色シルトを含む	
28	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む。カマド前を除いてしまりなし	掘方埋土

図版 76　SI50 住居跡（１）

全　景（西から）

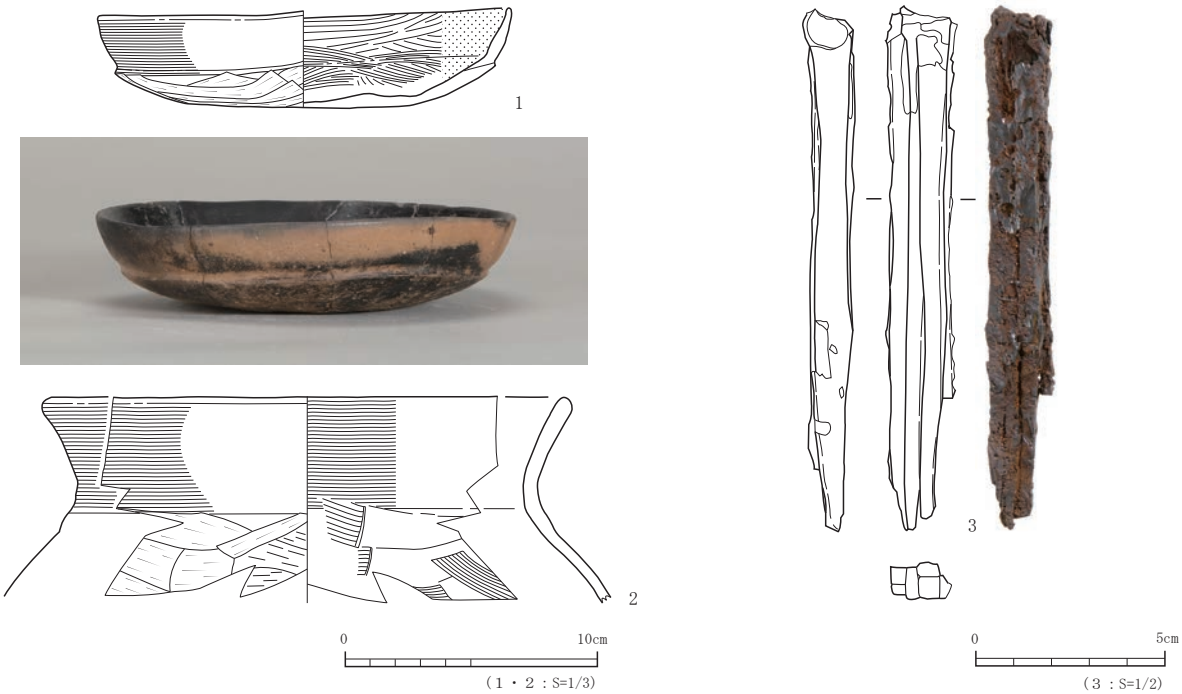
灰白色火山灰堆積状況（南から）

ベルト断面（南西から）

カマド断面（南西から）

カマド完掘（南西から）

図版 77　SI50 住居跡（２）



（法量：cm）

No.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
1	土師器	坏	床面(Po.1)	16.4	8.5	3.8	3/4	外：ヨコナデ→ケズリ　内：ミガキ→黒色処理。在地、有段	133
2	土師器	広口壺	b-2層	(10.2)	—	—	一部	外：ヨコナデ→ケズリ　内：ヨコナデ→ヘラナデ。関東系土師器	134
3	鉄製品	鏃	床面(Po.2)	—	—	—	—	長：13.8　幅：1.7　厚：1.0　鉄鏃6本が固着	170

図版 78　SI50 住居跡出土遺物

〔貯蔵穴・その他の施設〕いずれも認められなかった。

〔出土遺物〕南壁際の床面から土師器坏と鉄鏃７本が出土した（１・３）。ほかに、床面やカマド崩壊土から土師器甕、３層から土師器甕・広口壺（２）、２層から土師器坏・甕・広口壺、掘方埋土から土師器甕が出土した（図版 78）。土師器はいずれも非ロクロ調整である。

【SI51 住居跡】（図版 79 ～ 82）

〔位置・検出面〕Ｃ区中央部東端の第Ⅴ層で確認した火災住居で、西半部を調査した。

〔重複関係〕SE71・76 井戸跡より古い。

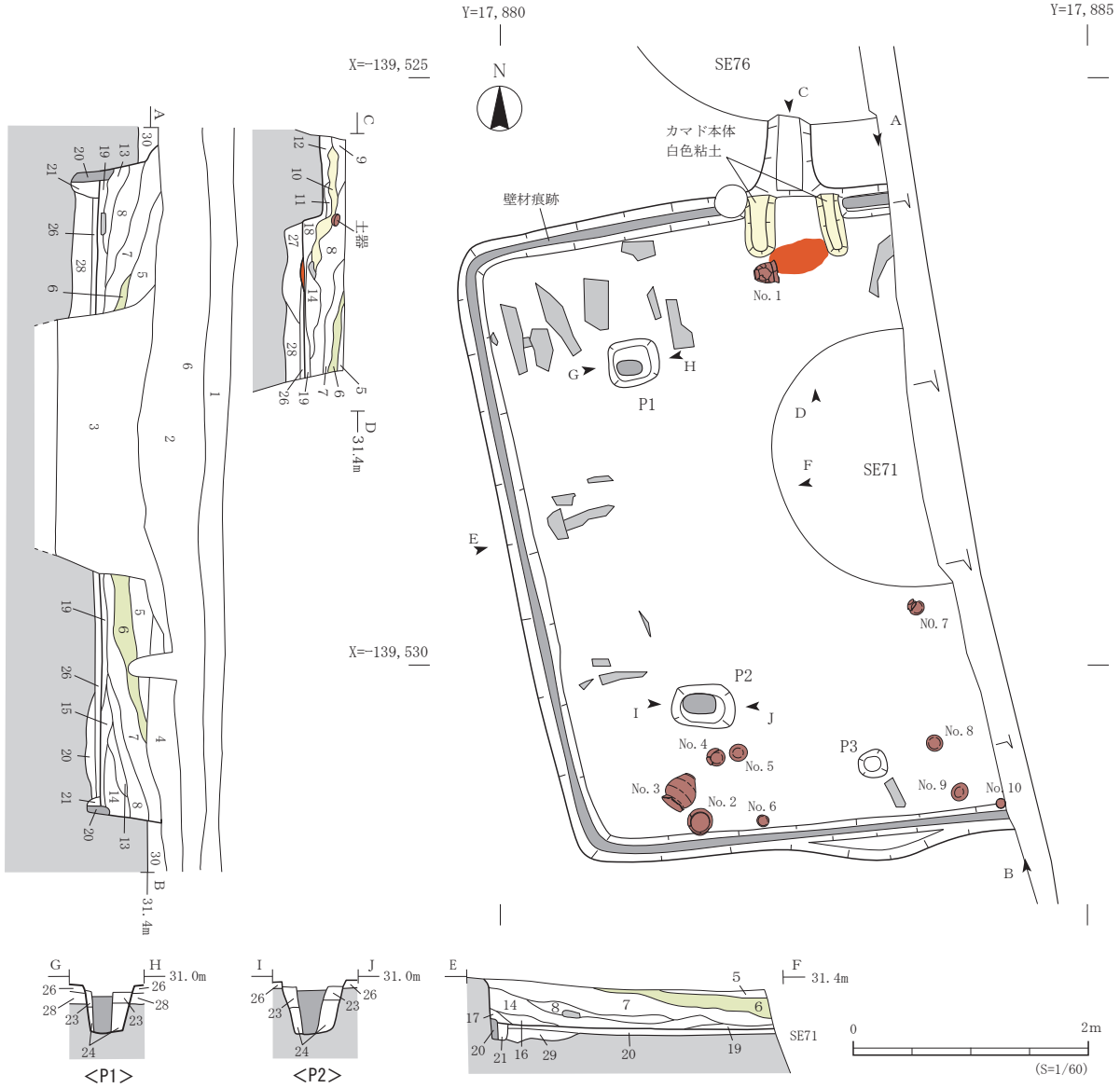
〔規模・平面形〕東西 3.7 m以上、南北 5.6 mの方形で、カマドや入口ピットの位置からみて東西は 5.8 mほどとみられる。

〔方向〕西辺で測るとＮ 11°Ｗである。

〔堆積土〕堆積土は大別して５層に分けられた。３層は人為的な埋土、４層は火災に伴う層（火災層）、５層は生活層である。本住居は火災後埋め戻され（３層）、その後窪んだ中央部には流入土（２層）の上に灰白色火山灰が堆積した（１層）。

〔壁〕壁は急に立ち上り、壁高は最も残りのよい西辺中央で 52cm ある。

〔床面と天井構築材の出土状況〕掘方埋土（第Ⅴ・Ⅵ層ブロック主体、黒褐色シルトを含む）を床とする。その上は生活層（５層）をはさんで、全体を火災に伴う焼土・炭化物層（４層）が覆う。４層中からは炭化材と焼土ブロックが多量に出土した（図版 82）。前者は主柱を結ぶ線に対して放射状に延びることから垂木、後者は屋根葺土と考えられる。

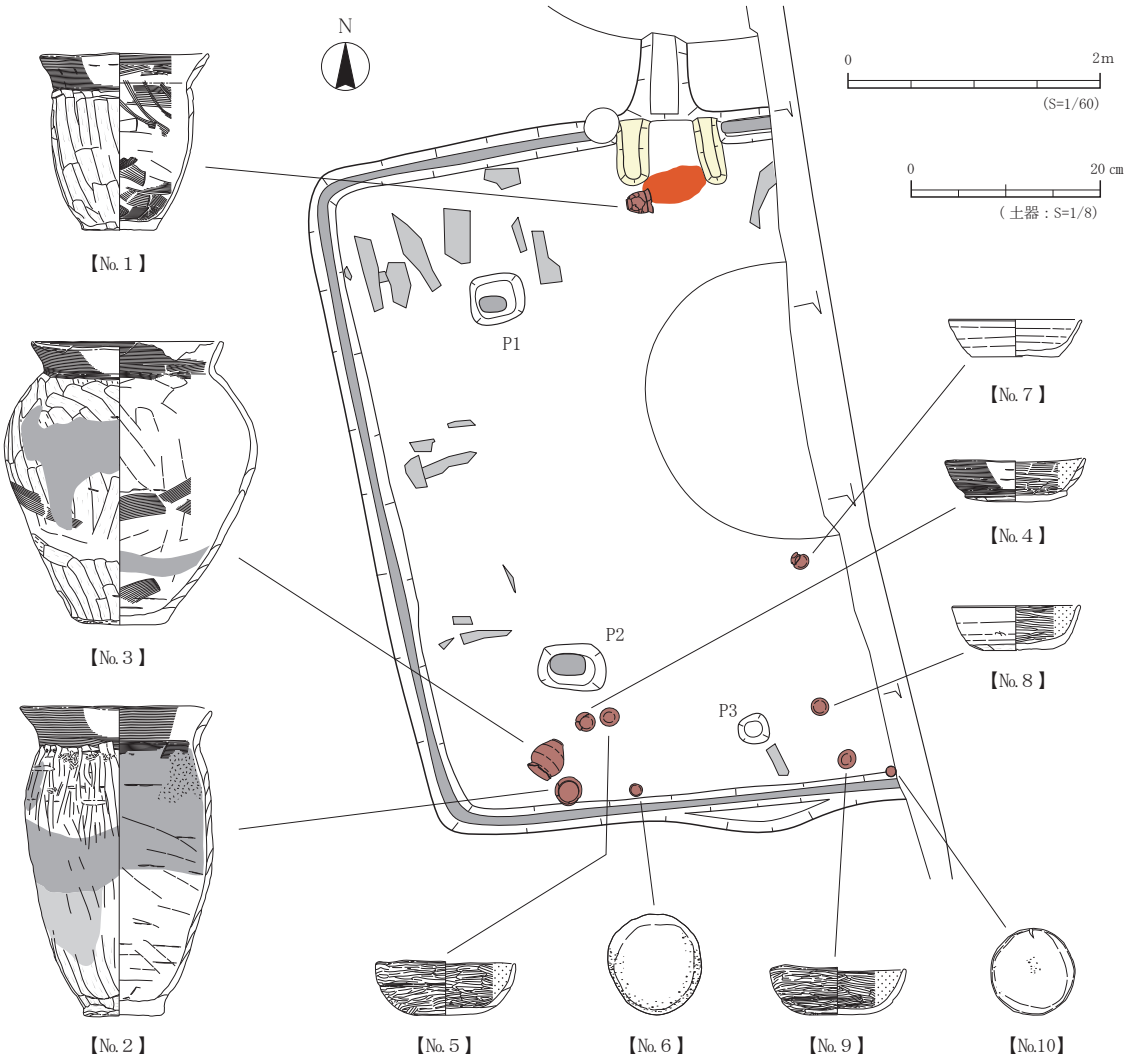


No.	土色	土性	混入物など	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト		基本第Ⅰa層
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト		基本第Ⅰb層
3				SE71埋土
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト		近世の旧表土？基本第Ⅱ層
5	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		大別1層。遺物1層。基本第Ⅱ層
6	にぶい黄橙色(10YR7/2)	シルト	灰白色火山灰	大別2層。遺物2層。基本第Ⅲ層
7	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼土や炭化物を多く含む	大別3層。遺物3層。火災後の埋土
8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土・炭化物・地山小ブロックを多く含む	大別3層。遺物4層。火災後の埋土
9	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土・炭化物を含む	大別3層。火災後の埋土
10			白色粘土ブロック＋黄褐色粘土ブロック	大別4層。本体煙道崩壊土
11	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土・炭化物を含む	煙道堆積土
12	黒褐色(10YR2/2)	シルト	焼土・炭化物を含む	
13	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土	焼土ブロック(土葺き屋根材)主体土	大別4層。遺物5層。火災層
14	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックや焼土ブロック(土葺き屋根材)、炭化物多く含む	
15	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化材を多く含む	
16	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化材を多く含む	大別4層。遺物5層。初期火災層
17	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト		
18	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山小ブロックや炭化物を含む	大別5層。カマド堆積土
19	黒褐色(10YR2/2)	シルト		大別5層。遺物5層。生活層

No.	土色	土性	混入物など	備考
20	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト	黒褐色シルトを少し含む	壁材痕
21	黒褐色(10YR2/3)	シルト		壁材掘方埋土
22	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	焼土や炭化物を多く含む	P1・2柱痕跡
23	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	P1・2掘方埋土
24	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロックを多く含む	
25	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	

No.	土色	土性	混入物など	備考
26	黄褐色(10YR5/6)	シルト質粘土	黒褐色土と白色粘土ブロックを多く含む	貼床
27	黄褐色(10YR5/6)	シルト質粘土	黒褐色シルトブロックを多く含む	カマド掘方埋土
28	黄褐色(10YR5/6)	シルト質粘土	黒褐色シルトブロックを含む	掘方埋土
29	黄褐色(10YR5/6)	シルト質粘土		
30	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		基本第Ⅴ層

図版79　SI51住居跡（1）



図版80　SI51住居跡（2）　－遺物出土状況－

〔柱穴〕主柱穴は西側で２個確認した（P1・2）ことから、対角線上に４個配置されたと考えられる。柱痕跡の径は 15 ～ 20㎝、掘方は一辺が 35 ～ 55cm の方形で、埋土は第Ⅴ層と第Ⅵ層のブロックを主体とする。

〔カマド〕北壁にあり、主柱穴や後述する入口ピットの位置からみて、中央に付設されたと考えられる。本体は住居内にあり、白色粘土でつくられた。規模は幅が焚口部で 0.8 m、住居壁際で 0.7 m、奥行きが 0.6 mほどである。焚口付近の壁内側や底面、本体手前の床面は強く焼けており、燃焼部と煙道部の間には 25㎝の段差がある。煙道は幅が 0.4 m、長さは 0.6 m以上あり、底面は水平である。また、燃焼部奥壁に近い本体崩壊土の上から、口縁部を上にした坏形のミニチュア土器が出土した（図版 82）。本住居は火災に遭っていることから、火災後に行われた廃絶祭祀に伴うものと考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕周溝はカマド部分を除いて全周するとみられる。壁材は幅が 10㎝ほどで、床から２～６㎝立ち上がる。掘方は幅 15 ～ 20㎝、深さは 10 ～ 25㎝で、南壁に較べて北壁部の規模が大きい。

〔貯蔵穴〕確認できなかった。

〔その他の施設〕カマド対面の南壁付近で柱穴を１個確認した（P3）。P3 は南壁から 30㎝離れており、

全　景（西から）

全　景（南西から）

図版 81　SI51 住居跡（3）

全　景（南から）

全　景（北西から）

東西ベルト断面（北西から）

カマド（南西から）

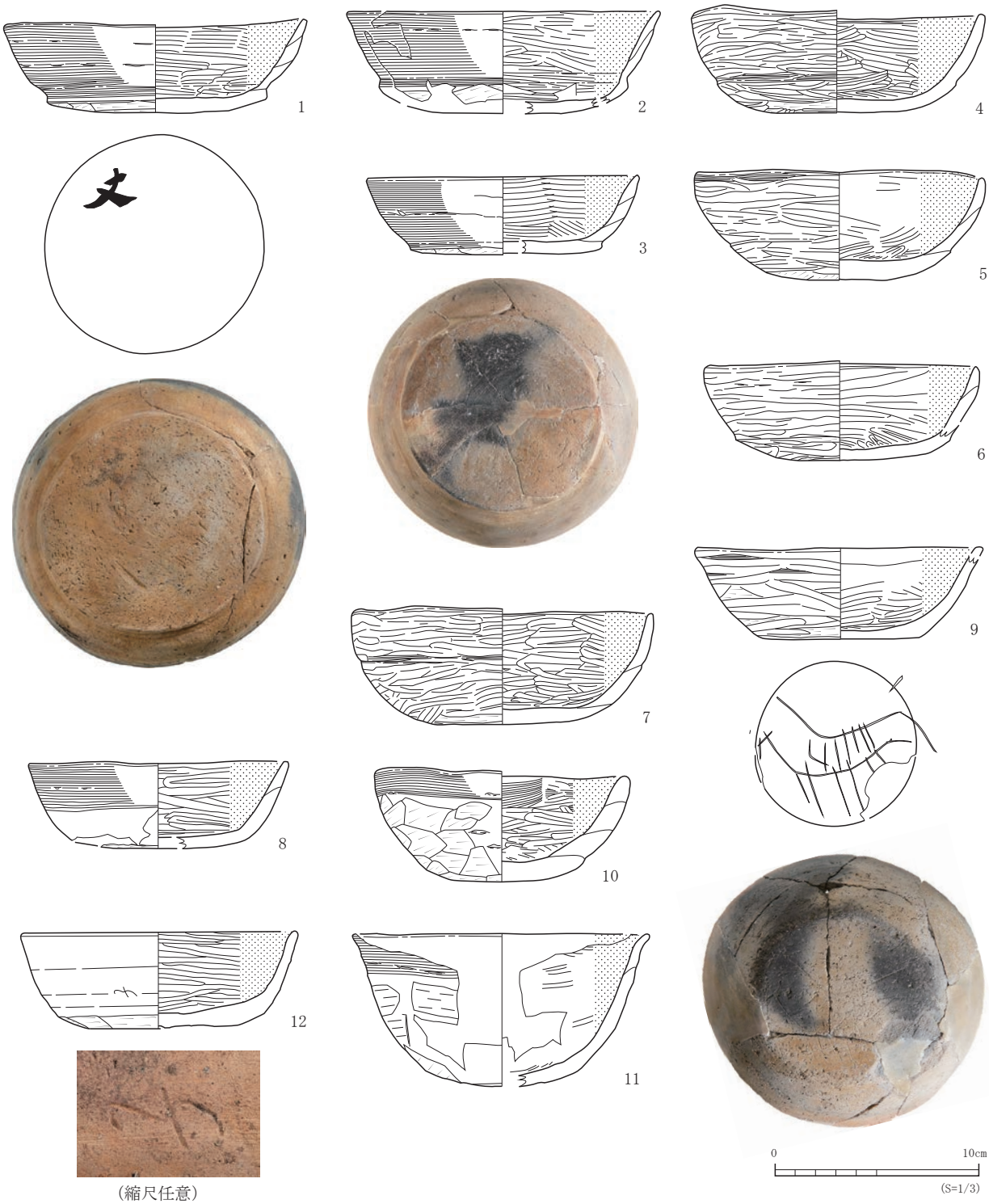
カマド 10 層上面土器出土状況（南西から）

P1 断面（南から）

南壁付近の床面遺物出土状況（北西から）

床面№4、5 出土状況（南東から）　手前が№5

図版 82　SI51 住居跡（4）



（縮尺任意）

（法量：cm）

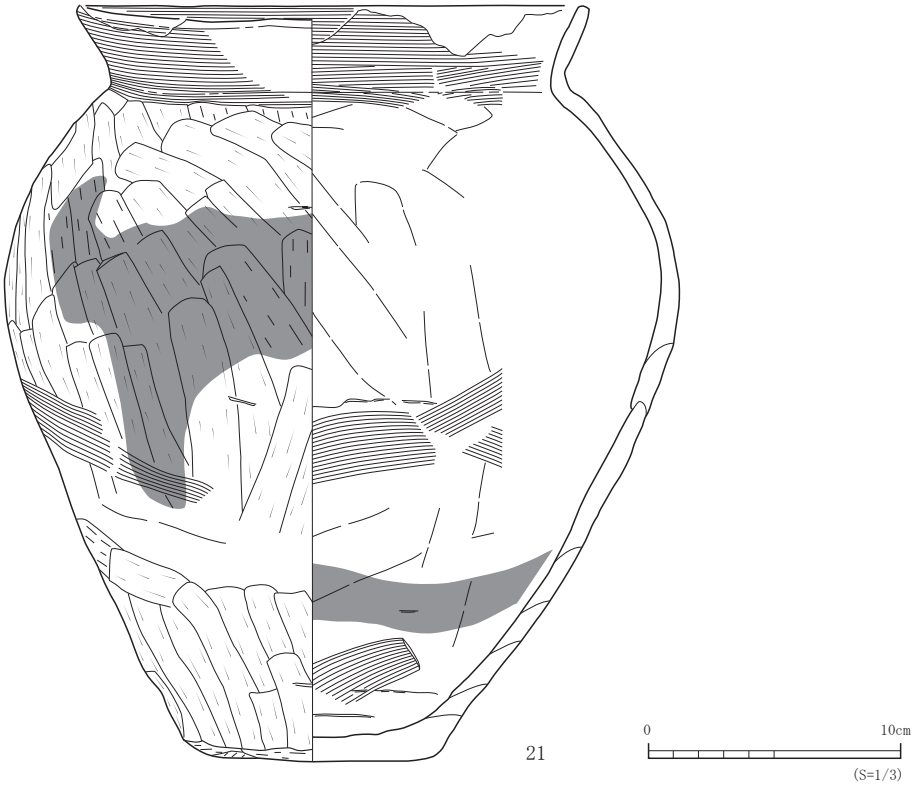
№	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
1	土師器	坏	床面(Po.4)	14.8	10.6	4.5	完形	外：ヨコナデ・ケズリ→墨書「丈」　内：ミガキ→黒色処理。有段平底	204
2	土師器	坏	c-5層	(15.2)	—	(5.0)	1/3	外：ヨコナデ→ケズリ→静止糸切り　内：ミガキ→黒色処理。有段平底	217
3	土師器	坏	c-5層	13.3	(9.3)	3.8	1/2	外：ヨコナデ→ケズリ→静止糸切り　内：ミガキ→黒色処理。有段平底	215
4	土師器	坏	床面(Po.9)	14.4	6.0	5.4	完形	外：ケズリ・ナデ→ミガキ　内：ミガキ→黒色処理。有段平底。再酸化	206
5	土師器	坏	c-4層 床	(13.8)	6.0	(5.4)	1/3	外：ケズリ・ナデ→ミガキ　内：ミガキ→黒色処理。有段平底。再酸化	226
6	土師器	坏	c-5層一括	(13.4)	6.0	4.9	1/3	外：ケズリ→ミガキ　内：ミガキ→黒色処理 有段。平底状。再酸化	214
7	土師器	坏	床面(Po.5)	14.7	6.0	5.8	ほぼ完形	外：ナデ・ケズリ→ミガキ　内：ミガキ→黒色処理。体部に弱い段。平底	205
8	土師器	坏	c-床面	(12.5)	(8.6)	(4.3)	1/3	外：ナデ→ヨコナデ・底部ケズリ　内：ミガキ→黒色処理。無段平底	213
9	土師器	坏	c-床面	(13.8)	8.0	4.5	2/3	外：ナデ・ケズリ→ミガキ→ヘラ書き　内：ミガキ→黒色処理。平底。底部ヘラ描き	227
10	土師器	ミニチュア	10層上面	12.3	5.0	5.6	ほぼ完形	鉢形。　外：ヨコナデ・ケズリ　内：ナデ→ミガキ→黒色処理。底部木葉痕。カマド廃絶祭祀	234
11	土師器	埦	カマド前	(14.4)	(7.0)	7.4	1/4	外：ヨコナデ・ケズリ　内：ミガキ→黒色処理。底部木葉痕。再酸化	232
12	土師器	坏	床(Po.8)	13.6	(7.1)	4.7	完形	外：ロクロナデ→ヘラ切→ケズリ→刻書「子」　内：ミガキ→黒色処理	207

図版 83　SI51 住居跡出土遺物（1）

(法量:cm)

№.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
13	須恵器	坏	床	14.0	9.2	(3.9)	ほぼ完形	外:ロクロナデ→ヘラ切→墨書「老」 内:ロクロナデ。皿形	208
14	須恵器	高台坏	c-5層	—	(10.2)	—	1/4	外:ヘラ切→高台接合→ナデ 内:ロクロナデ	216
15	土師器	埦	b-3層	(15.0)	(7.2)	6.8	1/2	外:ケズリ→ヨコナデ→ミガキ 内:ミガキ→黒色処理。再酸化	229
16	土師器	埦	b-4層	(14.4)	(9.0)	—	1/4	外:ケズリ 内:ミガキ→黒色処理。再酸化	225
17	土師器	埦	c-4層上面	(17.1)	(9.8)	7.5	2/5	外:ロクロナデ→ケズリ・ミガキ 内:ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	228
18	土師器	中形甕	床面(Po.1)	17.6	8.0	18.7	ほぼ完形	外:ハケメ→ヨコナデ→ケズリ 内:ナデ・ヘラナデ→ハケメ→ヨコナデ。底部木葉痕。頸部に段	201
19	土師器	長胴甕	a-カマド前	—	6.8	—	1/6	外:ケズリ 内:ハケメ	233
20	土師器	長胴甕	床(Po.3)	20.0	8.6	32.8	ほぼ完形	外:ケズリ・ヨコナデ→ナデ→ミガキ 内:ヨコナデ→ヘラナデ。木葉痕。カマド装着痕。スス明瞭	202

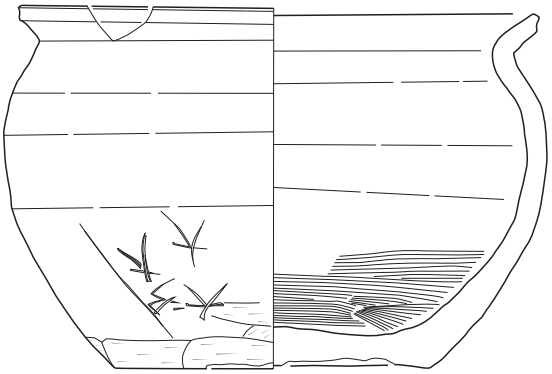
図版 84　SI51 住居跡出土遺物（2）



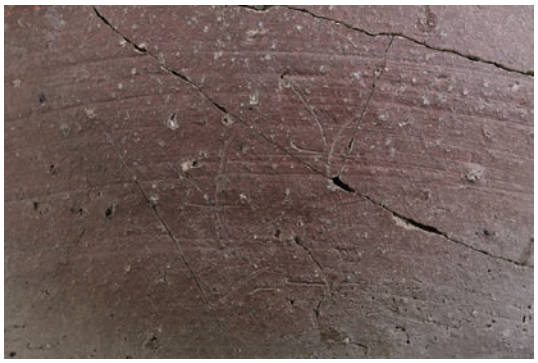
(法量:cm)

No.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
21	土師器	広口壺	床面(Po.2)	20.0	10.2	30.0	ほぼ完形	外:ヨコナデ→ケズリ→一部ナデ　内:ナデ・ヘラナデ→ヨコナデ。底部ケズリ	203

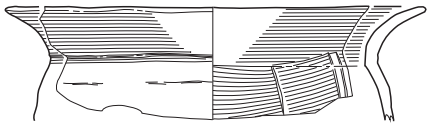
図版 85　SI51 住居跡出土遺物（3）



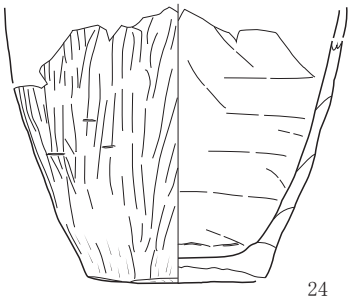
22



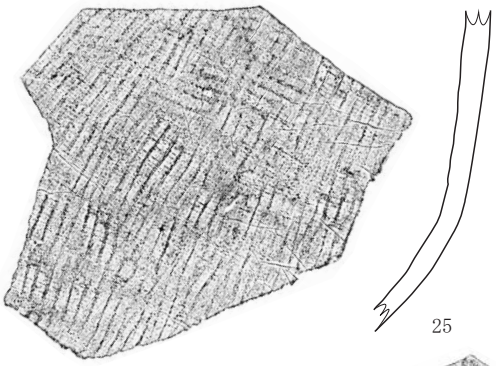
（縮尺任意）



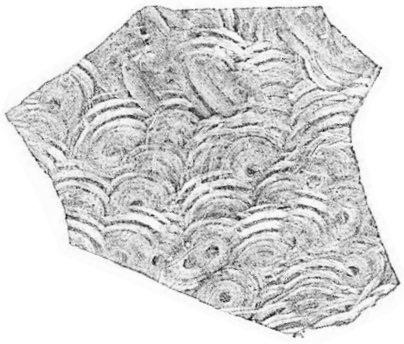
23

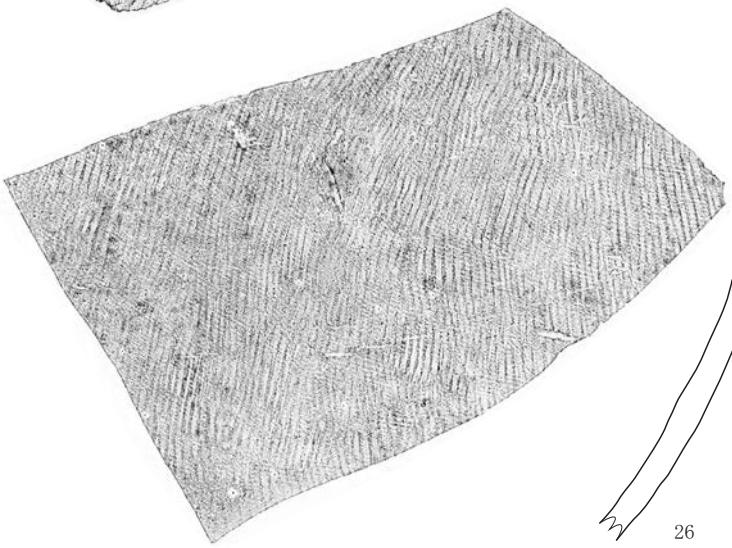


24



25





26

0　10cm

(S=1/3)

（法量：cm）

No.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
22	須恵器	鉢	c-床面	20.4	12.5	14.3	ほぼ完形	外：ロクロナデ→手持ケズリ→ヘラ書き「大大大□」(逆位)　内：ロクロナデ→ナデ	211
23	土師器	小形甕	a-5層	(16.6)	—	—	1/8	外：ヨコナデ・ナデ　内：ヘラナデ→ヨコナデ。頸部に段、沈線	221
24	土師器	小形甕	c-5層	—	(7.0)	—	1/4	外：ケズリ→ミガキ　内：ナデ	218
25	須恵器	甕	a-5層	—	—	—	一部	外：平行タタキ　内：同心円アテ具	222
26	須恵器	甕	a-5層	—	—	—	一部	外：平行タタキ　内：無文アテ具・同心円状アテ具・ナデ	223

図版 86　SI51 住居跡出土遺物（4）

（法量：cm）

No.	種別	器種	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	登録
27	石製品	磨石	床(Po.6)	10.5	9.7	6.5	完形	重量：978 g	209
28	石製品	円盤	床(Po.10)	9.1	8.9	2.5	完形	重量：195.9 g	210
29	石製品	砥石	a-4層	5.4	3.7	2.1	完形	重量：49.7 g	224
30	石製品	磨石	c-5層	6.2	5.2	3.9	完形	重量：149.1 g	219
31	石製品	磨石	c-5層	6.0	5.3	3.2	完形	重量：23.2 g	220

図版 87　SI51 住居跡出土遺物（５）

図版 88　SI51 住居跡出土遺物（6）

（５層出土炭化材　縮尺任意）

図版 89　SI51 住居跡出土遺物（７）

柱痕跡は径８cm、掘方は径 25cmほどの円形である。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。カマド反対側の壁近くあるこから、入口の梯子を固定した穴（入口ピット）と考えられる。

〔出土遺物〕床面から土師器坏・広口壺・中形甕・長胴甕、須恵器鉢、砥石・磨石・円盤状石製品、カマド内から土師器坏・甕、カマド前から土師器坏・椀・小形甕、４層から土師器坏・小形甕・甕、須恵器坏・高台坏・甕、磨石、３層から土師器坏・椀・甕、１層から土師器甕、掘方埋土から土師器甕と刀子などが出土した（図版 83 ～ 89）。

床面からの図示遺物の出土状況は、カマド側の北半部は土師器椀（11）と中形甕（18）のみで、他は南半に偏っており、特に壁際からは８点出土している。こうした状況は、同時期の集落跡で不慮の火災で焼失した原田遺跡 SI30 住居跡（宮城県教委 2009a）が、カマド周辺から多量の土器が出土したあり方と異なることから、北半部の道具類は動かされたか持ち出されたと考えられる。

土師器食器は古墳時代以来の伝統的な有段坏に加え、無段坏と新たに登場したロクロ土師器（12・17）が共伴する。このうち、有段坏は底部の丸味がとれて平底状になり、段は下に降りるか、ミガキで消されて痕跡的になるものが多い。これに対して、須恵器食器の数は著しく少ない。また、文字資料として墨書は「丈」が土師器坏底部（１）、「老」が須恵器坏底部（13）、刻書は「子」（横位）が土師器坏体部（12）、「大大大□」（倒位）が須恵器鉢胴下部（22）に認められる。さらに、底部にヘラで鞍などを装着された馬が描かれた土師器坏（９）が出土した。

住居№	平面形	規模（東西×南北、m）	方向/計測辺	火災	床	主柱 数	主柱 柱痕(径or一辺cm)	主柱 抜取穴	入口Pit	周溝（壁材痕）	カマド 位置	カマド 燃焼部	カマド 本体	カマド 煙道	貯蔵穴	主な新旧関係	その他	灰白色火山灰	主な出土遺物	時期	図版№ 平面	図版№ 断面
SI01	方形	5.7×5.6	N2°E/東	×	掘方埋土	4	?	○	○	カマド以外全周（○）	北中央	突出	白色粘土＋土師甕	短煙道	1(カマド右)		南東隅付近にPit	○	床)土師器鉢・長甕・小甕、床直)土師器坏・広壺・長甕、土錘、周溝抜取穴)土師器長甕・小甕、支脚、カマド)土師器ミニチュア・坏・長甕、貯穴)土師器小甕、堆)土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・壺	Ⅱ	47	47・49
SI02	隅丸方形	3.6×3.7	N1°W/東	×	掘方埋土	1？	?	○	×	カマドと南東隅以外全周（×）	北中央	突出	黄褐色土	長煙道	×		中央に土坑2。廃絶時にカマド祭祀	○	カマド)土師器坏・長甕、堆)土師器坏・甕	Ⅲ	54	54
SI03	方形	6.4×6.3	N2°W/西	×	掘埋＋地山	4	丸(14～20)	×	○	カマド以外全周（○）	北中央	突出	白色粘土＋土師甕	短煙道	1(カマド右)		北西隅に土坑3？	×	床)土師器坏・長甕・砥石、カマド)土師器坏・長甕・小甕、支脚、堆)土師器坏・甕	Ⅱ	57	57
SI06	隅丸方形	4.7×4.9	N2°E/西	×	掘方埋土	4	角(20×15)	○	○	カマド以外全周（○）	北中央	突出	白色粘土	短煙道	2(カマド右)	SK40→SI6	火災住居。中央付近に土坑2	○	床)土師器坏・甕、須恵器蓋、砥石、カマド)支脚・土師器坏・長甕、K２)土師器長甕、K３)土師器甕、堆)土師器坏・小型壺・長甕、須恵器坏	Ⅱ	62	62・64
SI07	隅丸方形	3.2～×4.2	N4°E/東	×	掘方埋土	4？	○(14)	○	?	南半部（○）	北中央？	突出	白色粘土	長煙道	2(カマド右)	SK58→SI7→SE17	東半を調査	○	カマド)支脚、堆)土師器坏・球甕・甕、須恵器坏	Ⅱ	69	69
SI11	隅丸方形？	1.2～×3.8～	N2°E/東	×	掘埋＋地山	?	?	?	?	カマド以外全周？	北中央？	?	?	?	2?(カマド右)	SI11→ST35・36	東辺付近を調査	○	堆)土師器坏・広壺・甕	Ⅱ	72	72
SI15	隅丸長方形	3.4×4.1	N23°W/西	×	掘方埋土	×	×	×	×	カマド以外全周（×）	北中央	突出	白色粘土	短煙道	×			×	カマド)支脚、堆)土師器坏・甕	Ⅱ	73	73
SI50	隅丸方形	3.8～4.0×3.7	N4°W/東	×	掘方埋土	1	丸(10)	○	×	カマド以外全周（×）	東中央	突出	白色粘土	短煙道	1?(カマド右)			○	床)土師器坏・甕、鉄器、カマド)土師器甕、堆)土師器坏・広壺・甕	Ⅱ	76	76
SI51	方形	3.7～×5.3	N12°W/西	○	貼床+掘埋	4？	角(27×14)	×	○	カマド以外全周（○）	北中央？	住居内	白色粘土	長煙道	?	SI51→SE71・76	火災住居。火災後にカマド祭祀	○	床)土師器坏・小甕・広壺・長甕、須恵器鉢、石製品、堆)土師器坏・小甕・甕、須恵器坏・高台坏・椀・甕、石製品	Ⅲ	79	79

※広壺は広口壺、小甕は小形甕、中甕は中形甕、長甕は長胴甕の略である。

表７　竪穴住居跡属性表

（2）掘立柱建物跡

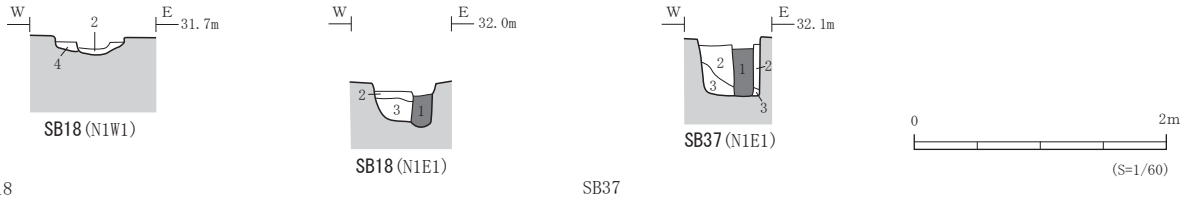
【SB37 建物跡】（図版 32・90）

Ｃ区中央部西端の SI07 住居跡南側で確認した南北２間の掘立柱建物跡である。後述する江戸時代以降の掘立柱建物とは、柱穴規模や埋土が異なり、平面形が方形となる点から古代の建物跡と判断した。

柱穴は３個検出し、２箇所で径 16㎝の柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認した。建物規模は東妻が総長 3.6 m、柱間寸法は北から 1.7・1.9 mとみられ、方向はＮ６°Ｗである。柱穴は一辺 0.4 ～ 0.6 mの方形で、深さ 0.5 m、埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトや黄褐色シルトをである。遺物は出土していない。

５．江戸時代以降

江戸時代以降のものとしては掘立柱建物跡７棟（建替えを含む）、井戸跡７基、墓 17 基を検出した。掘立柱建物跡や井戸跡の多くは、Ｃ区中央から東側にするものが多く、墓はそれらから離れたＣ区北西隅のＤ区との境に集中していた。こうした例は、自動車道調査区でも確認されている。建物・小屋（雑舎）・井戸で構成された農家が点在し、周りの遺構がない部分は畑などの耕作域となり、山際に屋敷墓がつくられた姿が想定できる。



SB18

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色（10YR3/1）	シルト		SB18B柱痕跡
2	黒褐色（10YR3/1）	シルト		SB18B柱抜取穴
3	黒褐色（10YR3/1）	シルト	地山ブロックを多く含む	SB18B柱穴埋土
4	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山ブロックを多く含む	

SB37

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色（10YR2/1）	シルト		柱痕跡
2	黒褐色（10YR3/2）	シルト		柱穴埋土
3	黄褐色（2.5Y5/6）	シルト	地山ブロックを含む	

SB18（S1W1）断面写真（南から）

SB37（N1E1）断面写真（南から）

図版 90　SB18・37 建物跡

（1）掘立柱建物跡

【SB08 建物跡】（図版 31・91）

Ｃ区北東部の SI03 住居跡北側で確認した２×２間の総柱掘立柱建物跡である。柱穴は８個検出し、６箇所で径 15㎝前後の柱痕跡、２箇所で柱抜取穴を確認した。建物規模は東西が北側柱列で総長 4.0 m、柱間寸法は西から 2.1・1.9 mで、南北が西側柱列で総長 4.0 m、柱間寸法は北から 1.7・2.3 m、方向は西側柱列で測るとＮ６°Ｅである。柱穴は径 0.3 ～ 0.4 mの歪んだ円形で、深さ 0.3 ～ 0.4 m、埋土は黒褐色粘土質シルトである。

【SB18A・B 建物跡】（図版 35・90）

Ｃ区中央部の SI51 住居跡南側で確認した２×２間の東西棟掘立柱建物跡である。１度建替えられている（Ａ→Ｂ）。柱穴は８個で構成されるが、確認できたのはＢ建物跡が６個、Ａ建物跡は４個である。Ｂ建物跡は１箇所で径 15㎝前後の柱痕跡、２箇所で柱抜取穴を確認した。建物規模は桁行が北側柱列で総長 4.5 m、梁行は西妻で総長 3.9 m、柱間寸法は北から 1.9・2.0 mとみられ、方向は西側柱列で測るとＮ 11°Ｗである。柱穴は径 0.4 ～ 0.6 mの歪んだ円形で、深さ 0.1 ～ 0.3 m、埋土は黒褐色シルトである。Ａ建物は梁行や方向が同じであるが、桁行は１m長い。埋土は暗褐色シルトである。

【SB19 建物跡】（図版 34・92）

Ｃ区中央部の SI06 住居跡南東で確認した１×１間の東西棟掘立柱建物跡である。柱穴は４個検出し、３個で径 15㎝前後の柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認した。建物規模は桁行が北側柱列で 2.5 m、梁行は東妻で 2.2 m、方向は東側柱列で測るとＮ２°Ｗである。柱穴は径 0.3 ～ 0.5 mの円形もしくは楕円形で、深さ 0.5 ～ 0.7 m、埋土は黒色や黒褐色のシルトが多い。

【SB20 建物跡】（図版 33・92）

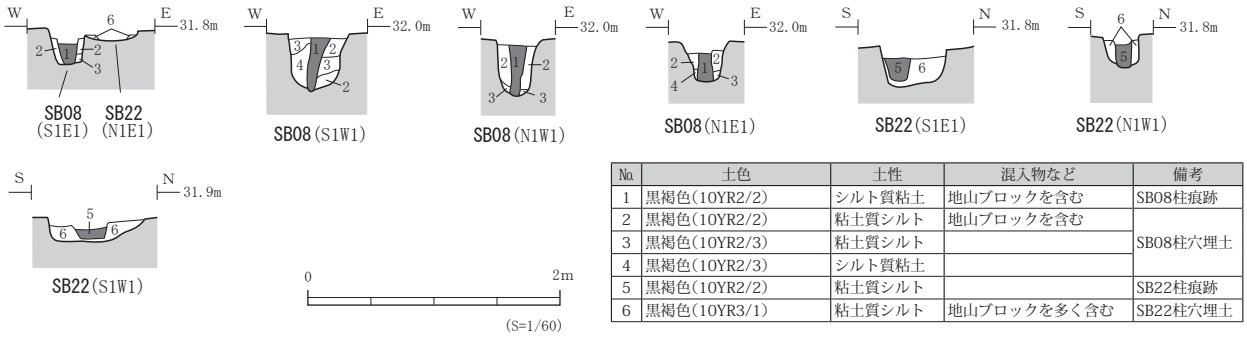
Ｃ区中央部の SI06 住居跡南側で確認した２×２間の掘立柱建物跡である。SK24 土坑より新しい。柱穴は８個検出し、４箇所で径 12㎝前後の柱痕跡を確認した。建物規模は東西が北側柱列で総長 3.3 m、柱間寸法は西から 1.7・1.6 m、梁行は東妻で総長 3.3 m、柱間寸法は北から 1.7・1.6 mとみられ、方向は西側柱列で測るとＮ３°Ｅである。柱穴は径 0.2 ～ 0.3 mの歪んだ円形で、深さ 0.3 m、埋土は黒褐色や暗褐色のシルトである。

【SB21 建物跡】（図版 34・92）

Ｃ区中央部の SI06 住居跡南東で確認した南北２間、東西は北側が２間、南側が３間の掘立柱建物跡である。柱穴は９個検出し、８箇所で径 15㎝前後の柱痕跡、１箇所で柱抜取穴を確認した。建物規模は東西が北側で総長 4.9 m、柱間寸法は西から 2.4・2.5 m、南側は総長が同じで、柱間寸法は西から 1.9・3.0 m（２間分）である。南北は東側柱列で総長 4.9 m、柱間寸法は北から 2.5・2.4 mで、方向は東側柱列で測るとＮ９°Ｗである。柱穴は径 0.4 ～ 0.5 mの歪んだ円形で、深さ 0.5 ～ 0.6 m、埋土は黒褐色や暗褐色のシルトである。本建物は３間となる南側が入口と考えられる。

【SB22 建物跡】（図版 31・91）

Ｃ区北東部の SI03 住居跡西側で確認した４×２間の南北棟掘立柱建物跡である。柱穴は 11 個検出し、３箇所で径 12㎝前後の柱痕跡、５箇所で柱抜取穴を確認した。建物規模は桁行が西側柱列で



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土	地山ブロックを含む	SB08柱痕跡
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山ブロックを含む	SB08柱穴埋土
3	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト		
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト質粘土		
5	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		SB22柱痕跡
6	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	SB22柱穴埋土

SB08 全景写真（南から）

SB22 全景写真（上から）

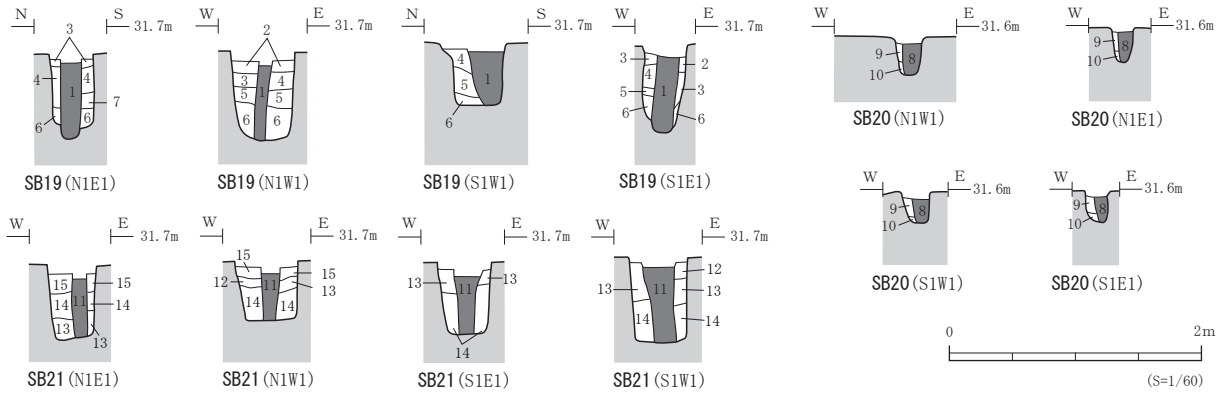
SB08(N1E1) 断面写真（南から）

SB08(S1W1) 断面写真（南から）

SB08(N1W1) 断面写真（南から）

SB22(N1W1) 断面写真（南から）

図版 91　SB08・22 建物跡



No	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト		SB19柱痕跡
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを含む	SB19柱穴埋土
3	褐色(10YR4/4)	シルト	黒褐色シルトを含む	
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
5	黒褐色(10YR2/3)	シルト		
6	黒褐色(10YR2/3)	シルト		
7	黒色(10YR2/1)	シルト		
8	黒褐色(10YR2/2)	シルト		SB20柱痕跡
9	黒褐色(10YR2/3)	シルト		SB20柱穴埋土
10	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを多く含む	
11	黒色(10YR2/1)	シルト		SB21柱痕跡
12	黒褐色(10YR2/2)	シルト		SB21柱穴埋土
13	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを多く含む	
14	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山小ブロックを含む	
15	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを含む	

SB19・20 全景写真（上から）

SB19(S1E1) 断面写真（西から）

SB19(S1W1) 断面写真（西から）

SB21 全景写真（上から）

SB21(N1E1) 断面写真（南から）

図版 92　SB19・20・21 建物跡

建物№	建物間数		棟方向	平面規模						建物の方向		柱痕跡(cm)	柱穴掘方		備考	図版№	
	桁行	梁行		桁行総長(m)/測定柱列/柱間寸法(m)			梁行総長(m)/測定柱列/柱間寸法(m)			角度/測定柱列			規模(cm)	平面形		平面	断面
SB08	2	2	―	4.0	西	1.7+2.3	4.0	北	2.1+1.9	N6°E	西	15	30～40	円形	総柱	31	91
SB18	2	2	東西	4.5	北	?	(3.9)	西	(1.9＋2.0)	N11°W	西	15	40～60	円形	建替え(A→B)。A建物の桁行は1m長い	35	90
SB19	1	1	東西	2.5	南	―	2.2	東	―	N2°W	東	15	30～50	楕円形、円形		34	92
SB20	2	2	東西	(3.3)	北	(1.7＋1.6)	(3.3)	東	(1.7＋1.6)	N3°E	西	12	20～30	円形		33	92
SB21	2	2	―	4.9	北	2.4＋2.5	4.9	東	2.5+2.4	N9°W	東	15	40～50	円形	南側は3間→入口	34	92
SB22	4	2	南北	9.4	西	2.8+2.0+4.6(2間)	5.1	西	2.9＋2.1	N9°W	西	12	40～70	楕円形		31	91
SB37	2	1～	東西?	3.6	東	1.7＋1.9	―	―	―	N6°W	東	16	40～60	方形	古代の建物	32	90

※(　)内の数値は推定値
※柱間寸法は、東西方向のものは西から、南北方向は北から順に書いた
※棟方向がわからない建物の規模は、桁行にデータを記した

表８　掘立柱建物跡属性表

総長 9.4 m、柱間寸法は北から 2.8・2.0・4.6 m（２間分）で、梁行は南妻で総長 5.1 m、柱間寸法は西から 2.9・2.1 mとみられる。方向は西側柱列で測るとＮ９°Ｗである。柱穴は長径 0.6 ～ 0.7 m、短径 0.4 mの楕円形で、深さ 0.1 ～ 0.3 m、埋土は黒褐色粘土質シルトである。

（2）井戸跡

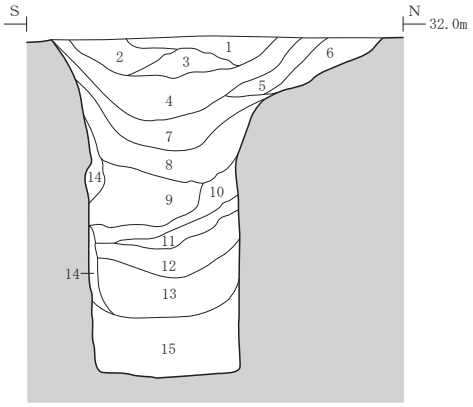
井戸跡は、Ｃ区で７基確認した。いずれも素掘で、北部中央に１基（SE05）、中央部東側に４基（SE71・75・76・99）、中央部西側に１基（SE17）、南東隅付近に１基（SE55）分布する。完掘したのは SE05 のみである。このため、SE05 は個別に、他の６基は一括して概要を述べることとし、個々の属性は表９にまとめた（図版 93・94）。

SE17・55・71・75・76・99 の平面形は円形で、規模は上部の径が 1.0 ～ 3.6 mで、半数は 2.0 m前後である。断面形は漏斗形（SE17・55・75）と箱形（SE99）があるが、SE71・76 については掘り下げが浅いため不明である。堆積土は、自然堆積で、特に下部は壁の崩落土が顕著となるもの（SE17・75）、人為的に埋め戻された後、上部に自然堆積が認められるもの（SE55・71・76）、人為堆積であるもの（SE99）に分けられる。このうち、隣り合う SE75・76 は、前者が自然堆積、後者は人為堆積であることから、SE75 の掘削で生じた土を、使わなくなった SE76 の埋め戻しに利用したと考えられる。

遺物は少なく、SE75 の堆積土から染付皿・壺、陶器片口・鉢・擂鉢、砥石などが出土したのみである（図版 95）。

【SE05 井戸跡】（図版 30・93）

Ｃ区北部中央で確認した素掘の井戸である。上部の平面形は 2.9 × 2.0 mの楕円形であるが、１m ほど下がった位置から下は径 1.1 mの円形になる。この変換部に対応して断面形は、北側上部がステップを作り出しながら開いており、井戸構築時の足場になったと考えられる。深さは 2.7 mほどである。

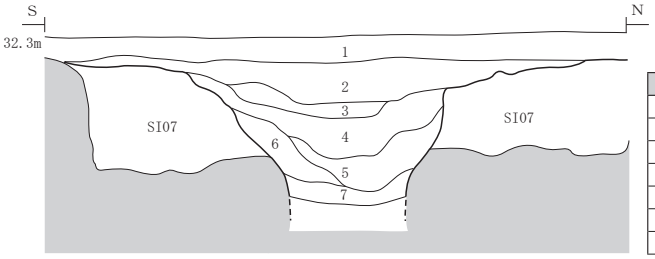


SE05

SE05 完掘写真　（東から）

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト		自然堆積
2	灰黄色(10YR5/2)	微細砂	白色砂を多く含む	
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	白色粘土ブロックを少し含む	人為堆積
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト		
5	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山ブロックを含む	
6	黒色(2.5Y2/1)	シルト	地山ブロックを含む	
7	黒色(2.5Y2/1)	シルト		
8	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	地山ブロックを多く含む	
9	黒色(10YR2/1)	シルト	地山ブロックを多く含む	
10	暗褐色(10YR3/4)	シルト		
11	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	
12	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山ブロックと14層を含む	
13	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土	地山ブロックを少し含む	
14	褐色(10YR4/6)	シルト		壁崩落土
15	褐灰色(10YR4/1)	粘土	白色粒砂を全体に含む	自然堆積

SE17 完掘写真（東から）

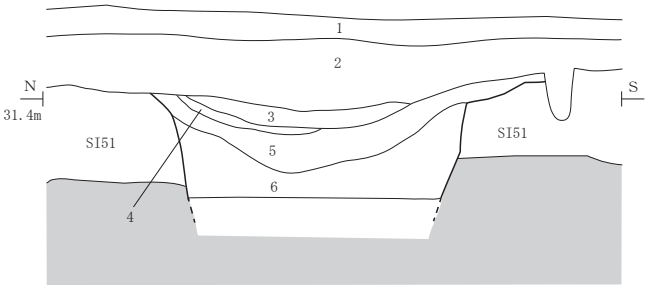


SE17

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト		基本第Ⅰ層
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
3	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山ブロックを含む	
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト		
5	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロック・礫を多く含む	
6	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	地山ブロックを多く含む	
7	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	シルト	黒褐色シルトブロックを含む	

0　2m

(S=1/60)

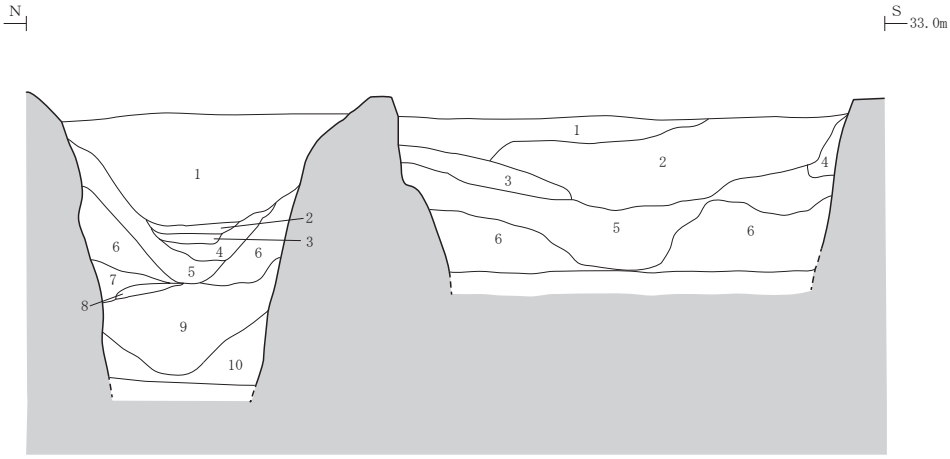


SE71

SE71 断面写真（西から）

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト		基本第Ⅰa層
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト		基本第Ⅰb層
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト		
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを多く含む	人為堆積
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを含む	
6	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを含む	

図版 93　SE05・17・71 井戸跡



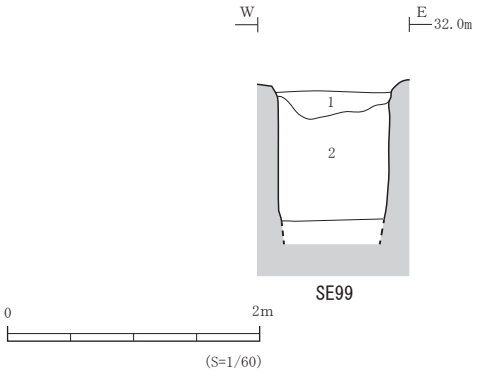
SE75　　SE76

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト		
2	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト	地山小ブロックを多く含む	
3	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト		
4	明黄褐色(10YR7/6)	砂質シルト		壁崩落土
5	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト		
6	明黄褐色(10YR7/6)	砂質シルト	地山中・小ブロックを多く含む	
7	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト		
8	明黄褐色(10YR7/6)	粘土質シルト		壁崩落土
9	褐灰色(10YR4/1)	シルト	地山ブロックを少し含む	
10	明黄褐色(10YR7/6)	シルト質粘土		壁崩落土

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	自然堆積
2	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	人為堆積
3	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	地山ブロックを含む	
4	にぶい黄橙(10YR6/4)	砂質シルト		
5	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	地山中・小ブロックを多く含む	
6	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト	地山ブロックを多く含む	

SE75 断面写真（西から）

SE76 断面写真（西から）



SE99

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを含む	人為堆積
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを多く含む	

SE99 断面写真（南から）

図版 94　SE75・76・99 井戸跡

(法量:cm)

№.	種別	層位	器種・特徴	登録
1	磁器・皿	1層	高台径:(6.2)	239
2	染付磁器・皿	1層	高台径:(8.4) 残存高:2.4	240
3	染付磁器・盃	堆	高台径:4.0。底部に「太明年製」	243
4	陶器・鉢	1層	底径:(9.4)。底部糸切	238
5	陶器・片口	堆	口径:(10.8)	244
6	陶器・擂鉢	堆	内:8本一組の卸目	245
7	石製品・砥石	2層	長:6.0　幅:7.0　厚:4.8	237

図版 95　SE75 井戸跡出土遺物

遺構№.	構造	平面形	断面形	規模(m)			堆積土の状況	主な出土遺物	備考	図版№.	
				確認面	下面	深さ				平面	断面
SE05	素掘	楕円形	漏斗形	2.9×2.0	径1.1	2.7	人為堆積			30	93
SE17	素掘	円形	漏斗形	径2.0前後	―	1.1～	人為堆積		SK58→SI0 7 →SE17。底未確認	32	93
SE55	素掘	円形	漏斗形	径1.6前後	―	1.0～	人為堆積		底未確認	36	―
SE71	素掘	円形	?	径2.2前後	―	0.8～	自然堆積		SI51→SE71。底未確認	34	93
SE75	素掘	円形	漏斗形	2.7×2.4?	―	2.1～	自然堆積	磁器皿、陶器片口・鉢・擂鉢、砥石	底未確認	34	94
SE76	素掘	円形	?	径3.6前後	―	1.2～	人為堆積		SI51→SE76。底未確認	34	94
SE99	素掘	円形	箱形	径1.0	―	1.2～	人為堆積		底未確認	24	94

表９　井戸跡属性表

(3) 墓跡

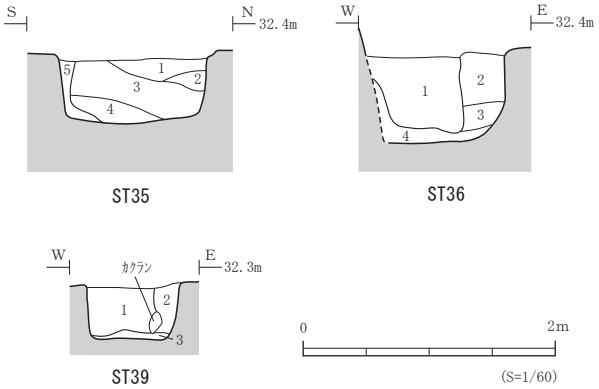
C区北西隅で 17 基確認した。山林との境に集中してつくられること、こうした例は 1976 ～ 78 年調査時にも２箇所確認されていることから、屋敷墓と考えられる。平面形は方形と円形があり、前者は方形木棺墓、後者は円形木棺墓（早桶）と考えられる。それぞれの数は方形 14 基、円形３基である。このうち、縄文時代の陥し穴や古代の住居跡と重複する ST35・36・39 は精査を行っており、３基について記述を行う。

【ST35 墓跡】（図版 29・96）

方形木棺墓で、SI11 住居跡より新しい。規模は東西 0.8 m以上、南北 1.2 m、深さは 0.6 mで、棺の規模は東西 0.7 m以上、南北 1.1 mとみられる。埋土から銭貨「寛永通宝」６枚と鉄釘が出土した（図版 97-1 ～ 6・14 ～ 17）。

【ST36 墓跡】（図版 29・96）

円形木棺墓で、SI11 住居跡より新しい。規模は径が 1.3 m、深さは 0.8 mで、棺の規模は径が 0.7 mほどとみられる。埋土から銭貨「寛永通宝」７枚と鉄釘が出土した（図版 97-7 ～ 13・18）。



ST35

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山小ブロックを少量含む	棺痕跡
2	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック主体。黒色土を微量含む	
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを多量に含む	
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックをやや多く含む	
5	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを多量に含む	掘方埋土

ST36

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを微量含む	棺痕跡
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを小量含む	
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを小量含む	掘方埋土
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを多量に含む	

ST39

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR1.7/1)	粘土質シルト	地山ブロックを含む	棺痕跡
2	黒色(10YR1.7/1)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	掘方埋土
3	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山ブロックを含む	

ST35 断面写真（東から）

ST35 完掘写真（東から）

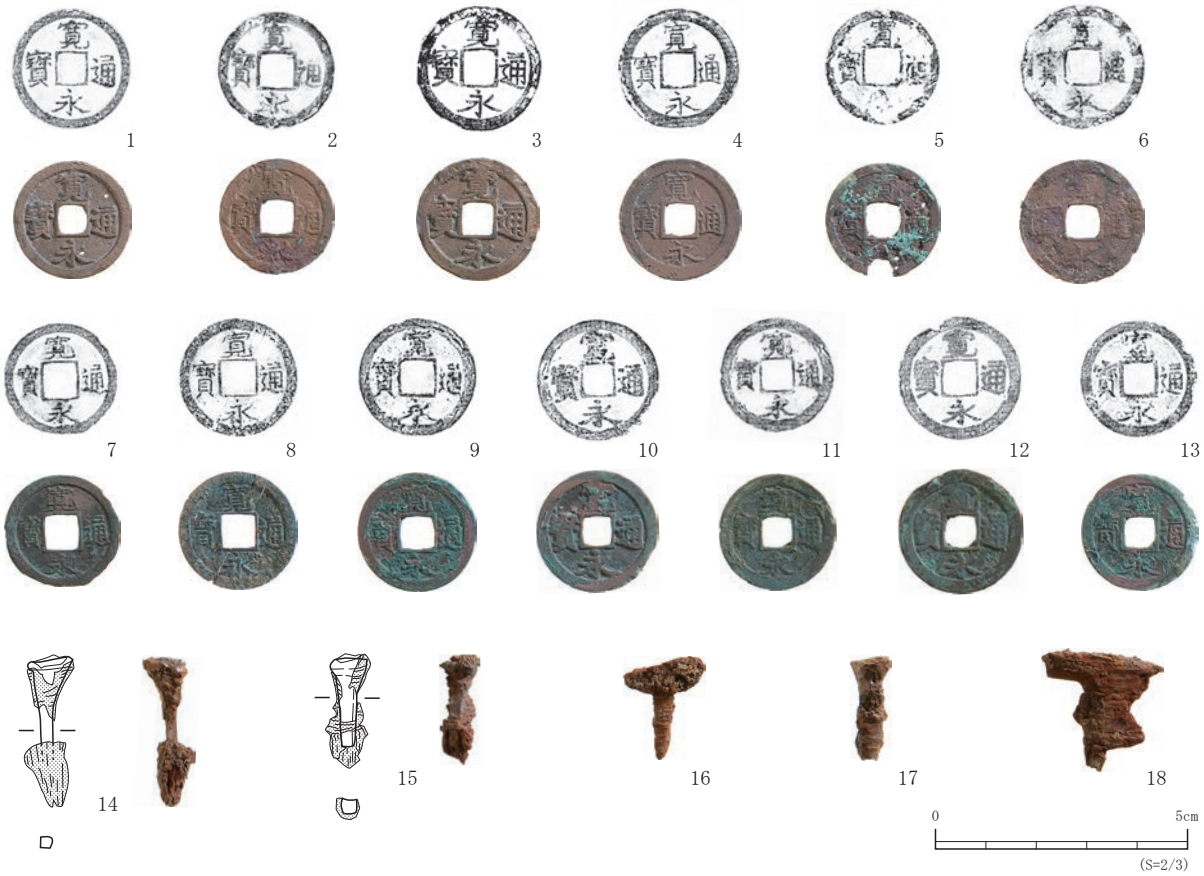
ST36 断面写真（南から）

ST36 完掘写真（北から）

ST36 完掘写真（東から）

ST39 断面写真（南から）

図版 96　ST35・36・39 墓跡



(法量:cm)

No.	種別	遺構	器種・特徴	登録	No.	種別	遺構	器種・特徴	登録
1	銭貨・寛永通宝	ST35		153	10	銭貨・寛永通宝	ST36		142
2	銭貨・寛永通宝	ST35		154	11	銭貨・寛永通宝	ST36		143
3	銭貨・寛永通宝	ST35		155	12	銭貨・寛永通宝	ST36		144
4	銭貨・寛永通宝	ST35		156	13	銭貨・寛永通宝	ST36		145
5	銭貨・寛永通宝	ST35		157	14	鉄製品・釘	ST35	長:(2.9)　幅:0.8　厚:0.2	150
6	銭貨・寛永通宝	ST35		158	15	鉄製品・釘	ST35	長:(2.4)　幅:(0.4)　厚:(0.4)	151
7	銭貨・寛永通宝	ST36		139	16	鉄製品・釘	ST35	長:2.0　幅:0.4　厚:0.3	146
8	銭貨・寛永通宝	ST36		140	17	鉄製品・釘	ST35	長:(2.0)　幅:0.8　厚:0.8	148
9	銭貨・寛永通宝	ST36		141	18	鉄製品・釘	ST36	長:(2.3)　幅:(2.3)　厚:(0.7)	171

図版 97　ST35・36 墓跡出土遺物

【ST39 墓跡】(図版 29・96)

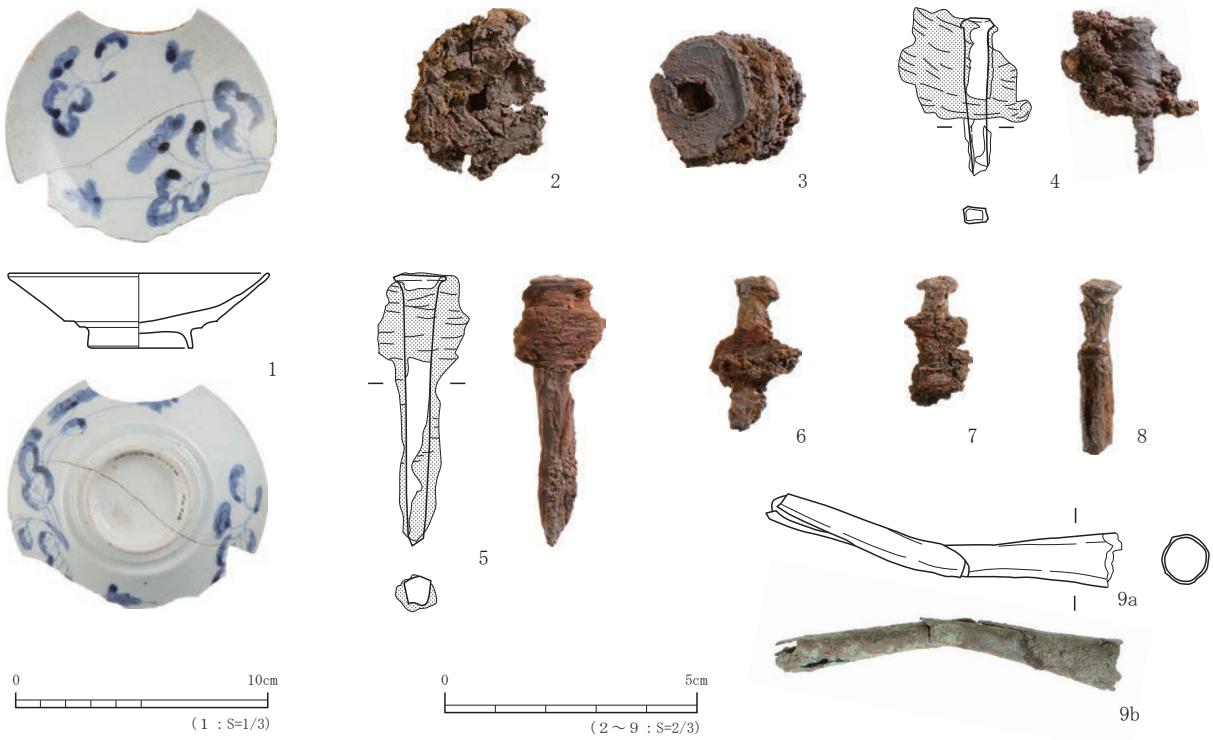
方形木棺墓で、SK38 土坑より新しい。規模は東西・南北とも 0.8 m、深さは 0.5 mで、棺の規模は一辺が 0.5 mとみられる。埋土から染付小皿と鉄銭、鉄釘が出土した(図版 98-1 ～ 8)。

(4) その他の遺構

土塁跡や空堀跡のほかピット・土坑・溝跡・性格不明遺構などがあり、その堆積土や第Ⅰ層から遺物が出土した。ここでは、ある程度遺構の性格が判明した SD42・43 溝跡、SA13 土塁跡と SD14 空堀跡の概要を述べ、他については主な断面や遺物を図版 99 に示した。

【SD42・43 溝跡】(図版 24・30)

SD42 はC区北西部で確認した東西溝跡で、16.8 m分を検出した。規模は幅が 0.9 m、深さ 0.1 mで、堆積土はしまりのない黒褐色シルトや暗褐色シルトである。SD43 は SD42 に接続する南北溝跡



（法量：cm）

No.	種別	遺構	器種・特徴	登録
1	染付・小皿	ST39	口径：10.2　器高：2.9　残存：2/3	135
2	鉄銭	ST39		159
3	鉄銭	ST39	サビで５枚固着	160
4	鉄製品・釘	ST39	長：(8.1)　幅：(0.5)　厚：(0.3)	165
5	鉄製品・釘	ST39	長：(5.3)　幅：(1.0)　厚：(0.8)	166
6	鉄製品・釘	ST39	長：(3.1)　幅：0.9　厚：0.7	167-1
7	鉄製品・釘	ST39	長：(2.6)　幅：0.9　厚：0.6	167-2
8	鉄製品・釘	ST39	長：(3.5)　幅：1.0　厚：0.7	167-3
9	銅製品・キセル	ST44	長：6.9　最大径：1.0	168

図版 98　ST39・44 墓跡出土遺物

遺構No.	形態	木棺			掘方（m）		主な出土遺物	備考	図版No.	
		棺	規模（m）	残存	規模	深さ			平面	断面
ST35	方形木棺墓	座棺	1.1×0.7？	×	1.3×0.9？	0.6	「寛永通宝」6枚。鉄釘	SI11→ST35	29	96
ST36	円形木棺墓	早桶	径0.7？	×	径1.3	0.8	磁器碗、「寛永通宝」７枚。鉄釘	SI11→ST36	29	96
ST39	方形木棺墓	座棺	一辺0.5？	×	一辺0.8	0.5	鉄銭６枚。鉄釘	SK38→ST39	29	96

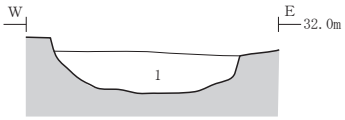
表10　墓跡属性表

で、16.7 m分を検出した。SK46 土坑より新しい。規模は幅が 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.1 mで、堆積土は SD42 と共通する。SD42 は現在の畑と山林の境と一致しており、耕作域と山林を分かつ地境の溝と考えられる。一方、これに接続する SD43 の西には近世墓が集中しており、山林を切り開いた墓域の東限溝とみられる。

【SA13 土塁跡と SD14 空堀跡】（図版 23・100）

遺跡北端の段丘裾部で確認した土塁跡と空堀跡である。栗原市教委の安達氏によれば、両者は併行して東北自動車道付近まで認められるとのことであるから、総長は 1 ㎞以上ある。SA13 は斜面下位側に設けられた。基底幅は 4 m以上、高さが 1.1 m前後ある。基底を水平にすることなく、旧表土（第Ⅳ層）の上に SD14 掘削で生じた第Ⅴ・Ⅵ層主体の土を直接積んでおり、積土自体もしまりがなかった。積土の残存高は 0.7 mほどである。SD14 は上幅 2.6 m前後、下幅 1.2 m前後、深さが 0.7 mある。断面形は逆台形であるが、底面を水平にすることなく、傾斜に合わせている。

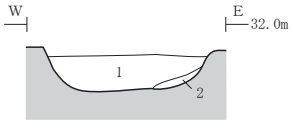
遺物が出土しなかったことから年代は不明であるが、空堀が斜面の上側につくられていること、傾



SK73

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを多く含む	

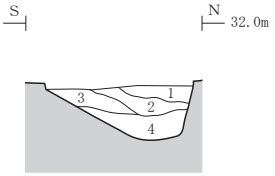
SK73 断面写真（南から）



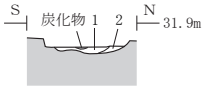
SK74

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山大・中ブロックを多く含む	
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山大ブロックを多く含む	

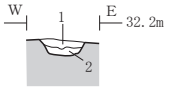
SK74 断面写真（南から）



SK105



SX41



SD43

(S=1/60)

SK105

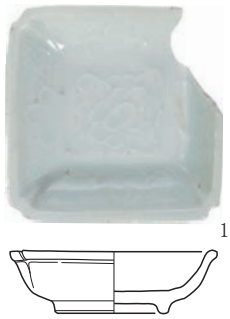
No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山を含む	自然堆積
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを含む	
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを含む	
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを少し含む	

SX41

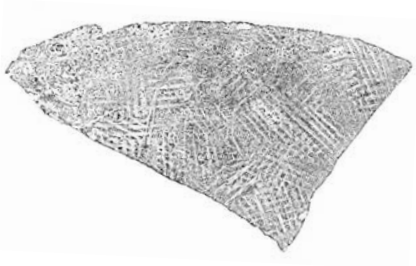
No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼けた地山の小ブロックを含む	
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼けた地山の中ブロックを含む	

SD43

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを含む	



1



2

3

（1・2：S=1/3）

（3：S=2/3）

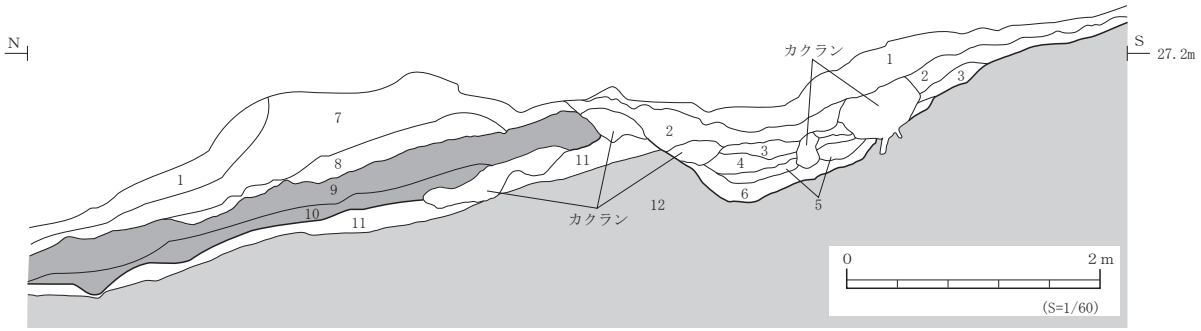
(法量:cm)

No.	種別	出土地	器種・特徴	登録
1	染付・小皿	SP4	平清水産。 長:8.2 高台長:4.3 器高:2.4	54
2	鉄銭	1T	外:平行タタキ 内:同心円アテ具	21

No.	種別	出土地	器種・特徴	登録
3	銭貨・寛永通宝	1T		55

図版 99 その他の遺構と第Ⅰ層出土遺物

斜に合わせて構築されていること、土塁の積み方が丁寧でないこと、下位段丘面は近世以降、水田として利用されたことから、耕作地と山林（上位段丘斜面）の境に設けられた獣よけの施設と考えられる。



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色（10YR2/3）	粘土質シルト		基本第Ⅰa層
2	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト		基本第Ⅰb層
3	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト		SD14堆積土
4	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	粗砂を含む	
5	褐色（10YR4/4）	粘土		
6	黒褐色（10YR2/3）	粘土質シルト	地山ブロックを含む	

No.	土色	土性	混入物など	備考
7	褐色（10YR4/4）	粘土	地山ブロックを多く含む	SA13積土
8	褐色（10YR4/4）	粘土	旧表土ブロックを含む	
9	黒褐色（10YR2/3）	粘土質シルト		基本第Ⅳb層
10	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト		基本第Ⅳa層
11	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト		基本第Ⅴ層
12	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト		基本第Ⅵ層

発掘調査前（東から）

断割部分の断面（南西から）

図版 100　SA13 土塁跡と SD14 空堀跡

D．総　括

築館バイパス工事に伴う発掘調査は、平成 21 年度から平成 27 年度まで行った。その結果、旧石器時代から縄文時代の遺物包含層 1 、縄文時代晩期の遺物包含層 1 、縄文時代の陥し穴 22、飛鳥時代から平安時代の竪穴住居 9 、掘立柱建物跡 1 のほか、江戸時代以降は掘立柱建物跡 7 （建替えを含む）、井戸跡 7 、墓 17、溝跡 2 に加え、獣除けとみられる併行する土塁跡と空堀跡を発見した。これらの遺構や基本層からは土器や陶磁器、鉄製品、石製品などが出土している。

以下、旧石器時代と飛鳥時代から平安時代の遺構・遺物について検討を行うが、その際、何度も出てくる教育委員会は教委とし、さらに、過去に行った本遺跡の調査は、1976 ～ 1978 年に実施した東北自動車道調査（宮城県 1982）を自動車道調査、2001 ～ 2002 年に実施した旧志波姫町教委調査（志波姫町教委 2005）を浄水場調査と略すことにする。

1．旧石器時代から縄文時代

平成 26 年度の本発掘調査区北西部で、縄文時代以降の遺構確認面（Ⅴ層上面）よりも下層（Ⅵ層）で石器集中地点 1 箇所を検出し、2,772 点の石器が出土した。その内訳は楔形石器 2 点、二次加工ある剥片 3 点、石刃 4 点、剥片 19 点、砕片 2,744 点（目視 27 点、水洗篩回収 2,717 点）である。砕片が非常に多く出土していることから、遺跡内で何らかの石器製作が行われたものと推定できる。ここでは、遺跡内における石器製作活動を中心に本石器群の様相を把握するとともに、出土層位も踏まえて石器群の時期について検討する。また、周辺遺跡との比較検討から、本石器群の地域的な位置づけについて検討を行う。

（1）遺跡内における石器製作活動

本遺跡における石器製作活動について、石材の獲得から使用に至るまで、本石器群で確認される各要素から検討を行うこととする。

本石器群の石材は、珪質頁岩 50 点、珪質凝灰岩 4 点、玉髄 1 点である。このうち珪質凝灰岩としたものは色調に差異が認められるものの、細粒緻密で光沢を帯びる質感が非常に近似していることから、同一の範疇の石材として認識が可能である。したがって、本石器群は、ほぼ単一の石材を利用したものとして捉えることができる。

これらの石材は遺跡内の地層では産出されないことから、石器石材は遺跡外で獲得したものである。獲得した石器石材について遺跡内への搬入形態を検討するにあたって、本遺跡で出土した個々の石器の自然面の残存状況を確認すると、いずれも部分的であるという状況が確認される。このことから、原石や粗割り段階の分割礫のような搬入形態はあまり想定されず、調整がある程度行われた段階での搬入形態が考えられる。剥片の形態を見ると、数は少ないながらも石核調整剥片が出土していることから、石核段階での搬入があったものと推定される。また、目的剥片や石核調整剥片の出土が少ない

ことから、トゥールの素材剥片の段階での搬入も推定され、遺跡内でトゥールの製作や調整が行われたと考えられる。

本石器群は遺跡内で石器集中地点を形成する。石器集中地点は、Z4 グリッドを中心に南北約 5.5m、東西約 10m 以上に分布するとみられる。Z4 グリッドを中心とした密な分布状況を示す西側ではほとんどが剥片や砕片で構成され、やや散漫な分布状況を示す東側ではトゥールや石刃も含まれる。砕片の分布状況では西側を中心に東側でも広く分布していることから、西側では剥片生産やトゥールの製作、東側ではトゥールの使用・調整といった行動が想定される。特に西側では剥片生産に特化した場の機能が考えられる。ただし、大型のトゥールや剥片類が残されていないことから、大型剥片素材のトゥールに関連する石器製作やその使用はあまり想定されず、中～小型の石器製作や使用が主体であったと考えられる。

（2）出土石器群の時期

本石器群は、浅間板鼻黄色軽石（As-YP）と十和田八戸テフラ（To-H）の上位の黄褐色シルト質粘土層から出土している。県内において、これらの火山灰と石器群との層位的な関係が良好に捉えられる発掘調査資料はこれまで発見されていないが、十和田八戸テフラの噴出源である青森県内に目を向けると、十和田八戸テフラをキーテフラとして、旧石器時代終末期から縄文時代草創期にかけての遺跡の変遷が捉えられている（川口 2011）。これによると、十和田八戸テフラの下位から無文土器を伴う長者久保・神子柴石器群が出土し、旧石器時代から縄文時代への移行期の段階に位置づけられ、十和田八戸テフラの上位では、縄文時代草創期に位置づけられる隆起線文系土器の出土が確認される。この層位的出土事例に照らし合わせると、本遺跡の石器群は縄文時代草創期に位置づけることが可能である。

ところで、本遺跡における石器群の出土層位は黄褐色シルト質粘土層であり、黒色や黒褐色を呈する土壌が形成される前の堆積層である。同じ縄文時代草創期に位置づけられる仙台市野川遺跡では、下位の黄褐色シルト層と上位の黒褐色シルト層の漸移層で遺構・遺物を検出している（仙台市教委 1996、鹿又・川口 2015）。本遺跡では漸移層直下が遺物包含層として捉えられることから、黒色土の形成という観点では、縄文時代草創期以前と推定される。

以上における層位的な関係から、本遺跡の石器群は縄文時代草創期の可能性が最も高いと言える。しかしながら石器の様相は、後期旧石器時代の形式技術的特徴のみが認められ、尖頭器などの両面加工石器や石斧など、当該期に特徴的な石器の存在が認められず、また、剥片や砕片の観察においても両面加工石器の製作や調整の痕跡が認められない。このことから、縄文時代草創期の石器群である可能性は高いものの、現時点では後期旧石器時代終末から縄文時代草創期までのある程度幅をもたせた時期の石器群として位置づけるのが妥当であると考える。

（3）遺跡周辺の旧石器時代石器群

本遺跡は、北側を流れる一迫川によって形成された緩やかに東へ傾斜する河岸段丘上に位置する。

これまでに発掘調査が行われた周辺の旧石器時代遺跡として、同一段丘上に栗原市淀遺跡（宮城県教委 2001）があり、一迫川を挟んでさらに北側の段丘上には同市伊治城跡がある。また、これらの段丘の西には築館丘陵が隣接し、この丘陵上に同市大久保遺跡（栗原市教委 2010b）が所在する（表 11）。大久保遺跡と同一丘陵上では、同市佐野原遺跡（興野 1976、鈴木ほか 2003）で大型局部磨製石斧が、同市小田裏 A 遺跡で有舌尖頭器（築館町史編纂委員会 1976）がそれぞれ採集され、いずれも縄文時代草創期に位置づけられている。

これらの石器群のうち、後期旧石器時代前半に位置づけられる石器群として、伊治城跡第 29 次調査出土資料（築館町教委 2004、図版 101-1 ～ 9）と大久保遺跡 3 区出土資料があげられる。前者には、縦長剥片素材のナイフ形石器（2）や石斧に類似する礫器（4）のほか、当該期に特徴的な台形剥片生産の様子がうかがえる接合資料や石核、剥片類がある（5 ～ 8）。なかでも、石刃と台形剥片が同一個体から剥離された接合資料（9）はこの時期の剥片生産の特徴を捉えた良好な利用である。石材は碧玉や玉髄、瑪瑙が主体であり、他に珪質頁岩や珪化凝灰岩、黒曜石など多様な石材利用が認められる。また、大久保遺跡 3 区でも玉髄や碧玉製の剥片を主体とする石器群が出土している。この石器群は AT 下位から出土しており、層位的に時期が裏付けられた良好な資料である。

後期旧石器時代後半の資料としては、大久保遺跡 5 区出土資料があげられる。AT 降下層準に近接した層から珪質頁岩製の石刃が 4 点出土しており、両設打面石核や石核調整の存在を加味して、この時期の資料として位置づけられている。また、伊治城跡第 20 次調査（図版 101-12・13、築館町教委 1995）では半両面加工の尖頭器（13）と石刃（12）が出土しており、型式学的特徴からこの時期以降の石器群の可能性が考えられる。これらの石器群はすべて珪質頁岩を利用している点で、碧玉や玉髄が主体となる後期旧石器時代前半の石器群と石材利用のあり方において大きな差異が認められる。なお、上記以外の伊治城跡出土石器群（図版 101-10・11・14 ～ 18、築館町教委 1992・1993・1994・2001、栗原市教委 2009・2013・2015b）や淀遺跡出土石器群もまた、すべてが珪質頁岩製であり、これら石器群も後期旧石器時代後半以降の石器群の可能性が考えられる。

本遺跡から出土した石器群の石材は、玉髄 1 点を除きすべて珪質頁岩や珪質凝灰岩であり、本遺跡周辺の後期旧石器時代後半以降における石器群の石材利用のあり方に共通する。しかしながら、県

遺跡	立地	調査年度	器　種	石　材	発掘原因	文献	備　考
伊治城 17 次	段丘	1991	石刃 1、剥片 1	珪質頁岩 2	保存目的調査	町 5 集	
伊治城 19 次	段丘	1992	スクレイパー、剥片	不明	保存目的調査	町 6 集	
伊治城 20 次	段丘	1993	尖頭器 1、石刃 1	珪質頁岩 2	保存目的調査	町 7 集	
伊治城 21 次	段丘	1994	石刃	不明	保存目的調査	町 8 集	
伊治城 27 次	段丘	2000	サイドスクレイパー 1	珪質頁岩 1	保存目的調査	町 14 集	
伊治城 29 次	段丘	2003	ナイフ形石器 1、二次加工ある剥片 1、礫器 1、石核 14、剥片 146、砕片 243	碧玉、玉髄、瑪瑙主体 他に珪質頁岩、珪化凝灰岩、珪質シルト岩、珪化木、黒曜石など	保存目的調査	町 17 集	後期旧石器時代前半
伊治城 36 次	段丘	2008	石刃 2、剥片 1	珪質頁岩 3	活用目的調査	市 9 集	
伊治城 H24	段丘	2012	石刃 1	珪質頁岩 1	工事立会	市 17 集	
伊治城 42 次	段丘	2014	二次加工ある剥片 1	珪質頁岩 1	活用目的調査	市 19 集	
淀	段丘	2000	剥片 2	珪質頁岩 2	試掘・確認調査	県 187 集	
大久保 3 区	丘陵	2008	二次加工ある剥片 1、石核 2、剥片・砕片 23 ※フルイ検出資料を除く	玉髄 17、碧玉 8、頁岩 1	記録保存調査	市 12 集	出土層位は AT 下位
大久保 5 区	丘陵	2008	石刃 4	珪質頁岩 4	記録保存調査	市 12 集	出土層位は AT 降下層準
御駒堂	段丘	2014	楔形石器 2、二次加工ある剥片 3、石刃 4、剥片 19、砕片 2744	珪質頁岩 50、珪質凝灰岩 4、玉髄 1 ※水洗篩回収資料を除く	記録保存調査	本書	出土層位は As-YP、To-H 上位

表 11　御駒堂遺跡周辺の旧石器時代遺跡一覧

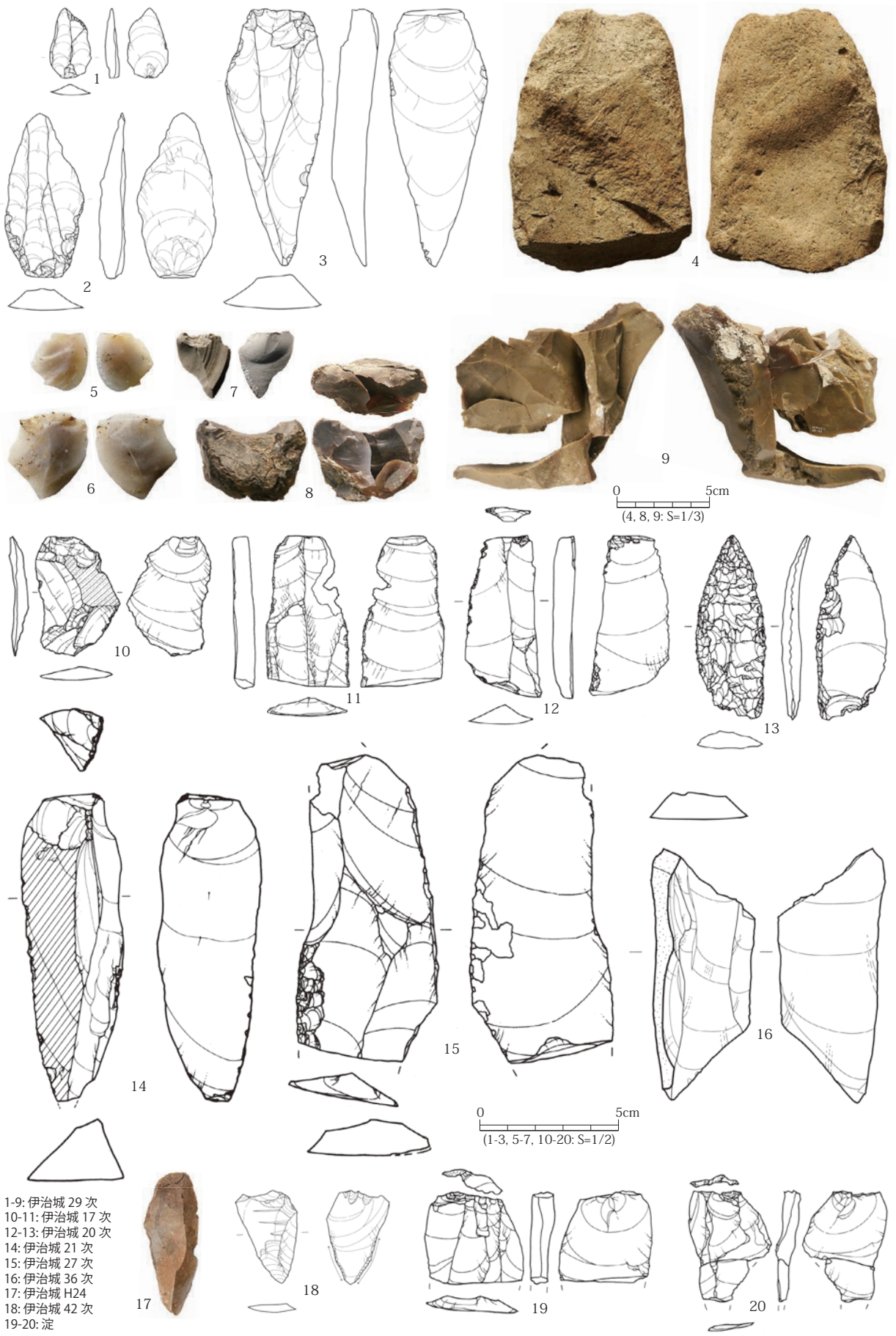
内の当該期石器群は必ずしも同様の石材利用状況ではなく（大場ほか 2006）、当該地域における特徴的な様相であると考える。

（4）まとめ

1．平成 26 年度の本発掘調査区の北西部で、石器集中地点 1 箇所を検出し、石器が 2,772 点出土した。その内訳は、楔形石器 2 点、二次加工ある剥片 3 点、石刃 4 点、剥片 19 点、砕片 2,744 点（目視取り上げ 27 点、水洗篩回収 2,717 点）である。

2．本遺跡における石器石材は、珪質頁岩とこれに類似する珪質凝灰岩がほとんどである。珪質頁岩主体の石材利用は、本遺跡周辺の後期旧石器時代後半以降の石器群の石材利用のあり方と共通する。

3．石器群は、浅間板鼻黄色軽石（As-YP）と十和田八戸テフラ（To-H）の上位、黒色土形成以前の堆積層から出土しており、後期旧石器時代終末から縄文時代草創期までの石器群として位置づけられる。



図版 101　周辺遺跡出土の旧石器

２．飛鳥～平安時代

（1）土器と竪穴住居跡の年代

９軒の竪穴住居跡（SI01・02・03・06・07・11・15・50・51）を中心に土師器や須恵器が出土した。それらは自動車道調査区の成果を参考にすると、Ａ群土器とＢ群土器に分けられる。

【Ａ群土器】（図版 102）

関東系土師器（註 15）を主体として在地土師器が組み合い、これに少量の須恵器が伴う。代表例は SI01・06 住居跡で、ほかに SI03・07・11・15・50 から出土している。関東系土師器には坏・埦・小形広口壺・長胴甕があり、長胴甕は器高から中形（17）と大形（19 ～ 23・25）に分かれる（註 16）。坏はいずれも丸底で、外傾して口縁にいたるもの（４）、口縁部で軽く屈曲するもの（５・８）、体部中位に稜があり、口縁部で外傾もしくは外反するもの（６・７）がある。埦（10）は８を大形化したものである。小形広口壺は胴部に最大径がある（13 ～ 15）（註 17）。甕の胴部は最大径が上半にあり小さな底部に向けてすぼまる。口縁部は「く」字状に強く屈曲して外反するもの（17・19 ～ 23・25）と、外傾するもの（20）がある。壺や甕の外面調整はヘラケズリで、後者の方向はヨコナデと接する上部が横方向、胴部は斜め、もしくは縦方向である。

在地土師器は坏･鉢･小形甕･長胴甕･ミニチュアがある。長胴甕には中形（18）と大形（24）がある。坏は有段丸底で内面は黒色処理が施される（以下、内黒とする）。いずれも段は体部中位にあるが、扁平で皿状になるもの（３）と底部の丸味が強いもの（１・２）とがある。鉢は甕または広口壺の下半を製作したのち、その上端をヨコナデして鉢としたものである（12）。大形の長胴甕は口縁端部が四角で、頸部に軽い段を持つ。胴部の最大径は中位にあり、外面は縦方向のハケメが施される（24）。中形（18）と小形（16）の甕の胴部調整は、縦方向や斜方向のナデである。ミニチュアは鉢形である（11）。

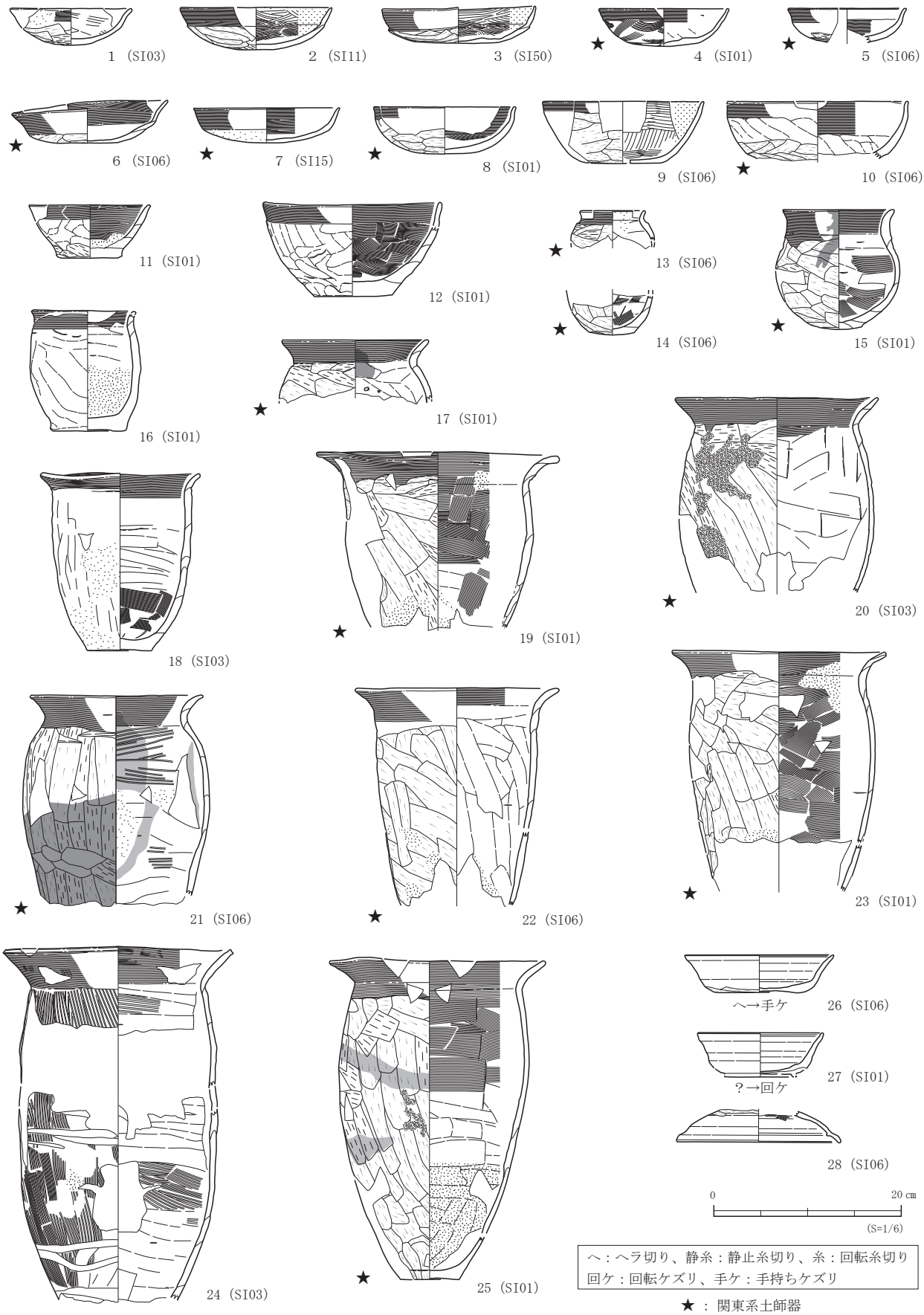
須恵器は坏・高台坏・蓋がある。坏は扁平で口縁内面に沈線が巡り、底部から体部下端にヘラケズリが施される（26）。高台坏もまた口縁内面に沈線が巡り、高台が低い（27）。蓋には弱いカエリが認められる（28）。

こうした特徴は、自動車道調査区の第２群土器（宮城県教委 1982）や浄水場調査区の SI1001 住居跡（註 18）、本遺跡南側に隣接する山ノ上遺跡１・２号住居跡（宮城県教委 1980g）などに類例が求められる（図版 103）。また、宮城県北部・沿岸部の６～８世紀の土器をまとめた佐藤敏幸氏の六段階にあたり、Ａ群土器の年代は８世紀前葉と考えられる（佐藤 2007）。

【Ｂ群土器】（図版 104）

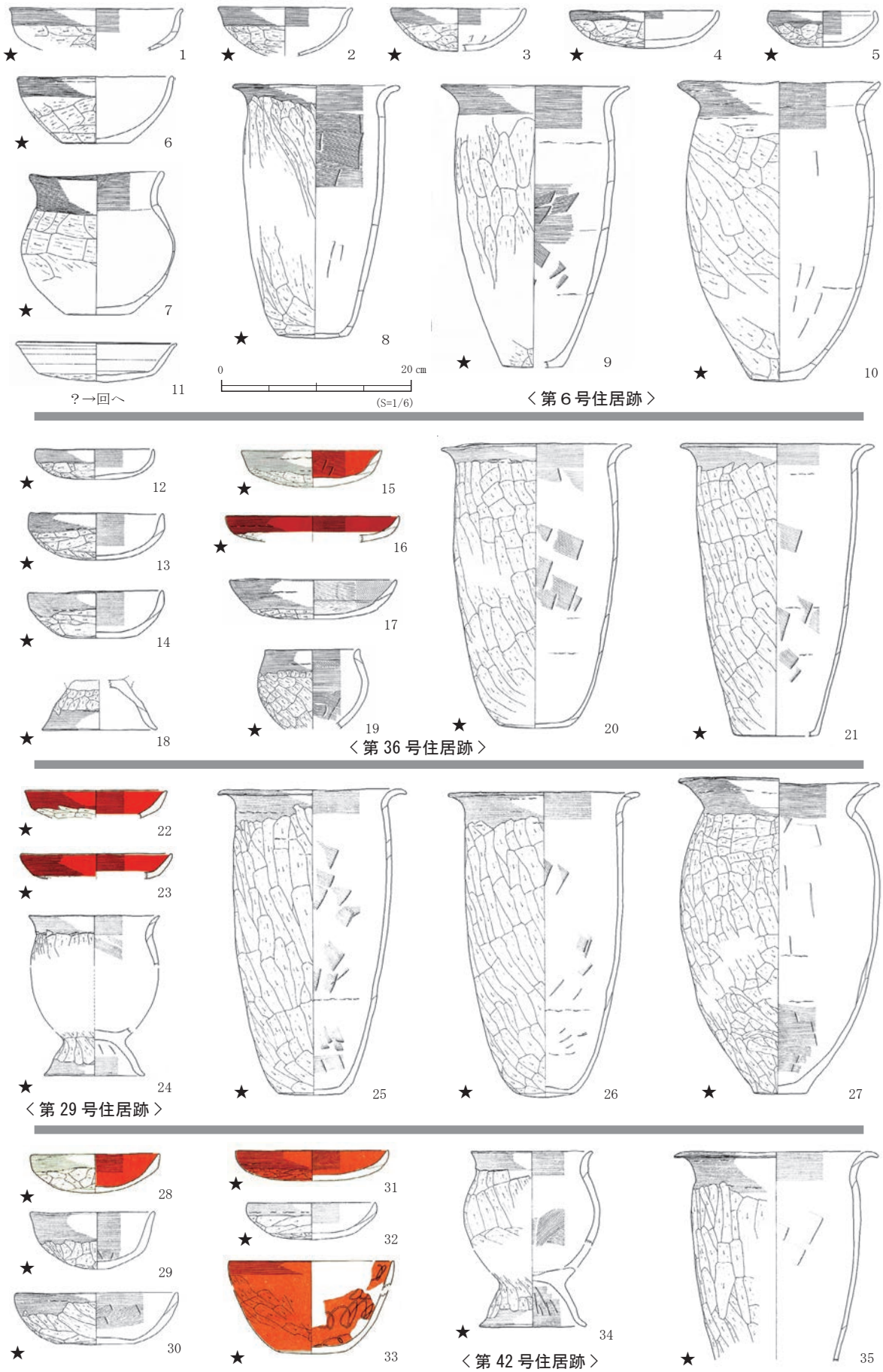
非ロクロ調整の土師器を主体とし、少量のロクロ土師器食器と須恵器で構成される。SI51 に代表され、ほかに SI02 からも出土している。非ロクロ土師器には坏・埦・鉢・広口壺・長胴甕・ミニチュアがあり、長胴甕には中形（16）と大形（17・18）がある。

坏は有段と無段（８～ 10）に分けられ、さらに前者は段の位置から中位（５～７）、下位（３・４）、下端（１・２）に細分できる。段の位置によって底部の形状も異なり、中位は丸底、下位は平底状、下端は平底である。このうち、１と３は底部中央に静止糸切り痕が認められた。また、９の土師器坏



1～8：土師器坏、9・10：土師器埦、11：土師器ミニチュア、12：土師器鉢、13～15：土師器小形広口壺、16：土師器小形甕、17・18：土師器長胴甕（中形）、19～25：土師器長胴甕（大形）、26：須恵器坏、27：須恵器高台坏、28：須恵器蓋

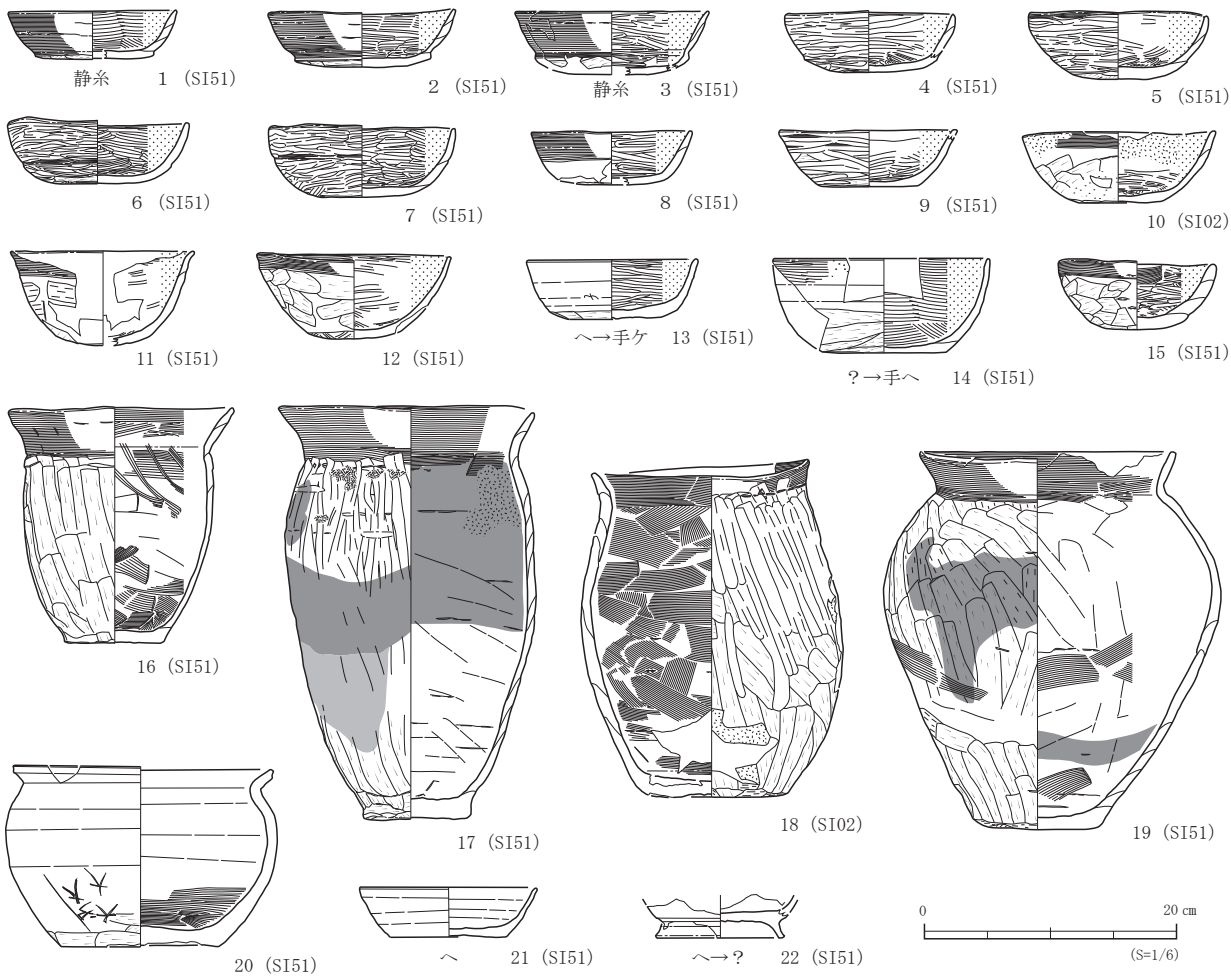
図版 102　A　群　土　器



１～６・12～17・22・23・28～32：土師器坏、33：土師器埦、７：土師器小形広口壺、19：土師器鉢、18・24・34：土師器台付甕、８～10・20・21・25～27・35：土師器長胴甕（大形）、11：須恵器坏

★：関東系土師器

図版 103　Ａ群土器の類例－自動車道調査区第２群土器



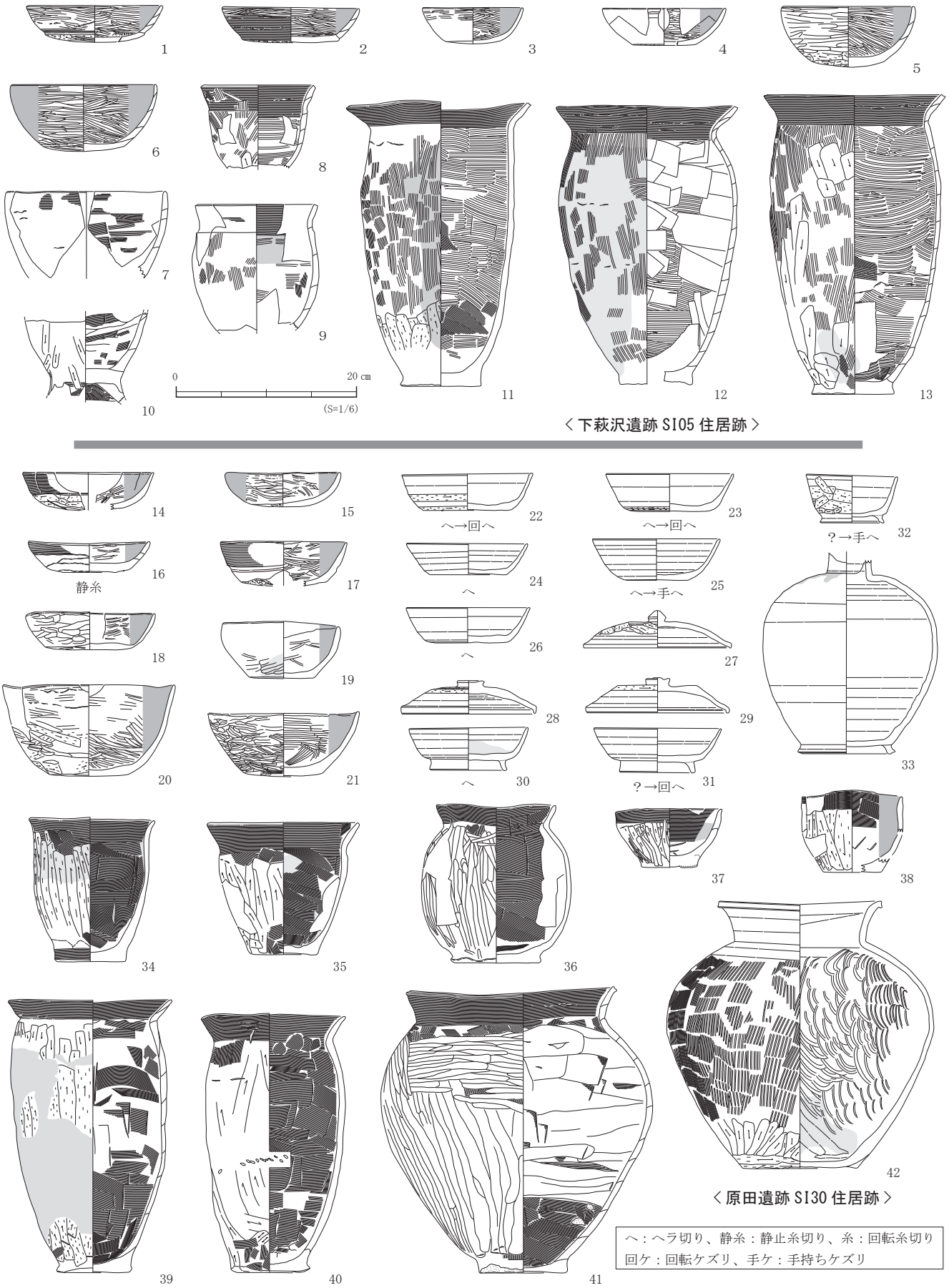
1～10：土師器坏、11・12：土師器椀、13：ロクロ土師器坏、14：ロクロ土師器椀、15：土師器ミニチュア、16：土師器長胴甕（中形）、17・18：土師器長胴甕（大形）、19：土師器広口壺、20：須恵器鉢、21：須恵器坏、22：須恵器高台坏

図版 104　B　群　土　器

底部には、ヘラや刀子などの工具の先端を利用した刻画が認められた。体部下端にも文様があることから、鞍を装着した馬が描かれたとみられる（図版 83-9）。椀は平底状丸底で、体部から底部にかけてヘラケズリが施される（11・12）。長胴甕や広口壺は頸部の段がなくなり、胴部調整がヘラケズリやミガキとなる（16 ～ 19）。特に、17 は胴部最大径が上半にあり、器形や胴部調整がＡ群土器の関東系土師器長胴甕（大形）に近い。ミニチュアは坏形で、内面に黒色処理が施される（15）。

ロクロ土師器は坏（13）・椀（14）の食器のみ認められ、前者は非ロクロ土師器無段坏と器形や法量が似る。椀の口縁部外面にはミガキがみられる。須恵器は坏が皿形でヘラ切りであり（21）、高台坏はＡ群土器に較べて高台が高くなる（22）。また、有段土師器坏や須恵器坏には墨書（図版 83-1・84-1）、ロクロ土師器坏や須恵器鉢には刻書が認められるものがある（図版 83-12・86-22）。

こうした特徴は、自動車道調査区の第４群土器（宮城県教委 1982）や原田・下萩沢遺跡Ⅰ B 群土器（宮城県教委 2009）、城下遺跡 SI16 B 住（栗原市教委 2014）などに類例が求められる（図版 105）。また、前述した佐藤編年の七段階にあたり、Ｂ群土器の年代は８世紀中葉～後半と考えられる（佐藤　前出）。



1～4・14～19：土師器坏、5・6・20・21：土師器埦、7・37・38：土師器鉢、8・9・34・35：土師器小形甕、10：土師器台付甕、11～13・39・40：土師器長胴甕（大形）、36：土師器小形広口壺、41：土師器広口壺、22～26：須恵器坏、27～29：須恵器蓋、30～32：須恵器高台坏、33：須恵器長頸壺、42：須恵器中甕

図版 105　B群土器の類例－原田・下萩沢遺跡ⅠB群土器

(2) 竪穴住居跡

土器群ごとに竪穴住居について検討を行う。このうち、規模は本調査がバイパス路線敷きとなり、全体が判明するのが９軒中６軒であることから、他の３軒については一辺の長さをもとに考えることとする。

【Ａ群土器段階】

７軒あり、平面形は方形が５軒（SI01・03・06・07・50）、長方形が１軒（SI15）、不明が１軒（SI11）である（註 19）。いずれもコーナーは丸くならず、直角に近い。住居の方向は１軒（SI15）を除いて真北から東西に５°以内に収まる。こうした傾向は自動車道調査区でも認められ、カマドが判明した 22 軒のうち、北壁に設けられた 15 軒のカマドの方向は東西 10°以内に集中することから（宮城県教委 1982）、本段階の住居は斉一性が高い（註 20）。

つぎに規模・主柱配置・入口ピット・周溝・壁材痕についてみてみたい。規模は一辺６m前後が２軒（SI01・03）、５m弱が１軒（SI06）で、他の４軒（SI07・11・15・50）は４m前後とみられる。主柱や入口ピット・周溝・壁材痕は、一辺５m以上の３軒がいずれも主柱が住居対角線上に４本で、入口ピットはカマドに対面する南壁中央内側にあり、カマド部分を除いて壁材痕が巡る。これに対し、一辺４m前後のものは主柱が４本とみられるのが１軒（SI07）、中央１本が１軒（SI50）、主柱なしが１軒（SI15）、不明が１軒（SI11）とバラエテイに富む。このうち、SI07 は周溝が巡るのに対し、SI15 と SI50 は入口ピットや周溝は認められない（図版 106）。こうしたことから、一辺５mを超える住居は主柱４本でカマド対面に入口ピットを有し、壁材が巡るといった高い規格性が認められるが、一辺４m前後以下の小さな住居は多様なあり方を示している。

【Ｂ群土器段階】

２軒（SI02・51）あり、平面形は方形とみられる。いずれもコーナーは丸くならず、直角に近い。住居の方向は SI02 がＮ１°Ｗと真北に近いが、SI51 はＮ 12°Ｗと西に傾く。規模は SI51 が一辺５m以上に対し、SI02 は一辺が４m未満である。規模の違いはＡ群土器段階と同じく主柱配置や入口ピット・壁材痕に反映しており、前者は主柱４本でカマド対面の南壁中央内側に入口ピットがあり、カマドを除いて壁材が巡るのに対し、後者は主柱や壁材は認められない（図版 106）。

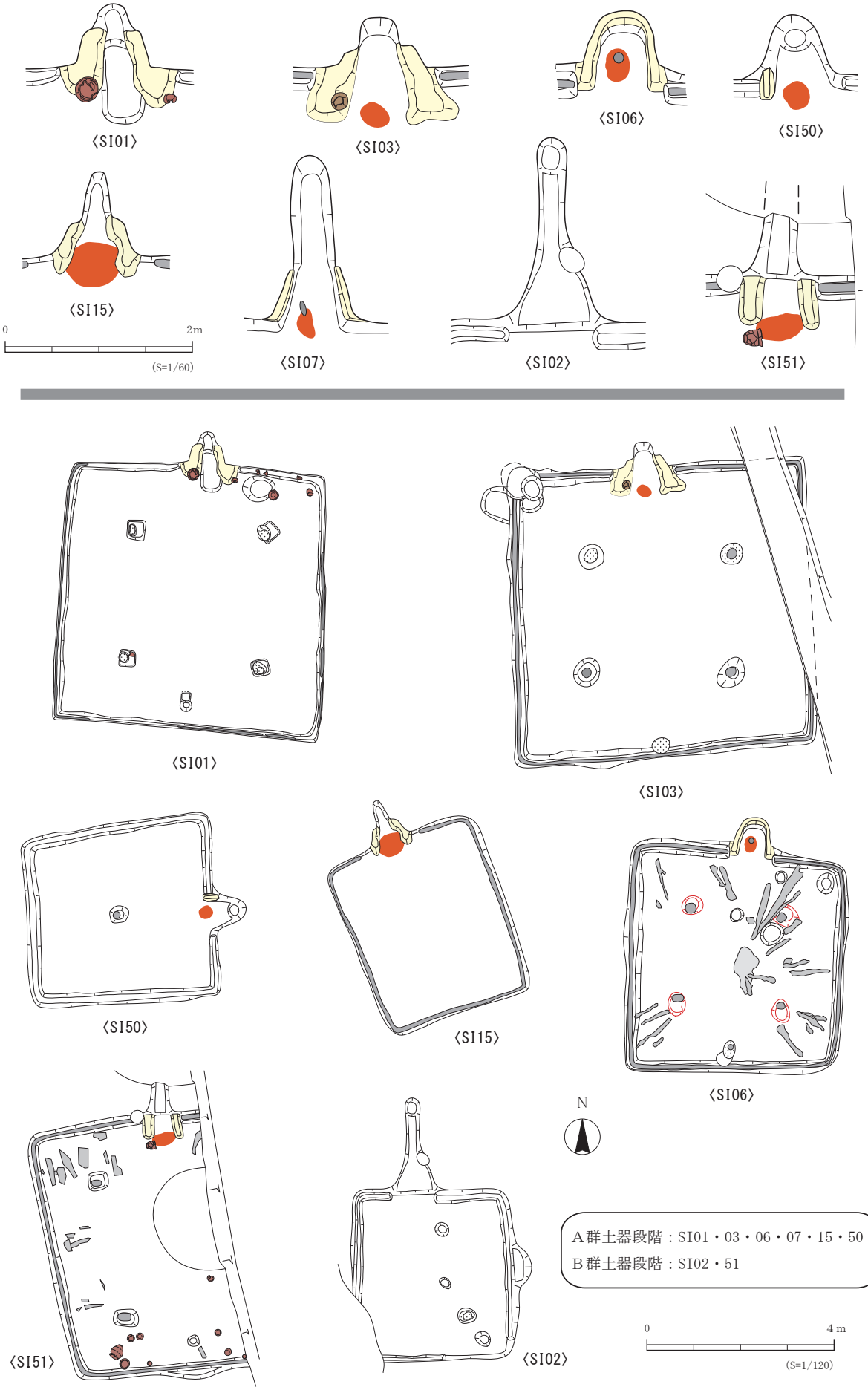
(3) カマド

カマド構造が検討できる住居は SI11 を除く８軒で、土器群ごとに検討を行う。

【Ａ群土器段階】

カマドの位置は、北壁中央が５軒（SI01・03・06・07・15）、東壁中央が１軒（SI50）である。いずれも本体は住居壁を外側に掘り込んで内壁に白色粘土を貼付けており、その一部が住居内まで延びるものがある。煙道は、掘込みの最奥部が煙道奥壁となるものと 0.6 m以下の短煙道もしくは 1.2 mの長煙道が付くものとがある。カマドの造替えは認められない（註 21）。これらをまとめると、以下のようになる（図版 106）。

・カマドは住居壁を掘り込み、白色粘土でつくられ、奥は煙道奥壁と一致する……SI06



図版 106　バイパス調査区のカマド（上）と竪穴住居跡（下）

・カマドは住居壁を掘り込み、白色粘土でつくられるが、本体の一部は住居内まで延び、短煙道が付く……SI01・03・15・50
・カマドは住居壁を掘り込み、白色粘土でつくられるが、本体の一部は住居内まで延び、長煙道が付く。掘り込んだ本体と煙道の下部は地山削出しで、上部が白色粘土となる。煙道は半地下式である……SI07

【Ｂ群土器段階】

カマドの位置は、２軒（SI02・51）とも北壁中央とみられる。本体と住居壁との関係や煙道のあり方は、以下のとおりである（図版 106）。

・カマドは住居壁を掘り込み、白色粘土でつくられ、長煙道が付く……SI02
・カマドは住居内にあり、白色粘土でつくられ、長煙道が付く……SI51

３．江戸時代以降

掘立柱建物跡７棟（建替えを含む）、井戸跡７基、墓 17 基を検出した。掘立柱建物跡や井戸跡の多くは、Ｃ区中央から東側にするものが多く、墓はそれらから離れたＣ区北西隅のＤ区との境に集中していた。こうした例は、自動車道調査区でも確認されている。掘立柱建物や井戸で構成された施設群は、現在の国道 398 号線寄りにあり、そこから離れた山林との境に墓が営まれている。国道近辺には、若柳宿や石森宿を経て狼河原村にいたる「築館・狼河原道」が通っていたことから（仙台郷土研究会 2002）、道側に建物・小屋（雑舎）・井戸で構成された農家が点在し、周りの遺構がない部分は畑などの耕作域、敷地奥の山際に屋敷墓が営まれたという景観が想定できる。

４．飛鳥～平安時代の御駒堂遺跡

（1）土器変遷・竪穴住居跡の年代・集落の様相

御駒堂遺跡の発掘調査は、1976 ～ 1978 年に実施した東北自動車道調査（宮城県教委 1982）、2001 ～ 2002 年に実施した浄水場調査（志波姫町教委 2005）、2009 年～ 2015 年の築館バイパス調査（本書）と栗原市教委による小規模開発に伴う数箇所の調査が行われている。ここでは、これまでの調査成果から飛鳥～平安時代における集落の様相をまとめ、さらに、そこから派生した古代栗原郡をめぐるいくつかの問題について考えてみたい。

発掘調査が行われた自動車道調査区・浄水場調査区・バイパス調査区における飛鳥～平安時代の土器は５つの土器群（Ⅰ～Ⅴ群土器）に分けられ、竪穴住居跡の年代は表 12 のようにまとめられる。バイパス調査のＡ群はⅡ群土器、Ｂ群土器はⅢ群土器に含まれる。また、自動車道調査区の第３群土器と第５群土器について再検討を行った結果、第３群土器は土師器坏・甕の様相が第４群土器（Ｂ群土器）と共通すると判断できたことから、Ⅲ群土器に含めている。

さらに、第５群土器は資料数が少ないためロクロ土師器を主体とする土器として一括されていたが、ロクロ土師器坏や須恵器坏の様相から第 17・18 号住居跡、第 16・21 号住居跡、第 33 号住居跡の３つに分けることができた。それらの中で古い第 17・18 号住居跡出土土器をⅣ群土器、新しい

土器群の名称			年代	浄水場調査区	バイパス調査区	栗原市調査区	自動車道調査区	数	割合（%）
全体の名称	自動車道調査	バイパス調査		遺跡北西隅	遺跡西側		遺跡東側		
Ⅰ群土器	第１群土器	―	７世紀末～８世紀初頭	―	―		12・14・20住	3	5
Ⅱ群土器	第２群土器	A群土器	８世紀前葉	SI100 1	SI01・03・06・07・11・15・50	SI1016	1・2・3・4・5・6・7・13・15・24・27・28・29・30・34・35・36・37・38・39・41・42住	31	55
Ⅲ群土器	第３・４群土器	B群土器	８世紀中葉～後半	―	SI02・51		10・11・22・40住	6	11
Ⅳ群土器	第５群土器	―	９世紀前葉	―	―		17・18住	2	4
Ⅴ群土器	―	―	９世紀中葉	―	―		16・21住	2	4
所属時期不明				SI1002～1006（確認のみ）	―		8・9・23・25・26・31・33住	12	21

※表中の調査区の並びは遺跡内での位置を示しており、西端の浄水場調査区を左、東端付近のバイパス調査区を右とした。

表 12　土器群の併行関係と竪穴住居跡の年代　－飛鳥・奈良・平安時代－

第 16・21 号住居跡をⅤ群土器とする。第 33 号住居跡は資料数が少なく、時期は特定できない。

【Ⅰ群土器】

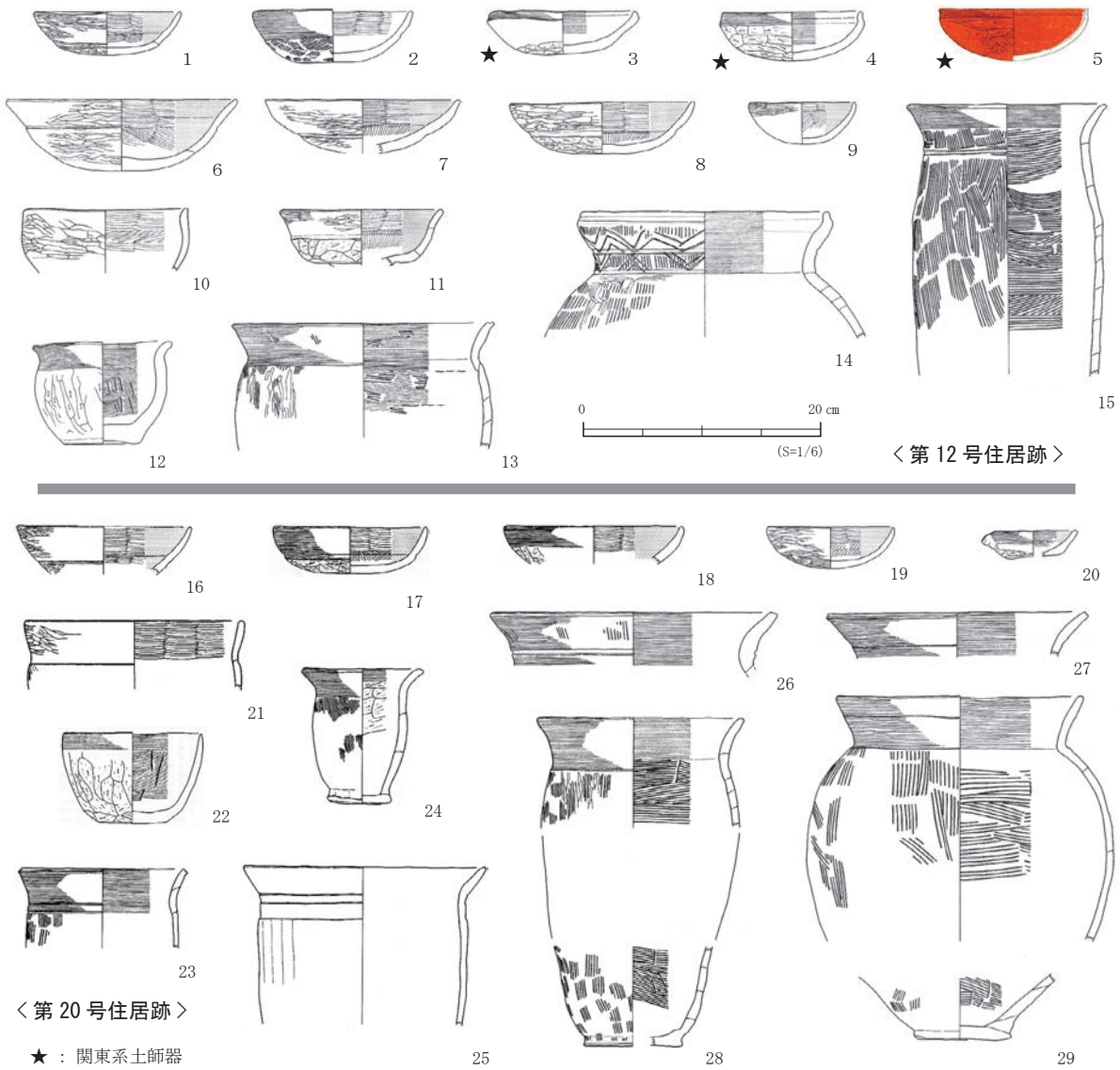
自動車道調査区の第 12・20 号住居跡に代表され、非ロクロ調整の在地土師器と少量の関東系土師器で構成される（図版 107）。須恵器は認められない。年代は７世紀末から８世紀初頭である（佐藤 2007）。在地土師器は坏・高坏・椀・大形坏（鉢）・鉢・片口・広口壺・小形甕・長胴甕（中形・大形）がある。坏は有段丸底を主体とし、無段丸底が少量伴い、いずれも内面が黒色処理（以下、内黒という）されている。広口壺や長胴甕は頸部に段を持ち、胴部調整は縦方向のハケメが主体である。坏や壺甕類に特徴的な段は、成形時に体部・胴部の内側にずらして口縁部を巻き上げる、もしくは積み上げることで段を形成しており（辻 2007）、こうした製作技法はⅡ群土器期まで継承される。

これらの中には、東北南部の土師器とは異なる特徴を持つものが含まれる。口縁部が内彎して外面にミガキまたは外面の段以下にハケメが施される坏（２・７・８・16）、口縁部が外反して外面にミガキが施される大形坏（鉢）（６）に加え、甕や広口壺は口縁端部が四角いもの（13・23・26・27）、口縁部に段や沈線が巡るもの（26・27・29）、口縁部に沈線で鋸歯文が描かれるもの（14）があり、こうした特徴は東北北部系土師器と考えられている（佐藤　前出）。関東系土師器は坏のみ認められ、口縁部が弱く屈曲するもの（５）と直立するもの（３・４）があり、器形は前者が北武蔵型暗文坏、後者は北武蔵型坏に類似する。

本段階の竪穴住居跡は遺跡北東部で３軒確認され、それぞれ 11 ～ 15 m離れている。

【Ⅱ群土器】

自動車道調査区の第１・２・６・15・24・28・29・35・36・41・42 号住居跡、浄水場調査区の SI1 住居跡、本調査 SI01・06 住居跡に代表される（図版 108）。関東系土師器を主体とし、少量の在地土師器と須恵器で構成される。年代は８世紀前葉である（佐藤　前出）。関東系土師器は坏・椀・鉢・広口壺・小形甕・長胴甕（中形・大形）・台付甕がある。坏は第１群土器と同じ北武蔵型坏や北武蔵型暗文坏の系譜を引くものと、新たに盤状坏や落合型坏といった南武蔵に出自が辿れるものが加わる（５・32）。こうした違いは、出土地点や遺構にも反映しており、遺跡東側の自動車道調査区では北武蔵型と南武蔵型坏の双方が認められるのに対し、西側のバイパス調査区や西端の浄水場調査区では北武蔵型のみ出土した。さらに、自動車道調査区では北武蔵型が６・36 号住、南武蔵型は 29・42 号住というように、住居毎に主体となる坏の様相が異なる点（鶴間 2009）も注目される（図版 103）。長胴甕は胴部上半から底部にかけてすぼまり、胴部がヘラケズリされる武蔵型甕である。



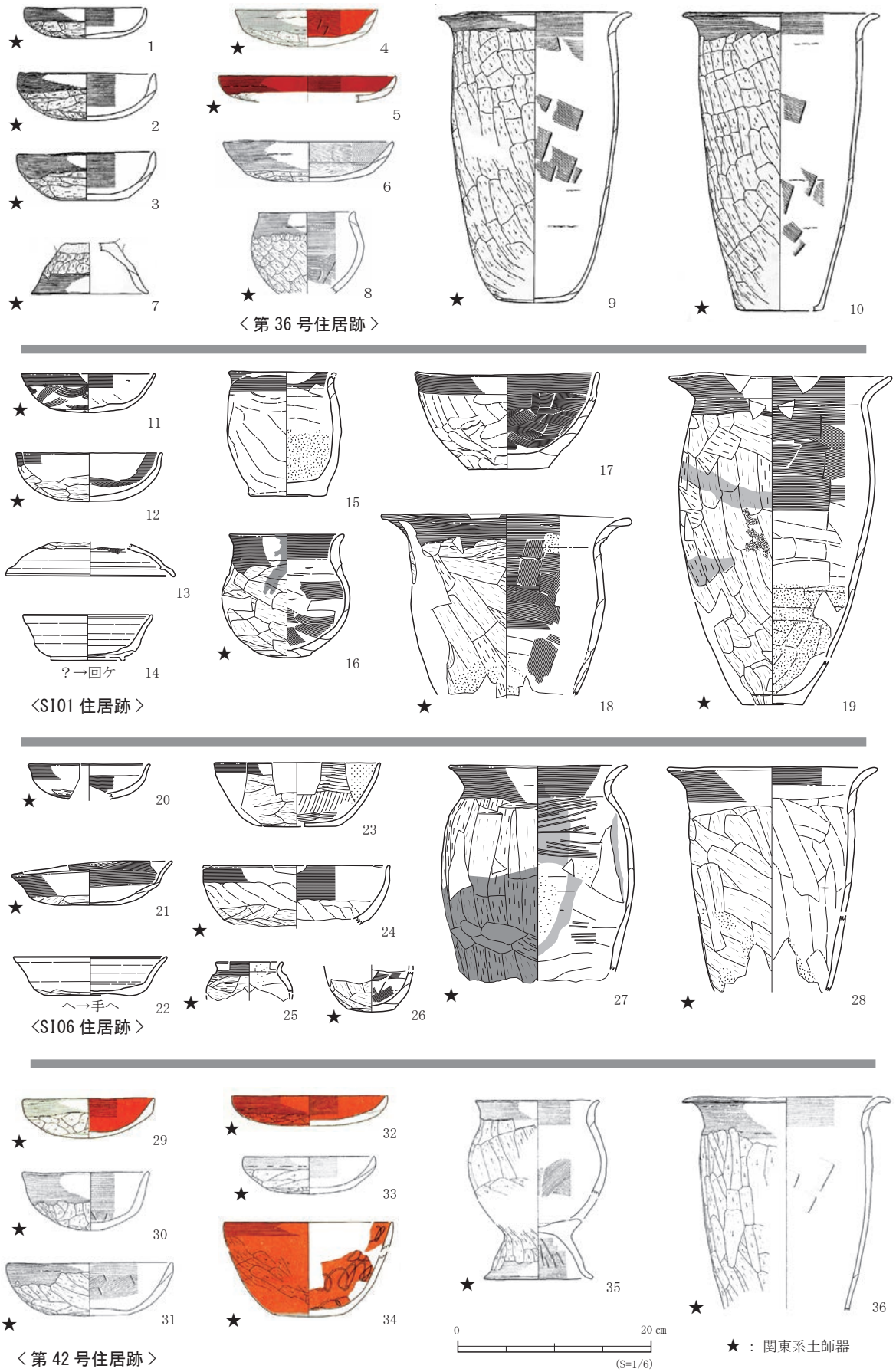
1～5・7・8・16～18：土師器坏、6：土師器大形坏、9・19：土師器ミニチュア、10：土師器埦、11：土師器高坏、21・22：土師器鉢、12・23・24：土師器小形甕、13・15・25・28：土師器長胴甕（大形）、14・26・27・29：土師器広口壺

図版 107　御駒堂遺跡出土土器の変遷（1）　－Ⅰ群土器－

ところで、図版 109 は第 18・27 号住居跡から出土した坏で、底部中央部分が下方に突出する。これらは本来、平底でつくられたのち突出部分をケズリとばして丸底に仕上げるものが、何らかの理由で突出部を残したまま焼成されたと考えられる。こうした技法は栗囲式期の丸底坏と共通しており（辻　前出）、関東系土師器坏の製作工程を知ることができる貴重な資料である。

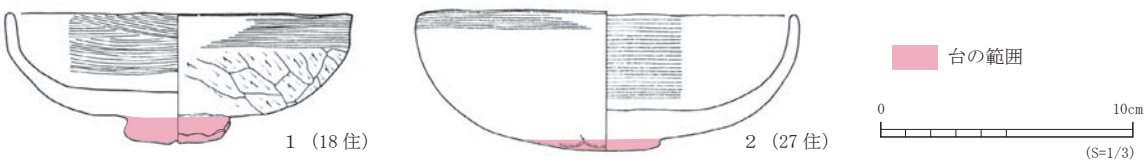
在地土師器は坏・高坏・広口壺・長胴甕がある。坏は有段丸底で内黒であるが、前代より器高が低くなる。広口壺や大形甕の特徴は前代と同じである。須恵器は丸底で回転ヘラケズリの坏、弱いカエリを有する蓋のほか、平底で手持ちヘラケズリの坏（22）などの新しい様相を示すものも認められる。

本段階の竪穴住居跡は 31 軒あり、全体の 55％（31/56）を占める。集落は 3 ～ 4 軒の住居がそれぞれ 10 ～ 15 m離れて 1 ブロック（以下、住居小群とする）を形成し、東西 1,500 m、南北 400



1～6・11・12・20・21・29～33：土師器坏、34：土師器埦、8・17：土師器鉢、7・35：土師器台付甕、15：土師器小形甕、9・10・18・19・27・28・36：土師器長胴甕（大形）、16・25・26：土師器小形広口壺、13：須恵器蓋、14：須恵器高台坏、22：須恵器坏

図版 108　御駒堂遺跡出土土器の変遷（2）　－Ⅱ群土器－



図版 109　成形段階の台を残す関東系土師器坏

mの遺跡全域に展開したと考えられる。土器は関東系土師器を主体としており、在地の要素は客体的に認められるに過ぎない。

【Ⅲ群土器】

自動車道調査区第 22 号住居跡、本調査 SI51 住居跡に代表される（図版 110）。在地土師器と須恵器からなり、前者は非ロクロ調整の土師器を主体とするが、少量のロクロ土師器食器が伴う。年代は８世紀中葉から後半である（佐藤　前出）（註 22）。

非ロクロ土師器には坏・埦・鉢・広口壺・小形甕・長胴甕（中形・大形）がある。坏は有段と無段があり、前者は前段階ほど明瞭でなくなるものや、段の位置が下がって底部が平底状や平底となるものの割合が増える（２・19 ～ 23）。埦は平底もしくは平底状丸底で、後者はミガキ調整が省略されヘラケズリだけが認められる（31･32）。長胴甕や広口壺は頸部に段が付くものとないものがあるが、胴部最大径は上半にあるものが多く（16・17・35・36）、外面調整はヘラケズリやミガキが増える。こうした器形や胴部調整の変化は、関東系土師器の影響と考えられる。また、本段階の特徴として坏埦類の段や壺甕類の頸部の段が不明瞭、もしくはないものが増える。これは、口縁部の成形技法が異なるためで、前段階までの体部や胴部の内側にずらして巻き上げる、もしくは積み上げる方法を止めたためと考えられる。

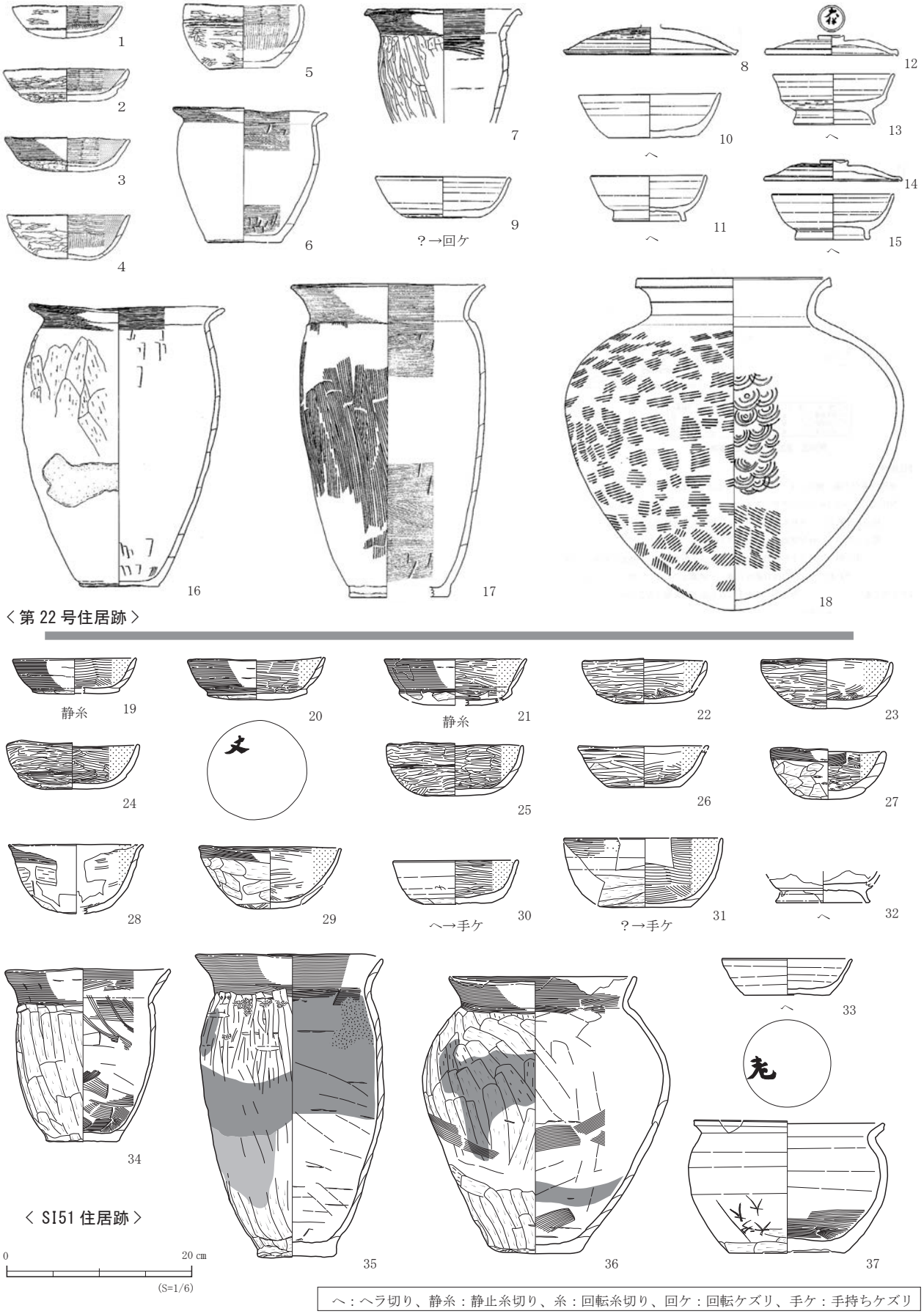
ロクロ土師器は食器のみ認められ、非ロクロ土師器の同器種と器形や法量が似る（30・31）。須恵器には坏・高台坏・蓋・鉢・中甕がある。坏は皿形でヘラ切りが多く（10・33）、高台坏もまた皿形・ヘラ切りであるが、前代より高台が高くなる（11・13・15）。蓋は天井が低く扁平で、擬宝珠つまみが付く（12・14）。中甕は丸底である（18）。

本段階の竪穴住居跡は６軒ある（註 23）。遺跡西側２軒と東側４軒あり、東西に認められるものの、前代に較べて数は著しく減る。

【Ⅳ群土器】

自動車道調査区の第 17・18 号住居跡に代表される（図版 111）。ロクロ土師器と非ロクロ土師器、須恵器で構成される。ロクロ土師器坏は皿形で体部下端から底部が回転ヘラケズリされる（１・２）。１は口縁部外面にヘラミガキが認められる。非ロクロ土師器には小形甕と長胴甕があり、後者の器形や調整は前代と共通する（５）。須恵器坏は皿形・ヘラ切りである（３）。

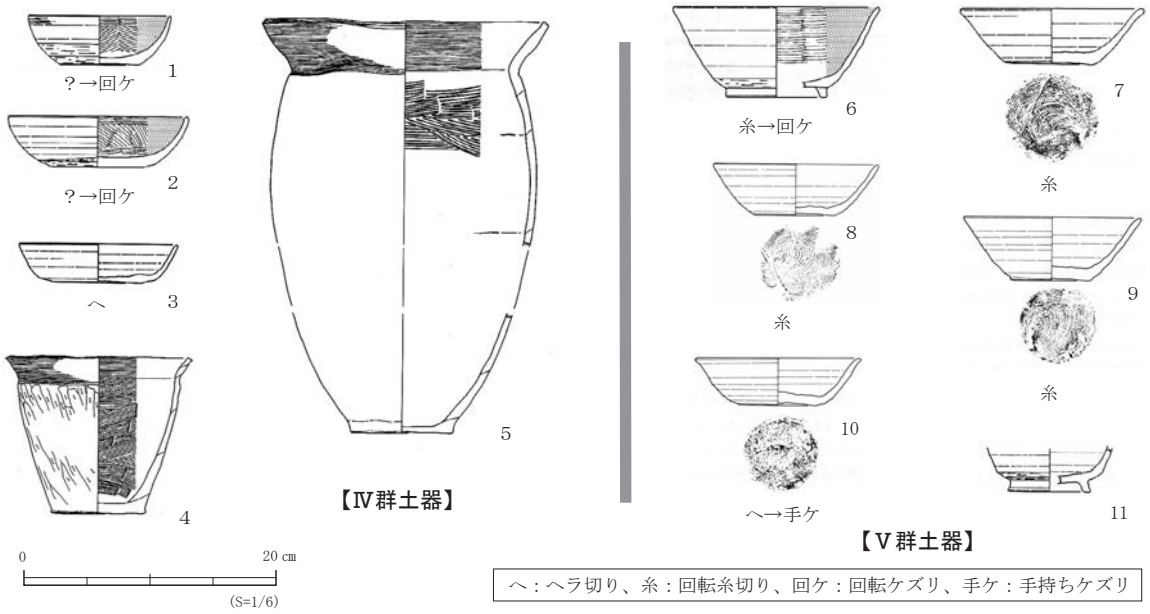
こうした特徴は、佐藤編年の八段階に後続し（佐藤　前出）、色麻町上新田遺跡出土土器（宮城県教委 1981a）や大衡村亀岡遺跡出土土器（東北学院大学考古学研究部 1979、大衡村教委 1995）に類例があることから、９世紀前葉と考えられる（註 24）。



へ：ヘラ切り、静糸：静止糸切り、糸：回転糸切り、回ケ：回転ケズリ、手ケ：手持ちケズリ

1～4・19～26：土師器坏、5・28・29：土師器椀、6・7：土師器小形甕、34：土師器長胴甕（中形）、
16・17・35：土師器長胴甕（大形）、36：土師器広口壺、27：土師器ミニチュア、30：ロクロ土師器坏、31：ロクロ土師器埦、
9・10・33：須恵器坏、11・13・15・35：須恵器高台坏、8・12・14：須恵器蓋、37：須恵器鉢、18：須恵器中甕

図版 110　御駒堂遺跡出土土器の変遷（3）　－Ⅲ群土器－



1～5：第 17 号住居跡、6・7：第 21 号住居跡、8～11：第 16 号住居跡
1・2：ロクロ土師器坏、6：ロクロ土師器高台坏、
4：土師器小形甕、5：土師器長胴甕（大形）、3・7～10：須恵器坏、11：須恵器高台坏

図版 111　御駒堂遺跡出土土器の変遷（4）　－Ⅳ・Ⅴ群土器－

本段階の竪穴住居跡は遺跡北東部で２軒確認された。両住居は東西に 2.4 mほど離れる。集落は北東部に限定され住居数も少ないことから、前代より大きく縮小したとみられる。

【Ⅴ群土器】

自動車道調査区の第 16・21 号住居跡に代表される（図版 111）。資料数は少ないもののⅣ群土器とは土師器や須恵器の器形や製作技法が異なることから、新たに設定した。ロクロ土師器と須恵器で構成される。ロクロ土師器高台坏は逆台形で回転糸切りののち、体部下端から底部に回転ヘラケズリが施される（6）。須恵器には坏・高台坏・大甕がある。坏は逆台形でヘラ切りや回転糸切りがあり、後者が多い（7～9）。前者には再調整で手持ちヘラケズリが認められるものがある（10）。こうした特徴は、多賀城跡 SE2101B 井戸跡出土土器（多賀研 1992）などに類例があり、9 世紀中葉と考えられる。

本段階の竪穴住居跡は遺跡北東部で２軒確認された。集落の位置や規模は前代とほぼ同じとみられる。

(2) 竪穴住居跡の検討

これまでの調査で確認された古代の竪穴住居跡は 55 軒で、うち 50 軒を精査し、その結果、33 軒の所属時期が判明した。これらの属性は表 13 にまとめている。集落の開始は 7 世紀末～8 世紀初頭で 9 世紀中葉まで続くが、8 世紀末～9 世紀初頭の住居は確認されていない。ここでは、住居の規模や主柱配置、周溝・壁材、入口について検討する（図版 112・113）。

その際、何度も出てくる自動車道調査区の第○号住居跡は○住とする。また、浄水場調査区とバイパス調査区の遺構名は、前者を SI1001 ～ 1006、後者は SI01 ～ 51 と呼んで区別する。

住居名	平面形	規模		方向	火災	主柱配置類型（主柱本数/柱痕跡）	入口Pit	周溝・壁材	カマド							貯蔵穴	灰白色火山灰	時期	8世紀の文字資料	備考
									位置	分類	燃焼部			煙道部	廃絶祭祀					
		m	分類								本体	両脇Pit	支脚/位置	長(m)/構造						
御駒堂遺跡1976・1978年調査（宮城県文報83）																				
1住	長方形	7.5×6.5	特大	N-1°-E	○	a（4/丸）	○	○	北壁中央	3b	本体突出。白色粘土・土師甕（焚口）	○	円筒/？	0.3	×	○右	○	8c前葉	×	
2住	方形	5.2×4.9	大形	E-84°-N	×	a（4/丸）	×	○	東壁中央	2b	白色粘土・土師甕（焚口）	×	×	0.6？	—	○右隅	○	8c前葉	×	カマド内から須恵器蓋１点
3住	方形	5.0×4.5	中形	N-2°-W	×	a（4/丸）	○	○	北壁中央	3a	本体突出。白色粘土	×	×	0.3	△	×	×	8c前葉	×	カマド内から土師器坏３点
4住	方形	3.7×3.6	小形	N-5°-W	×	×	×	○	北壁中央	3a	本体突出。白色粘土	×	？	×	△	○右隅	×	8c前葉	×	突出部奥壁＝短煙道奥壁。カマド本体崩落土下から土師器坏１点
5住	隅丸方形	4.5×4.4	中形	N-7°-E	×	×	×	○	北壁中央	3a	本体突出。白色粘土	×	×	×	×	×	×	8c前葉	×	
6住	方形	5.9×5.5	大形	N-1°-E	×	a（4/丸）	○	○	北壁中央	3c	本体突出。白色粘土・土師甕（本体芯）連接土師甕（焚口天井）	×	×	0.3	△	○右隅	○	8c前葉	×	図にないが、写真から土器連接カマドと判断。カマド内から土師器小型壺１点
7住	長方形	5.2×4.0	中形	N-6°-W	×	d（2/丸）	×	○	北壁中央	3a	本体突出。白色粘土	×	×	0.6	×	○右隅	×	8c前葉	×	突出部奥壁＝短煙道奥壁
8住	方形	3.4×2.9	小形	N-14°-E	×	×	×	○	北壁中央	3a	本体突出。黄褐色粘土	×	土師甕/左	0.6	×	×	×	—	—	煙道平面は三角形
9住	方形	2.6×2.5	小形	E-3°-S	×	×	×	×	東壁中央	1a	地山削出し・白色粘土	×	×	1.0	×	×	×	—	—	
10住	方形	4.7×4.2	中形	E-12°-N	×	a？	×	部分	東壁南側	1a	白色粘土	×	×	1.4	×	○右	×	8c中葉～後半	×	主柱は２本未確認
11住	方形	4.7×4.5	中形	N-8°-E	×	a（4/丸）	○	○	北壁中央	1b	地山削出し・黄褐色粘土・切石（焚口両側～天井）	×	×	1.5	△	○両側	×	8c中葉～後半	×	カマド内から土師器坏１点
12住	方形	6.7×6.4	特大	N-14°-W	×	a（4/丸）	○	○	北壁中央	1a	黄褐色粘土	×	土師鉢/中央	1.6/地下	×	×	×	7c末～8c初頭	×	
13住	隅丸方形	5.1×5.2	大形	N-9°-W	×	a（4/丸）	○	○	北壁中央	3a	本体突出。白色粘土	○	×	0.6	×	×	×	8c前葉	×	
14住	方形	4.9×4.6	中形	N-19°-W	×	a（4/丸）	×	○	北壁中央	1b	地山削出し・白色粘土・切石（焚口）	×	×	1.0/地下	△	○右	×	7c末～8c初頭	×	カマド内から土師器坏１点
15住	方形	7.7×7.6	特大	N-3°-W	×	a（4/丸）	○	○	北壁中央	3a	本体突出。白色粘土	○	×	0.5	×	○右隅	×	8c前葉	×	
16A住	長方形	（7.3×6.8）	特大	（E-17°-S）	×	a？	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
16B住	長方形	7.5×6.8	特大	E-17°-S	×	b→c（4→6/丸＋壁柱？、壁際はカマド右）	×	×	東壁南側	1a	—	×	×	（1.3）/地下	×	○右隅	×	9c中葉		主柱2本はカマド脇辺
17住	方形	3.5×3.5	小形	S-11°-E	○	×	×	×	南壁東側	1a	白色粘土	×	切石/左	1.3	×	×	×	9c前葉		
18住	方形	3.6×3.4	小形	N-15°-W	×	×	×	○	東壁南側・北壁中央	1a	（北）地山削出し	×	×	1.2	×	×	×	9c前葉		東カマドは本体撤去・北カマドは削出し＝２個併用→北カマドのみ使用
20住	隅丸方形	5.2×4.7	中形	N-34°-W	×	a（4/丸）	○	○	北壁中央	1b	地山削出し・白色粘土・切石（焚口天井）	×	×	1.5	×	○右	×	7c末～8c初頭	×	
21住	方形	4.4×4.0	中形	E-3°-N	×	×	×	○	東壁南側	3a	本体突出。白色粘土	×	×	×	×	○右	×	9c中葉		突出部奥壁＝短煙道奥壁
22住	長方形	5.8×5.1	大形	S-12°-E	○	a（4/丸）	×	○	南壁東側	1b	白色粘土・切石（焚口天井）	×	土師甕/左	1.2/半地下	×	○右	×	8c中葉～後半	墨書「大伴」	煙道部内壁は白色粘土。多量の須恵器と紡錘車を保有
23住	方形	3.7×3.5	小形	—	×	×	×	×	北壁中央	1or2	地山削出し	×	—	—	—	×	×	—	—	
24B住	方形	4.3×4.2	中形	E-20°-N	○	×	×	○	東壁南側	3a	本体突出。白色粘土	×	×	0.4	○？	×	×	8c前葉	×	カマド内から土師器坏１点
25住	方形	—	—	—	×	—	—	×	北壁中央？	1or2	白色粘土	×	×	—	×	—	×	—	—	
26住	隅丸方形	2.5×2.5	小形	E-18°-S	×	×	×	×	東壁南側	1a	地山削出し・黄褐色粘土	×	×	1.0	×	○右	×	—	—	
27住	方形	5.2×5.2	大形	N-1°-W	×	a（4/丸）	×	部分	北壁中央	3a	本体突出。白色粘土	○	×	0.2	×	×	×	8c前葉	×	
28A住	方形	6.4×6.1	大形	（N-7°-W）	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
28B住	長方形	7.0×6.1	特大	N-7°-W	×	a（4/丸）	○	○	北壁中央	3a	本体突出。白色粘土	○	×	0.3	○？	×	×	8c前葉	×	カマド内から土師器坏１点
29住	方形	4.8×4.7	中形	（E-2°-N）	×	a（4/丸）	×	○	東壁南側	3c	本体突出。白色粘土・土師甕（焚口）・連接土師甕（焚口天井）	×	×	0.2	×	×	○	8c前葉	×	土器連接カマド
30住	方形	3.7×3.6	小形	N-7°-W	×	×	○	○	北壁中央	3a	本体突出。白色粘土	×	×	×	×	○右隅	○	8c前葉	×	突出部奥壁＝短煙道奥壁
31住	方形	3.1×3.1	小形	—	×	×	×	○？	—	—	—	—	—	—	—	—	×	—	—	
33住	方形	5.9×5.9？	大形	（S-1°-E）	×	c（6/丸、壁際２本はカマドと同じ辺）	？	○？	南壁西側	1or2	白色粘土	×	×	—	×	○右隅	×	9c～		主柱2本はカマドと同壁
34住	長方形	4.7×3.5	中形	（N-17°-W）	×	×	○？	○	北壁東側	3a	本体突出。白色粘土	×	×	×	×	○右隅	×	8c前葉	×	突出部奥壁＝短煙道奥壁
35住	長方形	3.7×2.8	小形	E-6°-S	×	×	×	○？	東壁北側	3d	本体突出。白色粘土・土師甕（本体芯）	×	×	×	×	—	×	8c前葉	×	突出部奥壁＝短煙道奥壁
36A住	方形	（3.2×3.1）	小形	（E-12°-N）	×	b（4、2：壁際はカマド右）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
36B住	方形	3.7×3.6	小形	E-12°-N	×	b（4、2：壁際はカマド右）	×	○	東塀南側	3c	本体突出。白色粘土・連接土師甕（焚口天井）	×	×	0.3	×	○右隅	○	8c前葉	×	主柱２本はカマド脇辺。図にないが、写真から土器連接カマドと判断。規模が小さいので、主柱は住居内の２本か？
37住	長方形	2.7×2.4	小形	E-15°-S	×	×	×	○	東壁南端	3a	本体突出。白色粘土	×	×	×	×	×	×	8c前葉	×	突出部奥壁＝短煙道奥壁
38住	方形	3.2×3.2	小形	N-5°-E	×	×	×	○	北壁中央	3a	本体突出。白色粘土	×	—	×	○？	×	×	8c前葉	×	カマド本体崩落土下から倒位の土師器坏２点。突出部奥壁＝短煙道奥壁
39住	方形	—	—	—	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	×	8c前葉	×	
40住	方形	4.1×4.0	中形	E-17°-N	×	f	×	○	東壁中央	4a	本体突出。白色粘土	×	—	1.4	○？	○右隅	○	8c中葉～後半	×	カマド内から須恵器横瓶１点
41住	方形	4.5×4.5？	中形	N-4°-W	×	a（4/丸）	—	○	北壁中央	3c	本体突出。白色粘土・連接土師甕（焚口天井）	×	円筒？/中央	×	×	×	×	8c前葉	×	突出部奥壁＝短煙道奥壁
42住	方形	5.1×5.0	大形	N-4°-E	×	a（4/丸）	×	○	北壁中央	3a	本体突出。白色粘土	×	×	×	×	×	○	8c前葉	×	突出部奥壁＝短煙道奥壁
御駒堂遺跡2009-15年調査　（宮城県文報243）																				
SI01	方形	5.7×5.6	大形	N-2°-E	×	a（4/角）	○	○	北壁中央	3b	本体突出。白色粘土・土師甕（焚口）	×	円筒/？	0.3	×	○右	○	8c前葉	×	
SI02	方形	3.7×3.6	小形	N-1°-W	×	f	×	○	北壁中央	4a	本体突出。白色粘土	×	×	1.4	○/土師坏	×	○	8c中葉～後半	×	
SI03	方形	6.4×6.3	特大	N-2°-W	×	a（4/丸）	○	○？	北壁中央	3b	本体突出。白色粘土・土師甕（焚口）	×	棒状/左？	0.3	×	×	×	8c前葉	×	
SI06	方形	4.9×4.7	中形	N-2°-E	○	a（4/角）	○	○	北壁中央	3a	本体突出。白色粘土	×	円筒/左	×	○/土師甕	○右隅	○	8c前葉	×	突出部奥壁＝短煙道奥壁
SI07	方形	4.2×？	—	N-4°-E	×	a（4？/丸）	—	部分	北壁中央？	4a	本体突出。白色粘土	×	棒状/左	1.2/半地下	×	○右隅	○	8c前葉	×	煙道天井は白色粘土
SI11	方形？	—	—	N-2°-E	×	—	—	○？	北壁？	—	—	—	—	—	—	—	○	8c前葉	×	
SI15	長方形	4.1×3.4	小形	N-23°-W	×	f	×	○	北壁中央	3a	本体突出。白色粘土	×	棒状/？	0.5	×	×	×	8c前葉	×	
SI50	方形	3.8～4.0×3.7	小形	N-4°-W	×	e（1/丸）	×	○	東壁中央	3a	本体突出。白色粘土	×	×	0.6	×	×	○	8c前葉	×	
SI51	方形	5.3×？	—	N-12°-W	○	a（4？/角）	○	○？	北壁中央？	1a	白色粘土	×	×	0.6～/半地下	○/土師ミニ坏	—	○	8c中葉～後半	墨書「丈」「老」、刻書「子」、「大大大□」	煙道天井は白色粘土。土師坏底に馬のヘラ描き
御駒堂遺跡2001・2002年調査　（志波姫町文報1）																				
SI1001	隅丸長方形	6.4×4.0	大形	N-6°-W	×	f	×	○	東壁南側	4a	本体突出。白色粘土	×	×	1.4？/半地下	×	○右隅	×	8c前葉	×	旧町分を含む栗原市教委調査の遺構№は、1001からとする
SI1002	方形？	4.2×？	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	確認のみ
SI1003	方形？	5.4×？	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	確認のみ
SI1004	方形？	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	確認のみ
SI1005	方形？	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	確認のみ
SI1006	方形？	4.6×4.2	中形	N-10°-E	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.2？	—	—	—	—	—	確認のみ
御駒堂遺跡2013年調査　　（栗原市教委）																				
SI1016	方形？	3～×3～	—						北壁中央？	—	本体突出。白色粘土	×	×	×	×	×	○	8c前葉	—	確認のみ

※推定値は（　）を付けて表した。
※住居の規模は八木氏の分類、超大（60㎡以上）・特大（40～60㎡未満）・大形（25～40㎡未満）・中形（15～25㎡未満）・小形（15㎡未満）に従った（八木1998）。
※御駒堂遺跡1976・1978の方向は、カマドで測定している。
※主柱配置は、a）４本が住居の対角線上に配置、b）２本が住居内部、２本は壁際にあり、それらを結んだ線は長方形となるもの、c）６本のうち４本が住居の対角線上、２本は壁際にあり、それらを結んだ線は長方形となるもの、d）住居中央に２本配置されるもの、e）住居中央に１本配置されるもの、f）主柱がないものの６類に分けられる。

表 13　御駒堂遺跡の竪穴住居跡属性表

【規模】

住居面積から超大形（60㎡以上）、特大形（40㎡以上 60㎡未満）、大形（25㎡以上 40㎡未満）、中形（15㎡以上 25㎡未満）、小形（15㎡未満）に分けると（八木光則 1998）、Ⅰ群土器期は特大形１・中形２、Ⅱ群土器期は特大形４・大形７・中形８・小形８、Ⅲ群土器期は大形１・中形３・小形１、Ⅳ群土器期は小形２、Ⅴ群土器期が特大形１・中形１である。

数が多いⅡ群土器期についてみると、自動車道調査区は中形以上の３～４軒が 10 ～ 15 m離れて一つのグループを形成しており（以下、住居小群とする）、小形住居は南東部で５軒まとまっていた。一方、バイパス調査区では小形住居を含めた３～４軒の住居小群が認められる。

【主柱配置】

主柱配置は、ａ）４本が住居の対角線上に配置され、それらを結んだ線は正方形に近いもの、ｂ）４本のうち２本が住居内部、２本は壁際に配置され、それらを結んだ線は長方形となるもの、ｃ）６本のうち４本が住居の対角線上、２本は壁際に配置され、それらを結んだ線は長方形となるもの、ｄ）住居中央に２本配置されるもの、ｅ）住居中央に１本配置されるもの、ｆ）主柱がないものの６類に分けられる。柱は丸柱が多いが、角柱も認められる（SI01・06・51）。

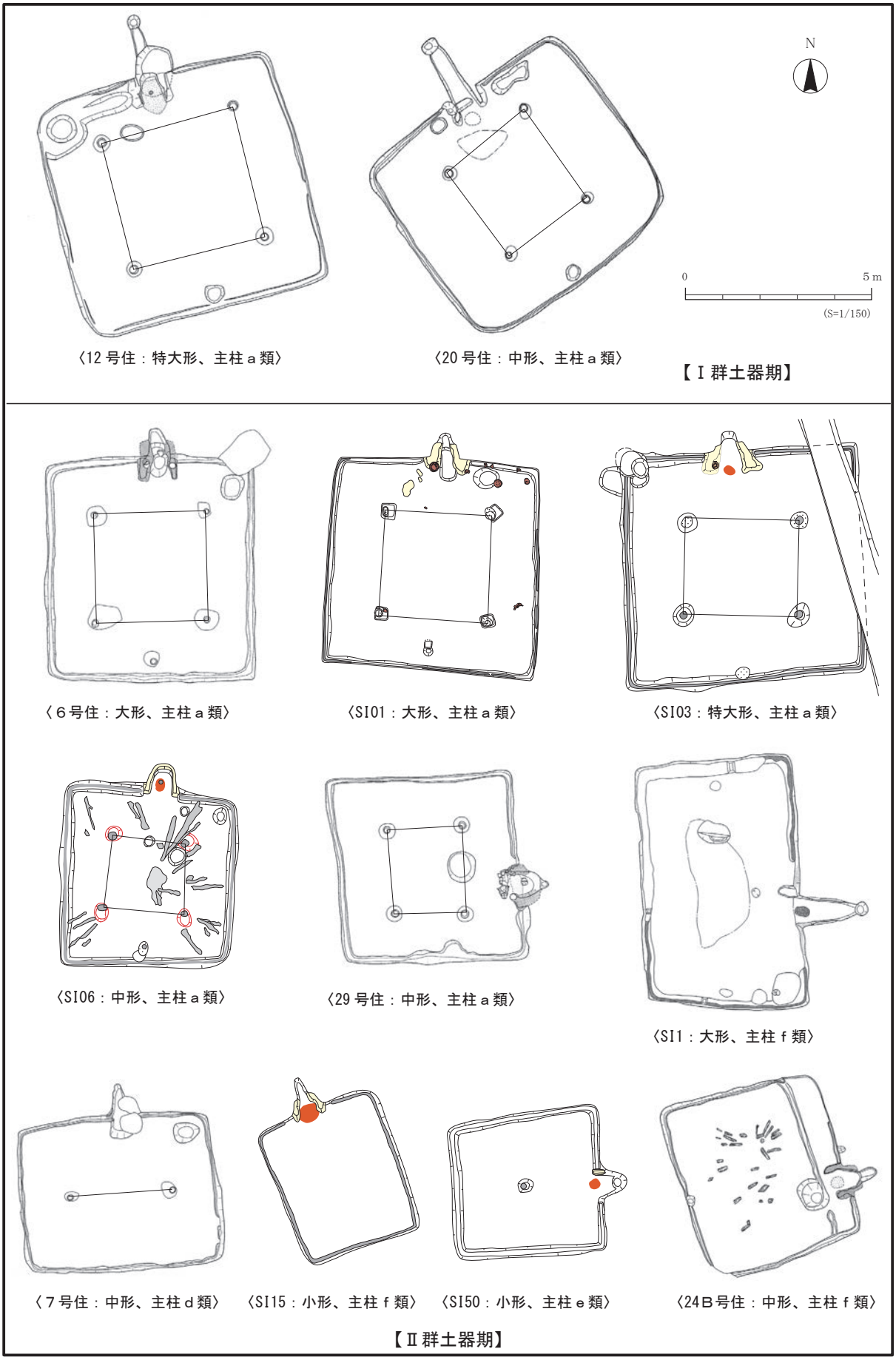
中形以上の 28 軒はａ類が 19 軒と多い。この傾向は、面積を算出できないもののうち、一辺４ｍを超える住居を加えるとさらに数が増えることから、時期に関係なく中形以上の住居のスタンダードといえる。それらの中にはⅢ群土器期の 22 住のように、柱を結んだ線が歪んだ方形になるものがある（図版 113）。ｂ・ｃ類は主柱の片側が壁際に寄り、それらを結んだ線が長方形となる。ｂ類はⅡ群土器期に１軒（36B 住）認められるが、他の２軒（ｂ：16B 住、ｃ：33 住）はⅣ群土器期以降である。ｄ類は中形の平面長方形で１軒（７住）、ｅ・ｆ類は、時期にかかわらず小形住居でのみ認められる。

【周溝・壁材】

周溝は面積のわかる 46 軒のうち、38 軒でカマド部分を除いて認められ、住居規模に関係なく全周する傾向が高い。また、浄水場調査区やバイパス調査区では、周溝を持つ住居 10 軒のうち、７軒で壁材が確認できたことから、周溝を有する住居の７割ほどは壁材が巡っていたとみられる（註 25）。

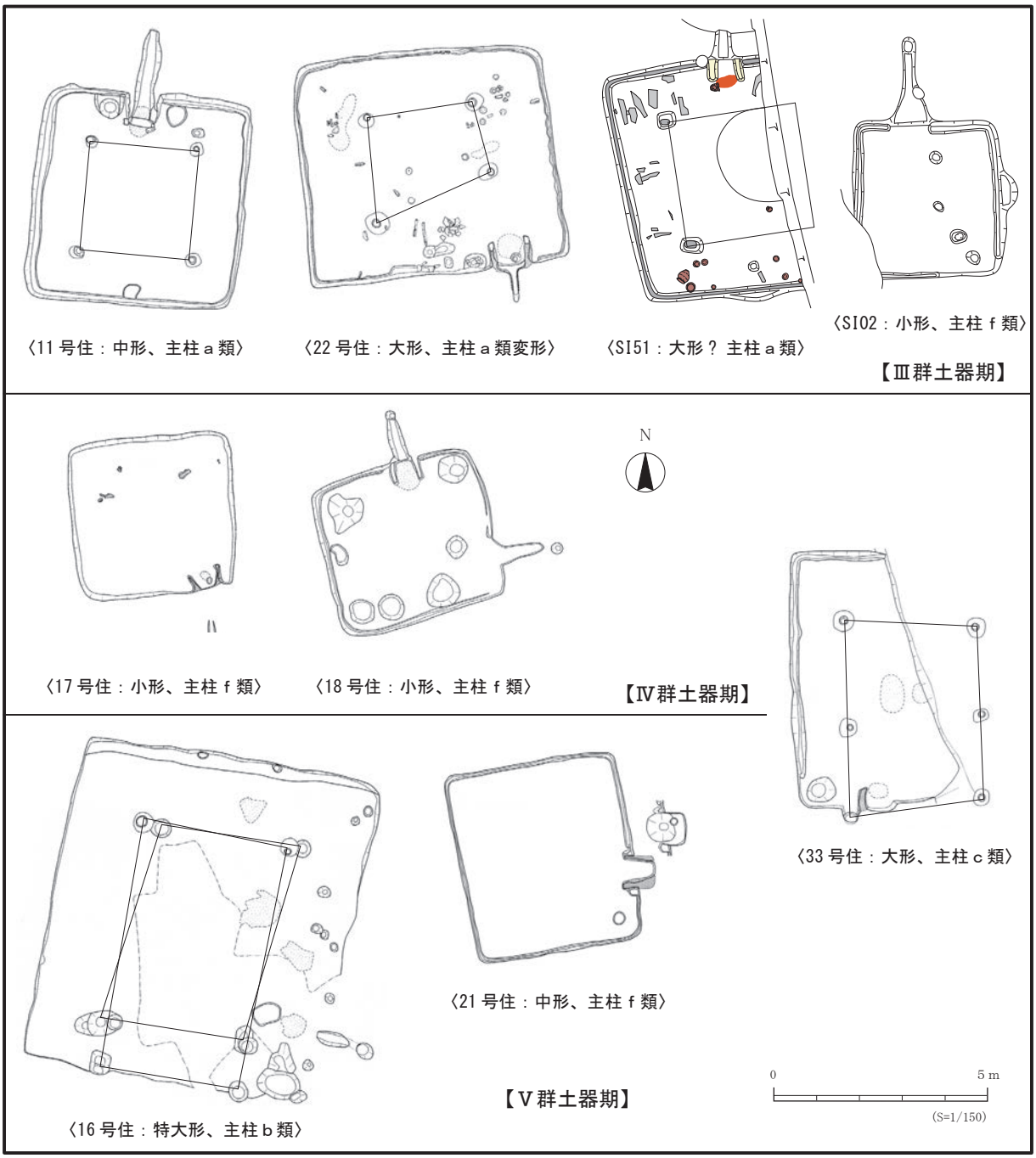
【入口】

住居の入口が検討できる 45 軒うち、15 軒で入口ピットを確認した。位置はカマド反対側の壁際中央付近である。その中で、13 軒は主柱配置がａ類である。また、主柱配置ｂ・ｃ類は柱２本が壁際にあるため、ａタイプとは上屋構造が異なる。具体的には、住居内に柱のある側が入母屋もしくは寄棟で、壁際に柱を立てた側が切妻となり、入口もそちらに設けられた可能性が高い。この場合、16B・36B 住はカマドに対して入口が右に位置することになり、入口ピットが一様にカマド反対辺に設けられたのとは大きく異なる。一方、33 住は南壁に柱を設けており、カマド側の住居外へも空間を拡張して入口を設けたと考えられる（註 26）。



〈　〉内は住居№：規模、主柱配置それぞれの類型を示す

図版 112　竪穴住居の変遷（１）－Ⅰ群・Ⅱ群土器期



〈　〉内は住居№：規模、主柱配置それぞれの類型を示す

図版 113　竪穴住居の変遷（２）－Ⅲ群～Ⅴ群土器期

(3) カマドの検討

カマドが確認できた住居跡は 44 軒ある（自動車道 36、町１、バイパス７）。これらを本体と煙道の構造から分類し、時期別に構造や支脚、貯蔵穴の検討を行う（図版 114）。

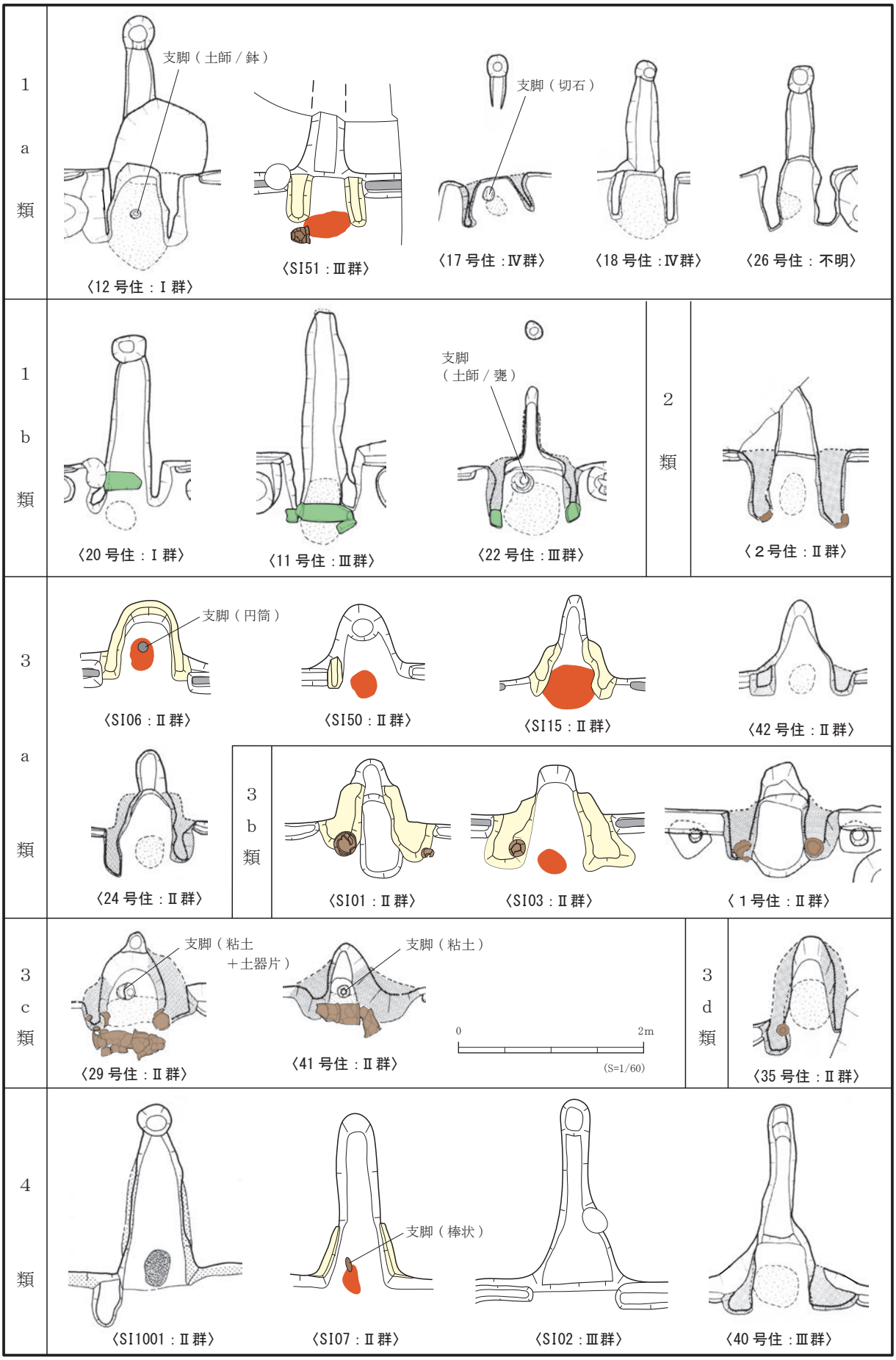
【分類】

〈１類カマド〉

本体が住居内につくられ、長煙道が付く。12 軒ある。

・１ａ類：本体は全体が黄褐色粘土や白色粘土でつくられる。下部のみ地山削出しとなるものがある

…９・10・12・16B・17・18・26住、SI51



図版 114　カマドの分類と所属時期

・１ｂ類：本体は１ａ類と同じだが、焚口は凝灰岩切石で補強される…11・14・20・22住

〈２類カマド〉

本体が住居内につくられ、短煙道が付く。１軒ある（２住）。本体は白色粘土で、焚口が土器で補強される。

〈３類カマド〉

本体は住居壁を掘り込み白色粘土でつくられ、その奥が煙道奥壁と一致する、もしくは長さが0.7m以下の短煙道が付く。27軒ある。

・３ａ類：本体全体が住居外につくられるものと、焚口付近が住居内につくられるものとがある…３・４・５・７・８・13・15・21・24B・27・28B・30・34・37・38・42住、SI06・15・50

・３ｂ類：本体は３ａ類と同じだが、焚口は土器で補強される…1住・SI01・03

・３ｃ類：３ｂ類に加え、焚口天井材として胴下半部と口縁部を入子状に連接した土師器甕が使われる…６・29・36B・41住

・３ｄ類：本体は３ａ類と同じだが、その芯を土器で補強されるもの…35住

〈４類カマド〉

本体は住居壁を掘り込み白色粘土でつくられ、その奥に長さが0.9ｍ以上の長煙道が付く。本体全体が住居外につくられるものと、焚口付近が住居内につくられるものとがある。４軒ある（40住、SI1001、SI02・07）。本類は煙道部が、側壁や天井部が白色粘土でつくられていることから半地下式と考えられる。

カマド本体は２～４類が白色粘土、１類が白色粘土もしくは基本層位第Ⅵ層の黄褐色シルト質粘土である。白色粘土は第Ⅵ層の0.9ｍほど下層にあるため、素材を得るのに手間や労力が必要となる。それでも使われた理由としては、２～４類カマドは本体が住居外に構築されたり、煙道が煙突状となるなど１類に較べて地上での露出部分が多いため、第Ⅵ層より粘度が高いという特性を持っていたためと考えられる。

【各期の様相】

〈Ⅰ群土器期〉

１ａ類が１例（12住）と１ｂ類が２例（14・20住）認められる。本体は１ａ類が黄褐色粘土、１ｂ類は下部が地山削出しで上部は白色粘土で構築される。これらはすべて北壁中央に設けられる。支脚がわかるのは１例（12住）で、中央に土師器鉢が倒位に据えられており、一つ掛けと判断できる。貯蔵穴は２例（14・20住）ともカマド右に設けられた。

〈Ⅱ群土器期〉

構造がわかるのは28例と最も多い。２類が１例（２住）、３ａ類は18例（３・４・５・７・13・15・24B・27・28B・30・34・37・38・42住、SI03・06・15・50）、３ｂ類が２例（１住・SI01）、３ｃ類が４例（６・29・36B・41住）、３ｄ類が１例（35住）、４類が２例（SI07・1001）

認められる。本体はすべて白色粘土が使われている。カマドの位置は北壁中央が 19 例、北壁東側が１例、東壁中央が２例、東壁北側が１例、東壁南側が４例、東壁南端が１例であり、北壁中央が７割近くを占める。１類は認められず、３類が 25 例と突出して多い。また、３類のうち５例（１・13・15・27・28B 住）でカマド両脇にピットが認められた。

支脚がわかるのは４例あり、中央が１例（円筒状：41 住）、左側が３例（棒状：SI03・07、円筒状：SI06）で、前者は一つ掛け、後者は横二つ掛けと考えられる。ほかに３例（円筒状：１住・SI01、棒状：SI15）は、支脚のみ出土した。貯蔵穴は 13 例ともカマド右で、うち、11 例は住居隅に設けられた。

〈Ⅲ群土器期〉

６例あり、内訳は１ａ類が２例（10 住、SI51）、１ｂ類が２例（11・22 住）、４類が２例（40 住、SI02）である。前代になかった１類が再び認められるようになり、６例中４例と主体を占める。本体は５例が白色粘土で、１例のみ下部が地山削出しで上部は黄褐色粘土である（11 住）。カマドの位置は北壁中央が３例、東壁中央・東壁南側・南壁東側が１例ずつで、前代に較べて北壁以外につくられる割合が増える。支脚がわかるのは１例で、左側に土師器小形甕を倒位で据えており、横二つ掛けと考えられる。貯蔵穴は３例認められ、２例がカマド右、１例はカマド右の住居隅に設けられた。

〈Ⅳ群土器期〉

１ａ類が２例（17・18 住）あり、本体は 17 住が白色粘土、18 住は北壁の下部が地山削出しである。カマドの位置は 17 住が南壁東側で、18 住は当初、東壁南側と北壁中央が併存しており、のちに前者が廃された。支脚は 17 住で切石を左側に据えており、横二つ掛けと考えられる。

〈Ⅴ群土器期〉

１ａ類（16B 住）と３ａ類（21 住）がある。本体は前者が不明で、後者は白色粘土である。ともに東壁南側につくられた。支脚の位置は不明で、貯蔵穴はカマド右にあり、16B 住は住居隅に位置する。

本遺跡では、Ⅰ～Ⅴ群土器期をとおしてカマドの造替えは少ない。カマドの位置はⅡ群土器期まで北壁中央が多いが、Ⅲ群土器期以降は東壁や南壁につくられる割合が増える。

１類カマドは、Ⅱ群を除く各土器群で認められる。一方、Ⅱ群土器期の周辺集落跡では、在地土師器を主体とする佐内屋敷遺跡６～８住（宮城県教委 1983）で１類カマドが確認できる。さらに、栗原郡域では７世紀後半以前のカマドの様相が不明であるが、隣接する桃生郡域の角山遺跡（宮城県教委 2005）や黒川以北十郡西部の地蔵車遺跡（加美町教委 2005）をみると、６世紀中葉から７世紀前半のカマドは１ａ・１ｂ類である。こうしたことから、１類は古墳時代後期以来の伝統的な形態と考えられ、１類を在地型カマドと呼びたい（村田 2000・2004）。

３類や４類はⅡ群土器期に突如出現してカマドの主体を占めるが、Ⅲ群土器期以降は急減する。最大の特徴は本体が住居外に突出する点で、類例は関東地方に求められるため、関東型カマドと呼ぶ（村田　前出）。Ⅱ群土器期は集落が急激に拡大し、そのカマドは関東型、土器も関東系土師器が主体を占める。こうしたあり方は、Ⅰ群土器期とは明確に異なり、関東地方からの移民が戸単位で行われたことを示唆する。２類については、本体が住居内にある点が１類に、短煙道である点は３類に共通す

ることから、両者の要素を取り入れた折衷型カマドと考えられる。

(4) 集落の変遷

発掘調査で確認された竪穴住居跡の年代は、表 12 のようにまとめられた。集落の開始は７世紀末～８世紀初頭（Ⅰ群土器期）で、遺跡東端に３軒を一単位とする小規模なムラが営まれた。その構成員は在地民（蝦夷）であるが、関東系土師器の食器が少量共伴することから、同地域とある程度の交流があったと想定できる。

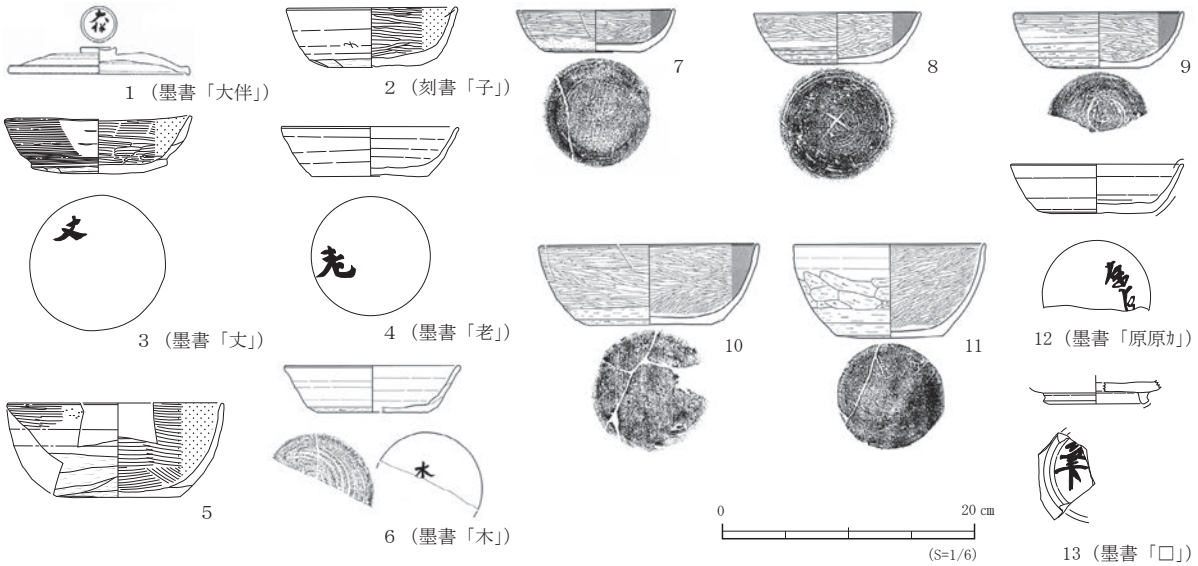
８世紀前葉（Ⅱ群土器期）は本遺跡の最盛期で、他時期に較べて遺構や遺物量が圧倒的に多い。カマドは関東型と少数の折衷型で占められ、土器もまた食膳具・貯蔵具・煮炊具を含めて関東系土師器が主体となり、在地の要素は土師器の一部にみられるに過ぎない。こうした集落が短期間かつ遺跡全体に形成されたのは、関東地方（坂東）からの大規模かつ直接的な移住があったことを示している（宮城県教委 1982）、その故地は、関東系土師器のあり方から、上野から北武蔵を中心とする坂東北西部と南武蔵を中心とする坂東南部と考えられる。

当期の集落は、３～４軒の住居が一つの単位を構成する住居小群が遺跡全体に展開したとみられる。その内容をみると、東側の自動車道調査区と西側のバイパス調査区・浄水場調査区では、後者のカマドに３ｃ・ｄ類や両脇ピットがなくバリエーションが少ない、南武蔵型坏が出土していない、といった違いが認められる。こうした点は、移民の出身地や移配時期の違いを示す可能性が考えられる。

８世紀中葉～後半（Ⅲ群土器期）は、遺跡東西で住居跡が認められるものの、数は前代より著しく減り、次の段階（８世紀末～９世紀初頭）の住居は確認されていない。関東系土師器は姿を消し、カマドもまた関東型が急減し在地型が復活する。本段階の SI51 は、ロクロ土師器や墨書土器が共伴する。伊治城周辺集落では、前者が本遺跡 SI51 のほかに城下遺跡 SI16 Ｂがあるのみで出土例がきわめて少ない。後者もまた、本遺跡の３例のほかに大天馬遺跡で１例、原田遺跡で２例認められるだけである（図版 115）。さらに、自動車道調査区の 22 住のように多様な器種で構成される須恵器は当期から認められる。

栗原郡におけるロクロ土師器や須恵器の生産は、神護景雲元年（767）の伊治城造営を契機として開始しており、墨書土器も伊治城から広まったと考えられる。それとほぼ同時期にこれらを保有した集落は、伊治城との結びつきが強く、そこからもたらされた、あるいはムラの中に識字者がいるといった、他に較べて特別な性格を有した可能性が考えられる（註 27）。そして、22 住・SI51 とも火災に遭っていることは、時期的にみてきわめて示唆的であり、この点については後述したい。

９世紀前葉（Ⅳ群土器期）と中葉（Ⅴ群土器期）の住居跡は、遺跡北東部で２軒ずつ認められたのみであり、集落はⅢ群土器期よりもいっそう縮小した。集落は９世紀中葉のうちに廃絶したとみられる。



1：須恵器蓋、4・6・12：須恵器坏、13：須恵器高台坏、3：土師器坏、2・7～9：ロクロ土師器坏、5・10・11：ロクロ土師器埦
1～5：御駒堂遺跡 22 住、2～5：御駒堂遺跡 SI51、6：大天馬遺跡 SI6、7～11：城下遺跡 SI16B、12・13：原田遺跡 SI30

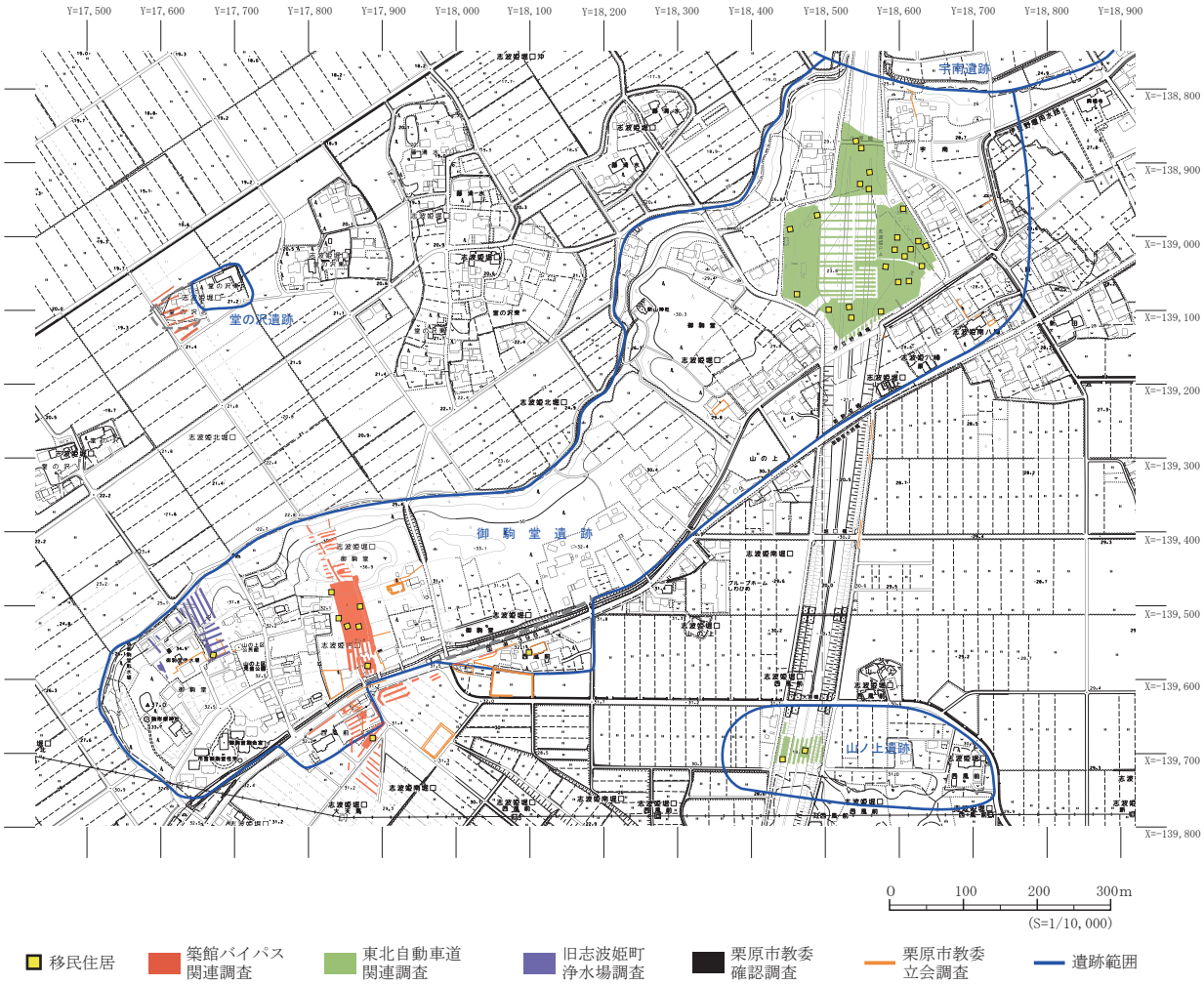
図版 115　伊治城周辺集落跡から出土したロクロ土師器と文字資料

(5) 8 世紀前葉の移民集落とその意義

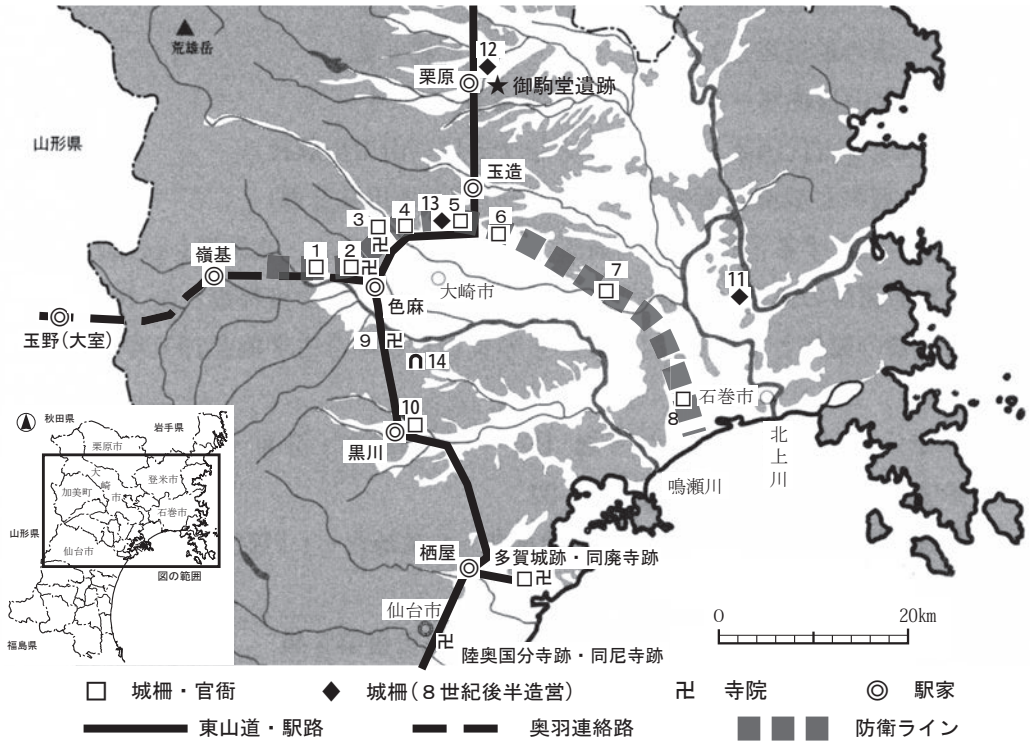
8 世紀前葉（Ⅱ群土器期）の集落は、東西 1,500 m、南北 400 mの遺跡全域に形成された。移民にかかわる住居や土器は、隣接する山ノ上遺跡（宮城県教委 1980g）やその南の下萩沢遺跡（栗原市教委 2016）、源光遺跡（栗原市教委 2015a）まで認められる。本遺跡周辺における集落の消長をみると、在地集落が 7 世紀末～8 世紀初頭の 1 遺跡 3 住居（御駒堂）から 8 世紀前葉の 2 遺跡（原田・佐内屋敷）5 住居と微増であるのに対し、移民集落は 8 世紀前葉に突如出現するとともに、本遺跡を含む 4 遺跡（御駒堂・山ノ上・下萩沢・源光）で 35 住居と激増する（表 14）。仮に、御駒堂遺跡全体に自動車道調査区とバイパス調査区と同じ密度で住居が分布したとすると、その数は 350 軒を超えるとみられる。未調査部分が多いためこの数値の確度は低いが、関東地方（坂東）からのかなりまとまった移住が行われたことは確かである（図版 116）（註 28）。

これらの遺跡は、御駒堂や山ノ上のように関東型カマドを持つ竪穴住居と関東系土師器が主体となる集落（②類集落）と、下萩沢や源光のように掘立柱建物と竪穴住居が計画的に配置され、住居から関東系土師器が出土する集落（③類集落）に分けられる。一方、周辺にはカマド・土師器とも在地型で構成される集落（①類集落：木戸遺跡、佐内屋敷遺跡、原田遺跡など）も存在した。こうした状況は、律令支配の前段階から初期に集落型城柵（ブロック連結構造城柵 B 類）を構築し、その内部に在地民や移民を収容したため、集落様相がわかりにくくなる（村田 2016a）黒川以北十郡以南とは明確に異なる。

この時期は、南の黒川以北十郡域まで建郡が進んだが、養老 4 年（720）の蝦夷反乱によって辺郡支配体制が見直され（熊谷 2000a）、同郡域の北縁に東西に並んだ城柵群による「防衛ライン」（＝可視化された国境）もまた、城柵の移動や大改修などの再整備が行われた（図版 117）（村田



図版116　８世紀前葉の移民集落



１．東山遺跡群（賀美郡家）　２．城生柵跡（推定色麻郡家）・菜切谷廃寺跡　３．名生館遺跡（玉造郡家）・伏見廃寺跡
４．小寺・杉ノ下遺跡（推定富田郡家、南小林遺跡の移転先）　５．権現山・三輪田遺跡（推定長岡郡家）
６．新田柵跡（新田郡家）　７．日向館跡・城山裏土塁跡（推定小田郡家）　８．赤井遺跡（推定牡鹿郡家）
９．一の関遺跡　10．一里塚遺跡(黒川郡家)　11．桃生城跡　12．伊治城跡
13．宮沢遺跡（推定長岡郡家･玉造塞、権現山・三輪田遺跡の移転先）　14．日の出山窯跡群（多賀城瓦230･231-660生産地）

図版117　８世紀前半の防衛ラインと御駒堂遺跡　（村田2010に加筆）

2010)。②類・③類集落の存在は、国境を越えた北の地域に対して坂東からの直接的な大量移民が行われた（②類）だけでなく、それらを統轄するかのような計画性の高い建物群で構成された官衙的な施設群（③類）がセットとなっていたことを示している。こうした方法は黒川以北十郡以南では認められない。古墳時代以来、南との繋がりが希薄であった（＝蝦夷の力が強かった）栗原郡域に対する律令制支配の新方式（村田 2009）と考えられるが、③類集落である下萩沢遺跡や源光遺跡は、この時期の遺構の全容がつかめておらず、より詳細な検討は今後の課題である。

（6）伊治城と周辺集落

８世紀中葉～後半（Ⅲ群土器期）は、遺跡の東西で住居跡が検出されたものの、数は前代より著しく減り、次の段階（８世紀末～９世紀初頭）の住居跡は認められないことから、集落は８世紀中葉以降、大きく縮小したと考えられる。関東系土師器は姿を消し、カマドもまた関東型が急減する一方で、在地型が再び認められるようになる。

Ⅲ群土器期には、ロクロ土師器や多様な須恵器、墨書土器が認められる。これらは、神護景雲元年（767）、本遺跡とは迫川低地や一迫川を挟んだ北側の河岸段丘につくられた伊治城創建を契機として生産を開始、もしくは導入されたものである。以下、伊治城と周辺集落の比較を通して栗原郡の在地社会をめぐる諸問題について考えてみたい（註 29）。

〈集落の消長〉

伊治城周辺集落の消長をみると、８世紀前葉の４遺跡 35 住居から８世紀中葉～後半の 14 遺跡 44 住居、８世紀末～９世紀初頭の 11 遺跡 35 住居、９世紀前葉の５遺跡６住居となり、８世紀中葉～後半に遺跡数が急増する一方、住居数の伸びは少ない。８世紀末～９世紀初頭にかけてほぼ横ばいで推移したのち、９世紀前葉に遺跡数・住居数ともに急減する（表 14）。また、６遺跡は８世紀末～９世紀初頭に廃絶する（鰻沢・大門・嘉倉・入の沢・長者原・青野）（註 30）。

こうした集落数の増加と急減、住居数の変化は 767 年創建、９世紀前葉に廃絶した伊治城と連動するもので、栗原郡をめぐる人やモノの移動と密接に関わる。集落数の増加については、Ａ）御駒堂の移民集落が廃絶したこと、Ｂ）関東系土師器の食器は急減するが、長胴甕の器形（胴部上半に最大径）や調整（ケズリ・ナデ）が在地土師器に受容されること、Ｃ）関東型カマドは減少するものの継承されること、Ｄ）文献に伊治城の造営前後から８世紀後半代を通して柵戸（移民）の移配が行われたこと（表 18）、Ｅ）栗原郡に会津郷があり、伊治城や原田遺跡で同地方特有の長胴甕が出土したことなどから（図版 118）（註 31）、８世紀前葉の移民集落群が縮小・廃絶して、その構成員が郡内や他地域に拡散したこと、新たな移民が行われたこと、さらには移民や移民系住民が伊治城外郭北半の広大な住居域に収容されたことなどが同時に進行した結果と考えられる。

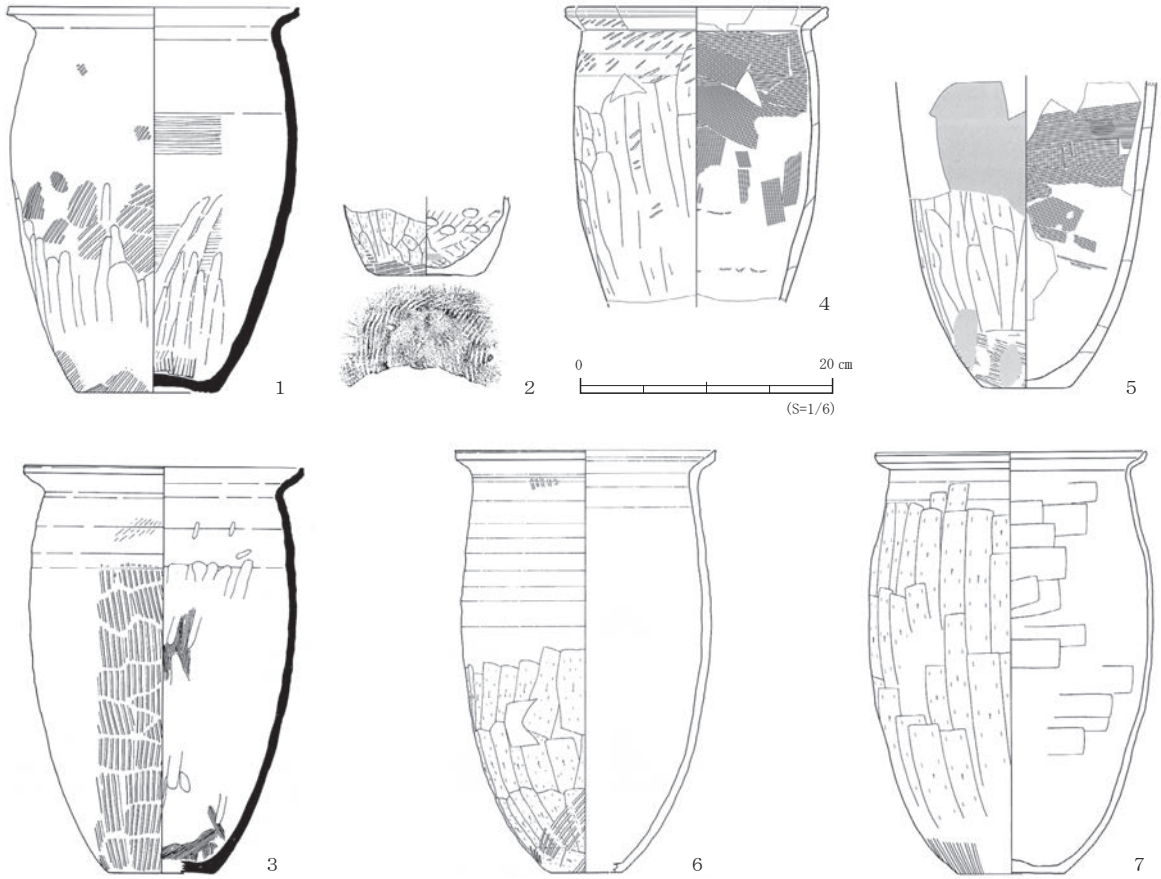
新たな移民は、それまでみられたような関東型カマドや関東系土師器が認められず、坂東の要素が非常に薄い。これは、前代の移民系住民が蝦夷系住民と融合したことや、移民自体がそれまでの「戸」単位から犯罪人や浮浪人などの「人」単位に変質したためと考えられる（註 32）。

	7c末～8c初頭	8c前葉	8c中葉～後半	8c末～9c初頭	9c前葉	9c中葉	9c後葉	10c前葉	計
御駒堂	3	31	6		2	2			43
山ノ上		2	1						3
大天馬			2						2
後沢			1						1
下萩沢		1	16						17
源光		1		1	1				3
原田		2	3		1				6
鰻沢			1	2			1		4
佐内屋敷		3	1	2	1	7	12	2	28
木戸			1						1
宇南						6	2		8
大門			1	1					2
糠塚				13		3			16
嘉倉貝塚				4					4
入の沢			1	1				3	5
城下			3						3
佐野			4	1	1		4		10
有賀峰				1		1	1		3
長者原			3	7					10
青野				2					2
計	3	40	44	35	6	19	20	5	171

	—	—	8c後半	8c末～9c初頭	—	—	—	—	計
伊治城	—	—	13	22	—	—	—	—	162
			伊治城期						
			127						

長期存続集落

表 14　伊治城と周辺集落における竪穴住居の消長



1：伊治城跡 SI04 住居跡（多賀城関連 3）　2：伊治城跡表採（栗原市 19）　3：伊治城跡 SK18 土坑（多賀城関連 4）
4・5：原田遺跡 SI31 住居跡（宮城県 219）　6：角山遺跡 SI1013 住居跡（宮城県 206）　7：山居遺跡 SI105 住居跡（宮城県 206）

図版 118　栗原・桃生郡域で出土した会津型長胴甕

〈城内と集落の住居構成〉

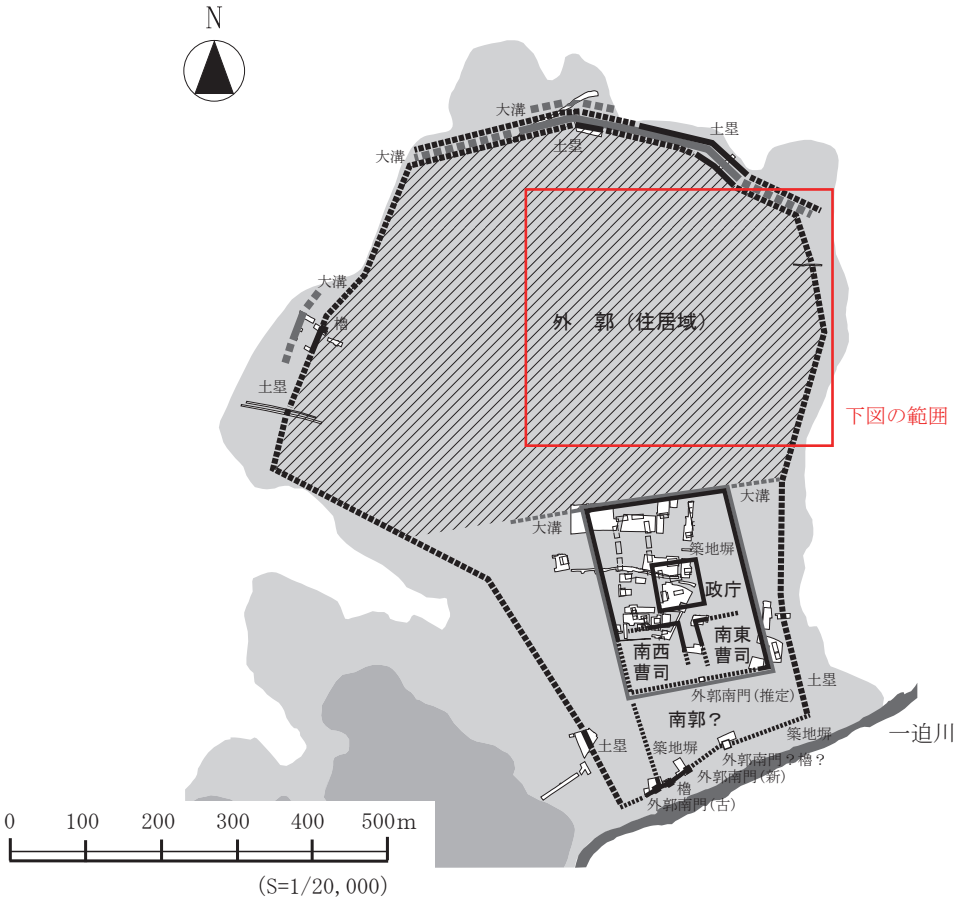
伊治城の外郭は、内郭の西・北・東を囲んでおり、多数の竪穴住居跡が検出されている。最大の特徴は住居が密集し、その半数を小形住居が占める点である（図版 119）。これに対し、同時期の伊治城周辺集落は小形・中形・大形住居がそれぞれ３割ほどを占め、それらが３～４軒を一単位とするグループを形成して集落内に点在する（表 15）（註 33）。散村形態は、一部の集落を除いて７世紀末～10 世紀前葉まで主体的に認められ、栗原郡における古代集落のスタンダードである。その結果、住居どうしの重複は少ない（註 34）。こうした違いは、居住した構成員の違いにもとづくもので、伊治城内の竪穴住居は騎兵や鎮兵、軍団兵、柵戸らが一時的に住んだ建物であったことに由来する（村田 2004）。

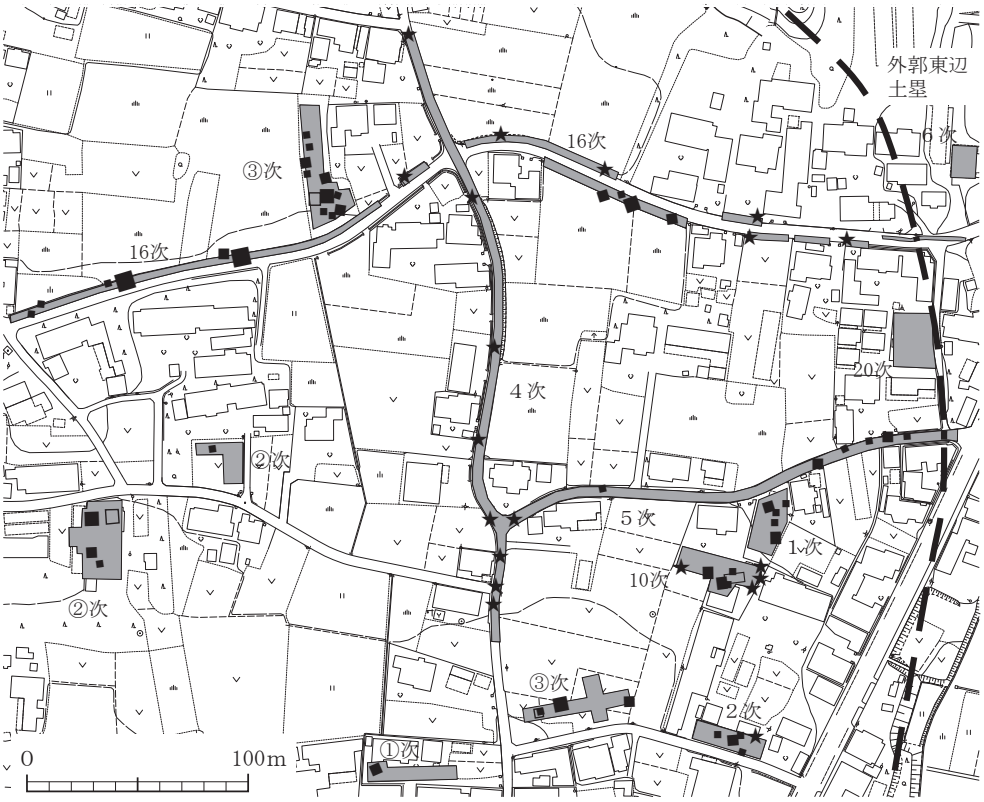
〈火災住居の検討〉

伊治城周辺集落の時期別住居数をみると、８世紀中葉から後半代に火災住居が 44 軒中 14 軒と３割を超える。同時期の城内の住居でも 13 軒中２軒のみであることから、突出して多い（表 16）（註 35）。このうち、原田・下萩沢遺跡の報告書では、火災の原因が宝亀 11 年（780）の伊治公呰麻呂の乱にあった可能性が指摘されている（宮城県教委 2009）。本遺跡でも 22 住と SI51 が火災に遭っており、これらについては須恵器の多様な器種構成（22 住）や墨書土器・ロクロ土師器の保有（SI51）といった、一般集落とは異なる特徴が指摘できた。

こうした火災住居と出土遺物についてまとめたのが表 17 である。火災住居には、床面の遺物の出土状況から、大きく分けて多量の遺物が出土するものと少量もしくは偏って出土するものとがあり、表中では前者をＡ、後者をＢとしている。そして、Ａは突発的な火災、Ｂはある程度道具が持ち出せた、あるいは必要なものを持ち出した後に意図的に火を付けたとの解釈が示された（宮城県教委 2009）。

伊治城周辺集落の火災住居の内訳はＡが６軒、Ｂは８軒である。このうち、遺物が少ない下萩沢遺跡の３軒（SI01・02・07）を除く 11 軒についてみると、８軒で墨書土器・ロクロ土師器・須恵器・金属製品のうち、３つ以上の組合せが認められた。このことは、前述したとおり伊治城（＝律令国家）との結びつきが強く、それゆえ、伊治公呰麻呂の乱で蝦夷の襲撃対象になった可能性を示すと考えられる。この想定が正しいとすると、同じ遺跡で火災住居Ａが認められる場合は、Ｂについても突発的な火災であったと考えられる（註 36）。また、遺物が多く出土したが伊治城との関係性を示す遺物が少ない３軒のうち２軒（SI05・62）や床面からの遺物が少ない３軒は、いずれも下萩沢遺跡であり、原田遺跡に近いことから、伊治公呰麻呂の乱でともに（事故的に？）襲撃された可能性を考えたい（註 37）。さらに、こうした集落のうち、御駒堂・下萩沢・原田遺跡は、８世紀前葉に坂東からの直接的な大量移民が行われ②類・③類集落が形成された場所と重なっており、前代から律令国家側とのつながりが強い人々が居住するエリアとして、蝦夷側から意識されていた可能性も指摘しておきたい。





■ 竪穴住居（一辺７ｍ以上）　■ 竪穴住居（一辺６ｍ以上）　■ 竪穴住居（一辺４ｍ以上６ｍ未満）
▪ 竪穴住居（一辺４ｍ未満）　★ 竪穴住居（規模不明）
※①次から③次は多賀城跡調査研究所、他は築館町or栗原市教育委員会の調査次数

図版119　伊治城跡と外郭北東部で密集する竪穴住居跡　（村田2015に加筆・編集）

【伊治城周辺集落跡】

〈全　体〉

7世紀末～8世紀初頭(住居数3)	規模	小形	中形	大形	特大	超大
	数	0	2	0	1	0
	割合	0	0.67	0	0.33	0
8世紀前葉(住居数36)	規模	小形	中形	大形	特大	超大
	数	9	12	9	6	0
	割合	0.25	0.33	0.25	0.17	0
8世紀中葉～後半(住居数35)	規模	小形	中形	大形	特大	超大
	数	11	12	8	3	1
	割合	0.31	0.34	0.23	0.09	0.03
8世紀末～9世紀初頭(住居数27)	規模	小形	中形	大形	特大	超大
	数	8	6	8	2	3
	割合	0.30	0.22	0.30	0.07	0.11
9世紀前葉(住居数6)	規模	小形	中形	大形	特大	超大
	数	3	1	2	0	0
	割合	0.50	0.17	0.33	0	0
9世紀中葉(住居数16)	規模	小形	中形	大形	特大	超大
	数	1	9	3	3	0
	割合	0.06	0.56	0.19	0.19	0
9世紀後葉(住居数15)	規模	小形	中形	大形	特大	超大
	数	6	4	4	1	0
	割合	0.40	0.27	0.27	0.07	0
10世紀前葉(住居数5)	規模	小形	中形	大形	特大	超大
	数	4	0	1	0	0
	割合	0.80	0	0.20	0	0

〈主な集落跡〉

御駒堂遺跡(住居数3)	7世紀末～8世紀初頭	規模	小形	中形	大形	特大	超大
		数	0	2	0	1	0
		割合	0	0.67	0	0.33	0
御駒堂遺跡(住居数27)	8世紀前葉	規模	小形	中形	大形	特大	超大
		数	8	8	7	4	0
		割合	0.30	0.30	0.26	0.15	0
佐内屋敷遺跡(住居数3)	8世紀前葉	規模	小形	中形	大形	特大	超大
		数	1	1	1	0	0
		割合	0.33	0.33	0.33	0	0
御駒堂遺跡(住居数5)	8世紀中葉～後半	規模	小形	中形	大形	特大	超大
		数	1	3	1	0	0
		割合	0.20	0.60	0.20	0	0
下萩沢遺跡(住居数13)	8世紀中葉～後半	規模	小形	中形	大形	特大	超大
		数	5	4	1	2	1
		割合	0.38	0.31	0.08	0.15	0.08
糠塚遺跡(住居数11)	8世紀末～9世紀初頭	規模	小形	中形	大形	特大	超大
		数	3	0	3	2	3
		割合	0.27	0	0.27	0.18	0.27
長者原遺跡(住居数5)	8世紀末～9世紀初頭	規模	小形	中形	大形	特大	超大
		数	2	2	1	0	0
		割合	0.40	0.40	0.20	0	0
御駒堂遺跡(住居数2)	9世紀前葉	規模	小形	中形	大形	特大	超大
		数	2	0	0	0	0
		割合	1.00	0	0	0	0
御駒堂遺跡(住居数2)	9世紀中葉	規模	小形	中形	大形	特大	超大
		数	0	1	0	1	0
		割合	0	0.50	0	0.50	0
佐内屋敷遺跡(住居数7)	9世紀中葉	規模	小形	中形	大形	特大	超大
		数	0	4	2	1	0
		割合	0	0.57	0.29	0.14	0
宇南遺跡(住居数5)	9世紀中葉	規模	小形	中形	大形	特大	超大
		数	1	3	1	0	0
		割合	0.20	0.60	0.20	0	0
佐内屋敷遺跡(住居数12)	9世紀後葉	規模	小形	中形	大形	特大	超大
		数	6	3	3	0	0
		割合	0.50	0.25	0.25	0	0

【伊治城存続期の城内と城外】

〈伊治城跡〉

8世紀後半～9世紀初頭(住居数64)	規模	小形	中形	大形	特大	超大
	数	32	22	5	3	2
	割合	0.50	0.34	0.08	0.05	0.03

〈伊治城周辺集落〉

周辺集落(住居数62)	規模	小形	中形	大形	特大	超大
	数	19	18	16	5	4
	割合	0.31	0.29	0.26	0.08	0.06

※住居規模は、面積から小形(15㎡未満)、中形(15㎡以上25㎡未満)、大形(25㎡以上40㎡未満)、特大形(40㎡以上60㎡未満)、超大形(60㎡以上)に分けた(八木1998)

表 15　伊治城と周辺集落における竪穴住居跡の時期別構成

7c末～8c初頭			8c前葉			8c中葉～後半			8c末～9c初頭			9c前葉			9c中葉			9c後葉			10c前葉		
遺跡数		1	遺跡数		6	遺跡数		14	遺跡数		12	遺跡数		4	遺跡数		5	遺跡数		5	遺跡数		2
住居数		3	住居数		39	住居数		44	住居数		35	住居数		6	住居数		19	住居数		20	住居数		5
火災住居	数	0	火災住居	数	6	火災住居	数	14	火災住居	数	2	火災住居	数	1	火災住居	数	1	火災住居	数	4	火災住居	数	1
	割合	0		割合	0.15		割合	0.32		割合	0.06		割合	0.17		割合	0.05		割合	0.20		割合	0.20
	A	0		A	0		A	6		A	0		A	0		A	0		A	1		A	0
	B	0		B	6		B	8		B	2		B	1		B	1		B	3		B	1

※火災住居は床面の遺物出土状況から、(A)多量の遺物が残されていたものと(B)少量もしくは出土に偏りが認められるもの、に分けた。(A)は突発的な火災で道具が持ち出せなかったケース、(B)は突発的であるが、道具を持ち出しえたケース、あるいは道具を片付けたのち火を付けたケースと考えられる(宮城県教委2009)。

表 16　伊治城周辺集落の時期別住居数と火災住居

遺跡名	住居名	平面形	規模		火災	主柱配置/主柱	カマド		文字資料	食器の構成			壺甕類の構成		土師器ミニチュア	金属製品	備考
			m	分類			位置	分類		非ロクロ	ロクロ	須恵器	非ロクロ	須恵器			
御駒堂	10住	方形	4.7×4.2	中形	×	4?	東壁南側	1a	×	○	×	○	○	×	×	×	
御駒堂	11住	方形	4.7×4.5	中形	×	4/丸	北壁中央	1b	×	●4/4	×	×	○	×	×	×	
御駒堂	22住	長方形	5.8×5.1	大形	○(A)	4/丸	南壁東側	1b	墨書「大伴」	●5/12	×	●7/12	●4/6	○2/6	×	×	須恵器は器種が豊富。土製紡錘車出土
御駒堂	40住	方形	4.1×4.0	中形	×	×	東壁中央	4a	×	×	×	○	×	○	×	×	
御駒堂	SI02	方形	3.7×3.6	小形	×	×	北壁中央	4a	×	○	×	×	○	×	×	刀子	
御駒堂	SI51	方形	5.3×?	—	○(B)	4?/角	北壁中央?	1a	墨書「丈」「老」、刻書「子」、「大大大□」	●12/16	○2/12	○2/12	●6/7	○1/7	○	×	土師坏底に馬のヘラ描き
山ノ上	3住	方形	3.0×2.7	小形	×	×	北壁中央	1or2	×	○	×	○	○	○	×	×	須恵器壺甕類は２点とも大甕
大天馬	SI6	方形	4.6×4.4	中形	×	4/丸	北壁中央→東壁南側	1a	墨書「木」	○	×	○	●6/6	×	○	×	長胴甕の外面はヘラケズリ
大天馬	SI21	方形	5.0×4.9	中形		4?/?	北壁中央	4b	×	○	×	×	×	×	×	×	8c中頃？　土師器壺甕類はすべてカマド関連
後沢	SI1	方形	5.0×4.9	中形	×	4?/丸	北壁中央	1or2	×	×	×	○	○	×	×	×	8c中頃？
下萩沢	SI01	方形	3.3×3.3	小形	○(B)	×	北壁中央	1a	×	○	×	○	○	×	×	×	須恵器坏は古い
下萩沢	SI02	方形	4.5×3.8	中形	○(B)	×	北壁中央	1a	×	×	×	○	○	×	×	×	
下萩沢	SI04A	隅丸方形	3.8×3.4	小形	×	—	北壁中央	—	×	×	×	×	×	×	×	×	
下萩沢	SI04B	隅丸方形	5.1×4.7	中形	×	—	北壁中央	—	×	×	×	×	○	×	×	×	
下萩沢	SI04C	隅丸方形	6.1×6.0	大形	×	4/丸	北壁中央	1a	×	×	×	○	×	×	×	鉄鏃	須恵器坏は古い
下萩沢	SI05	隅丸方形	6.5×6.5	特大	○(A)	4/丸	北壁中央	1c	×	●7/7	×	×	●8/8	×	×	×	非ロクロ土師器が主体
下萩沢	SI06A	隅丸方形	7.2×7.1	特大	×	4/丸	北壁中央	—	×	×	×	×	×	×	×	×	
下萩沢	SI06B	方形?	—	—	×	4?/丸	北壁中央	—	×	×	×	×	×		×	×	
下萩沢	SI06C	方形	8.3×8.0	超大	○(B)	4/丸	北壁中央	1c	×	○2/6	○1/6	●3/6	○	×	○	鉄鏃・刀子・鉄製紡錘車	土師器壺甕類はカマド関連が多い。須恵器は食器のみで古い。他に土錘出土
下萩沢	SI07	隅丸方形	6.5×?	—	○(B)	4/角?	東壁南側?	—	×	○	×	×	○	×	×	×	
下萩沢	SI61A	隅丸方形	—	—	×	—	北壁中央	—	×	×	×	×	×	×	×	×	
下萩沢	SI61B	隅丸方形	4.7×4.3	中形	×	壁柱/丸	北壁中央	1c	×	×	×	○	○	○	○	鉄鏃・鉄製鈍	
下萩沢	SI62	隅丸方形	3.3×3.2	小形	○(B)	×	北壁中央	4b	×	●4/4	×	○	○	×	○	×	須恵器は食器のみで、３点とも古い蓋。ミガキ須恵器蓋
下萩沢	SI63	隅丸方形	3.5×3.1	小形	×	×	北壁中央	4a	×	×	×	○	○	×	○	鉄製紡錘車、鉄製鋤先	
下萩沢	SI64A	隅丸方形	3.8×3.7	小形	—	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×	×	
下萩沢	SI64B	隅丸方形	4.5×3.8	中形	○(B)	×	東壁南側	4b	×	○	×	○	○	○	×	鉄製紡錘車	土師器壺甕類はカマド関連が多い。須恵器大甕、木錘出土
原田	SI30	隅丸方形	7.2×7.0	特大	○(A)	4/丸＋壁柱	北壁中央→東壁中央	1b	墨書「原原カ」、「□□」	●10/22	×	●12/22	●25/29	○4/29	○	小札・鉄鏃・鉄製紡錘車・鉄釘・鉄鐸	須恵器や鉄製品(小札・鏃・鐸)を多量に保有
原田	SI70	隅丸方形	3.6×3.5	小形	○(A)	×	北壁中央	1b	×	○	×	○	●14/16	○2/16	○	小札・鉄鏃・鉄釘・鞘尻	
原田	SI91	隅丸方形	5.4×5.4	大形	×	4/丸	北壁中央	1a	×	●5/5	×	×	●5/5	×	○	×	
鰻沢	SI1	方形	5.0×4.7	中形	×	4/丸＋四隅4/丸	東壁中央	—	×	○	×	×	○	×	×	×	カマド破壊
佐内屋敷	9住	方形	3.7×3.5	小形	○(A)	×	北壁中央	1b	×	●5/8	×	○3/8	●6/7	○1/7	×	鉄刀・鉄鐸	東北北部系土師器。須恵器坏・壺・中甕
木戸	2住	方形	4.4×4.4	中形	×	4/丸	東壁南側	1a	×	○	×	×	●7/7	×	×	×	土師器のみ
大門	1住	隅丸長方形	6.5×5.5	大形	×	4/丸	北壁中央	3a	×	○	×	×	○	×	×	×	突出部奥壁=短煙道奥壁
入の沢	SI7	方形＋張出	5.6×4.4～5.5＋張出	大形	×	4/丸	東壁中央	1a	×								カマド・周溝・張出しを補修
城下	SI16B	隅丸方形	5.7×5.0	大形	○(A)	4/丸	東壁中央	2b	朱書「×」	○3/22	●13/22	●6/22	●7/11	○4/11	×	鉄鏃・鉄鉾・刀子・刀装具・鉄製紡錘車・銅鋺・銙帯金具	土製紡錘車
城下	SI17	方形	5.8×5.7	大形	×	4/丸	東壁中央	1a	×	×	×	○	×	○	×	×	SI17→SI85
城下	SI85	隅丸長方形	4.5×3.2	小形	×	×	東壁中央	1b	×	×	×	×	○	×	×	×	SI17→SI85。カマド破壊→祭祀？
佐野	2住	隅丸長方形	5.5×4.9	大形	×	×	北壁中央	1c	×	×	×	×	×	○	×	×	2住→3住→4住→16住
佐野	8住	方形	5.8×?	—	×	4/?	北壁中央	1a	×	○	×	×	×	×	×	×	
佐野	14住	隅丸方形?	5.0×?	—	×	×	北壁中央	1a	×	○	×	×	○	×	×	×	カマドから土師器坏2個
佐野	15住	方形?	—	—	×	—	北壁	1or2	×	×	×	×	×	×	○	×	カマド破壊？　カマド崩壊土下からミニチュア出土
長者原	4住	方形	—	—	×	—	北壁	1c	×	×	×	×	×	×	×	×	
長者原	20住	方形	5.4×5.3	大形	○(B)	4/角	北壁中央	1c	×	○	×	○	●6/6	×	×	×	土版？
長者原	25住	方形	3.9×3.8	小形	×	×	北壁中央	1a	×	×	×	×	○	×	×	×	

火災住居　●出土量多い　○出土　×出土なし

※火災住居は床面の遺物出土状況から、(A)多量の遺物が残されていたものと(B)少量もしくは出土に偏りが認められるもの、に分けた。(A)は突発的な火災で道具が持ち出せなかったケース、(B)は突発的であるが、道具を持ち出しえたケース、あるいは道具を片付けたのち火を付けたケースと考えられる(宮城県教委2009)。

表17　伊治城周辺集落における８世紀中葉から後半の竪穴住居跡と出土遺物

〈文　献〉

西暦	和暦	天皇	記事	文献
715	霊亀１	元正	５.坂東６国の富民1000戸を陸奥国に移配する	続日本紀
767	神護景雲１	称徳	10. 陸奥国伊治城の造営が完了する	続日本紀
			11. 陸奥国に栗原郡を設置する	続日本紀
768	神護景雲２	称徳	12. 陸奥国および他国から桃生・伊治２城に移住を希望する者の課役を免ずる	続日本紀
769	神護景雲３	称徳	１.桃生・伊治２城への移民を確保するため優遇することを定める	続日本紀
			２.坂東８国から桃生・伊治城へ移住する人々を募集する	続日本紀
			６.陸奥国伊治村に浮浪人2500余人を移住させる	続日本紀
774	宝亀５	光仁	７.陸奥国の海道蝦夷が桃生城を攻撃する→38年戦争が勃発する	続日本紀
778	宝亀９	光仁	６.征夷に功績のあった陸奥・出羽の国司以下2267人に位階・勲位を授ける。伊治公呰麻呂は外従五位下を賜う	続日本紀
780	宝亀11	光仁	２.陸奥国の申請により、胆沢の地を制圧するため覚鱉城を造営することとする	続日本紀
			３.陸奥国上治郡大領伊治公呰麻呂が、伊治城で按察使紀広純を殺害し、多賀城に放火する	続日本紀
789	延暦８	桓武	８.陸奥国の軍士の田租・課役を免除し、黒川以北十郡についてはさらに課役の免除を延長する→すでに成立していた遠田・桃生・栗原郡の名が見えない	続日本紀
792	延暦11	桓武	１.斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが、伊治村の俘に妨げられて果たせないことを訴える	類聚国史
796	延暦15	桓武	11. 陸奥国の伊治城と玉造塞の間に駅を置く	日本後紀
			11. 坂東６国と出羽・越後国の人々9000人を陸奥国伊治城に移住させる	日本後紀
804	延暦23	桓武	11. 陸奥国栗原郡に３駅を置く	日本後紀
805	延暦24	桓武	12. 藤原緒嗣の意見により、蝦夷征討と平安京造営を中止する	日本後紀
811	弘仁２	嵯峨	12. 文室綿麻呂が征夷の終了を報告する→38年戦争の終了	日本後紀
837	承和４	仁明	４.昨年春より百姓の妖言に奥邑の民が動揺し、栗原・賀美両郡の百姓が多く逃亡する。また、栗原・桃生以北の俘囚は、反覆して定まらないので、援兵1000人を動員して非常に備える	続日本後紀
859	天安３	清和	１.陸奥国の志波姫神などに位を授ける	日本三代実録
905	延喜５ (着手)	醍醐	延喜式 ○神名式　陸奥国100座 栗原郡７座　大１座　志波姫神社 小６座　表刀神社　雄鋭神社　駒形根神社　駒形根神社 和我神社　香取御児神社　遠流志別石神社 ○民部式　東山道・陸奥国大国 ……志太、栗原、磐井…… ○兵部式　陸奥国駅馬 ……玉造、栗原、磐井……各５疋	延喜式
931～938	承平年間	醍醐～朱雀	和名類聚抄 ○巻５国郡部　陸奥国管36　栗原郡(久利波良) ○巻７国郡部　栗原郡　(郷名)栗原・清水・仲村・会津(安都)	和名類聚抄
1050・1051	永承５・６	後冷泉	陸奥守藤原登任と出羽城介平繁成が安倍頼良を攻めるが、鬼切部で破れる→鬼切部＝鬼攻部(鬼首)の誤り？	陸奥話記
1062	康平５	後冷泉	７.源頼義の説得に応じ、出羽山北俘囚主清原光頼の弟武則が一万余の兵を率いて陸奥国栗原郡営岡に到着する	陸奥話記、扶桑略記
1062	康平５	後冷泉	８.源頼義が栗原郡営岡に到着し、清原武則の軍と合流する	陸奥話記、扶桑略記
1070	延久２	後三条	10. これ以前に陸奥国栗原荘・出羽国寒河江荘が京極殿領として成立する	近衛家文書
1103	康和５	堀河	６.御体御卜の結果、祟りをなしているとされた陸奥国志波姫神らに対して祓えを行う	朝野群載

〈出土文字資料〉

西暦	和暦		内容	遺跡名/遺構名 資料名	報告書等
８世紀後半			栗□	伊治城/13次湿地跡 墨書土器	築館町教委 1990
８世紀末～ ９世紀前葉			此治城	多賀城/30次 SK981-5c層 漆紙文書	多賀研 1978

表 18　栗原郡に関する古代史年表

第Ⅳ章　堂（どう）の沢（さわ）遺跡

堂の沢遺跡と御駒堂遺跡

調　査　要　項

遺跡名：堂の沢遺跡（宮城県遺跡登録番号　49024）

遺跡記号：ＹＩ

所在地：宮城県栗原市志波姫堀口堂の沢

調査対象面積：2,446㎡

発掘面積：550㎡

調査期間：平成 25 年 11 月 5 日～ 11 月 14 日

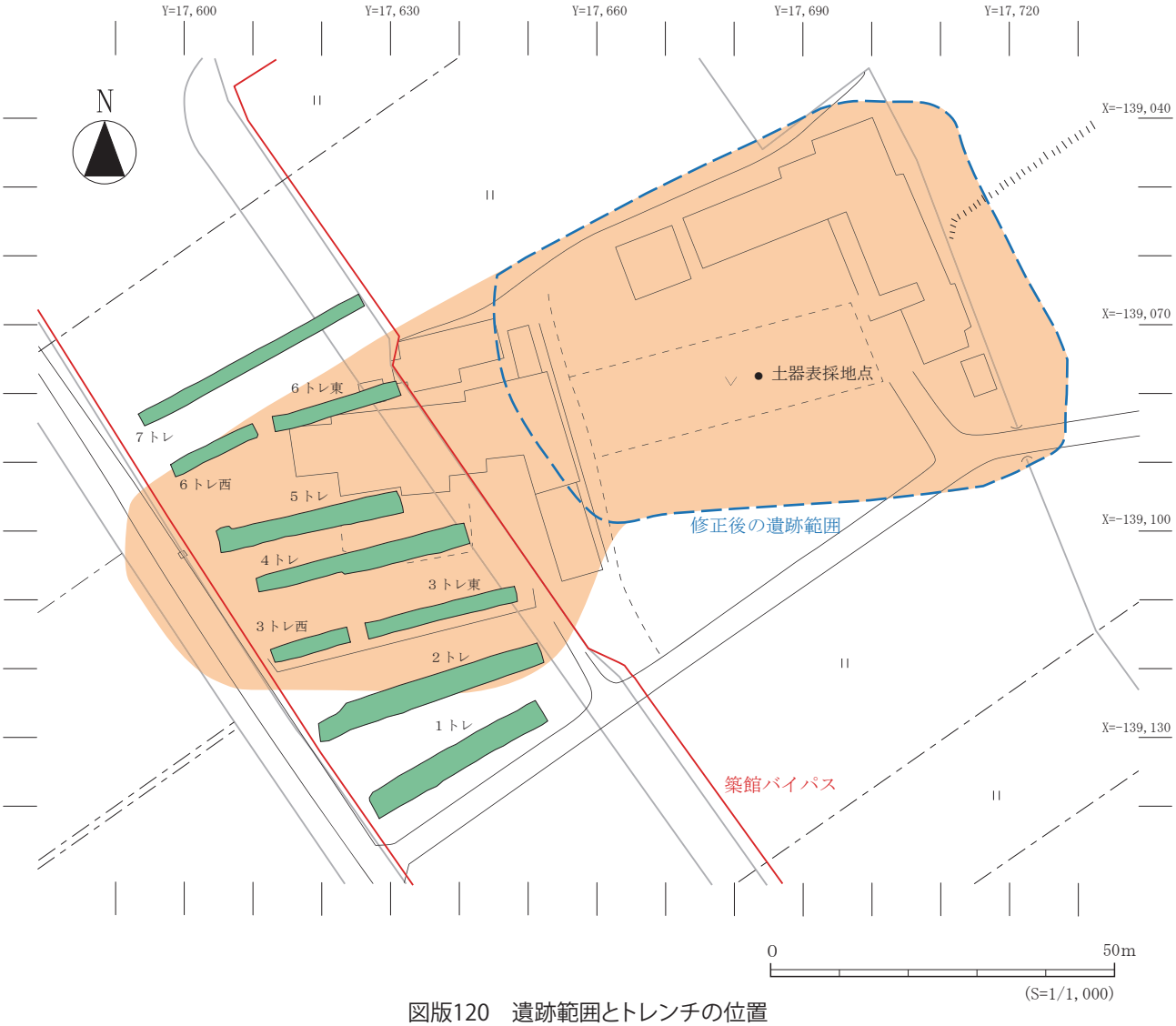
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：村田晃一・大友邦彦

A．調査の方法と経過

発掘対象地は、遺跡の西端にあたる。調査前の状況は東へ延びる自然堤防部分が宅地や畑地で、その縁辺は水田として利用されていた。また、事前に周辺を確認したところ、遺物が表採できなかったことから、対象地の遺構はあったとしても数は少ないと予想できた。このため、遺跡範囲内と隣接地について幅２～３ｍの東西トレンチを任意に７本設けて遺構確認調査を実施した（図版 120）。

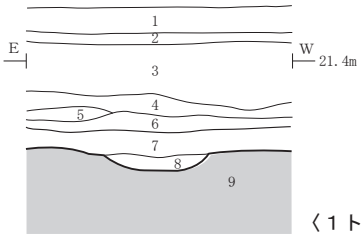
その結果、１・２トレンチで水田耕作土、３～５・６トレンチ東側で旧表土や土坑・溝跡を確認した。いずれも比較的新しい盛土で覆われており、西と南にいくほど厚くなっていた。また、これらより一段低い６トレンチ西側や７トレンチは、水田耕作土の下が湿地となっており、特に７トレンチ中央から西側では 10 世紀前葉に降下した灰白色火山灰層が厚く堆積していた（図版 122）。一方、古記録には遺跡周辺の開田は近世以降に行われたと記されている。このため、１・２トレンチで確認した水田や３～６トレンチ東側で確認した土坑・溝跡は近世以降で、その後、宅地を拡張するため盛土が行われたこと、遺跡の北側は近世に至るまで湿地であったことが考えられた。特に、溝跡は自然堤防の縁辺に認められることから、屋敷地と水田を画した溝の可能性がある。



図版120　遺跡範囲とトレンチの位置

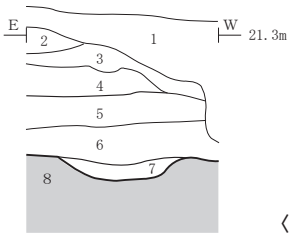
遺跡遠景（北西から）　右手の段丘は御駒堂遺跡

作　業　風　景



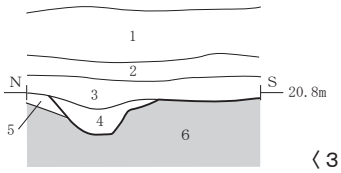
〈１トレンチ西側断面〉

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト		基本第Ⅰ層
2	褐灰色(10YR5/4)	シルト	礫を多く含む	
3	褐灰色(10YR4/2)	シルト	地山大ブロックを含む	
4	明黄褐色(10YR4/3)	シルト	砂礫を含む	
5	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	砂礫を含む	
6	明黄褐色(10YR6/4)	シルト	礫を含む	
7	黒色(10YR2/1)	粘土	地山小ブロックを含む	基本第Ⅱ層
8	黒褐色(10YR3/1)	粘土		SD01堆積土
9	灰色(10YR6/1)	粘土	地山ブロックを少し含む	基本第Ⅴ層



〈２トレンチ西側断面〉

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	灰黄褐色(10YR4/4)		礫を多く含む	基本第Ⅰ層
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	礫を多く含む	
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	礫を多く含む	
4	褐色(10YR4/4)	シルト	礫を多く含む	
5	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト		基本第Ⅱｂ層
6	黒褐色(10YR2/2)	シルト		基本第Ⅱａ層
7	黒色(10YR2/1)	粘土	地山小ブロックを含む	SD03堆積土
8	褐色(10YR4/6)	粘土		基本第Ⅴ層



〈３トレンチ東壁断面〉

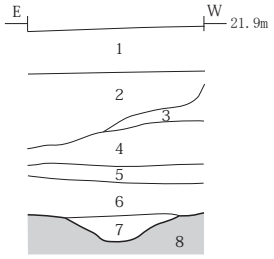
No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色(10YR3/2)		礫を多く含む	基本第Ⅰ層
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト		
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト		SD02堆積土
5	黒褐色(10YR2/2)	砂質シルト	地山ブロックを含む	基本第Ⅲ層
6	褐色(10YR4/6)	シルト		基本第Ⅴ層

１トレンチ西側、ＳＤ01 周辺断面（北から）

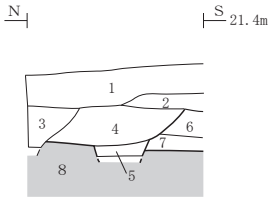
２トレンチ全景（西から）

３トレンチ全景（東から）

図版 121　遠景・トレンチ・基本層序（１）



〈４トレンチ西側断面〉



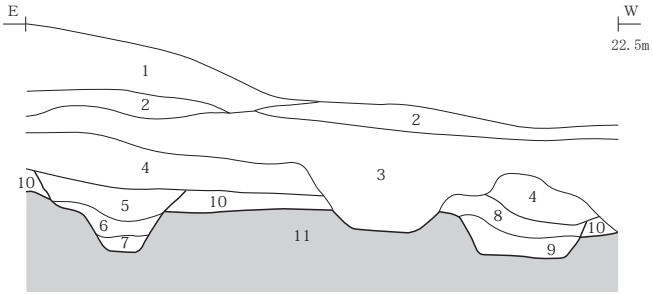
〈６トレンチ東側断面〉

（左図土層観察表）

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	礫を含む	基本第Ⅰ層
2	褐色(10YR6/4)	砂質シルト		
3	明黄褐色(10YR6/6)	砂		
4	灰黄褐色(10YR4/4)	シルト	礫を多く含む	
5	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		基本第Ⅱｂ層
6	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		基本第Ⅱａ層
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト		SD03堆積土
8	黄褐色(10YR5/8)	シルト		基本第Ⅴ層

（右図土層観察表）

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	灰黄褐色(10YR4/4)	シルト	礫を多く含む	基本第Ⅰ層
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	砂を多く含む	
3	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物を含む	
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	礫を多く含む	
5	褐灰色(10YR4/1)	粘土	地山ブロックを含む	SD06堆積土
6	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		基本第Ⅱｂ層
7	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		基本第Ⅱａ層
8	黄褐色(10YR5/8)	シルト		基本第Ⅴ層



〈５トレンチ西側、SD04・05 周辺断面〉

No.	土色	土性	混入物など	備考
1	灰黄褐色(10YR4/4)	シルト		基本第Ⅰ層
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト		
3	黒褐色(10YR2/2)	粘土	砂を多く含む	
4	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		基本第Ⅲ層
5	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト		SD04堆積土
6	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む	
7	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	粘性強い	
8	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		SD05堆積土
9	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	地山ブロックを含む	
10	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト		第Ⅳ層
11	黄褐色(10YR5/8)	シルト		第Ⅴ層

５トレンチ西側、SD03 周辺断面（北から）

５トレンチ全景（西から）

６トレンチ東側全景（東から）

７トレンチ中央～西側断面（北から）

７トレンチ中央断面（北から）

図版 122　遠景・トレンチ・基本層序（２）

こうしたことから、対象地には中世以前の遺構が存在しないと考えられ、本発掘調査の必要はないと判断した。また、今回の成果で遺跡の範囲は東へ縮小すると考えられたため、栗原市教育委員会とはかって遺跡の範囲変更を行うこととした。

トレンチの土層断面図は、随時手実測で作成した（縮尺 1/20）。平面図は、調査区の近くに設定された工事用の測量原点（世界測地系第Ｘ系）を基準とし、（株）ＣＵＢＩＣ製発掘調査関連測量専用ソフト「電子平板　遺構くん」と（株）ソキア・トプコン製の自動追尾トータルステーションを用いて作成した。また、遺構の写真撮影は 1,200 万画素のデジタルカメラを使用している。

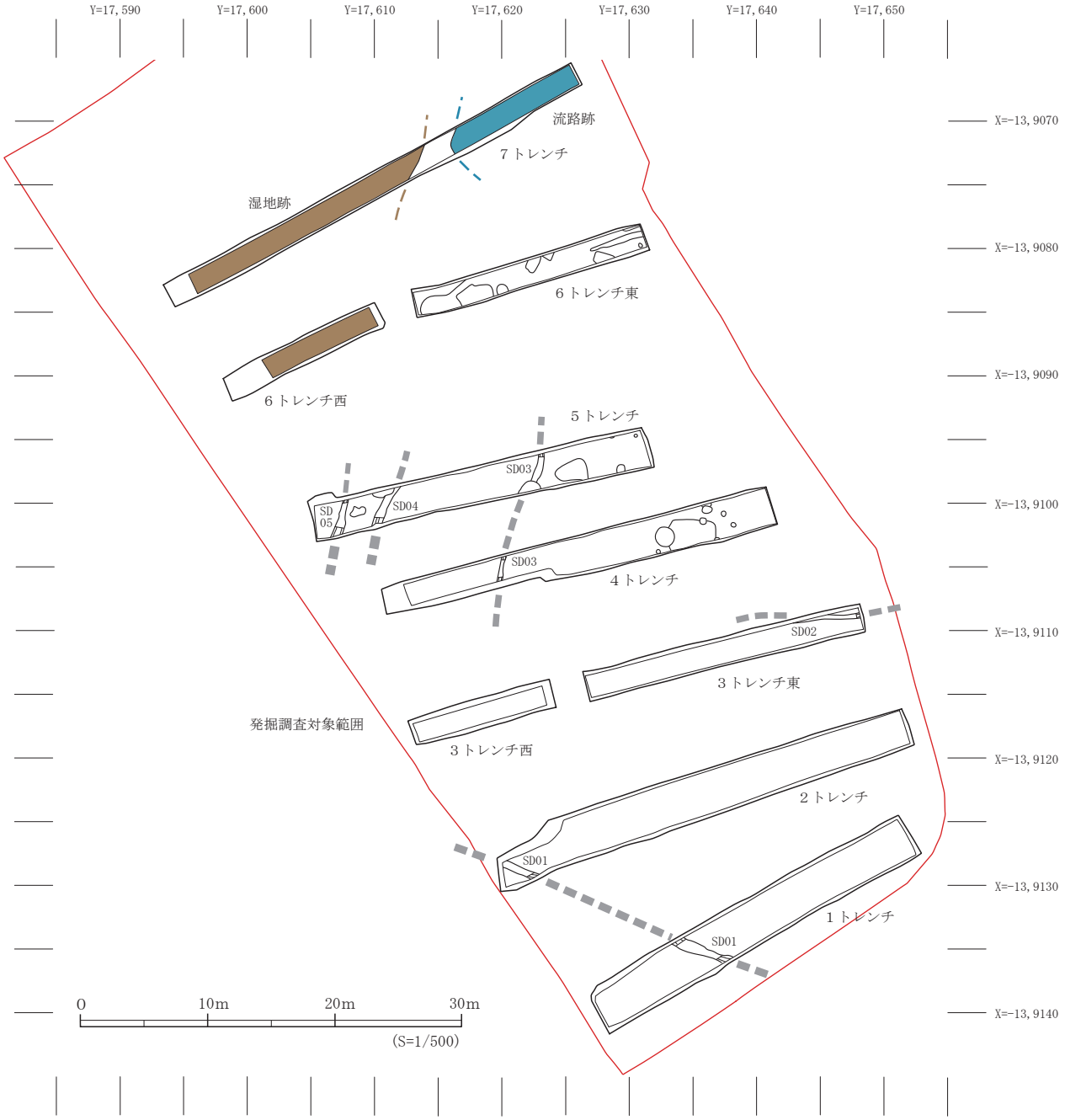
Ｂ．基本層序

本遺跡は迫川低地の自然堤防に立地しており、御駒堂遺跡より 10 ～ 15 m低い（図版２）。標高は自然堤防が 21 m前後、北側の低地が 20 m前後である。基本層は自然堤防と隣接地で５層（第Ⅰ～Ⅴ層）、その外側は４層（第Ⅱ・Ⅵ～Ⅷ層）に大別できる（図版 121・122）。

第Ⅰ層は、現代に宅地を拡張した際の盛土である。第Ⅱ層は近世以降の水田耕作土で、１・２トレンチは厚い第Ⅰ層下で認められた。第Ⅲ層は近世以降の旧表土、第Ⅳ層はこれより古い近世の旧表土で、３～５・６トレンチ東側の土坑や溝は第Ⅳ層から掘り込まれ、第Ⅲ層に覆われた。これらより１段低い６トレンチ西側や７トレンチでは、第Ⅱ層下に湿地堆積土が２枚あり、第Ⅶ層の灰白色火山灰層をはさんで第Ⅵ層と第Ⅷ層に分けられる。灰白色火山灰は純堆積層と再堆積層が認められ、その上は第Ⅵ層が覆うことから、遺跡北側は古代から中世を通して湿地であったと考えられる。

Ｃ．発見した遺構と遺物

確認調査を行った結果､中央から南側の１～６トレンチ東で近世以降の水田跡や溝跡などを検出し、北側の６トレンチ西から北は湿地土壌の中に灰白色火山灰が厚く堆積していた（図版 123）。中世までの遺構がないこと、北側は湿地であったことから、本発掘調査は必要なしと判断した。また、今回の成果より遺跡の範囲は東へ縮小する（東西 75 m、南北 40 ～ 60 m）と考えられたため、市教育委員会とはかって遺跡の範囲変更を行うこととした。


Y=17,590
Y=17,600
Y=17,610
Y=17,620
Y=17,630
Y=17,640
Y=17,650
X=-13,9070
X=-13,9080
X=-13,9090
X=-13,9100
X=-13,9110
X=-13,9120
X=-13,9130
X=-13,9140
流路跡
7トレンチ
湿地跡
6トレンチ東
6トレンチ西
5トレンチ
SD03
SD04
SD 05
SD03
4トレンチ
SD02
3トレンチ東
発掘調査対象範囲
3トレンチ西
2トレンチ
SD01
1トレンチ
SD01
0
10m
20m
30m
(S=1/500)

図版123　検　出　遺　構

第Ⅴ章　まとめ

〈御駒堂遺跡〉

1．御駒堂遺跡は、栗原市志波姫堀口字御駒堂にあり、迫川低地を望む上位段丘に立地する。両者の比高差は 10 ～ 20 mである。

2．御駒堂遺跡の範囲は東西約 1,500 m、南北約 400 mと東西に細長い。

3．発見した遺構は、旧石器時代から縄文時代の石器集中地点１箇所、遺物包含層１箇所、縄文時代の陥し穴 22 基、遺物包含層１箇所、奈良時代の竪穴住居跡９軒、古代の掘立柱建物跡１棟、江戸時代以降の掘立柱建物跡７棟、井戸跡７基、墓跡 17 基、土塁１条、空堀１条のほか、溝跡や小溝状遺構群である。

4．石器集中地点からは 2,772 点の石器が出土した。石器や層位的特徴より後期旧石器時代末から縄文時代草創期に位置付けられる。また、石器のほとんどが砕片であることから、石器製作の場と考えられる。

5．縄文時代の陥し穴は、Ａ：平面が円形で底中央に逆茂木が１本立てられるもの、Ｂ：平面が楕円形で穴底の長軸に合わせて逆茂木が２本立てられるもの、Ｃ：平面が溝状に細長いものの３タイプがある。Ａ類は 14 基、Ｂ類が５基、Ｃ類は３基検出した。このうちＡ類は、１基を除いて４～ 10 m離れて南北に並ぶ。

6．奈良時代の竪穴住居跡の年代は８世紀前葉が７軒、８世紀中葉～後半が２軒である。

7．江戸時代より新しい遺構は、掘立柱建物や井戸が現在の国道 398 号線寄りにあり、そこから離れた山林との境で墓を検出した。国道近辺には「築館・狼河原道」が通っていたことから、道側に建物・小屋（雑舎）・井戸で構成された農家が点在し、その周囲は畑などの耕作地で、山林との際に屋敷墓が営まれたという景観が想定できる。

8．これまでの調査成果を併せると、他時期に較べて遺構や遺物量が圧倒的に多い８世紀前葉が本遺跡の最盛期と考えられる。住居は、３～４軒を単位とする小群が遺跡全体に展開しており、総数は 300 軒を超え、そのほとんどが関東型カマドや関東系土師器を有するとみられる。これは、坂東からの大規模かつ直接的な移住があったことを示しており、移民の故地は、上野から北武蔵を中心とする坂東北西部と南武蔵を中心とする坂東南部と考えられる。

9．８世紀中葉～後半の住居跡は遺跡東端と西側で認められたが、その数は前代より大幅に減る。本段階には、ロクロ土師器や多様な器種構成を持つ須恵器のほか、墨書土器が認められる。栗原郡におけるロクロ土師器や須恵器は、神護景雲元年（767）の伊治城造営を契機として生産を開始しており、墨書土器もまた、伊治城から広まった。本集落は、早い段階からこれらを保有しており、他に較べて伊治城との関係が深かったと考えられる。

〈堂の沢遺跡〉

1．堂の沢遺跡は栗原市志波姫堀口堂の沢にあり、一迫川沿いの下位段丘に立地する。標高は 21 m前後で、周囲の低地より 1 mほど高い。

2．遺跡範囲の西側について確認調査を行った結果、近世以降の水田跡や溝跡などを検出したが、中世以前の遺構・遺物は確認できなかった。このため、遺跡の範囲は東へ縮小し東西 75 m、南北 40 ～ 60 mと考えられた。

註

註 1　灰白色火山灰の降下年代は、『扶桑略記』に記された延喜 15 年（915）とする見方が強まってきている。

註 2　藤沢敦氏は、鶴ノ丸遺跡や伊治城跡の円墳もしくは円形の低墳丘墓について前期と考えているが、確実に共伴する遺物がないことから、中期もしくは後期に下る可能性も捨てきれないと指摘した（藤沢 2000）。しかし、伊治城跡は長年調査しており、その成果からみて、藤沢氏が指摘した前期の可能性が高いと考えられる。

註 3　6 世紀代に仙台平野以北で古墳や集落形成が低調となり、古墳文化と続縄文文化の折衷型の墓がつくられた理由としては、5 世紀から続く古墳寒冷期の影響が大きいと考えられる（坂口 1984a・b）。

註 4　カマドの分類については、村田晃一の指摘に基づく（村田 2000）。

註 5　3 類型への仕分けは発掘調査成果に基づくが、いずれも遺跡の一部を調査したにとどまることから、見直しが必要である。

　また、栗原郡域における 7・8 世紀の集落は、広い範囲に竪穴住居が散在する形態が一般的であったが、近年、下萩沢遺跡南部で 2 ～ 3 が直列型配置をとる建物群（8 世紀後半以前、宮城県教委 2009）、同遺跡北部で北と西を溝で画された内部に掘立柱建物や竪穴住居、竪穴遺構つくられた例（8 世紀前葉、栗原市教委 2016）、源光遺跡で掘立柱建物と竪穴住居がセットとなる例（8 世紀前葉、栗原市教委 2015a）などがあり、集落への掘立柱建物の導入がかなり早い段階から認められるようになった。特に源光遺跡は、7 世紀まで遡る可能性が指摘されている。

註 6　佐内屋敷遺跡の土器は第Ⅰ群と第Ⅱ群に大別し、それぞれ a ～ c グループに細分している。本稿では第Ⅰ群土器 a グループを第Ⅰ a 土器群というように、大別と細別を組み合わせて表現している。

註 7　栗原郡の建郡が遅れた理由は、7 世紀以降、古墳や在地土師器にみられたように中央政権との結びつきが弱い反面、伝統的に北上川中流域以北との結びつきが強かったためである。さらに、8 世紀前半代は養老 4 年（720）の蝦夷の反乱に代表されるように、黒川以北十郡域の律令支配が安定していなかったことも大きな原因と考えられる。

註 8　8 世紀後半以降の移民政策は、1）民・百姓・富民が戸単位で選ばれていた 8 世紀前半のあり方から、犯罪人や浮浪人などが人単位で強制的に移配させられる形に変質した天平宝字年間（757 ～ 764）、2）当国他国を問わず希望者を優遇して自主的移住を募った神護景雲元年～宝亀 5 年（767 ～ 774）、3）他国からの移民空白期である宝亀 5 年～延暦 13 年（774 ～ 794）、4）他国からの強制移住が再開される延暦 14 年～ 21 年（795 ～ 802）、の 4 段階に分けて理解されている（鈴木 1998）。いずれも浮浪人や希望者を人単位で移住させた点で共通する。

註 9　原田遺跡 SI31 の年代は、9 世紀前半と報告されている（宮城県教委 2009a）。

註 10　8 世紀後半に関東系土師器がみられなくなる理由としては、天平宝字元年（757）以降、移民が民・百姓・富民から犯罪人や浮浪人などが中心となり、しかも人単位の移配となったためと考えられている（今泉 1992）。

註 11　糠塚遺跡からは、蝦夷集団の祭祀用儀器と指摘された赤彩広口壺（杉本 1998）が出土している。糠塚の年代は伊治城Ⅲ期と考えられることから、伊治公呰麻呂の乱後も古墳時代後期から続く北上川中流域以北とのつながりは続いていたと考えられる（宮城県教委 1978、村田 1997）。

註 12　八木光則氏は、800 年前後の陸奥・出羽両国では新城柵造営による版図拡大、両国府の整備による支配基盤の安定が認められたが、徳政相論に代表される東北経営の軌道修正によって、城柵の統合による郡制や移民政策の変更・中止が行われた結果、650 年頃以降 20 数ヶ所に設置された城柵が、延暦期の再

配置を経て、承和年間に６城柵に再編された（＝６城柵体制）と指摘している（八木 2001）。その一方、陸奥国の桃生・栗原郡以北では明確な郡家は認められていない。当地における律令支配の実態究明は、今後の大きな研究課題である。

註 13　第３群土器期の年代について、報告書では第２群土器期に対応するとしているが、総括で再検討したところ、第４群土器期に含められ、その中でも古い様相を示すと考えられることから、第３群土器の年代は８世紀中葉～後半とする。

註 14　厳密には、同一噴火輪廻のテフラの可能性がある浅間草津テフラ（As-K）とも考えられる（早田勉氏による）。

註 15　関東系土師器は、器形や器面調整が在地土師器と異なり関東地方と類似するものである。６世紀末以降顕在化し、８世紀中頃まで認められる。搬入品は少なく、基本的に東北で生産されたが、器形や器面調整のほか胎土に鉄分を多く入れて赤く発色させる、ケズリを多用することによって薄手に仕上がるなどの違いが認められる。関東系土器とも呼ばれるが、東北における古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器在地生産再開にあたっても、関東地方との結びつきが強く認められることから、それと区別する意味で「関東系土師器」と呼んでおきたい。

註 16　土師器甕は、器高から大形（25㎝以上）・中形（17㎝以上 25㎝未満）・小形（17㎝未満）に分けられる（村田 2007a）。

註 17　広口壺は球胴甕と呼ばれることもあるが、長胴甕とは器形が異なり煮炊具としての使用痕が認められないことから貯蔵具であり、器種名は「広口壺」がふさわしい（村田 2007a）。

註 18　本遺跡の遺構番号は、県教委調査との重複を避けるため栗原市教育委員会調査（旧町分を含む）で発見されたものは 1001 から附すこととした。このため、市教委で最も古い旧志波姫町調査分は、報告書（志波姫町教委 2005）の番号に 1000 を加えて呼ぶこととする。

註 19　短辺と長辺の差が 60㎝以上を長方形、60㎝未満を方形と判断した。

註 20　これに対し、東壁にカマドをもつ場合、カマドの方向は南へ 15°、北へ 20°と北壁に較べてばらつきが大きい（宮城県教委 1982）。

註 21　SI07・50 はカマド本体の一部が撤去されているが、支脚や焼面の位置から本体の一部（焚口部）は住居内にあったと判断した。また、煙道は後述する伊治城周辺集落のカマドのあり方から長さが 0.9 m以上のものを長煙道、0.7 m未満のものを短煙道と判断した。

註 22　これまでの調査で、Ⅲ群土器に関東系土師器は認められない。しかし、宮城県北部における８世紀中葉から後半の土器群では、その前半（８世紀中葉）に在地化が進んだ関東系土師器が認められること（村田 2000）、栗原郡域でも、伊治城跡採集遺物の中にⅡ群土器期より型式変遷した関東系土師器坏の存在が指摘されていることから（栗原市教委 2015a）、今後の発掘調査でⅢ群土器段階の関東系土師器が出土する可能性がある。

註 23　Ⅲ群土器期の 40 号住は、自動車道の報告書で第２群土器期の可能性を考えていたが、出土した須恵器坏は８世紀中葉であることから、Ⅲ群土器期と判断した。

註 24　自動車道の報告書でも、第 17 号住居跡出土土器は胆沢城跡の中でも最も古い SD114 溝跡出土土器に類似すると指摘している（宮城県教委 1982）。

註 25　自動車道調査時は、壁材痕を認識していなかった。このため、報告書に記載がないが、最近の調査事例をみると、本来は壁材を巡らせた住居が多かったと考えられる。

註 26　壁際に主柱を立てる住居は、そちらへ空間を拡張して入口を設けたと考えられる。大衡村亀岡遺跡 SI11 住居跡はカマド右側の住居外にも柱を立てた例である（大衡村教委 1995）。こうした住居と掘立柱を併用する建物は、日本海側に類例が多い（高橋学 2015）。ｂ・ｃタイプの主柱を持つ住居は、外部の柱穴の有無も注意して調査する必要がある。

註 27　ロクロ土師器や墨書土器はモノであることから、２次的に移動することもあるためその出土が即、官との結びつきを示さない可能性もある。このため、遺構を含めた総合的な分析を行い、考察の確度を高める必要がある。

註 28　単純に計算すると、遺跡面積 600,000（1,500 × 400）÷自動車道調査区・バイパス調査区の面積 50,816（36,000 ＋ 14,816）× 30（両調査のⅡ群土器期住居数）＝ 354.219…となる。

註 29　伊治城周辺集落とは、発掘調査で古代の竪穴住居跡が確認されたもののうち、伊治城から５㎞以内のを目安としており、その大部分は図版２の中に収まる。また、城柵の竪穴住居群を含めたのは、集落と

比較することで、城柵が地域社会に与えた影響など、より多角的な分析が可能と考えたからである。

註 30　原田・糠塚・有賀峰遺跡でも 9 世紀前葉の住居跡は「0」であるが、その前後の時期には住居があることから、未調査部分にこの時期の住居が存在した可能性もあることから、カウントしていない。

註 31　会津型長胴甕は、伊治城跡 SI04（多賀研 1978）、SK18（多賀研 1979）、要害地区表採（栗原市 19）のほか、原田遺跡 SI31（県 219）に認められる。さらに、旧桃生郡の石巻市角山遺跡 SI1013 や同市山居遺跡 SI105（ともに宮城県 2006）からも出土している。

註 32　こうした見解については、関東系土師器と在地土師器の融合や関東型カマドの変遷など、伊治城内と周辺集落との遺構・遺物両面からの検証が必要である。

註 33　住居規模は八木光則氏の論考にもとづいて、面積から小形（15㎡未満）、中形（15㎡以上 25㎡未満）、大形（25㎡以上 40㎡未満）、特大形（40㎡以上 60㎡未満）、超大形（60㎡以上）に分けている（八木 1998）。

註 34　散村形態と異なる集落が糠塚遺跡である（宮城県教委 1978）。8 世紀末～ 9 世紀初頭に出現し、住居の重複が多い。土師器は古墳後期以来の伝統的器種である高坏や甑を有し、東北北部系の土器を持つ一方、須恵器食器が多く認められる。集落形態や土器様相が異なることから、移住した蝦夷が住んだ集落といった、特別なムラとみられる。

註 35　伊治城跡は、竪穴住居について遺構確認でとどめたものが多く、所属時期が明らかなものは少ない。

註 36　御駒堂遺跡 SI51 は火災後のつぶれたカマドの上から、ミニチュア土器が出土した。突発的な火災ののち、居住者が住居に戻って廃絶祭祀を行ったと考えられる。

註 37　桃生城の東郭とみられる新田東遺跡（村田 2004）でも、8 世紀後半の竪穴住居が火災に遭っており、その原因は宝亀 5 年（774）の海道蝦夷の襲撃と指摘されている（宮城県教委 2003a）。

図版出典

図版 5：横浜市歴史博物館 2002、村田晃一 2000、宮城県教委 1982 より編集。
図版 102：宮城県教委 1982 より編集。図版 104：宮城県教委 2009 より編集。
図版 105：宮城県教委 1982・2012、栗原市教委 2014 より編集。
図版 101：各報告書より転載（表 10 参照）。ただし、石器写真は栗原市教育委員会提供
図版 106 ～ 114：宮城県教委 2009 より編集。
図版 116：村田晃一 2010 に加筆。図版 118：村田晃一 2015 に加筆・編集。
図版 117：宮城県教委 2006・2009、多賀研 1978・1979、栗原市教委 2015b

引用・参考文献

青森県史編さん古代部会編　2001『青森県史　資料編　古代 1　文献史料』 青森県

池田敏宏　2009「栃木県における 6・7 世紀の土器様相－地域間交流を中心視座にすえて－」『古代社会と地域間交流』 国士舘大学考古学会編　六一書房　pp.93 ～ 110

今泉隆雄　1992「律令国家とエミシ」『古代の日本』第 9 巻　東北・北海道　角川書店　pp.163 ～ 198

今泉隆雄・藤沢敦　2006「古代史の舞台　東北」『列島の古代史 1』 岩波書店　pp.63 ～ 110

大場正善・小野章太郎・安倍奈々子　2006 「宮城・福島の石刃石器群」『東北日本の石刃石器群」『東北日本の石刃石器群』第 20 回東北日本の旧石器文化を語る会　pp.92 ～ 121

大衡村教育委員会　1995『亀岡遺跡』 大衡村文化財調査報告書第 1 集

押切・多田・西田　2003「渋江遺跡検出の墓域について－特に近代墓に関する報告－」『研究紀要』創刊号　山形県埋蔵文化財センター　pp.146 ～ 153

鹿又喜隆・川口亮　2015「宮城県仙台市野川遺跡 2015 年度発掘調査の概要」『第 29 回東北日本の旧石器文化を語る会　予稿集』 pp.59 ～ 66

加美町教育委員会　2005『地蔵車遺跡』 加美町文化財調査報告書第 4 集

川口潤　2011「大平山元遺跡群の位置付け」『大平山元』青森県津軽郡外ヶ浜町教育委員会　pp.92 ～ 100

北東北古代集落遺跡研究会　2014『 9 ～ 11 世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実際的研究』

興野義一　1976 「原始期」『一迫町史』pp. 45-100
熊谷公男　1992「古代東北の豪族」『新版古代の日本』第９巻　東北・北海道　角川書店　pp.261 ～ 288
熊谷公男　2000a「養老四年の蝦夷の反乱と多賀城の創建」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 84 集　pp.61 ～ 90
熊谷公男　2000b「第Ⅲ章　律令社会と変貌」『仙台市史　通史編２古代中世』 pp.140 ～ 174
熊谷公男　2004『古代の蝦夷と城柵』 吉川弘文館
熊谷公男　2007「多賀城創建再考」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）研究成果報告書　pp.418 ～ 442
熊谷公男　2009「律令国家形成期における柵戸と関東系土師器」『古代社会と地域間交流』国士舘大学考古学会編　六一書房　pp.163 ～ 191
熊谷公男　2015「蝦夷支配体制の強化と戦乱の時代への序曲」『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館　pp.218 ～ 250
熊谷公男　2016「古代国家北縁の二つの世界－栗原市入の沢遺跡の発見によせて－」『日中韓周縁域の宗教文化Ⅱ』 pp.33 ～ 51
熊田亮介　1983「宮城の式内社をめぐる諸問題」『宮城の研究』第２巻　古代篇　中世篇Ⅰ　pp.181 ～ 215
熊田亮介　1992「奥羽の神々」『新版古代の日本』第９巻　東北・北海道　角川書店　pp.311 ～ 332
栗駒町教育委員会　1972『宮城県栗原郡鳥矢崎古墳調査概報』
栗駒町教育委員会　1995『長者原遺跡』栗駒町文化財調査報告書第３集
栗原市教育委員会　2006「四ッ壇遺跡」『四ッ壇遺跡ほか』栗原市文化財調査報告書第３集　pp.1 ～ 29
栗原市教育委員会　2009『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第９集
栗原市教育委員会　2010a『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第 11 集
栗原市教育委員会　2010b『大久保遺跡』栗原市文化財調査報告書第 12 集
栗原市教育委員会　2012『源光遺跡』栗原市文化財調査報告書第 15 集
栗原市教育委員会　2013『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第 17 集
栗原市教育委員会　2014『城下遺跡』栗原市文化財調査報告書第 18 集
栗原市教育委員会　2015a「平成 26 年度史跡伊治城跡・源光遺跡発掘調査の概要」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』 pp.117 ～ 124
栗原市教育委員会　2015b『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第 19 集
栗原市教育委員会　2016『下萩沢遺跡』栗原市文化財調査報告書第 20 集
小井川和夫・村田晃一　1994「古代東北地方南部の集落と生業」『北日本の考古学』吉川弘文館　pp.175 ～ 200
坂口豊　1984a「寒冷地域の気候変化」『寒冷地域の自然環境』北大図書刊行会
坂口豊　1984b「日本の先史・歴史時代の気候」『自然』５月号
桜岡正信　2009「古代東北と上野」『古代社会と地域間交流』国士舘大学考古学会編　六一書房　pp.77 ～ 92
佐藤敏幸　2007「宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）研究成果報告書　pp.164 ～ 209
進藤秋輝　2010「多賀城研究の現段階－東北城柵の変遷と課題－」『考古学ジャーナル』604 号　ニューサイエンス社　pp.3 ～ 7
志波姫町教育委員会　2005『御駒堂遺跡』志波姫町文化財調査報告書第１集
菅原祥夫　2015「律令国家形成期の移民と集落」『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館　pp.64 ～ 86
杉井健　1993「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第 40 巻第１号　考古学研究会　pp.33 ～ 59
杉本良　1998「岩手県北上盆地における蝦夷集団の動態」『考古学研究』第 45 巻第１号　pp.71 ～ 89
鈴木隆・大場亜弥・須藤隆　2003「宮城県一迫町採集の大型局部磨製石斧２例」『宮城考古学』第５号　pp.241 ～ 254
鈴木拓也　1998『古代東北の支配構造』吉川弘文館
鈴木拓也　2008『蝦夷と東北戦争』吉川弘文館
瀬峰町教育委員会　1983『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第４集
瀬峰町教育委員会　1987「瀬峰町泉谷館跡・清水山Ⅰ遺跡発掘調査略報」『瀬峰町の文化財』第６集　pp.12 ～ 23

瀬峰町教育委員会　1988『下藤沢Ⅱ遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第６集
瀬峰町教育委員会　2000「桃生田前遺跡」『桃生田前遺跡　下富前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第 19 集
瀬峰町教育委員会　2003『長根遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第 21 集
仙台郷土研究会　2002『仙台藩歴史事典』
仙台市教育委員会　1996『野川遺跡』仙台市文化財調査報告書第 205 集
仙台市教育委員会　2011「大野田古墳群」『下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第 390 集　pp.490 ～ 614
外山政子　1990a「羽田倉遺跡の煮沸具の観察から－古墳時代を中心として－」『長根羽田倉遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第 99 集　pp.500 ～ 509
外山政子　1990b「矢田遺跡の平安時代のカマドと煮沸具－煮沸具の使用痕跡の観察結果から－」『矢田遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第 99 集　pp.263 ～ 273
外山政子　1991「三ッ寺Ⅱ遺跡のカマドと煮炊」『三ッ寺Ⅱ遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第 93 集　pp.173 ～ 204
外山政子　1998「関東北西部地域の平安時代住居とカマド－群馬県矢田遺跡の検討から－」『法政考古学』第 24 集　法政考古学会　pp.41 ～ 62
高清水町教育委員会　2000「経ヶ崎遺跡」『経ヶ崎遺跡　観音沢遺跡』高清水町文化財調査報告書第２集　pp.4 ～ 68
高清水町教育委員会　2000「観音沢遺跡」『経ヶ崎遺跡　観音沢遺跡』高清水町文化財調査報告書第２集　pp.69 ～ 108
多賀城跡調査研究所　1978『伊治城跡Ⅰ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第３冊
多賀城跡調査研究所　1979『伊治城跡Ⅱ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第４冊
多賀城跡調査研究所　1980『伊治城跡Ⅲ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第５冊
多賀城跡調査研究所　1992『年報　1991』
多賀城市教育委員会　1998『大日北遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 49 集
高橋一夫　2011「カマド掛け口考」『埼玉考古』第 46 号　埼玉考古学会　pp.85 ～ 94
高橋千晶　2007「岩手県南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）研究成果報告書　pp.210 ～ 244
高橋誠明　2009「古代社会と地域間交流－土器からみた関東系土師器と東北の様相－」『古代社会と地域間交流』六一書房　pp.209 ～ 218
高橋誠明　2015「古墳時代前期の倭国北縁社会－宮城県北部の様相－」『古代倭国北縁の軋轢と交流　栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』東北学院大学アジア流域文化研究所　pp.46 ～ 63
高橋学　1984「奈良・平安時代の竪穴住居跡復原－カマドの類型化作業を通して－」『秋田考古学』第 38 号　pp.1 ～ 17
高橋学　2015「竪穴・掘立柱併用建物」『季刊考古学』第 131 号　雄山閣　pp.77 ～ 79
谷旬　1982「古代東国のカマド」『研究紀要７』千葉県文化財センター　pp.223 ～ 248
谷旬　1990「所謂「Ｆ類カマド」型の集落（上総西部編）」『研究連絡誌』第 29 号　千葉県文化財センター　pp.1 ～ 5
千葉長彦・後藤秀一　2001「伊治城跡発掘調査の成果」『第 27 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』pp.101 ～ 128
築館町教育委員会　1991『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第４集
築館町教育委員会　1992『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第５集
築館町教育委員会　1993『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第６集
築館町教育委員会　1994『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第７集
築館町教育委員会　1995『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第８集
築館町教育委員会　1998『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第 11 集
築館町教育委員会　2001『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第 14 集
築館町教育委員会　2003『嘉倉貝塚』築館町文化財調査報告書第 16 集
築館町教育委員会　2004『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第 17 集
築館町教育委員会　2005『鰻沢遺跡』築館町文化財調査報告書第 18 集

築館町史編纂委員会　1976『築館町史』pp.138
辻秀人　2007「栗囲式土師器の製作技法」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）研究成果報告書　pp.411～417
辻秀人ほか　2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）研究成果報告書』
辻秀人ほか　2015「鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告」『東北学院大学論集　歴史と文化』第53号　pp.59～102
鶴間正昭　2004「関東にみる新型土師器坏の出現」『研究論集』ＸＸ　東京都埋蔵文化財センター　pp.1～22
鶴間正昭　2009「南武蔵・相模の土器様相と地域間交流」『古代社会と地域間交流』国士舘大学考古学会編　六一書房　pp. 7～34
東北学院大学考古学研究部　1972「鳥矢ヶ崎古墳群発掘調査概報」『温故』第7号
東北学院大学考古学研究部　1979「亀岡遺跡発掘調査報告」『温故』第12号　pp. 1～141
東北学院大学アジア流域文化研究所　2015『古代倭国北縁の軋轢と交流　栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』
東北歴史博物館　2004『東北発掘ものがたり』
富田和夫　2009「移民の携えた土器－北武蔵・上野由来の「関東系土師器」をめぐって」『古代社会と地域間交流』国士舘大学考古学会編　六一書房　pp.55～76
登米市教育委員会　2011『滝塚・滝遺跡』登米市文化財調査報告書第2集
永田英明　2016「古代東北の軍事と交通－城柵をめぐる交通関係－」『日本古代の交通・交流・情報』1　吉川弘文館　pp.206～232
永田英明　2015「城柵の設置と新たな蝦夷支配」『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館　pp.15～58
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム　1997～1999「神奈川県におけるカマド構造の基礎的研究（1）～（3）」『研究紀要2～4　かながわの考古学』神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人神奈川考古学財団
迫町教育委員会　2005『坂戸遺跡』迫町文化財調査報告書第4集
樋口知志　2013『阿弖流為』ミネルヴァ書房
藤沢敦 2000「栗原・桃生・本吉地方の古墳墓」『阿部正光君追悼集』阿部正光君追悼集刊会　pp.69～80
古川一明　1996「北辺に分布する横穴墓について」『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生退官記念論集刊行会　pp.255～272
古川市教育委員会　2003『筆塚Ｂ遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書第34集
松本太郎　2009「鬼高系の系譜と歴史的背景」『古代社会と地域間交流』国士舘大学考古学会編　六一書房　pp.35～54
松本太郎　2013『東国の土器と官衙遺跡』六一書房
宮城県教育委員会　1978「糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）』宮城県文化財調査報告書第53集　pp.44～198
宮城県教育委員会　1979a『宇南遺跡』宮城県文化財調査報告書第59集
宮城県教育委員会　1979b『五輪Ｃ遺跡』宮城県文化財調査報告書第61集
宮城県教育委員会　1980a「大門遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第62集　pp.273～306
宮城県教育委員会　1980b「藤屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第63集　pp.119～251
宮城県教育委員会　1980c「西手取・手取遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第63集　pp.252～408
宮城県教育委員会　1980d「原田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第63集　pp.409～423
宮城県教育委員会　1980e「佐野遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第63集　pp.425～546
宮城県教育委員会　1980f「木戸遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集　pp.423～460
宮城県教育委員会　1980g「山ノ上遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集　pp.461～499

宮城県教育委員会　1980h「宇南遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 69 集　pp.501 ～ 556
宮城県教育委員会　1980i「有賀峰遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 69 集　pp.557 ～ 589
宮城県教育委員会　1980j「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第 72 集　pp.131 ～ 349
宮城県教育委員会　1980k「八沢要害遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第 72 集　pp.351 ～ 398
宮城県教育委員会　1981a『上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第 78 集
宮城県教育委員会　1981b「鶴ノ丸遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第 81 集　pp.353 ～ 500
宮城県教育委員会　1982「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告所Ⅵ』宮城県文化財調査報告書第 83 集　pp.307 ～ 584
宮城県教育委員会　1983「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ』宮城県文化財調査報告書第 93 集　pp.289 ～ 546
宮城県教育委員会　2001「淀遺跡」『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 187 集　pp.151 ～ 154
宮城県教育委員会　2003a『新田東遺跡』宮城県文化財調査報告書第 191 集
宮城県教育委員会　2003b『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第 192 集
宮城県教育委員会　2005『角山遺跡』宮城県文化財調査報告書第 200 集
宮城県教育委員会　2006『角山遺跡・山居遺跡』宮城県文化財調査報告書第 206 集
宮城県教育委員会　2009a「原田遺跡」『原田遺跡・下萩沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第 219 集　pp.1 ～ 109
宮城県教育委員会　2009b「下萩沢遺跡」『原田遺跡・下萩沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第 219 集　pp.109 ～ 272
宮城県教育委員会　2012『大天馬遺跡』宮城県文化財調査報告書第 231 集
宮城県教育委員会　2016『大天馬遺跡』宮城県文化財調査報告書第 240 集
宮崎町教育委員会　1996『米泉館跡』宮崎町文化財調査報告書第 5 集
村上裕次　2015a「入の沢遺跡の調査成果」『古代倭国北縁の軋轢と交流　栗原市入の沢遺跡で何が起きたか』東北学院大学アジア流域文化研究所　pp.11 ～ 22
村上裕次　2015b「古墳時代前期北縁の拠点的な集落－栗原市入の沢遺跡」『季刊考古学』第 133 号　pp.89 ～ 90
村田晃一　1997「陸奥中部における北との交流」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会 1997 年度秋田大会資料　pp.243 ～ 271
村田晃一　2000「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺」『宮城考古学』第 2 号 宮城県考古学会　pp.45 ～ 80
村田晃一　2004「三重構造城柵論」『宮城考古学』第 6 号 宮城県考古学会　pp.159 ～ 186
村田晃一　2007a「宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 平成 15 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）研究成果報告書　pp.119 ～ 163
村田晃一　2007b「陸奥北辺の城柵と郡家」『宮城考古学』第 9 号 宮城県考古学会　pp.85 ～ 110
村田晃一　2009「律令国家形成期の陸奥北辺経営と坂東－在地土師器・関東系土師器・囲郭集落の検討から－」『古代社会と地域間交流』 国士舘大学考古学会編　六一書房　pp.141 ～ 162
村田晃一　2010「黒川以北十郡における城柵・官衙群」『考古学ジャーナル』604 号　ニューサイエンス社　pp.21 ～ 26
村田晃一　2015「版図の拡大と城柵」『蝦夷と城柵の時代』 吉川弘文館　pp.87 ～ 118
村田晃一　2016a「日本古代城柵の検討（３）－飛鳥時代の城柵－」『日本古代考古学論集』 同成舎　pp.638 ～ 652
村田晃一 2016b「律令国家の拡大と城柵－伊治城跡と桃生城跡の成果を中心に－」『栗原市伊治城跡から読み解く東北古代史』東北学院大学アジア流域文化研究所　pp.47 ～ 64
八木光則　1998「馬淵川流域の様相」『第 24 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』 pp.77 ～ 90
八木光則　1999「東北北部の終末期古墳」『北海道考古学』第 35 輯　北海道考古学会　pp.89 ～ 100

八木光則　2001「城柵の再編」『日本考古学』第 12 号　日本考古学協会　pp.55 ～ 68
柳澤和明　2001「桃生城跡発掘調査の成果」『第 27 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』 pp.77 ～ 100
柳澤和明　2010「桃生城跡と伊治城跡」『考古学ジャーナル』604 号　ニューサイエンス社　pp.27 ～ 30
柳田俊雄　2003「東北地方中南部地域の「暗色帯」とそれに対応する層から出土する石器群の特徴について」『Bulletin of the Tohoku University Museum』 3　pp.69 ～ 89
山中雄志　2003「古代会津地方の長胴甕にみる特質について」『行政社会論集』第 15 巻第 3 号　福島大学行政社会学会　pp.217 ～ 236
横浜市歴史博物館　2002『東へ西へ　－律令国家を支えた古代東国の人々－』
横浜市歴史博物館　2006『「諸岡五十戸」木簡と横浜　－大宝律令以前の支配システムを探る－』
横浜市歴史博物館　2007『ヒトが移るモノが動く　－古代の東国にその痕跡を探る－』

附章　栗原市御駒堂遺跡における火山灰分析

株式会社　火山灰考古学研究所

１．はじめに

東北地方宮城県北部に位置する栗原市とその周辺の地層や土壌の中には、鳴子、肘折、栗駒、十和田など東北地方の火山のほか、洞爺、浅間、御岳、三瓶、阿蘇、姶良、鬼界など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く認められる。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ（町田・新井 1992・2003・2011）などに収録されており、考古遺跡などで調査分析を行い年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

栗原市御駒堂遺跡における発掘調査でも、層位や年代が不明な石器や遺構などが検出されたことから、地質調査を行って土層やテフラ層の記載を行うとともに、高純度の分析試料を採取し、実験室内でテフラ分析（火山ガラス比分析，火山ガラスの屈折率測定，火山ガラスの EPMA 分析）を実施して、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を行うことになった。調査分析の対象は、A5 グリッド西壁、SI11 住居跡、SK40 土坑（壁面）、第 19 トレンチ南壁の 4 地点である。

２．土層層序

（1）A5 グリッド西壁

御駒堂遺跡の基本的土層断面である A5 グリッド西壁では、下位より白色粘土質シルト層（層厚 20cm 以上，ⅩⅣ層）、黄褐色風化軽石層（層厚 19cm，ⅩⅢ層）、黄色凝灰質砂層（層厚 12cm，ⅩⅡ層）、黄白色粘土質シルト層（層厚 14cm，ⅩⅠ層）、やや黄色がかった褐色土（層厚 14cm，Ⅸ層）、砂混じり黄色土（層厚 8cm，Ⅷ層）、砂混じりでやや褐色がかった黄色土（層厚 12cm，Ⅶ層）、砂混じり黄色土（層厚 12cm，Ⅵ層）、砂混じり黄色土（層厚 7cm，Ⅴｂ層）、暗褐色土（層厚 10cm，Ⅴａ層）、暗灰褐色土（層厚 5cm，Ⅰ層）、暗灰色土（層厚 17cm，表土）が認められる（図 1）。これらのうち、Ⅵ層が旧石器時代から縄文時代の遺物包含層である。

（2）SI11 住居跡

奈良時代の竪穴住居跡と推定されている SI11 住居跡は、下位より黄色土ブロックを多く含みやや灰色がかった暗褐色土の上面に床面がつくられている（図 2）。床面は、下位より黄色土粒子や炭化物を含みやや灰色がかった暗褐色土（層厚 10cm）、色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚 15cm）、テフラ層（層厚 13cm）、暗灰色土（層厚 4cm）、暗灰褐色土（層厚 19cm）で覆われている（図 2）。

（3）SK40 土坑（壁面）

SK40 土坑壁面では、下位より褐色土（層厚 20cm 以上）、褐灰色土（層厚 7cm）、亜円～亜角礫からなる礫層（層厚 4cm，礫の最大径 14mm）、灰色シルト層（層厚 6cm）、亜円～亜角礫からなる礫

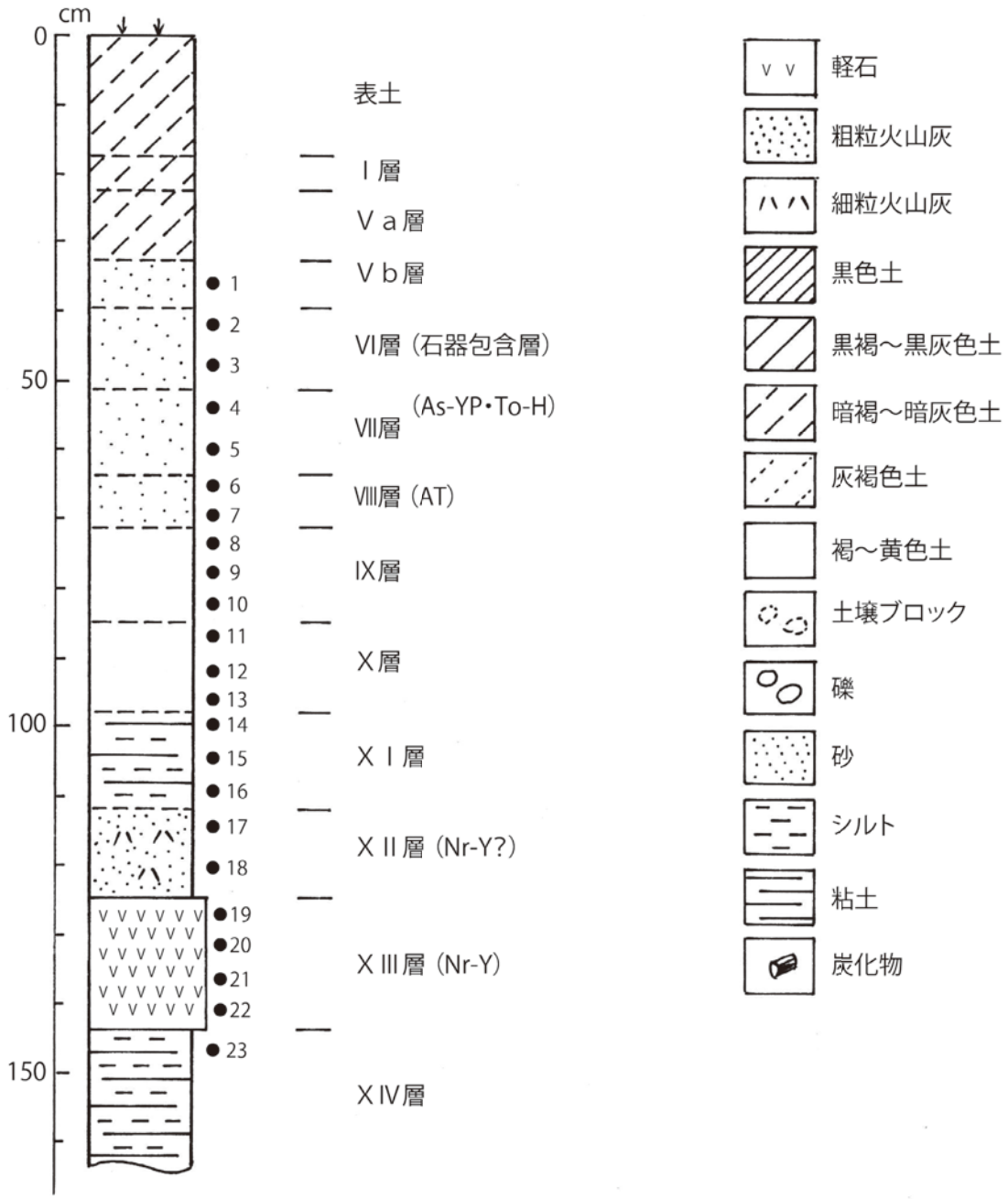


図１　A5 グリッド西壁の土層柱状図　●：テフラ分析試料の層位．数字：テフラ分析試料番号

層（層厚 3cm，礫の最大径８mm）、黄灰色シルト層（層厚 14cm）、亜円礫層（層厚 1cm，礫の最大径 11mm）、黄灰色シルト層（層厚 6cm）、黄灰色砂層（層厚 8cm）、基底に亜角礫を含む褐色土（層厚 18cm，礫の最大径 24mm）が認められる（図 3）。最上位の土層の上面が SI6 住居跡の床面に相当する。

（4）第 19 トレンチ南壁

第 19 トレンチでは、下位より黄灰色砂層（層厚 10cm 以上）、黄灰色砂質土（層厚 15cm）、黄色土（層厚 21cm）、やや灰色がかった黄色土（層厚 17cm，Ⅸ層）、炭化物混じり灰黄色土（層厚 16cm，Ⅷ層）が認められる（図 4）。

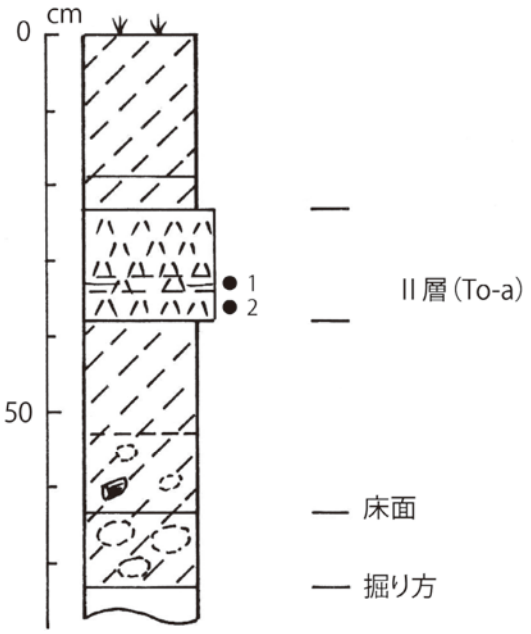


図 2　SI11 住居跡の土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位
数字：テフラ分析試料番号

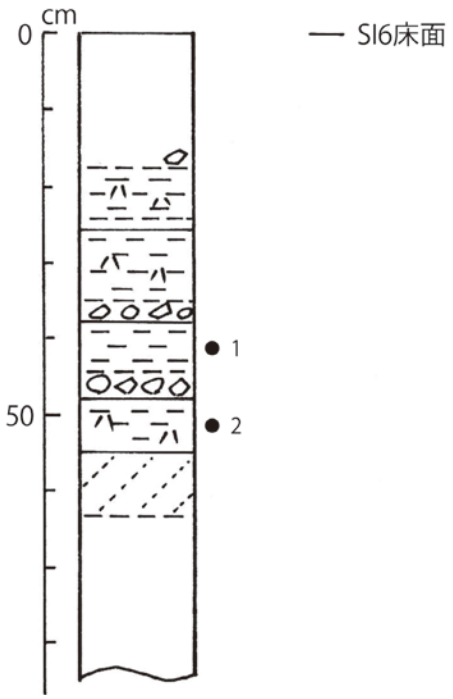


図 3　SK40 土坑壁面の土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位
数字：テフラ分析試料番号

3．火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

御駒堂遺跡の遺構・遺物の層位や形成年代を明らかにするため、基本的に厚さ 5cm ごとに設定採取された試料あるいは土層ごとに採取された試料のうちの 15 試料を対象に、火山ガラスの形態色調別含有率と、重鉱物や軽鉱物の含有率を合わせて求める火山ガラス比分析を実施して、ガラス質テフラの検出ならびにテフラ層に含まれる火山ガラスの特徴の把握を行った。分析の手順は次のとおりである。

1）砂分の量に合わせて試料 6 ～ 10g を秤量。

2）超音波洗浄により泥分を除去。

3）80℃で恒温乾燥。

4）実体顕微鏡下でテフラ粒子の相対的な量や特徴を観察。

5）分析篩により、1/4 ～ 1/8mm と 1/8 ～ 1/16mm の粒子を篩別。

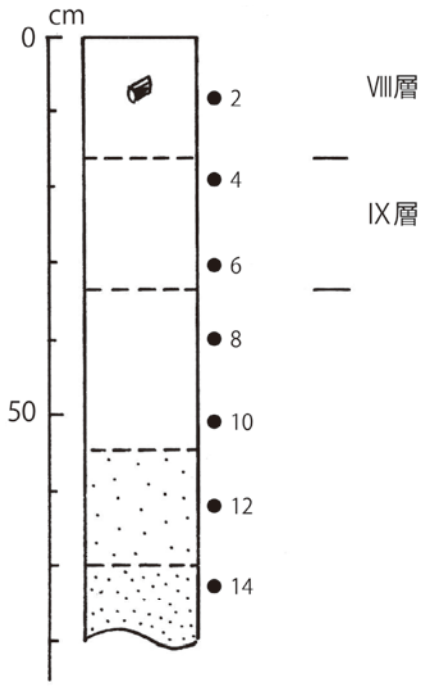


図 4　第 19 グリッド南壁の土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位
数字：テフラ分析試料番号

6）偏光顕微鏡下で 1/4 ～ 1/8mm 粒径の 250 粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別含有率ならびに軽鉱物や重鉱物の含有率を求める。

（2）分析結果

火山ガラス比分析の結果を、ダイヤグラムにして図 5 に、またその内訳を表 1 に示す。A5 グリッド西壁では、試料 21 に火山ガラスが多く含まれている（36.4％）。火山ガラスは、含有率が高い順に繊維束状軽石型（28.0％）、分厚い中間型（6.4％）、スポンジ状軽石型（2.0％）である。軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ 52.0％と 6.0％で後者の含有率が低い。不透明鉱物以外に含まれる重鉱物は、斜方輝石や角閃石である。

ほかには、試料 13 にやや多くの火山ガラスが認められる（24.4％）。火山ガラスは、含有率が高い順に繊維束状軽石型（14.4％）、中間型（7.6％）、スポンジ状軽石型（1.6％）、そして無色透明のバブル型（0.8％）である。このうち、バブル型ガラスはやや厚手のものである。軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ 37.2％と 3.2％で、やはり後者の含有率が低い。不透明鉱物以外に含まれる重鉱物も、斜方輝石や角閃石で、試料 21 の傾向と似ている。

それより上位では火山ガラスの含有率は高くないものの、試料 7 より上位で、無色透明のバブル型ガラスが少量ながら連続的に検出される。また、試料 3 より上位では、スポンジ状軽石型ガラスが、やはり少量ながら検出される。さらに、試料 2 では、前後の試料と比較して、やや多くの火山ガラスが認められる（12.8％）。この試料に含まれる火山ガラスは、含有率が高い順に中間型（6.4％）、繊維束状軽石型（5.2％）、無色透明のバブル型（0.8％）、スポンジ状軽石型（0.4％）である。なお、中間型ガラスは、試料 4 より上位でやや含有率が高い傾向にある。下位の試料と比較すると、斜方輝石や角閃石など重鉱物の含有率が高い。

以上のことから、テフラ層をのぞけば、A5 グリッド西壁では、試料 7 付近にバブル型ガラス、試料 4 付近に中間型ガラス、そして試料 2 付近に、中間型、繊維束状軽石型、そしてスポンジ状軽石型などの火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準のある可能性が指摘される。

同じようにローム層について分析を実施した第 19 トレンチ南壁では、A5 グリッド西壁より火山ガラスの含有率がやや高い傾向が伺えるが、テフラの有意な層位的変化はほとんど認められない。

表 1　火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw (cl)	bw (pb)	bw (br)	md	pm (sp)	pm (fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
A5 グリッド西壁	1	1	0	0	9	2	11	132	10	85	250
	2	2	0	0	16	1	13	132	19	67	250
	3	2	0	0	8	1	8	149	22	60	250
	4	1	0	0	10	0	9	159	18	53	250
	5	1	0	0	6	0	10	157	19	57	250
	7	1	0	0	8	1	15	139	19	67	250
	9	0	0	0	8	3	14	142	23	60	250
	13	2	0	0	19	4	36	93	8	88	250
	15	1	0	0	12	1	17	110	41	68	250
	17	0	0	0	9	7	24	109	11	90	250
	21	0	0	0	16	5	70	130	15	14	250
第 19 トレンチ南壁	2	1	0	0	23	2	11	109	23	81	250
	4	3	0	0	14	1	9	131	21	71	250
	6	1	0	0	18	0	12	120	24	75	250
SI11 住居跡	2	1	0	0	10	5	24	75	10	125	250

bw: バブル型, mb: 中間型, pm: 軽石型, cl: 無色透明, pb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状. 数字は粒子数.

SI11 住居跡の試料 2 には、やや多くの火山ガラスが含まれている（16％）。この試料に含まれる火山ガラスは、含有率が高い順に繊維束状軽石型（9.6％）、中間型（4.0％）、スポンジ状軽石型（2.0％）、無色透明のバブル型（0.4％）である。軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ 30.0％と 4.0％で後者の含有率が低い。不透明鉱物以外に含まれる重鉱物は、斜方輝石や単斜輝石である。

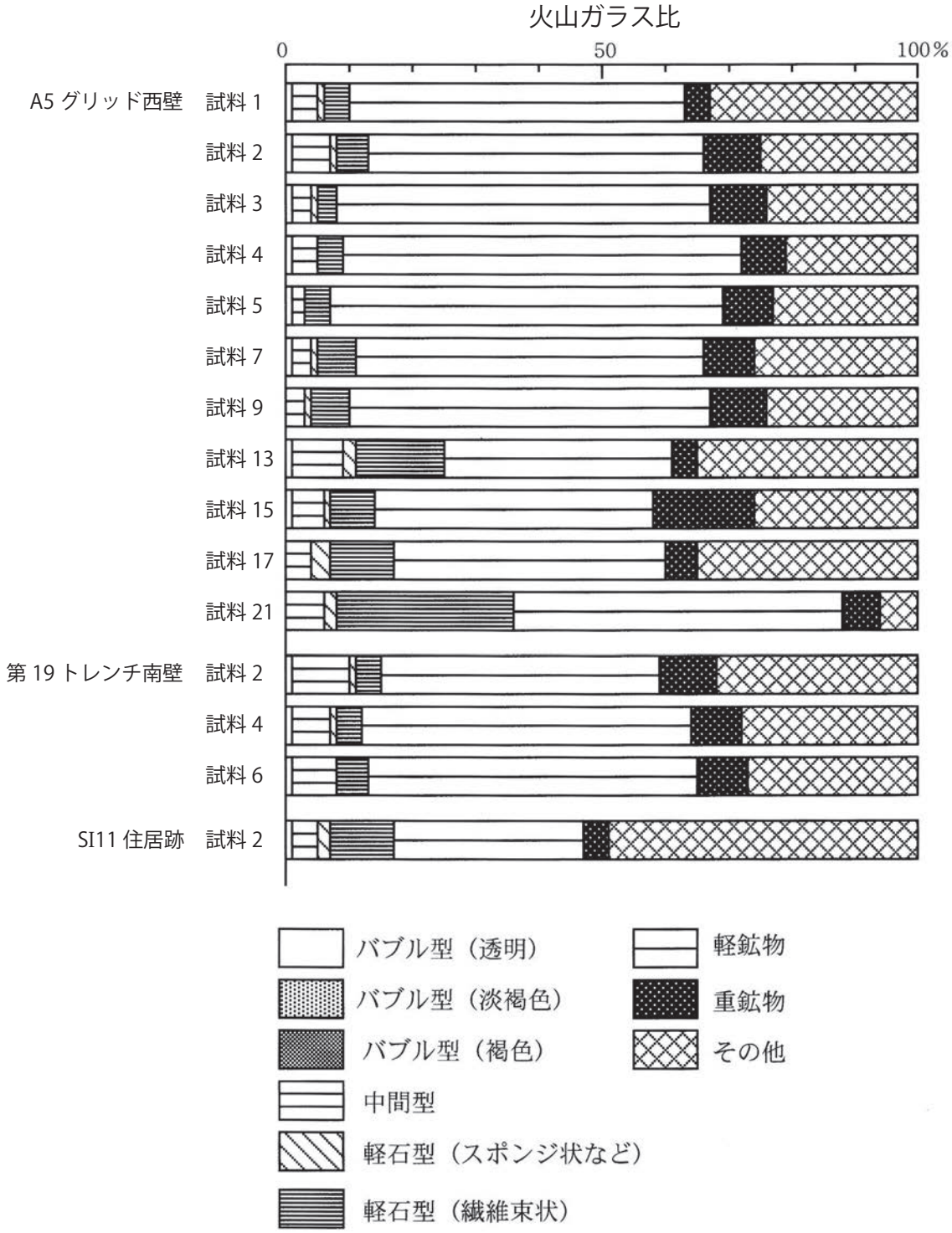


図 5　御駒堂遺跡テフラ試料の火山ガラス比ダイヤグラム

4．屈折率測定（火山ガラス）

（1）測定試料と測定方法

火山ガラス比分析の対象試料のうち、A5 グリッド西壁および SI11 住居跡の 5 試料に含まれる火山ガラスについて、指標テフラとの同定精度を向上させるために含まれる火山ガラス（n）の屈折率測定を行った。測定に用いた機器は温度変化型屈折率測定装置（京都フィッション・トラック社製 RIMS2000）で、1/8 ～ 1/16mm 粒子の中の火山ガラスを測定対象とした。

（2）測定結果

屈折率の測定結果を表 2 に示す。この表には、宮城県北部周辺の後期更新世以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて示した。A5 グリッド西壁の試料 21 に含まれる火山ガラス（32 粒子）の屈折率（n）は、1.501-1.503 である。試料 7 に含まれる火山ガラス（34 粒子）の屈折率（n）は、1.499-1.504 である。試料 4 に含まれる火山ガラス（30 粒子）の屈折率（n）も、1.499-1.504 である。試料 2 に含まれる火山ガラス（33 粒子）の屈折率（n）は、1.501-1.506 である。

一方、SI11 住居跡の試料 2 に含まれる火山ガラス（30 粒子）の屈折率（n）は、1.500-1.506 である。

表 2　屈折率測定結果

地点・テフラ	試料	火山ガラス		文献
		屈折率（n）	測定点数	
A5 グリッド西壁	2	1.501-1.506	33	本報告
	4	1.499-1.504	30	本報告
	7	1.499-1.504	34	本報告
	21	1.501-1.503	32	本報告
SI11 住居跡	2	1.500-1.506	30	本報告
指標テフラ				
十和田 a（To-a）	岩手周辺	1.500-1.508		町田・新井（2011）
	宮城周辺	1.503-1.507		町田・新井（2011）
十和田中掫（To-Cu）		1.508-1.512		町田・新井（2011）
肘折尾花沢（Hj-O）		1.499-1.504		町田・新井（2011）
十和田八戸（To-H）		1.502-1.509		町田・新井（2011）
浅間板鼻黄色（As-YP）		1.501-1.505		町田・新井（2011）
鳴子潟沼上原（Nk-U）		1.492-1.500		早田（2001）
姶良 Tn（AT）		1.498-1.501		町田・新井（2011）
十和田大不動（To-Of）		1.505-1.511		町田・新井（2011）
クッチャロ庶路（Kc-Sr）		1.502-1.505		町田・新井（2011）
支笏 1（Spfa-1）		1.501-1.505		町田・新井（2011）
焼石山形（Yk-Y）		1.500-1.503		町田・新井（2011）
鳴子柳沢（Nr-Y）		1.500-1.503		町田・新井（2011）
阿蘇 4（Aso-4）		1.506-1.510		町田・新井（2011）
鳴子荷坂（Nr-N）		1.500-1.502		町田・新井（2011）
肘折北原（Hj-Kth）		1.499-1.502		町田・新井（2011）
三瓶木次（SK）		1.496-1.498		町田・新井（2011）
洞爺（Toya）		1.494-1.498		町田・新井（2011）

本報告における屈折率の測定は, 温度変化型屈折率測定装置による.

5．火山ガラスの EPMA 分析（主成分化学組成分析）

（1）分析試料と分析方法

指標テフラとの同定精度をさらに向上させるため、屈折率測定試料のうち、A5 グリッド西壁の 4 試料に含まれる火山ガラスを対象に、電子線マイクロアナライザ（EPMA）により、1/4-1/8mm 粒径の火山ガラスの主成分化学組成を明らかにした。分析に使用した分析機器は、山形大学理学部の日

本電子 JXA8600MWDS 型 EPMA である。加速電圧 15kV、照射電流 0.01 μ A、ビーム径 10 μ m の条件で行った。また、補正には Oxide ZAF 法を用いた。

（2）分析結果

分析結果を表 3 ～ 6 に示す。さらに指標テフラとの比較のために、従来の東北地方中南部に分布する後期更新世後半以降の指標テフラの主成分化学組成データ（八木・早田 1989）を加えて表 7 を作成した。なお、分析結果はいずれも無水に換算して表示している。

4 試料では、下位の 2 試料と、上位の 2 試料でそれぞれ同じような傾向が認められた。

6．考察

A5 グリッド西壁における火山ガラスの屈折率測定対象試料のうち、試料 21（XⅢ層）が採取された軽石層は、層相、火山ガラスの形態や色調、火山ガラスの屈折率特性や主成分化学組成から、約 4.1 ～ 6.3 万年前に鳴子カルデラから噴出した鳴子柳沢テフラ（Nr-Y, 早田 1989, 町田･新井 2003 など）のうちの降下テフラ層と思われる。その上位に堆積する凝灰質砂層（XⅡ層）が、柳沢火砕流に関係するとすれば、Y1 降下軽石（早田 1989）の可能性が指摘される。

試料 7（Ⅷ層）に含まれる火山ガラスの多くも、主成分組成化学組成から Nr-Y に由来すると考えられる。ただし、無色透明のバブル型ガラスが含まれていること、Nr-Y と比較してやや低い屈折率特性をもつ火山ガラスが含まれていることなどから、このⅧ層中に約 2.8 ～ 3.0 万年前に姶良カルデラから噴出した姶良 Tn 火山灰（AT，町田・新井 1976・1992，松本ほか 1987，村山ほか 1993，池田ほか 1995）の降灰層準のある可能性が考えられる。AT が EPMA 分析で検出されなかったことには、屈折率測定と EPMA 分析での対象粒径の違いが関係しているのかも知れない。

試料 4（Ⅶ層）も火山ガラスの屈折率特性が試料 7（Ⅷ層）と類似していることから、Nr-Y や AT が混在していると考えられる。ただ、この試料に含まれる火山ガラスの主成分組成は、十和田系テフラの特徴を示唆している。本地域に降灰している十和田系テフラとしては、約 3.2 万年前以前に十和田火山から噴出した十和田大不動テフラ（To-Of，中川ほか 1972，Hayakawa, 1985，大池・中川 1979，松山・大池 1986，町田・新井 2003，古環境研究所 2004，小岩ほか 2007）や、約 1.5 万年前に十和田火山から噴出した十和田八戸テフラ（To-H，中川ほか 1972，早川 1983，Hayakawa, 1995，町田・新井 2003）が考えられる。すぐ下位のⅧ層から採取された試料 7 で、この主成分組成タイプの火山ガラスが検出されていないことは、後者の可能性がより高いことを示唆すると思われる。

また、試料 2 に含まれる火山ガラスについても、主成分化学組成から、To-H が混在する可能性が考えられるが、屈折率特性がやや高いことを考慮すると、この試料には、ほかに、約 1.5 ～ 1.65 万年前に浅間火山から噴出した浅間草津黄色軽石（As-K，新井 1979，町田・新井 1992）を含む浅間板鼻黄色軽石（As-YP，新井 1962，町田・新井 1992 など）が混在していると推定される。このテフラに特徴的な中間型ガラスは、試料 4 でも比較的多いことから、総合的にみると、Ⅶ層からⅥ層にかけて、As-YP が含まれていると考えられよう。

表3　A5グリッド西壁・試料2に含まれる火山ガラスの主成分化学組成

試料	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	total
1	77.95	0.36	13.17	1.56	0.10	0.40	2.10	3.19	1.12	0.04	100.00
2	78.56	0.30	12.64	1.66	0.04	0.36	1.90	3.31	1.17	0.06	100.00
3	76.11	0.35	13.46	2.33	0.12	0.53	2.36	3.46	1.16	0.12	100.00
4	78.50	0.30	12.80	1.67	0.08	0.38	2.00	3.03	1.26	0.00	100.00
5	78.86	0.33	12.51	1.62	0.10	0.36	1.92	3.02	1.14	0.14	100.00
6	78.17	0.34	12.76	1.65	0.07	0.39	2.01	3.32	1.17	0.13	100.00
7	77.58	0.33	12.83	2.01	0.22	0.42	2.04	3.39	1.14	0.03	100.00
8	78.62	0.32	12.68	1.64	0.00	0.31	1.80	3.33	1.18	0.11	100.00
9	78.05	0.34	12.66	1.66	0.17	0.39	2.01	3.49	1.23	0.00	100.00
10	78.88	0.25	12.17	1.37	0.06	0.21	1.44	3.76	1.83	0.02	100.00
11	77.73	0.35	12.93	1.72	0.19	0.38	1.97	3.33	1.31	0.11	100.00
12	78.19	0.32	13.33	1.49	0.10	0.40	1.98	2.87	1.28	0.04	100.00
av.	**78.10**	**0.32**	**12.83**	**1.70**	**0.10**	**0.38**	**1.96**	**3.29**	**1.25**	**0.07**	**100.00**

表4　A5グリッド西壁・試料4に含まれる火山ガラスの主成分化学組成

試料	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	total
1	79.16	0.21	11.89	1.28	0.04	0.18	1.56	3.86	1.80	0.02	100.00
2	75.80	0.43	13.36	2.10	0.03	0.67	2.70	3.75	1.05	0.13	100.00
3	78.75	0.22	12.45	1.54	0.08	0.36	1.97	3.40	1.14	0.07	100.00
4	76.46	0.41	13.33	2.31	0.14	0.56	2.49	3.20	1.04	0.06	100.00
5	79.26	0.22	11.80	1.35	0.23	0.21	1.53	3.41	1.96	0.03	100.00
6	77.97	0.35	12.84	1.82	0.09	0.46	2.08	2.93	1.35	0.10	100.00
7	77.79	0.43	12.86	2.16	0.09	0.47	2.19	2.73	1.24	0.04	100.00
8	78.72	0.23	12.05	1.38	0.07	0.15	1.23	4.27	1.88	0.02	100.00
9	78.78	0.20	11.84	1.39	0.13	0.20	1.37	4.00	2.00	0.09	100.00
10	79.12	0.21	11.89	1.39	0.00	0.23	1.58	3.38	2.08	0.12	100.00
11	80.19	0.10	12.01	1.24	0.01	0.22	1.60	2.69	1.93	0.02	100.00
12	79.04	0.23	11.75	1.34	0.00	0.20	1.36	4.02	2.03	0.03	100.00
av.	**78.42**	**0.27**	**12.34**	**1.61**	**0.08**	**0.33**	**1.80**	**3.47**	**1.63**	**0.06**	**100.00**

表5　A5グリッド西壁・試料7に含まれる火山ガラスの主成分化学組成

試料	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	total
1	79.52	0.13	11.78	1.54	0.07	0.18	1.30	3.15	2.30	0.04	100.00
2	79.34	0.25	12.07	1.17	0.06	0.22	1.28	3.69	1.93	0.00	100.00
3	78.77	0.13	11.86	1.38	0.14	0.21	1.31	3.90	2.30	0.00	100.00
4	79.23	0.17	11.93	1.24	0.07	0.18	1.49	3.56	2.12	0.01	100.00
5	80.95	0.16	10.97	1.20	0.02	0.16	1.43	3.44	1.66	0.00	100.00
6	79.53	0.17	11.95	1.18	0.02	0.21	1.29	3.39	2.25	0.00	100.00
7	79.35	0.15	12.14	1.22	0.08	0.22	1.30	3.35	2.17	0.02	100.00
8	79.08	0.16	11.95	1.18	0.07	0.25	1.36	3.97	1.95	0.02	100.00
9	79.19	0.16	11.89	1.22	0.07	0.17	1.25	3.93	2.13	0.00	100.00
10	79.23	0.21	11.89	1.29	0.10	0.22	1.31	3.67	2.08	0.00	100.00
11	79.34	0.15	11.89	1.25	0.12	0.17	1.28	3.75	2.03	0.02	100.00
av.	**79.41**	**0.17**	**11.85**	**1.26**	**0.07**	**0.20**	**1.33**	**3.62**	**2.08**	**0.01**	**100.00**

表6　A5グリッド西壁・試料21に含まれる火山ガラスの主成分化学組成

試料	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	total
1	80.30	0.21	11.84	1.31	0.05	0.23	1.34	2.95	1.72	0.04	100.00
2	79.95	0.26	11.82	1.18	0.00	0.18	1.27	3.42	1.90	0.03	100.00
3	79.40	0.20	11.76	1.41	0.07	0.22	1.53	3.55	1.83	0.05	100.00
4	79.96	0.26	12.12	1.17	0.17	0.22	1.50	2.92	1.68	0.00	100.00
5	79.57	0.25	11.88	1.22	0.06	0.19	1.40	3.50	1.91	0.03	100.00
6	79.87	0.18	11.95	1.31	0.13	0.24	1.35	3.08	1.83	0.05	100.00
7	79.95	0.23	11.91	1.37	0.09	0.24	1.52	3.02	1.66	0.02	100.00
8	80.08	0.18	11.92	1.34	0.11	0.23	1.48	2.95	1.72	0.00	100.00
9	79.69	0.23	11.94	1.40	0.07	0.18	1.54	3.15	1.77	0.02	100.00
10	79.53	0.21	11.99	1.29	0.09	0.21	1.46	3.29	1.84	0.09	100.00
av.	**79.83**	**0.22**	**11.91**	**1.30**	**0.08**	**0.21**	**1.44**	**3.18**	**1.79**	**0.03**	**100.00**

表7　御駒堂遺跡テフラ試料と約5万年前以降の指標テフラに含まれる火山ガラスの主成分組成比較

地点・試料	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	備考
A5 グリッド西壁・試料 2	78.10	0.32	12.83	1.70	0.10	0.38	1.96	3.29	1.25	0.07	12 粒子
A5 グリッド西壁・試料 4	78.42	0.27	12.34	1.61	0.08	0.33	1.80	3.47	1.63	0.06	12 粒子
A5 グリッド西壁・試料 7	79.41	0.17	11.85	1.26	0.07	0.20	1.33	3.62	2.08	0.01	11 粒子
A5 グリッド西壁・試料 21	79.83	0.22	11.91	1.30	0.08	0.21	1.44	3.18	1.79	0.03	10 粒子
指標テフラ											
To-a	77.87	0.37	12.81	1.75	0.10	0.42	2.00	3.29	1.34		1)
Nm-N	78.10	0.24	12.10	1.14	0.09	0.19	1.34	3.35	3.45		2)
To-Cu	75.08	0.44	13.28	2.46	0.08	0.63	2.63	4.04	1.29		1)
K-Ah	75.24	0.53	12.85	2.42	0.08	0.47	2.02	3.32	3.00		1)
Hj-O	77.79	0.16	12.76	1.05	記載なし	0.44	1.09	3.61	3.10		2)
To-H (pfl) 上部	78.30	0.29	12.67	1.52	0.06	0.29	1.73	3.84	1.30		2)
To-H (pfl) 下部	76.38	0.40	13.43	1.90	0.11	0.44	2.22	3.88	1.24		2)
As-YP	78.15	0.27	11.99	1.33	0.04	0.26	1.30	3.72	2.89		1)
Nr-KU	77.98	0.22	12.28	1.22	記載なし	1.01	1.59	4.23	1.47		2)
AT	78.25	0.13	12.14	1.26	0.04	0.11	1.09	3.41	3.56	0.02	1)
To-Of (pfl)	77.82	0.36	12.45	1.88	0.08	0.33	1.87	3.97	1.25		2)
Nr-Y	79.93	0.17	12.07	1.34	0.11	0.21	1.40	2.87	1.88	0.02	1)

無水に換算. 1）八木（未公表）. 2）青木・新井（2000）.

以上のことから、遺物包含層であるⅥ層は、AT より上位で As-YP や To-H が含まれる土層、厳密には、To-H 降灰後に最終的に形成された土層の可能性が高い。

また、SI11 住居跡堆積土中に認められたテフラ層は、層相や火山ガラスの形態色調組成や屈折率特性、さらに重鉱物の組み合わせから、915 年に十和田火山から噴出した十和田 a 火山灰（To-a，大池 1972，町田ほか 1981）に同定される。このことは、SI11 住居跡が考古学的に奈良時代と推定されていることと矛盾しない。

本遺跡周辺には、ほかにも、AT のすぐ上位にある鳴子潟沼上原テフラ（Nr-KU，早田 1989）、約 1.1 ～ 1.2 万年前に肘折火山から噴出した肘折尾花沢テフラ（Hj-O，米地・菊池 1966，早田 1989，町田・新井 1992，2003 など）、約 6,000 年前に十和田火山から噴出した十和田中掫テフラ（To-Cu，大池ほか 1966，早川 1983，町田・新井 1992・2003 など）など多くのテフラが降灰している。今後も詳細なテフラの調査分析を実施して、層位学的、編年学的資料を蓄積する必要がある。

7．まとめ

栗原市御駒堂遺跡において、地質調査、火山ガラス比分析、火山ガラスの屈折率測定、火山ガラスの EPMA 分析を実施した。その結果、鳴子柳沢テフラ（Nr-Y，約 4.1 ～ 6.3 万年前）や十和田 a テフラ（To-a，915 年）の一次堆積層のほか、姶良 Tn 火山灰（AT，約 2.8 ～ 3.0 万年前）、浅間板鼻黄色軽石（As-YP，約 1.5 ～ 1.65 万年前）、十和田八戸テフラ（To-H，約 1.5 万年前）に由来する可能性の高い火山ガラスを検出できた。その結果、遺物包含層は、To-H より上位の旧石器時代から縄文時代にかけて形成された土層と推定された。また、SI11 住居跡は To-a より下位にあることが判明した。

文献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.

早川由紀夫（1983a）火山豆石として降下堆積した十和田火山八戸火山灰．火山，28，p.25-40.

早川由紀夫（1983b）十和田中掫テフラ層の分布，粒度，組成，年代．火山，28，p.263-273.

Hayakawa, Y. (1985) Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthq. Res. Inst. Univ. Tokyo, 60, p.507-592.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による ^{14}C 年代．第四紀研究, 34, p.377-379.

小岩直人・柴　正俊・葛西優貴（2007）十和田大不動テフラの AMS^{14}C 年代. 第四紀研究, 46, p.437-441.

古環境研究所（2004）早坂平遺跡出土の放射性炭素年代測定．岩手県久慈地方振興局土木部・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター編「早坂平遺跡発掘調査報告書　第 1 分冊」p.581-583.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良 Tn 火山灰の発見とその意義－．科学，46，p.339-347.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.

町田　洋・新井房夫（2011）新編火山灰アトラス（第２刷）．東京大学出版会，336p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562-569.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良 Tn 火山灰（AT）の ^{14}C 年代．第四紀研究，26，p.79-83.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦（1993）四国沖ピストンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の ^{14}C 年代．地質雑，99，p.787-798.

中川久夫・中馬教充・石田琢二・松山　力・七崎　修（1972）十和田火山発達史概要．岩井淳一教授記念論文集，p.7-17.

大池昭二（1972）十和田火山東麓における完新世テフラの編年．第四紀研究，11，p.232-233.

大池昭二・中川久夫（1979）地形並びに表層地質調査.「三戸地域広域農業開発基本調査報告書」，東北農政局，103p.

大池昭・中川久夫・七崎　修・松山　力・米倉伸之（1966）馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰．第四紀研究，５，p.29-35.

早田　勉（1989）テフロクロノロジーによる前期旧石器時代遺物包含層の検討．第四紀研究，28，p.269-282.

早田　勉（2010）更新世堆積物とテフラ.稲田孝司・佐藤宏之編「講座日本の考古学１　旧石器時代上」，青木書店，p.77-102.

豊島正幸・石田琢二（1983）座散乱木遺跡周辺の地形地質および火山灰．石器文化談話会編「宮城

県岩出山町座散乱木遺跡発掘調査報告書Ⅲ」，p.72-79.
八木浩司・早田　勉（1989）宮城県中部および北部に分布する後期更新世広域テフラとその層位．地学雑，98，p.871-885.
米地文夫・菊池強一（1966）尾花沢軽石について．東北地理．18，p.23-27.

写真１　5A 区深掘トレンチ・試料２
中央：繊維束状軽石型ガラス.

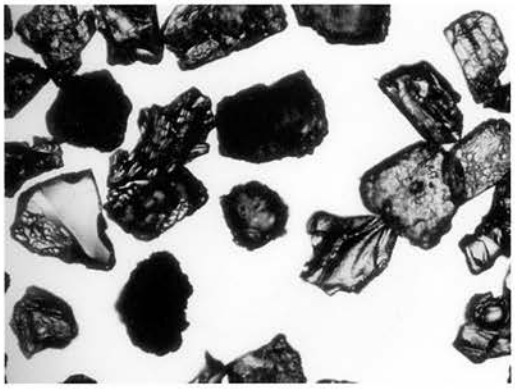


写真２　5A 区深掘トレンチ・試料４
中央・中央右：中間型ガラス.

写真３　5A 区深掘トレンチ・試料７
中央：無色透明バブル型ガラス
中央右上：ベータ石英.

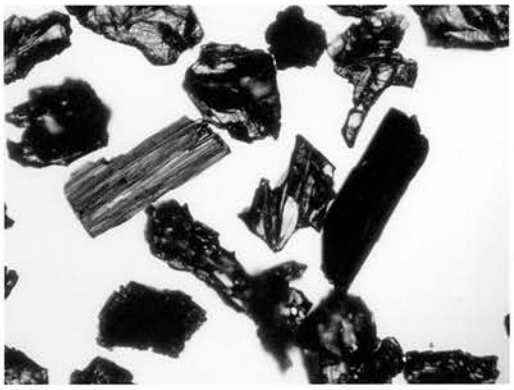


写真４　5A 区深掘トレンチ・試料 21
中央・中央左：繊維束状軽石型
ガラス

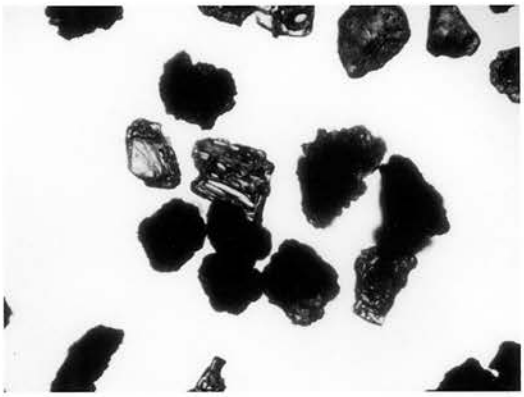


写真５　5A 区 SI11・試料２（To-a）
中央左：繊維束状軽石型ガラス.
中央右：スポンジ状軽石型ガラス.

0.2mm

報　告　書　抄　録

ふりがな	おこまどういせき・どうのさわいせき
書名	御駒堂遺跡・堂の沢遺跡
副書名	一般国道４号線築館バイパス関連遺跡調査報告Ⅲ
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第 244 集
編著者名	村田晃一、小野章太郎
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒 980-8423　宮城県仙台市青葉区本町３丁目８－１　℡ 022-211-3684
発行年月日	西暦　2016 年 12 月 22 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系 北緯	世界測地系 東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
御駒堂遺跡（おこまどういせき）	宮城県栗原市志波姫堀口御駒堂（みやぎけんくりはらししわひめほりぐちおこまどう）	042137	49014	38 度 44 分 36 秒	141 度 2 分 19 秒	20090525 ～ 20090603	300	試掘・確認調査
						20101020 ～ 20101026	900	試掘・確認調査
						20120904 ～ 20120918	470	記録保存調査、試掘・確認調査
						20131111 ～ 20131128、20140121 ～ 20140130	2,350	記録保存調査、試掘・確認調査
						20140707 ～ 20141003	3,530	記録保存調査、試掘・確認調査
						20150420 ～ 20150602	460	記録保存調査
堂の沢遺跡（どうのさわいせき）	宮城県栗原市志波姫堂の沢（みやぎけんくりはらししわひめどうのさわ）	042137	49024	38 度 44 分 49 秒	141 度 2 分 10 秒	20131105 ～ 20131114	620	試掘・確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御駒堂遺跡	集　落	旧石器時代～縄文時代、縄文時代、奈良時代、江戸時代以降	旧石器時代から縄文時代の石器集中地点１、遺物包含層１、縄文時代の陥し穴 22、遺物包含層１、奈良時代の竪穴住居跡９、古代の掘立柱建物跡１、江戸時代以降の掘立柱建物跡７、井戸跡７、墓跡 17、土塁１、空堀１	旧石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品	８世紀前葉に形成された坂東からの移民集落を調査し、同時代の住居が東西 1,500 m、南北 400 m の遺跡全体に分布することを確認。また、８世紀中葉から後半の火災住居１軒から、集落への普及段階の墨書土器やロクロ土師器が出土した。
堂の沢遺跡	集　落	古代	近世以降の水田跡や溝跡	なし	遺跡範囲の西側を調査した結果、近世以降の水田跡や溝跡などを検出したが、中世以前の遺構・遺物は確認できなかった。このため、遺跡の範囲は東へ縮小すると考えられた。

要約	国道４号線築館バイパス工事に先立ち、平成 21 ～ 27 年度に実施した御駒堂遺跡と堂の沢遺跡の発掘調査報告書である。後者は、中世以前の遺構・遺物が出土しなかったことから、本発掘調査の必要なしと判断した。前者では８世紀前葉の移民集落跡を発見し、坂東北西部と南部から移民が行われたこと、集落は東西 1,500 m、南北 400 mの遺跡全体に営まれたことを確認した。住居の総数は 300 軒を超えるとみられる。また、８世紀中葉から後半の火災住居跡から、同時期の一般集落で数が少ない墨書土器やロクロ土師器が出土した。こうした遺物は、伊治城との関係性の深さを示しており、住居は宝亀 11 年（780）の伊治公呰麻呂の乱で襲撃され、焼失した可能性が考えられた。

SI 51 住居跡出土土器

宮城県文化財調査報告書第 244 集

御駒堂遺跡・堂の沢遺跡

――一般国道 4 号線築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅲ―

平成 28 年 12 月 15 日印刷
平成 28 年 12 月 22 日発行

発行　宮城県教育委員会
〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町三丁目 8 番 1 号
印刷　株式会社　東北プリント
〒980-0822　仙台市青葉区立町 24－24